コロニア芸能史　2

コロニア芸能史編纂委員会

（2）　第九部から第一四部まで収録

コロニア芸能史・目次

コロニア芸能史刊行によせて……小野　純男
芸能史の発刊を祝す……尾身　倍一
コロニア芸能史の刊行を祝う……竹中　正
発刊のことば′　……水本　毅

第1部　民　謡

コロニアの日本民謡……松崎　松蔵
伯国日本民謡歴……猪狩　宗鳳
民謡は〝心のふるさと〟……佐々木重夫

第2部　演　劇

移民劇の真髄・伯光団の誕生……醍醐麻沙夫
演劇に〝半生〟捧げ悔なし……嵐　正太郎
歌舞伎芝居に生きた群像……山口　春海
芝居とシネマ屋に終始……岡村　正
戦後初の芝居？……広田　義秋
市川鍛吉郎を悼む……松家　英夫
名作「夕鶴」などを公演……八田　大八
「旅芝居」もまた楽し……小泉　照男

丹下セツ子劇団……田村　徹
戦後初の芸能祭……押田真佐男
慈善事業に協力を……及川也周平
ヴァルゼン・グランデ演劇団……及川也周平
迫真！？「松の廊下」……

第３部　日本舞踊
鍬を取った手に「舞扇」……京藤間勘輝
「順ちゃんにおヒゲが…」……京藤間勘君
京藤間流に二代目家元……京藤間勘君
勘輝さんと出合った頃……常磐津兼三喜
日舞指導に今後も努力……倉岡　房枝
コロニア日舞界の先達……佐々木重夫
〃白い靴下〃　で日本舞踊……下川八重子
藤間流日本舞踊学校……田村　徹
池芝流新舞踊に意欲……田村　徹
日本舞踊の普及に専心……花柳　金龍

第４部　バ　レエ
「農村にオアシスが…」……浜田　拓
ただ踊るだけでなく……弓場　勇
「私と弓場農場」……小原　明子

「弓場農場の舞台づくり」……小原しよお
バレエの道に４５年余……大谷　康夫
バレエに魅せられて……戸塚　マリ
サンバの指導などにも……若松　慶子

第５部　能楽・謡
「伯謡会の今昔」……鈴木　威

第６部　音　楽
クラシック音楽の流れ……山川　健一
脇山一郎と軽音楽界……生田目善助
古典にゆかしい音色……宮下　芳山
常磐津の響よ、いつまでも……隈下　順子

第７部　ラジオ・テレビ
華やかだった日語放送……内海　博
さながら〃雨後の筍〃……
ＴＶ界に確固たる地位……山口　春海

第８部　郷土芸能
神楽で文化交流と親善……井原　爾一
親善、友好の実を上げる……花笠協議会

住民の喜怒哀楽織込む……牧　政治
サンパウロ七夕まつり……大橋　鉄雄
勇壮、玄妙な「鬼剣舞」……及川也周平
沖縄の古典芸能……屋比久孟清
野村流音楽協会ブラジル支部……

（Ｖｏｌ　２はここから収録）

第９部　奇　術　８
魔術と奇術に打込んだが……大　魔　王　１１
曲芸、奇術、落語で活躍……松旭斉天楽　１９

第１０部　詩　吟　２１
吟剣詩舞道の向上発展へ……西森　重喜　２３
郷愁の償いに『詩吟』……浦田　光馬　３１

第１１部　浪　曲　３８
草分け移住者に活力……沢田　多策　４０
私が出合った戦前の浪曲師……花中軒水月　５９
浪曲を通じて人づくり……中川　芳月　６８

第１２部　映　画　８２
老舗、日伯シネマ社……平田　公泰　８７
垣間見た興行界……江沢　晋二　１２２

東宝が業界に〝新風〟……押田真佐男　139
私の「邦画界変遷記」……押田真佐男　149
各地に次々と常設館……池田　重二　161
薄命だったシネ・日活……山元　貞義　167
巡業シネマ屋……醍醐麻沙夫　170
松竹が「楢山節考」で進出……水本　毅　179
田中さんとシネ・ニテロイ……矢萩富士夫　187
ニテロイ〟街づくり〟に一役……城島慶次郎　193
先輩の業績に敬意……水本　毅　198
「七人の侍」に挑む……赤嶺　尚由　201
千津薫と百合薫……三藤　悟人　219
邦画の〝上映事始め〟……230
『移民史映画』成らず……249

第13部　レコード

歌謡曲、演歌などが大半……カーザ小野商会　257

第14部　芸能関係者の来伯

三浦環と『蝶々夫人』……264
「我らのテナー」、藤原義江……269
アメリカ二世の長谷川敏子……272

「あゆみの箱・ブラジル大会」の思い出　小畑　博昭　２７３
「あゆみの箱・ブラジル大会」に就いて　山本　紫朗　２８３
二万キロは夢のうち……奥村　静雄　２８５
第一回大会出演の人々……　２８７
第二回大会出演者のプロフィル……　３０３
川田三姉妹の参加をよろこぶ……屋比久孟清　３１６
心うつ『能』の美しさ……矢島　貞　３２０
「奇蹟の人」大島彰さん……阿部　三郎　３２９
日毎が戦後初の芸能団……　３３９
……
松竹舞劇団が来伯……　３５６
宝塚歌劇団も来演……　３６２
異色の歌姫、田中路子……　３６７
北島三郎　特別公演……　３７３

装幀　田中慎二

（写真提供）　各部門の執筆者、
光石竹乃、野村清博、キネマ旬報別刷、芸術生活、文芸春秋
のデラックス増刊、コロニア芸能史編さん委員会。

第9部

奇術

〔手　品〕てじな　手妻（てつま）とも奇術ともいう。巧妙な抜術によって人の目を眩惑せしめる芸能。シナで、幻術・幻人といったのが、散楽として奈良朝時代に輸入されたので、そのなかに唐術といったのがそれであろうといわれる。これをまた、幻戯ともめくらましともいい、呪師・田楽から放下に伝えられ、江戸時代に入って、手妻あるいは手品と称せられた。

奇術の語は「日本書記」にみえるのがはじめであろう。室町時代に、妙果心居士が、よく幻術を使ったことが伝えられているが、忍術などに近いものであろう。これが興行化したのはやはり江戸時代に入ってからである。

延宝八年（一六八〇）に、都右近というものが、四代将軍の上覧に供した手品の番組に活鴨三羽を空籠より出すとか、山芋を鰻にするとか、絵の雀が抜け出るとかの曲目がある。

元禄期には、塩（屋）の長次郎が、馬や牛を呑む術を興行して

名高く、文政期には、初代柳川一蝶斉が「うかれ蝶の曲」といって、紙の蝶を生けるがごとく使って喝采された。これは、さきに大阪下りの谷川定吉の手品を習ったものだという。

また同時代の人に養老滝五郎という手品師が知られている。なお一蝶斉の名は明治の中期まで三代を数える。

これらの日本の手品の特色は、小手先の芸と、からくり、水芸などの簡単な機関（からくり）を用いたもので、すべて鳴物、口上に合せ、芝居がかりの演出におもしろみがあったので、この点、西洋の大がかりな奇術とは対称的である。

〔西洋手品〕　日本へ伝わった西洋の手品は、秀吉が切支丹の幻術を見たという話のごときがもっとも早いものかも知れない。鎖国時代のこの種のものは妖術視され、正しい認識を欠いているので明らかではない。

明治になって九年（一八七六）に、初めて英人ジョン・マルコムの手品が伝えられ、そののちウォジャー、マダム・ユーラー、明治二十一年には、明治座にノアトン一座が来朝するというふうに、さかんに迎えられた。

日本人でこれをはじめて学んだものは、前名を林屋正楽といった掘天斉正一で、西洋手品という看板を売りものにして、中橋の寄席に出た。その「洋術首切」と称するものは、マルコムの奇術を学んだもののであった。そののち松旭斉天一が出て洋行もし、日本手品を併合し、その弟子天勝また奇術界を牛耳っ

て大いに行なわれた。いま明治三十九年（一九〇六）の天一・天勝一座の番組の一例を示すと次のごとくである。

「空中美人の出現」「大魔術タンバリンキャビネット」「自動催眠術」「万国の国旗」「観客頭上の魚釣り」「電気応用自由噴水」「活人画の美人」これらは、日本のごとき小手先の芸ではなく、機械力や電気を用いた大仕掛を特徴とするもので、手品というより奇術といった方が適切である。

〔シナ手品〕　日本の手品は、古くシナ大陸より散楽として伝わり、近世初頭には、あらためて、長崎より唐人の渡来とともに伝えられたものが、日本化されたものであるが、特に明治期になってあらたにもたらされたものを、ふつうシナ手品南京手品といっている。

清国人張世存・寂光興が渡来し、のちに帰化している。さらに西洋奇術もしばしば紹介され、その影響を受けている。

〔水　芸〕　みずげい　本水を用いた曲芸・手品。水力を用いて、目を驚かす仕掛物の見世物に、近年初頭の〝水からくり〟があった。これらは人形劇や歌舞伎に取入られて本水を使って早替りをする劇術を生んでいる。

手品として行なわれる水芸は、お囃子につれて、刀の先や扇や衣服より水を吹き出させるもので仕掛は細い管を通してあるので、別に奇抜なものではないが、見た目の美しさから、多くは女性の演ずるものとされている。

そのはじめは、曲独楽の竹沢藤治が一座の女の子に演じさせたのだといわれる。泉鏡花の「滝の白糸」で名高いが、奇術師・松旭斉天勝もこれを一曲目としていた。

（河竹繁俊監修、演劇博物館編「芸能辞典」より転載）

魔術と奇術に生きた人々

テレビの普及で活動の場失う

大　魔　王

新人の出現を期待

日本移民初期時代の娯楽の少なかりし頃よりブラジル日本移民七五周年（一九八三）の歴史の中に数多（あまた）の諸芸をコロニア各地で披露した芸能人のうちに、われわれ魔術、奇術、手品などをおもにした人々が存在したことを一般は記憶にとどめておられると思う。私が実際に見たり、あるいは会って友好を交したコロニアの奇術師はサンパウロ市では非常に少なく、他州での未知のプロ奇術師、アマチュアの方々も同じように少なかったようである。

私が芸名を自ら「大魔王」と命名し、サンパウロ市郊外の各

地で大魔王一座として公演していた当時、香川天竜という奇術師が訪ずれて来られ、以後、交際を続けるようになった。天竜は私たち一座のため外交を勤めて下さったこともあるが、その前はサンパウロ州内各地を奇術、寸劇などで巡業したという。

本名は長谷部一夫（はせべ・かずを）。その長谷部さんが巡業先で小さいタンバリンの中からテープを山のように出し、さらにその中からいとも鮮（あざや）かに日傘を二・三本ほど出すとワーツと来て物凄い大拍手、喝采（かっさい）を博したと云っていた。これも奇術、手品などを実演する人々が皆無に等しかったからであろう。

可憐な乙女を空中に浮揚させた大魔王、私の"十八番"（おはこ）のひとつでもあった（写真上）

ギロチンの怪？

とにかく、戦前のテレビが普及されていなかった頃である。当時は〝活弁〟による映画や、浪曲などが芸達者な人々の活躍によってコロニアの娯楽は支えられていたものと思われます。そうした中で、終戦間もなく日本からの芸能人の訪ずれの稀だった頃（一九五一年六月）、松旭斉天勝一座がサンパウロ市を初めとして州内、パラナ州各地で公演、いずこでも大観客を動員して熱狂的な好評を博したものである。

大魔王（左）による「洋術腹切」（？）ともいわれる魔術のひとつ

しかし、一九六〇年代の後半に入ると、テレビの普及は一般の予想を裏切って、各家庭が先を争って購入、家に居ながら各種の娯楽が楽しめるようになった。このため、それまでは〝娯楽の王者〟とまでいわれていた映画の観客は目に見えて減ってきた。ちょうどその頃、ブラジル人の興行者、アゼンシア・サー

レスによる二代目松旭斉大勝一座の来伯公演がサンパウロを初め各地で予想以上に不評で、興行者は各邦字紙に〝大入り満員！〟というお礼広告を派手に出していたが、座員一同は大変に困っていた……ということを聞いている。

私がベロ・オリゾンテ市のテアトロ・フランシスコ・ヌーネスで十一日間にわたって公演した時、二代目天勝の得意とする「トランク抜け」の魔術を実演したが、この間連日、同市々長の息子さんが〝タネ〟を見破るといって舞台に上がり近くで頑張っていたが、ついに、これはどうしても分からない、と頭を抱えていました。

ところで、私の魔術は御伽噺（おとぎばなし）の魔法使のように煙の中から現れて、人間を空中に浮揚させたり、人体を焼いて白骨に変え、また元に戻したり常識では判断が付かないような種々な大魔術、大奇術を主として公演していました。

ある日、私宅にバストスに本拠を置き、戦前、戦後とも州内各地で巡業して人気の高かった伯光団の光石教嗣（芸名・尾上菊若）さんが訪ねて来られた。光石さんによると、当今は観客を引き付けるには芝居ばかりでは無理なので、舞踊も取入れ、さらに映画も付け加えている。また、場所によっては奇術も是非という注文も多い　―　と、協力を頼まれた。そこで私は、いっそのこと貴方が奇術を習ってご自分のショーの中に取入れたらよいでしょう。私も協力します、と奇術に必要ないろいろな道

具を譲るとともに、知人を紹介してあげたこともあります。以後、伯光団のプログラムの中に奇術も加えられるようになったとのことです。

コロニアで魔術、奇術、手品などを興行してこられた人たち、先輩を次に紹介します。

それと同時に、この世界での新人の出現を期待します。

香川天竜（本名・長谷部一夫）戦前の娯楽が少なかった頃、各地で奇術、寸劇などを披露、多大なる好評を博した。独身、戦後はサント・アマーロ近くのエンブー・グアスにいた姉夫婦の家で竹細工をやっていたが、数年前に帰国したといわれる。

福岡天一（本名・青木？）昭和九年（一九三四）頃ノロエステ線プロミッソンに住み自ら奇術の道具を作り、一般に公開していた

松旭斉天楽（本名失念）最近一度会ったこともあるが―。マリオ・神谷　夫人、娘さんたちとともに奇術、曲芸、舞踊などで各地で巡業している

大魔術師「大魔王」の誕生

私は昭和五年（一九三〇）十二歳の時、両親とともに農業移民として渡伯、モジアナ腺のサンタ・ルシア耕地に配耕されましたが、ある事情から同年、現在も引続き住んでいるグアルーリョスに移りました。ここではシャカレイロとして作った野菜

類をフェイラで直売して生計を立てて来ました。

奇術への病み付きは、子供の頃からで、小学校の隣にあった稲荷神社のお祭りで若い夫婦者の奇術を見てからです。奥さんの弾く三味線に合せて空中より金魚を釣ったり、晴着帽子といって黒のソフトハットからいろいろな物品を取出す、という妙技に刺激されてからです。

「トランク抜け」の実演

グアルーリョスに移ってから数年後にはいろいろと奇術の本を集め、独学、研究に没頭しました。その後、知人から国内で奇術研究の権威であるとともに斯道の大先輩であるジョン・ペイショット氏の子息、ノルマン・ペイショット・ドス・サントスさんを紹介されてから、同氏を師と仰ぎ、手品、奇術、魔術の数々を修得しました。

そこで、日本一の魔術師といわれた松旭斉天一を目差し、各地での興行を考えた。先ず第一に出来うる限り大きな道具類の

作成が必要であり、その完成とともに一九六七年、地元のグアルーリョスを皮切りとして巡業の旅に出ました。一座は次男、長女、次女、私の四人にマネージャ（礼軒富士夫氏）の五人で、息子、娘たちの学校の関係から、学校の休みを待ってサンパウロ、南北パラナ州と日程を組んで回り、各地で大好評を博したものです。

一九六九年二月、岩根友一氏（故）から、「シルコ・デ・マジコ東京」という魔術団一座の話がありました。座員は二代目天勝一座にいた歌手の三田草苗、日舞と洋舞の若松慶子、洋舞の青年、リオの青年楽団の人たちに私など十五名ばかり。勿論、魔術を主体とした一座で、リオ市のテアトロ・ジョン・カエターノで十日間、ニテロイ市のテアトロ・アルボラーダで六日間、ベロ・オリゾンテ市のテアトロ・フランシスコ・ヌーネスで十一日間にわたっての公演だったが、岩根氏が契約事項を守らなかったため、グアルーリョスに引揚げた、ということもありました。

その後、次々と新らしい道具を作って珍らしい魔術を一般にお目に掛けるつもりでしたが、一九七四年頃からテレビの普及に押されて各地での公演もままならず、また、子供たちの将来も考え巡業を止めました。あとに残った道具類は六トン積のカミニオン二台分、幸い希望者があり、その大部分を譲り渡しました。

きよう、この頃は、小さな道具を手に毎日曜日、地元の生長の家の子供会で、奇術を見せています。また近い将来、残った道具を生かして皆さまにお目に掛りたいと思っています。乞ご期待。

（本名・森政又彦、広島県出身）

トランクの両側から長剣を次々と刺込む、トランクの中の生贄（いけにえ）の乙女の運命は……

松旭夫妻

最近の松旭斉天楽夫妻

花柳金竜師らとともに出演、コロニア一世の芸能人として有終の美を飾った。本名は田島竹二郎。明治三十四年（一九〇一）三月十五日、東京新宿生まれ。

奇術師　国吉　南海

沖縄県出身。昭和九年（一九三四）頃よりサンパウロ州各地を巡業、昭和二十三年（一九四八）に「シルコ南海」を創立、ブラジル人の芸人二十余人を抱え、国内主要都市でブラジル人向け興行を続け好評だった。

その後、パラナ州ローランジアでレスタウランテを経営し現在に至る。

なお、昭和三十五年（一九六〇）、サンパウロ市の南米劇場で、名古屋天一、上村楽団とともに「一大ショーと大奇術」に出演、華麗な奇術を披露した　。

奇術師　　名古屋天一

本名・千葉愛次郎、故人。サンパウロ市隣接のオザスコで農園を経営するかたわら、余暇に各地を巡業した。

劇団青春座に参加して幕間（まくあい）に奇術師として出演した。その後は、サンパウロ市および郊外におけるコロニア関係の催しなどで特異の奇術を見せて人気があった。

第１０部

詩　吟

〔詩　吟〕　詩吟は中国から伝来したものではなく、漢詩を日本語式に読み直し、音調をつけて吟ずる日本古来のものであり、漢詩の別名を唐詩または宋詩とも呼ぶ。

日本には、西歴七〇〇年代の頃から遣唐使の往来が頻繁になってから多くの漢詩が伝来した。中でも支那（現・中国）の詩人白居易の「白詩文集」は有名である。八〇〇年代に至っては、日本でも多くの漢詩文集が作られ残っている。

現代でも良く愛誦されるのに、菅原道真の「重陽後一日」＝去年今夜＝は九〇二年九月十日の作とあるから、丁度、一〇八一年前のものである。これは日本の古い漢詩の代表的なものである。其の後も、広く集作され愛誦されてもいるが、一四〇〇―一六〇〇年にかけての戦国時代の作品も沢山見られる。

近代では、一八〇〇年代の明治維新前後に至り漢詩、漢文字が流行し沢山の詩社も興った。頼山陽の詩等、雄津な格調でひろく愛唱されている。現代の日本では、第二次大戦後漢詩の吟詠を芸術的に鑑賞する様になり、至る所に朗吟大会や詩吟芸術祭等が催される様になった。以上は「日本史、坂本太郎編。

唐詩の鑑賞、大野実之助著。唐詩選新書、「水田勇賢著」による。八三年六月、浦田記。

〔剣　舞〕　詩意につれて刀を以て仕打を現わす、演舞の一種。作意により勇壮に、あるいは悲哀に、詩吟に合せて踊る。吟者舞者ともに、必ず袴（はかま）をつけて、舞者は詩に必要な刀・扇・四尺五寸位の白布の襷・二尺位の白布の鉢巻。手拭・鞭・四尺五寸位の竹などを演舞前に、あらかじめ用意しておく。槍・薙刀・弓などは鞭または竹を代用する。明治三十年頃（一八九七）、娘の剣舞が盛んになって、浅草公園六区の清明館にて見世物として、興行された。

ドンチャンと鳴物入り、法螺貝の音もまじえた勇壮楽は明治

十五年頃にはやった榊原健吉の撃剣見世物の真似である。白に黒線の袴を、股高に端折り、ニューと脛素足を見せ、日本髪に向う鉢巻き、白襷の服装にて、詩吟に合せて舞台せましと暴れ回った。一回興行三百六十人入りを六回以上くりかえしたというのが、この興行物の始まりで、不思議がられた。後はそれを真似て、九段招魂社の祭日や地方の大市などにもよく見られた。活動写真（現在の映画）の発達に追われて、いつかその姿は消えた。

（国劇向上全編「芸能辞典」、一九五三年版に拠る）。

吟剣詩舞道の向上発展へ

詩吟会　連合会　一般への普及を目指す

西森　重喜

〔ブラジル詩吟会　連合会副会長〕

詩吟、剣舞指導に原口氏

ブラジルの詩吟剣舞は日本のそれと異なり、これといった組織だったもの、さらに適切なる指導者が無いため、従来それぞれの植民地で聞き覚えの詩吟や剣舞を披露する程度で、これという活発な動きは無かったようである。

一九五三年一月に、第一回全伯素人歌合戦がシネ・オデオンで催され、その折に歌謡の部に詩吟が特別出演（浦田輝星）しているが、これがおそらく公式の場で詩吟の第一声であろう。

一九五五年八月、日本から国際朗吟芸能協会理事長の原口愛光苑先生（現全国朗吟文化協会々長）が来伯、約六か月滞在し、各地の同好者に詩吟と剣舞を指導された。原口先生は五六年三月に日本に帰られたが、その後はサンパウロおよび近郊で同好者が吟詠を続けたものの、特に活発な動きは無かった。

ブラジル詩吟会連合会の設立前、市内ビニェイロス区の長谷山氏塾での詩吟会（一九七六年末）、写真上

一九八二年十一月、東京で開かれた詩吟文化協会主催の女流朗吟祭会場での記念撮影。左から三人目が原口愛光苑先生、その右が原口愛光子と西森重喜

一九六四年四月、バイア州のクビチェック植民地よりサンパウロに出て来た平井龍雄（岳陽、日本に於て木村岳風先生に師事）はサンパウロ市にサンパウロ朗吟会（発起人は平井龍雄、郷原重登、川畑三郎、林田磯太、光永与一）を設立、カストロ・ア

ルヴェス街三〇一の日伯女学校（郷原重登校主）に寄り漸次吟詠指導に乗り出した。翌六五年一月には近郊、モジ・ダス・クルーゼス市に平井岳陽指導に依り芳賀芳朗、山田一雄、泉中和、中山正平等によって詩吟同好会が発足した。

第一回全伯吟剣詩舞大会は一九七九年一月二十八日、サンパウロ新聞社講堂で開かれた

当時の同好者の主だった者は前記の外に、国松英輔、福川薩然、佐藤源助、人形源英、橋爪照雄、土生文吉、吉永宗一郎、田平文子、丸山孝義、小柴群平、滋野英一、田植角繁、小口平午、浦口武、西家佐登里等外数名あり、またサンパウロ朗吟会に於ても漸次同好者が集まり、茂村徳太郎、中島一吟、林田苓洲、森田操、加茂正、平井一市、古池孝、満生義雄、待井民治、笹原

ヒナ、郷原満寿恵、川畑シモ、坂本幸一、松谷正治、古賀督三郎、古賀節子、石田博俊、原芳郎、古沢典穂外数名、またピニエイロスに於ては日本語私塾を開いている長谷山忠太郎の下に詩吟愛好会があり坪内忠治、牛草茂、亀井杜雁、森隆一、河合行夫、梅地十郎、森下義登、五十嵐保司等あり、トーマス・デ・リーマ街一三六の大正会には重清保、時成完、浦塚義雄、井上清女、八木沼与惣治、島田正司、丸茂勇あり、さらにスザノ市本願寺住職豊橋竜雲の下、大日本皇風会詩吟ありて布村正、蓮沼信一、清江夫妻や名取国治、谷保、川上増市、豊橋みる子等何れも毎月一回日曜日を定めて詩吟剣詩舞の練習をなし、ブラジルの詩吟界も漸く活発化したが、たまたま七三年八月十一日、唯一の指導者とたのむ平井岳陽（龍雄氏）は七十歳を一期として死亡された。爾来、これとした指導者も無く、それぞれの詩吟仲間の交流を計り吟道向上に努めてきた。

七二年二月、たまたまパラナ州より出聖した西森重喜は指導者に乏しいブラジルの詩吟に慊ず、指導を宗家国日本に求め、縁あって吼山流詩吟道宗家より基本から通信教授を受ける事となり、ブラジル詩吟会に一石を投じた。坂井安衛、岡部真信、富田勇、田中佐吉、森田操、西森美代子、尾田嘉雄等の協力を得たうえ、また折から日本よりの鉄道技術援助に来伯中の技師、清水吼翠先生（師範）によって三か月の指導を受ける等によっ

て漸次吟詠技術向上し自ら奥伝師範の免許を受け、次第に会員が増え、パラナ州までに支部を持つに至り、此の実績は基本より正しき指導を受ける事が上達の道である事を実証した。

またパラナ州ロンドリーナ市に於て北海道の心豊流（木村心豊宗家）の指導を受ける箕輪新七のグループが生まれ、さらに七八年には移住者として関心流興道吟詩会師範、後藤康之の来伯によってサンパウロ市中心地に於て詩吟指導塾を開始する等各地に宗家国日本よりの指導を受けて正しいいくつかの詩吟が栄えるに至った。

ブラジル詩吟会連合会が発足

ブラジル日本移民七十周年を機とし漸次盛んになった詩吟も、ここらで中央機関を設ける議が起こり、ピニエイロスの長谷山忠太郎やイタケーラの西森重喜等によって七八年十二月十日、藤井卓治氏（県連会長）を会長に戴き副会長郷原重登、芳賀芳朗、後藤康之、常任理事長谷山忠太郎、山田一雄、西森重喜等によってブラジル詩吟会連合会が発足した。

顧問には相場真一、竹中正、牛草茂、蜂谷専一、野村丈吉、水本光任のコロニアの錚々たる名士を戴く。七九年一月二十八日、邦字三新聞社の後援、特にサンパウロ新聞社長水本光任氏の援助を得て、サンパウロ新聞社講堂に於て、第一回全伯吟剣詩舞大会を催した。

当日は遠く日本から吟剣詩舞振興会長笹川良一氏より御祝電を戴き、また連邦議員野村丈吾氏、小笠原勉氏、牛草茂氏、水本光任氏等来賓として臨席しそれぞれ祝辞あり、五十名の吟士、三百名の同好者を一堂に集めて盛会であった。年々詩吟人口は急速に増えて来たが、これは常任理事西森霜聖の奔走によって毎年邦人集団の地方都市（アラサツーバ、ロンドリーナ、アチバイア、マリンガ）で地方詩吟大会を催し、サンパウロより多くの吟士が参加交流する効果が大と思う。また八二年二月、北海道より心豊流宗家木村心豊先生が御来伯になり、ロンドリーナ、ノロエステおよびサンパウロ等で公演行脚をされた。

第十九回コロニア芸能祭での詩舞。舞は榊原寿々子、吟は西森霜聖（一九八四年）

ウルグアイで「日本武道の夕」

一九八四年三月十六日、駐ウルグアイ国日本特命全権大使・平野文夫閣下より同大使館主催の「日本武道の夕」のアトラクションに公演の招待に接し、団長・藤井卓治（吟連会長）、副団

長・西森霜聖（吟連副会長、霜楓流師範）、剣舞、木田勝己（藤間流）、同月本昭（吟連総務理事、居合道奥伝）、詩舞、榊原寿々子（静山流詩舞、教授）、同内山瑞英（京都着物学院、舞踊家）など六名を以て吟剣詩舞使節団を派遣、モンテビデオ市において外国人が九八パーセントという観衆を前に公演、絶讃を博し得た事実は、吟連創立以来の急速なるブラジル吟剣詩舞道の向上発展を裏付けるものである。さらにはウルグアイ公演によって得たる成果に鑑み、今後海外において詩舞、剣舞と組み合せたる吟詠、音楽的な要素伴奏の導入こそ望ましく、吟連に於いては詩舞、創舞の育成に力を入れることとなった。

また、総務理事となった月本昭は居合術剣舞のブラジル人の間に於ける普及を計り、あるいはテレビ、新聞などの報道機関を通じて積極的進出を目ざしており、このため吟連では詩舞榊原寿々子、剣舞月本昭によって日伯女学校講堂で第一、第三土曜日午後指導する事になった。

現在、吟連加入の各地詩吟会は次のとおり。

霜楓流詩吟会　サンパウロ　一〇名
ロンドリーナ　一六名
カラガタツーバ　一五名
アチバイア　一二名
関心流吟詩会　サンパウロ中央　八名

サント・アマーロ　八名
カンピーナス　七名
国誠流詩吟会　サンパウロ　一〇名
モジ詩吟研究会　モジ　一〇名
亀井神道流　聖東　一二名
岳風合　聖北　一一名
カロン　一〇名
平和友ノ会　八名
ルジエ・ラーモス　七名
関西流詩吟会　佐賀支部　一四名
タボン　四名
アチバイア清流詩吟愛好会　六名
マリンガ詩吟清流会　二五名
プロミッソン詩吟会　一〇名
リンス詩吟会　四名
アラサツーバ詩吟会　一〇名
心豊流詩吟会　ロンドリーナ　一〇名

なお、ブラジル詩吟会連合会の会員は三百名。また、現役員は次のとおりである。

会長＝藤井卓治、副会長＝後藤其洲、西森霜聖、山田雄山、総務理事＝月本昭、常任理事＝光永光祥苑、鎌田美鳳、渡辺正、渉外理事＝桐生昭義、会計理事＝山中真爵、　同兼、後藤真洲、監

事＝水谷潤楓、石田峰誠、川内伯皓（以下略、文中敬称略）。
なお、筆者の俳号は西山。また詩吟霜楓会　ブラジル本部々長。

（一九八四年九月記）

郷愁の償いに「詩吟」

全伯朗吟芸能連盟の発足へ

浦田　光馬

〔全伯朗吟芸能連盟元事務理事〕

戦後に初めて公開詩吟第一声

ブラジルの日本移民は、一九八三年六月で七十五周年を迎えた。渡伯当時の移民達は、せめての郷愁の償いに、何かの集会や会合を利用して、詩吟の一節でも朗詠するのが何よりの慰安であって、これぞと特記する程の大会も催されていない。が、約三十年前、一九五三年一月五日に第一回全伯素人歌合戦が、シネ・オデオンで催された時、歌謡の部に、詩吟が特別出演として吟詠されているのが、大会出場の詩吟の第一声であろう。

一九五四年には、サンパウロ市創設四百年を記念してサンパウロ市庁は各国移民に祝典の演芸参加を呼び掛けたので、日本

移民もいろいろの催し物を出して参加したが、この年は奥地方よりの劇団参加の全伯芸能競演会と銘打って、サンパウロ市において演劇コンクールが開演された。然し、末だその頃には朗吟は普及されていなかった。

原口愛光苑先生帰国の送別演芸会が開かれた一九五六年二月二十六日、同先生＝前列中央＝と、当時のサンパウロ市朗吟芸能文化連盟の役員（サクラ・クラブで）、写真上

全伯芸能競演会の演劇コンクールの団体部門で優勝したサクラ・クラブの面々、当時、朗吟は一般に普及されていなかった（後列右端が筆者、一九五四年九月十二日）、写真上

その頃、日本移民芸能人の中に、「芸能三羽烏」と綽号（しゃくごお）された人達がいた。その人達は、スザノの河合貞一郎、

サンパウロ市ピニェイロスの坂野熊太郎、ポアの薬師神真一郎の三老人がおった。河合老は朗吟会の結成を促した。

計らずも一九五五年八月、日本から国際朗吟芸能協会理事長、原口愛光苑先生を迎えることになった。原口先生は鹿児島県出身で、朗吟と大和舞（剣舞の一種）の普及に来伯された。その当時、昭和新聞社があって、その社長の川畑三郎氏が同県人の好誼（こおぎ）で、先生は一時、社長宅に起居せられ、サンパウロ市内では急速に朗吟会を結成し、それに全伯朗吟芸能連盟と命名した。発足当時の役員に、三元老は無論、川畑三郎、古沢典穂、小林美登里、ツクルビーの林田老、スザノの杉本靖風も加り、浦田輝星が専務理事となり堅実な結成を見るに至った。原口先生は滞伯中に、スザノの藤間国枝師（故）の門弟、林田剣舞研究生、京藤間勘輝師（故、初代）の門弟などに特別指導をしたり、近郊および遠くは奥地のノロエステ、パウリスタ、パラナ方面にも、二、三の弟子を引率して行脚普及された。

一九五五年九月九日には、原口先生の研究生の発表会を兼ねて、昭和新聞社六周年記念謝恩演芸大会が、シネ東京で催された。

翌一九五六年二月二十六日には、原口愛光苑先生帰国の送別演芸会が、サクラ・クラブにおいて催された。この日、平凡ブラジル友の会の後援もあり、同会の定兼勤、佐藤義昭、土生文吉、山下良香、松旭斉天楽師などの応援もあった。

（一九八三年六月十日記述、ブラジル詩吟会連合会に提出）。

心温まるばかり

和やかに寛いだ一日

全伯朗吟芸能連盟は、昨年（五五年）八月に渡伯以来、朗吟と大和舞の普及のため、献身的に各地に奔走せられた国際朗吟芸能協会理事長、原口愛光苑先生が遠からず帰国されることになったので、その送別の餞けに、平凡ブラジル友の会と合同主催にて、五六年二月二十六日サクラ・クラブにおいて、家族慰安大会を催した。当日は平凡バンドの後援を得て午後二時開幕。平凡ブラジル友の会代表定兼勤氏の司会の挨拶、全伯朗吟の専務理事浦田輝星の原口先生紹介の挨拶、原口先生の謝辞があり、引続き演芸会に入り、原口先生の愛弟子達を初めに、スザノの藤間国枝師門下生達、ツクルビーの林田剣舞研究生など、その他に筑前琵琶、詩吟入り菅公の一節の特別出演など、昼夜二回に分けて約五時間、出演者数百名を越し、演ずる者も見る者も心置きなく温まるばかりの和やかさに、くつろいだ一日であった。

番組は幼老男女軟硬を織りまぜ、種々多様に上演されたが、中でも伯国芸能界の元老、河合貞一郎老の、残月に川中島の剣舞二題は老の若年の頃の勇壮さを偲ぼるる程で、青年達も掌中

汗を振るの感があり、また、伯国での尺八の名手として知られる小林美登利先生の尺八と横笛の朗吟伴奏の特別出演もあり、深更午後十一時迄、円滑と満員の盛況裡に閉幕となった。

このような柔和な集いは、原口先生への良い餞けとなったことを主催者側は喜んでいる。

（五六年三月、平凡ブラジル友の会々報）

――――　◇　――――

なお、原口愛光苑先生の「パウリスタ線行脚」について、五五年十月四日付の昭和新聞は、次のように伝えている。

響く朗々の吟声

一九五五年八月着伯以来、日本伝統漢詩の朗吟及び今様詩舞の普及を以て在伯同胞慰問の為、東奔西走席温まる間もなき国際朗吟連盟理事長、原口愛光苑氏は、高弟川畑藤子嬢を伴ひ、去る九月十六日マリリア市を振り出しにパウリスタ線在住邦人訪問行脚に上った。

マリリア、ポンペイア、ツパンの三市に於ては、公開及び講習を行ひ、その新時代に即した朗吟及び、優雅にして気品ある今様詩舞は、日本的なものへの憧れにいきる同地邦人の心をしっかと掴んで、各地共きわめてたん期間ながら、多大の好評を博し、続々と講習申込が殺到する有様であったが、予定され

た時日の事とて後日を待ち、心を残しつつ前記三市のみを終えて、去る六日に帰聖した。

マリリア市に於ては同地青年道場にて、上田児童音楽学校せい徒他青壮年を交え、約五十名が三日間に亘って朗吟、詩舞の講習を受け、尚一般公開は、マリリア青年会主催、マリリア日本入会後援、上田児童音楽学校せい徒全員の歓迎参加応援のもとに、日伯会館に於て盛大に行はれたが、場を埋めた人々に深い感銘を与えた。

響く朗々の吟聲

優雅な詩舞に目を奪はれる

原口愛光苑氏パ線行脚の成果

魅力充満

ポンペイア市における公開は、同市旧青年会館でポンペイア青年会、文化放送部主催の下に行はれ、同管内サンマノエル植民地男女青年会主催に依り、二日間の講習が同地区小学校で行はれた。

ツパン市に於ての公開は、同市青年会館にて行はれたが、主催はツパン青年会であり、聖徳学院生徒他男女青年に、二日間の講習が行はれた。

この様に三市に於ける原口愛光苑氏の、潔白にして懇切な指導は、温厚真摯な氏の人格の反映として至るところで敬慕の的となり、又これを補佐する川畑不二子嬢の非凡な働きも興って大いに力あり、斯くの如き成果を示したのである。（原文のまま）。

全伯朗吟芸能連盟結成さる

話は前後するが、全伯朗吟芸能連盟結成委員会が催されたのは一九五五年九月十六日であった。この委員会において全伯の朗吟愛好者を糾合し吟道の研究と、合せて優雅な気風を涵養することを目的として発会式を挙行、地方支部設置の決議を行なった。

第一期役員は次のとおりであった。

会長＝川畑三郎、副会長＝河合貞一郎、専務理事＝浦田輝星、常任理事＝古沢典穂（朗吟師範）、村田伊太郎（剣舞師範）、藤間国枝（詩舞師範）、坂野熊太郎、薬師神真一郎、土生文吉、林田武雄、定兼勤。

第11部

浪曲

〔浪　　曲〕　なにわぶし・説教節・祭文から出た関西地方の語り物。うかれ節・ちょぼくれ・ちょんがれんなどを総称して江戸で「浪花節」と称えた。創始期のものは内容、辞句ともに卑俗なものであったが、江戸時代末期に物語・講釈・浄瑠璃・琵琶などを取り入れて今日の浪花節を大成させた。三味線を伴奏楽器として、解り易い平明な節調は極めて大衆的で人気を呼び、現在も全国に多数の愛好者を持っている。

明治末年に出た桃中軒雲右衛門と同時代に大阪に出た吉田奈良丸の出現によって浪曲史に空前の黄金時代を築き上げ、続いて一心亭辰雄、木村重勝、早川辰燕、東家三叟、港家大夢、京山小円、岡本鶴治、日吉川秋水などを輩出した。その流派も雲右衛派、奈良丸派東家派、木村派、雲月派などに分れ、大正中期以来漸次衰退の傾向をたどったが、満州事変以後、太平洋戦争の間、国家主義的な風潮と相まって隆盛を誇っていた。

戦後は極めて不振の態を見せていたが、最近（一九五三年頃）は再び人気を取りもどし民間放送の開始は浪曲に新しい分野を拡げている。雲右衛門・奈良丸時代に続いて亀甲斎虎丸、東家楽遊、東家楽燕、木村重友、天中軒雲月が大正期に活躍したが、その後を受けて、木村友衛、寿々木米若、広沢虎造、玉川勝太郎、春日井梅鶯、春日清鶴、梅中軒鶯童、三門博などが昭和期の浪曲界を牛耳った。

なかでも虎造の「次郎長伝」、米若の「佐渡情話」、勝太郎の「天保水滸伝」などはことに有名で、町の子供までがその文句を口ずさむ程であった。

また三門博の人気は最近（一九五三年頃）ことに高く、彼の十八番である「唄入り観音経」は浪花節の異色篇として近来まれにみる歓迎を受けた。

関西で第一に指を屈するのは三代目吉田奈良丸である。先代岡本鶴治につづいて二代目奈良丸が完成した「あて節」中心の節が正統をなすものでこれを受け継いでいる三代目が浪花節の嫡流でありとする人もある。初代雲月の義妹で天中軒雲月を名乗り、関西に赴いて改名した伊丹秀子も戦時中は軍事浪曲の花形であり、戦後も人気が盛んな女浪曲師である。初代雲月の節を基礎として独自の節をつくり上げた。女流浪花節のほとんど全部が彼女の影響を受けているのを見ても彼女の存在の大きさが窺われる。

また文芸浪曲の名の創始者酒井雲は、雲右衛門の末弟子で、傑作に「駕籠幽霊」などがある。関東にも関西にも上らず、名古屋に孤高の芸を守る特異な存在になっている。

木村友衛は関東節の正統を伝える人で重友の高弟。得意なものに「小松嵐」や「塩原多助」などがある。友衛が会長の浪曲協会はほとんどすべての浪曲師を包含し、時々大劇場で公演を催して、明治座や国際劇場などに満員の客を呼び、最近は浪曲映画にも進出している。雲右衛門によって大劇場に初めて進出した浪曲は、今日ラジオの発達とともに最も大衆的な芸能として人気を博し、長谷川伸などの一流文人もその台本に筆を執っている。

河竹繁俊監修、演劇博物館編（一九五三年八月発行）の「芸能辞典」から転載。

草分け移住者らに〝活力〟

戦前、浪曲家が貴重な役割り

沢田　多策

（ブラジル浪曲協会指導員）

コロニア浪曲家先達の霊に捧ぐ

移住者草分時代、それは大正の初期より昭和の初期ころまでと思う。この時期に最も多く、それら移住者が開拓の意欲に燃えて働いた時代であろう。そのような時代、無味乾燥の明け暮れの時、心に慰安と、明日に希望と働く意欲を与えた芸能人の業績は、永久にブラジル日本移住史の一ページに残すべきものであろう。

コロニアで浪曲の草分け時代と云えば、沢井天城（故人）が弁士（活弁）付きの映画と浪曲を持って口演、巡業したのが最初ではないかと思う。その外に浪曲を語って歩いた人も二、三名はいたらしいが、残念だがその名前は分らない。それに、レコードで覚えた程度の芸域の浅い連中では、いくらコロニアが娯楽に飢えていたころとは云え、あまり歓迎はされなかったらしい。それで自然に姿を消して行ったようだ。このような時代が過ぎてから浪曲を職業とし、また〝半職業〟としてコロニア各地を巡業するようになったのは一九二七年（昭和五）ころからである。それら人々の経歴を次に簡単に記載してみよう。

南米　呑州　一九二七年より三二年まで五か年間、コロニア各地を巡業。日本の文芸浪曲家として有名な酒井雲の一座で桃中軒の芸名で相当な人気者であったが、九州巡業の時ある未亡人と意気投合、その家族とともにブラジルに移住した。しかし、

コロノ仕事は全然せず、本職であった浪曲でコロニアを回り始めた。ところで、日本でも一流級の浪曲家の芸であったため非常な人気を博し、至る所で大歓迎を受けたらしい。そのうちに京山月子と云う女浪曲師が一枚加わり、それがさらに人気を呼び引張凧の状態であったが、ブラジルに見切りをつけたのか、五年後の一九三二年に当時の海外興業株式会社（移住者の斡せん機関）のブラジル宣伝員として帰国、日本国内を隈なく回ったらしい。熊本県の天草で死亡、行年七十二才であった。

東家　正丸　この人は一九二七年よりコロニアを巡業、滑稽（こっけい）ものが得意で相当な人気があった。浪曲で働いて得た金でイタケーラの町はずれに土地を求め家屋を建てたという。努力家であったが、一九五三年に死亡した。

南米　弧舟　一九二七年より各地の植民地を浪曲で回ったが、あまり人気はなかったようだ。好きな酒が原因で体を痛め、アララクアラ線ミラソール在の実兄の家に厄介になっていたが、四七年にその家で死亡した。

伯州　雲春　一九二七年ころより夫婦でコロニア各地を巡業、なかなか人気があった。
それに、当時としては珍らしい大変に真面目な人であったらし

い。一九三六年に日本に帰り、それから間もなく死亡したらしい。

京山　美代治　正丸師の弟、独身だった。
兄の正丸師はどの人気はなかった。五三年ころ旅先で死亡。

東家　楽心　沢井天城とともにコロニアを巡業した人であるが、あまり人気はなかったようだ。終戦後、サンパウロ市の日本人旅館で親切な館主に看取られて黄泉の人となった。
身寄もなく旅芸人の悲惨な末路である。五二年ころの死亡。

東家　鶴太郎　一九三〇年よりコロニアを回って浪曲を口演。なかなか人気があったらしいが、五三年ころに現役から引退したらしく、その後の消息は知るよしもない。

小早川　清舟　一九三〇年より五七年ころまで浪曲巡業していたが、ソロカバナ線のオウリニョスで宿屋を経営しながら、時に応じて浪曲口演に出掛けていたらしい。

京山　円駒　この人は日本で子供のころから本格的に浪曲を勉強した根っから本職の浪曲師であり、日本にいれば大家として有名に成ったことと思われる。ところが、人間の運命とは妙

なもので、親戚の構成家族の一員としてブラジルに移住したが、コロノの仕事は全然せず、浪曲で巡業を始めたのは一九三二年ころであった。当然…とも云うべきか、さすが日本の本舞台での芸はコロニアで大変な人気であり、次々と引張凧の状態だった。

それに応じて収入も相当なものであったが、昔の芸人癖で〝宵越しの金は持たない〟という風で、派手に消費してしまった。しかし、晩年は子供らが成功し、誠に結構な余生を送っていたが、八二年、行年七十五才で黄泉の人となった。

菊地　小天狗　熊本県菊地郡の出身。ブラジルに移住後は義務農年を終え、コロニア各地を一九三三年ころより巡業、声量が豊で、日本で少しは勉強したと思われる。元来が天理教の講師の肩書を有する非常に真面目な人であり、五八年まで巡業し、浪曲家としては人気があった。六八年ころに死亡。なお、サント・アマーロ区に同師の経営する天理教の支教会があり、現在はその子息が引継いでいる。

桃中軒　雲外　小柄な体で、舞台に出る前には必ずピンガを一杯ぐーっと呑む癖があった。「義士伝」が十八番（おはこ）で、一九三五年ころより巡業、五五年ころまで続けていたらしい。大変な美声の持主であった。

ピンガの呑み過ぎで体を痛めたことと思う。
その家族は、いまサンパウロ郊外に住んでいるらしいが、本人は五五年に死亡。

東家　燕真　日本で浪曲の大家・東家楽燕師の下で若いころ勉強、将来を有望視されたが、途中より全然声が出なくなり、好きな浪曲を断念、写真店を経営していた。数年後、また元のように声が出るようになり、浪曲を職業にしようと考えているうちにブラジル移住を思いたち、移住の許可の出るまで県下を巡業した。渡伯後、農業の方は家族に委せ、筑前琵琶の東旭水と組んでコロニアを巡業、大変な人気であった。燕真の芸は、日本の大家の下で修業しただけに全く抜群であった。
ブラジルでは一九三五年から七六年まで現役として活躍した。

花中軒　水月　天性の美声、コロニアでは他の追従を許さなかった。日本にいてその道に入っていたならば相当な域に達していたことと思う。「上塚周平伝」前後篇をレコードに吹込み、相当量の売上げを記録している。
「水月祭り」に友情出演の日本舞踊をプログラムの中に加えて、これまで三回行ない、ことし九月（一九八四）には浪曲歴五十年記念口演を行なうべく、その準備中に倒れた。誠に惜しいことであった。一九三五年に浪曲を始め、八四年三月二十八日に

地下に眠った。

故水月得意の読物（よみもの）としては、社会美談「正直車夫」、軍事探偵「橘秀夫」、義士外伝「村上喜剣」などがある。

天中軒　富月　昔の海軍出身者であり、入隊中に好きで浪曲を覚え、ブラジルに移住後はマーラを肩にコロニアを巡業した。軍事物が得意であったが、第二次世界大戦が始まると、家庭工業に従事、それが好成績を上げ、立派な住宅を建てた。戦後は訪日旅行はするというほどで、コロニア浪曲界における最高の儲け頭であろう。戦後は浪曲界よりキレイに足を洗った。一九三六年より四一年にかけて活躍した。

寿々木　一若　桃中軒雲外の実弟である。

天性の美声で、大変な人気があった。得意の読物は「涙の君が代」、「文七元結の由来」などは、他の追従を許さなかった。一九七五年十二月、惜しくも五十四才の若さで、この世を去った。

寿々幸　一声（筆者）。青年時代、日本では北海道で正式の手ほどきを受けたが本職にはなれず、兄弟五人とともに一九三三年八月、ブラジルに移住した。コロノとしての義務農年を終えた後、三七年ころより浪曲巡業に従事、〃旅がらす〃の苦労を体験した。しかし、浪曲で私ぐらい広くブラジルを歩いた人は

他にないであろう。ゴヤス州の奥、三角ミナス、ベロ・オリゾンテ、クリチーバ、パラナグア、イタジュウバ、マリア・ダ・フェにリオ州のイタグアイ、テレゾポリス、モロッテス、アントニーナなどで、訪れた先々でいろいろ珍らしい話が沢山あるが、稿を別にして書くことにしよう。戦前、コロニアの浪曲界では花中軒水月、寿々木一声と私が〝三羽烏〟と云われた黄金時代があった。

私自身は舞台に立つ時、常に日本の歴史を語って聞かせるのであるというプライドを持って口演した。また、慈善関係面に協力しことも、私の誇の一つとするところである。

その功績に対し、一九八二年五月三十日、沖縄県人会々館における私の「浪曲五十周年記念公演」に際し、州議の森永セルジ

オ氏を通じ、ブラジル政府から文化章を贈られた。現在、ブラジル浪曲協会の指導員として籍を置き、休日を利用して各老人クラブを慰問のため仲間とともに浪曲口演に出掛けている。

天中軒　満月　第二次世界大戦が終った一九四七年ころよりコロニアを巡業、軽い節回しと語り方で大変コロニアに人気を博した。

その間、「平野運平伝」のレコードを吹込んで相当額の売上げ成績をものにした点をみても、同師の人気のあったことが実証される。

芸の研究に数か月間にわたって訪日したほどの熱心家でもあった。ブラジル浪曲協会の創立者であるとともに、初代会長としてその席にあること数年、惜しいかな五十四才の若さで七三年にこの世を去った。

南光軒　秋月　一九四七年ころから浪曲巡業を始めた。美声の持主で四、五年間にわたってコロニアを回ったが職業としての浪曲師に見切りをつけ、バウル市の日本人会々館の管理人として生活中の七五年に死亡した。

松井　薫風　不動産関係の仕事を本業として各地を旅行中、乞われるとその夜は浪曲口演という変りダネの存在であった。

昔風の渋い声で「父帰る」の芸題が十八番であった。一九四七年に浪曲を始め、七〇年にはやめている。

日吉川　秋豊　日本の日吉川秋水師の高弟の芸名をそのまま名乗っていたが、口演して歩いた……ということは聞いた覚えがない。

（注・一声こと私）、巡業中にプ・プルデンテ市の旅館であったことがあるが、その後の消息はようとして不明。

高橋　伯山　講　談　ブラジルでは只一人の講談師であり、日本で有名な講談師・神田伯山の下で修業した後、雄志を抱いてブラジルに移住した。そして義務農年を果した後コロニア各地を「講談」で巡業を始めたのが一九三三年であった。日本において本格的に修業した芸は、聴衆を魅了したことは当然である。そして大変な人気を得て、次々と引張凧の状態であった。その巡業でかなりの蓄財を得て日本に帰るべく準備したが、何かの都合で中止、時折は口演に出掛けていた。晩年はサンパウロ市カーザ・ヴェルデ区で養鶏を始めたが、一九六三年に死亡した。あとに残った夫人は、養女の世話を受けていると聞くが、その後の状態は不明である。

以上で、戦前のコロニアにおける浪曲家の活躍記録は一応

終ったのである。

（芸名・寿々喜一声）

戦後初の全伯素人浪曲大会

純日本人的な義理と人情を多分に折込んだ内容の浪曲などは、終戦後十五、六年ぐらいで自然に消滅するのではなげかと思っていたが、それは杞憂（きゅう）に過ぎなかった。その反対に、段々とファンが増えてきたのである。

このような状態の折に、マリリア市のシネ・サンルイスで土井公男、山路政雄、京山円駒民らの奔走の下に第一回全伯素人浪曲大会が開催された。一九五三年十月二十九日のことである。

第一回全伯素人浪曲大会で優勝した笠井剣風（右）と審査員の寿々喜一声

第二回全伯浪曲大会のおもなメンバー。前列右より寿々喜一声（審査員）、藤本政雄（B組一位）、岡梅子（曲師）、宮原敏雄（A組一位）、京山円駒（審査委員長）、後列右より小路政雄、松井鷹風、田の上の諸氏

聴衆は満員であったが、出演者は十名。審査員には委員長に京山円駒師、委員に寿々喜一声、花中軒水月の三名であった。なお、第一回から三十一回（八四年）までの大会優勝者は次のとおり。（注＝上段の数字は開催年度、二段目は大会数）。各自準名人位獲得。

53	1	笠井　剣風
54	2	宮原　敏雄
55	3	宮原　敏雄
56	4	久野　鹿夫
57	5	清水　敬治
58		移民五〇年
		祭のため中止
59	6	真名子雲声
60	7	三岳とみ子
61	8	神保　新月
62	9	植木　蓉月
63	10	音成　次男
64	11	小原　峯月
65	12	鍬柄　梅若
68	15	青山　謡月
69	16	中川　芳月

70　17　菅原　竜二
71　18　由井　竜月
72　19　富士州々夢
73　20　荒木　正光
74　21　嵐山　福友
75　22　戸島　鳳若
76　23　南　雲声
77　24　高橋　秋水
78　25　奥山　繁若

第三回全伯浪曲大会のおもなメンバー。右より京山円駒（審査委員長）、寿々喜一声と花中軒水月（審査員）、役員の山路政雄、宮原巌、宮原（弟）

７９　２６　今野　吉郎
８０　２７　村野　燕若
８１　２８　宗像　巌
８２　２９　樋口　公若
６６　１３　片岡　燕若
６７　１４　高野　南州
８３　３０　笹原　春月
８４　３１　岩永　清若

全伯浪曲準名人大会

全伯素人浪曲大会において、小学級、中学級、大学級と三階段を経て大学級で優勝した人が準名人位となり、その準名人位連が、名人位を獲得せんがために競う大会である。この域に達するまでには成績の良い人で四、五年ぐらいはかかる。十年の歳月を費やしても名人位になれない人もある。

なお、全伯浪曲準名人大会は一九六四年四月より開始されたが、第一回大会は六五年度からとなった。また、第十七回大会より二回優勝者にのみ名人位を授与することに決定。

第一回から二十回（八四年）までの優勝者は次のとおり（上段の数字は年度、二段目は大会数）。

６５　１　宮原　敏雄　　７５　１１　由井　竜月
６６　２　神保　新月　　７６　１２　中川　芳月

６７　３　京山　秀駒　７７　１３　嵐山　福友
６８　４　真名子雲声　７８　１４　戸島　鳳若
６９　５　三岳とみ子　７９　１５　荒木　正光
７０　６　植木　蓉月　８０　１６　高橋　秋水
７１　７　鍬柄　梅若　８１　１７　村野　燕若
７２　８　片岡　燕若　８２　１８　村野　燕若
７３　９　青山　謡月　８３　１９準　阿部秀月
７４　１０　高原　南州　８４　２０準　今野吾郎

全伯慈善浪曲名人大会は、ことし（一九八四年）で第十五回目を迎えた。なお、本大会の剰余金はすべて各日系コロニアの慈善団体に寄付されてきた。

ブラジル浪曲連盟を創設

ブラジル浪曲連盟が正式に創設されたのは一九八三年十二月で、各地支部は次のとおりである。また、全伯素人浪曲大会、全伯浪曲準名人大会、全伯慈善浪曲名人大会は現在すべてブラジル浪曲連盟が主催している。三大会の開催日は毎年、素人が八月、準名人位が四月、慈善が十一月と決まっている。

１　ロンドリーナ浪曲協会
２　アサイ浪曲愛好会
３　リンス浪曲愛好会
４　バウルー浪曲愛好会

5　ペレイラ・パレット浪曲協会
6　タクアリチンガ浪曲愛好会
7　カンピーナス浪曲愛好会
8　アラサツーバ浪曲協会
9　ブラジリア浪曲愛好会
10　ブラジル浪曲協会　（聖市）
11　サンパウロ浪曲協会（聖市）

次々と著名浪曲家来聖

第二次世界大戦終了後、日本より来伯した浪曲家は、およそ次のような人々である。

第二次世界大戦終了後、日本より来伯した浪曲家は、およそ次のような人々である。
① 五一年一月、日伯毎日新聞社招聘

① 五一年一月、日伯毎日新聞社招聘
東海林太郎団長　篠田実、房信父子　曲師　篠田房信。

戦後初の芸能団（外に小唄勝太郎、三味線豊吉）だっただけ、各地で大歓迎を受けるとともに、興行面で大成功を収めた。

②　五一年六月、日伯毎日新聞社招聘

古賀政男団長　広沢虎造　曲師　萩原稲子。

③　五二年九月、三浦愛蓄堂招聘

松平晃団長　芙蓉軒麗花　曲師　中川加奈女。招聘責任者による不手際からか各地での興行は失敗に終り、芸能団一行は三邦字新聞社主催の同情公演（二日間）により、ようやく帰国。

④　年代不明、日伯シネマ社招聘、宮川左雲丸。

⑤　七九年、招聘者不明

二葉百合子、太田英夫。興行は失敗、ヤクルトの援助で帰国と聞く。

⑥　七四年、奥原プロダクション招聘

木村忠衛、ブリガデイロ劇場で二日間口演。

⑦　七七年七月、ブラジル浪曲協会招聘

天津羽衣　曲師　華井美智子。霊友会の布教用務を帯びており、公演は三、四か所にとどまったが、一流女流浪曲家の芸は流石であった。

⑧　七八年六月ブラジル浪曲協会招聘

中川海老丸　曲師　本田富士子。

中川海老丸

⑨　八一年八月、ブラジル天理教団招聘
二葉百合香　曲師　本田富士子。教団の用務多忙のためジアデーマ日本人会館だけで口演、ブラジル浪曲協会員が応援出演。

⑩　八〇年十一月、ブラジル浪曲協会招聘
東家菊燕　曲師　山本繁、本田富士子
文協大講堂で二回、州内各地八か所、サントスの更生ホームと憩の園ホームでの慰問口演など、計十二か所の公演は大変な人気を博した。

⑪　サンパウロ日伯援護協会招聘、チャリティショオ。玉川勝太郎（三代目）。

⑫　松竹本社派遣、村田英雄。ブラジル松竹主催のアトラクションにシネ松竹で口演。

浪曲公演で慈善団体へ協力

ブラジル浪曲協会とは別個に、寿々喜一声が主となった日系慈善団体へ協力のための浪曲公演が次のように催された。

一、一九五四年十月、聖市テアトロ・コロンボにおいて聖市四百年祭を記念しての「浪曲の夕」、平田公泰氏の主催。出演者は十三名で、当日の優勝者は松井薫風、審査員は寿々喜一声。剰

余金はパウリスタ癌撲滅協会へ

一、一九五五年五月一日、寿々喜一声奔走の「浪曲のど自慢大会」が桜クラブで。出演者は十四名、剰余金は各慈善団体へ。

一、一九六六年十一月、救済会の憩の園増築資金捻出のための「浪曲の夕」を寿々喜一声、水前寺菊若、寿々木一若、外一名らの奔走により文協大サロンで。剰余金は約一千コントス。

サクラ・クラブでの「浪曲のど自慢大会」演壇前は手前（手品）、後列右から宮原義美（司会）、松下、一人おいて中島春水、染谷義雄、松下（妹）、土井公男、藤本政雄、宮原敏雄、高橋伯山（講談）、花中軒水月、菊地小天狗、寿々喜一声、天中軒雲月、青木

テアトロ・コロンボでの「浪曲の夕」に出演した後列右から藤本透、土井公男、松井薫風、宮原敏雄、前列右から藤本政雄と審査員の寿々喜一声

一、一九六八年五月十二日、文協大サロン　で「第二回浪曲のど自慢大会」、寿々喜一声　の奔走による。剰余金は子供の園

とカンポス・ド・ジョルドンの肺結核療養所へ。

私が出合った戦前の浪曲師
大正中期から先輩多数が活躍

花中軒水月　（本名・花田典幸）

在りし日の花中軒水月

南米呑舟、伯州雲春らが〝先駆者〟

きょうこの頃のわれわれは、物価高騰の折から何が何んでも働かざる者は食うべからずという訳で、コロニア七十余万の同胞が、毎日汗だくだくになって多忙な毎日をおくっている。しかし、日曜日、祭日ともなれば、日舞、民謡、のど自慢、陸上、野球、相撲、そして釣だの、ゴルフなど、または映画、祭典かどなど、何ひとつの娯楽にこと欠くことは無くなったが、このようなことは、戦前、それは大正初期（一九一〇年代）の移民達には夢どころか、想像も出来なかったことであろうと思われ

る。

ただ、朝早く起き出して畑に行く。炎天下に汗みどろになって働く。日が暮れたら家路につく。その繰り返しを続けて来たのが、われわれコロニアである。ようやく独立農となり、生活の安定が出来はじめたのは、大正十年（一九二〇年代）以後のことであろう。

昭和初期の三、四年（一九二八、九年）頃南米呑舟とか、伯州雲春という浪曲師が、モジアナ、ノロエステ線地方で好評だった、という話を聞いた。私が昭和十四年（一九三九）の末、ノロエステ線ビリグイの松隈旅館に泊って口演した際、この宿の主人である松隈宗次郎さん（故人）から、昔（一九二一年前後）、近沢、右庄との三人で日曜日毎に近辺の各部落を〝唸って〟歩いたが、大変喜ばれてこれが四、五年も続いたと聞かされた。

ところで、その浪花節も、呑舟や雲春の出現によって、やめたのではないか、と思うのだが、この人達三人が、ひょっとすれば、コロニア浪曲の最初の人達だったかも知れない。

生前の京山月子師には私も随分世話になったが、この女流浪曲師である月子師も約五十年前の人で、その前は「月の家」の看板を掲げて大層流行った料理屋の女将であった。その後、小早川清水、伯柳軒某および、手品と浪曲の福岡天一という人達もおられたが、到頭一度も出会うことが出来なかった。そのた

め私の許には、何の文献も残っていない。

十二の小僧ッ子時代から唸る…

昭和八年（一九三三）に渡伯した私が、ノロエステ線プロミッソンの上塚第一植民地ゴンザガで京山美代治という人による「雷電と大岩」の遺恨相撲を聞いたのが最初の浪花節である。その頃、隣接のボラ植民地で佐々木という人が、節劇（源氏節芝居、女芸居の一種）をやっていた。なかなかの評判で、近隣の植民地では、主として青年達が熱中していたようだ。

その翌年、私は両親などとともにソロカバナ線ランシャリアに移った。ここで五十代の南米孤舟による「乃木将軍と孝行兵士」を聞いた。私もその頃は「南部坂雪の別れ」や「孝行辻占売り」などを唸っていた。まだ、十二才の小僧っ子であった。

昭和十年（一九三五）、南米米友の「稲妻お玉」や「召集令」を聞いて、このくらいの浪花節で皆が喜ぶくらいなら、自分も……と思って、近所の人達に集って貰い、再三唸ったことがある。「隅田の夜話」「鼠小僧次郎吉」に「佐渡情話」を覚えたのも、その頃であった。いまの寿々木一若が小若丸と名乗っていた頃である。

私の最初の芸名は東川右近、次に津山崎亭則雪、花田伯雲、瑞竜軒峯雲、花中軒水月と五回も芸名を変えたが、一九四五年以来、水月で通して来た。寿々木一若も晩年、三代目京山円駒を

名乗ったが、私は「一若、一若」と呼んでいた。彼は私とは同じ船で渡伯した誼もあり大の親友であったが、五、六年前とおとお病のため死んでしまった。全伯浪曲がこんにちまで盛大に続いているのは、京山円駒、寿々木一若両名の力に負うところが多い。

熊本県菊地郡の出身であるため菊地小天狗と名乗った中野茂は、「弁天お春」が十八番であった。東家正丸を名乗った稲掛氏は、先に書いた京山美代治の舎弟である。「村上喜剣」「勧進帖」「大久保と島田一郎」などが得意であったが、戦後〝勝ち組〟の旗頭で、二か年余の島流した遭って、帰って来て間もなく他界したのは気の毒であった。

昭和十七年頃（一九四二）、「大阪親友派青年横綱」の肩書で名刺をいただいた日吉川秋穂という人に、バストス移住地の池田ホテル（現聖市）で出合ったが、何ともほめようがなかった。十八番は「トランク事件」であった。

その以前、リンスに住んでいた二代目京山円駒は昭和七年（一九三二）の渡伯だが、曲師の繁子夫人とともにリンスに来た頃の人気たるや物凄いもので、とても近頃の人達に話をしてもウソのように聞える程である。それもその筈、彼こそ正真正銘の大阪親友派の大幹部、初代京山円駒の二代目を龍名した新進の浪曲師、若手花形であったのだ。その上、ブラジルで聞く初めての三味線も本場仕込みの音締めだから、リンスの町は〝円

駒円駒〃で沸騰した。晩年は不遇だったが、彼に教えを乞うた人（素人）は十指に余る筈なのに、義理人情を説く浪曲にしては、ちょっと淋しい気がしてならない。蓋し、全伯浪曲界にとっての大恩人であった。

唯事の出世頭は天中軒富月

先年他界した東家燕真という人は、浪曲で生活出来る人ではなかったが、商才に優れた人であったようだ。桃中軒雲月、彼は寿々木一若の実兄で、その義士外伝「曽我物語」は聞き応えのあるものであった。現在、素人の中に、この「曽我物語」を読んでいる人もある。なお、一若の得意は「涙の君が代」「佐渡情話」「文七元結」などで、晩年には「伯国版、己が罪」を自作、これがなかなかの評判であったにもかかわらずテープに残さなかったのは残念である。

一方、二代目円駒の得意は、何といっても「孝行万兵衛」であろう。その他に「トランク事件」「芸者の誠」「幡随院長兵衛」などなど読物も豊富であった。

ソロカバナ線アグードスの奥には、京山修月、リンスに京山円菊の二人がいたが、老齢のため巡業には出なかったようだ。

天中軒富月、この人は義士伝が得意で、「南部坂雪の別れ」を何回か聞かせていただいた。この人の「南部坂…」は、飽きが来ない程うまいと思ったが、「曽我物語」も良かった。しかし、

家度の事情で終戦後は引退して商売に打込み、現在は楽隠居である。浪曲仲間の出世頭はこの人ぐらいであろう。舞台用の道具一切は私が譲っていただいて、今なお大事に使っている。

寿々喜一声との交際も、約四十年ぐらいになる。三十年前までは渋い声でやっていたが矢張り年（とし）には勝てない。新作物を得意として「杉野兵曹長の妻」「紀国屋文左衛門」、この頃では「男の花道」などなど、若い者顔負けの意欲を燃やしている。すでに七十五だが、現在、ブラジル浪曲界の指導者として頑張っている。素人の人達は、この一声を大事にしないと、本当の指導者はいなくなる。素人はどこまでいっても素人である。

私が昭和九年（一九三四）以来、半世紀の間に出合った玄人仲間のうち現存者は、天中軒富月（西村）、寿々喜一声（沢田）と私の三人だけである。

ここで私事になるが、ブラジル全土を巡業したのは私一人である。寿々喜一声はサンパウロ、パラナ州が多く、パラー、アマゾーナス州でも巡業したが、私ほどの口演旅行は出来なかった。

私の得意は、「橘美雄」「村上喜剣」「安中草三郎」、その他に自作の移民浪曲「上塚周平」「平野運平伝」「水野竜」「下元健吉伝」、最近では「涙の日語教師、芳根哲子」がある。また、「ああ拓魂」と銘打って「上塚植民地開拓史」をカセットに入れようとしたが残念ながら失敗を続け、「コロニア移民七十五周年記

念」の浪曲は断念の止むなきに至った。ただ、恒例の「水月祭り」は、毎年盛大に続いている。

（文中敬称略）

―――◇―――

花中軒　水月

本名・花田典幸、一九二二年一月十二日福岡県宗像郡津屋崎町生まれ。

一九三三年七月二十七日サントス着ありぞな丸で渡伯。十二才の時から口演。

一九六二年、自作自演の移民の父、上塚周平翁の血涙物語「拓魂」（二枚）、次いで安中草三郎と移民の功労者「水野竜伝」をレコードに吹込んで好評。

一九七四年、亀井福岡県知事来聖の際、同追憶の言葉　故花中軒水月君との出合いはマリリア地方を巡業中の一九四〇年頃だったと思う。当時、コロニアでは浪曲が全盛の時であり、戦前戦後を通じて最も歓迎された時代であった。

そして、花中軒水月、寿々木一若、寿々喜一知事揮毫の掛幕「中心」を贈られる。

一九七九年九月の第一回「水月祭り」を八三年まで続行、八四年二月二十八日、心臓病悪化のため死去、六十二才。

生前、娯楽の少ない時代に浪曲でコロニアを慰問した功に対し、ロンドンおよびカプラール章を受ける。

一九八四年九月十六日、文化センター大講堂で「水月師追悼浪曲大会」（水月後援会主催、ブラジル浪曲協会後援）が開かれ、大盛況を呈した

（以上略歴は沢田多策氏提供）。

寿々喜一声

この三人がコロニア浪曲家の「三羽烏」と云われるような黄金時代でもあった。

戦後の一九五三年十月二十九日、同好者の奔走によりマリリアで全伯素人浪曲大会が開かれ、彼と私は審査員として第三回大会まで招かれ出席した。しかし、彼と私とはブラジルにおけ

る浪曲の将来に就いて考え方が違っていた。
私は趣味として語るもので職業としては成立たない…といつも主張したが、彼はその反対で飽くまで職業としてやり通そうとした。
その熱意にはただ敬服の外はない。戦後早くも四十年、浪曲を職業とした多くの人々も他界、八三年頃には彼と私の二人きりとなったのは、非常に淋しいことであった。
七六年か七七年頃、彼は心臓病で入院、医師から浪曲の口演を禁じられたが、少し良くなると再び浪曲口演で歩き出し、病状を悪化させたのではなかろうか。現に八三年の第五回「水月祭り」に私も招かれて出演したが、容体に悪化の兆が見られ、翌八四年二月二十八日、突然にも多量の吐血の後、バンディランテス病院で黄泉の客となった。
残された三人の子供は未だ幼い。だが、賢婦人の奥さんが立派に育て上げるだろう。
君は地下に在ってそれを見守ってやって呉れよ。君は私より十幾年も年少であった。これから人生を楽しめるのに、運命なれば是非もなし、噫々惜しいかな。

（一九八五年二月・記）

第九回全伯浪曲大会に審査員の一人として出席した花中軒水月＝中央＝、左から京山円駒、寿々喜一声、天中軒満月、土井公男（一九六二年八月二十五、六日）中川芳月師提供

浪曲を通じて人づくり

ブラジル浪曲協会創立とその意義

中川　芳月
（ブラジル浪曲協会々長）

愛好者らが研究会を設立

戦前、コロニアの浪曲家の大半は〝呑む、打つ、買う〟と、三

拍子の揃った道楽者で占められていた。

ために、浪花節は常に世間一般から白眼視された。「日本人の心の歌」と云われた浪花節が、なぜ悪いのか。それは語る人の品行が、悪いからだ、と浪曲愛好者の筆者と、親友である宮原巌、土井公男ら三人の意見は一致、さらに一般愛好者の後援を得、「浪曲を通じて人間を造る」と云う意義のもとに催されたのが一九五三年十月二十九日、マリリアでの第一回全伯素人浪曲大会であった。

一九五三年十月二十九日の第一回全伯素人浪曲大会での土井公男（右）と京山円駒

同大会後、マリリアに浪曲研究会が生まれ初代会長に山路政雄が推され、第二回、第三回大会とも引続きマリリアで開かれた。当時の会員は十八名だった。

その後、浪曲研究会の中堅、土井公男、宮原敏雄、藤本政雄ら三人が殆んど時を同じくしてサンパウロに移ったため、第四回大会は天中軒満月師の協力を得て、市内、パルケ・ドン・ペードロ二世内の青年会館で開いた。

出場者は三十六名、女流浪曲家の三岳とみ子が初めてモジから来演したのが、この大会でもあった。

同大会終了後、サンパウロにサンパウロ浪曲研究会が誕生、初代会長は平田郁夫で、彼が会長時代の第五回大会（シネ東京で開催）に出場した現名人の鍬柄梅若は、口演に先立って〝元気ずつけ〟か、生タマゴを一ダースも飲み、口演中にそれを舞台上で吐き出して止む無く中途で退場、という一幕もあった。

同研究全の第二代会長は岩本和一、第三代は天中軒満月師であった。満月師は芸熱心な人で、一九六四年、浪曲勉強のため約一か月間にわたって訪日した。帰伯の際には有名な寿々木米若師から、同師愛用の三味線をサンパウロ浪曲研究会へ贈られ、これを持ち帰った。また同時に日本浪曲協会長の東家浦太郎師より、サンパウロ浪曲研究会をこんご日本浪曲協会の海外支部とするという認定証をいただいたので、帰伯後、それまでの会名をブラジル浪曲協会と改め、一九六五年から国内各地での支部設立に奔走した。満月師は七二年一月十二日に急死、協会では協会葬をもってその功績に報いた。

第五代会長は土井公男だったが、第一回全伯素人浪曲大会（一九五三年）から数えて三十年目の八三年に勇退、同年十二月に創設されたブラジル浪曲連盟の初代理事長として選ばれた。

浪曲連盟公認、名人の〝横顔〟

ブラジル浪曲連盟が創設された一九八三年十二月から現在（八五年十月）まで、同協会が公認した名人は十九名、次にいささか簡単に過ぎるようだが、そのプロフィルを記す。

土井　公男　現在のコロニアにおける浪曲の普及と発展を顧みる時、忘れることのできない人である。戦後、コロニアの苦難の時代にマリリアで日本芸能文化のひとつである浪曲の大会を手かげ、以来三十三年間にわたって大会に皆勤、積極的に「浪曲によって人を造る」という信条をくずさず、人格の陶冶（とおや）を提唱して来た。天中軒満月師の没後、ブラジル浪曲協会の会長を務め、ブラジル浪曲連盟の創設によって初代理事長、現在は顧問としてコロニア浪曲界に情熱を注いでいる。

寿々喜　一声　本名・沢田多策。娯楽の乏しかった戦前にも、町から植民地へと丹念に移民の慰問に行脚（あんぎゃ）した功績は大である。コロニア浪曲界のプロとして、現在ただ一人の生存者である。三年前の一九八二年、サンパウロの在伯沖縄県人会々館で「浪曲五十周年」の記念浪曲大会を催し、現在も浪曲の指導に張切って衰えを見せない、浪曲界にとって貴重な一人である。

写真は左上から土井公男、同下―高野南州
右上―今野吉郎、同下―宮原敏雄

真名子　雲声　本名・真名子一下。一九五九年の全伯浪曲大会で優勝、それから九年目の六八年に催された第四回全伯準名人大会でも優勝して名人位を獲得した。幼少の頃から浪曲好の父親に愛され、その父は死のきわに

「死んだらお経の代りにお前の浪曲で弔らってくれ……」と云い残したという。浪曲界一の美声の持主で、来伯した日本の浪曲師たちも感嘆した程である。また曲師としてもその技量は最近ますます冴え、浪曲界で活躍している。〃おはこ（十八番）〃は「深川裸祭」。

植北　蓉月　本名・植北喜次。一九六二年の第八回全伯素人浪曲大会で優勝、次いで六九年の全伯準名人浪曲大会でも優勝して名人となる。ブラジル日本移民七十周年の際、一期ブラジ

ル浪曲協会々長を務め、来伯した中川海老丸師を四か年にわたって世話した。若き日のような声は冴えないが、老巧の重みと貫禄は充分、愛好者に喜ばれる浪曲を語る。〝おはこ〟は「涙の王将」「無法松の一生」。

三岳　とみ子　本名も同じ。一九六〇年の第七回全伯素人浪曲大会、同七〇年の第十六回全伯準名人浪曲大会でも優勝して、名人となる。十九名人中の紅一点だけにファンも多い。また民謡の面でも活躍し、盆踊りの歌い手としても無くてはならない人である。〝雲月調〟で「花街の母」「原爆の母」「鈴蘭の母」などといった母ものが得意である。

鍬若　梅若　本名・鍬若三郎。一九六五年八月の第十二回全伯素人浪曲大会、同七一年四月の第七回全伯準名人大会でともに優勝して名人位を獲得する。春日井梅鶯の名調子をものにして、舞台での熱演は浪曲界随一である。練習は毎朝二時間は欠かしたことはない、という精進振りである。現在、サンパウロ浪曲協会の会長として活躍中。得意は「父帰る」「召集令」など。

片岡　燕若　本名・片岡良嘉。一九六六年の第十三回全伯素人浪曲大会、同七二年の第八回全伯準名人大会で優勝、名人位を得る。

曲師としても有能な人で、指導力も抜群、幾多の優秀な浪曲師を育て上げている。また最近は歌謡曲の指導にも当っており、カラオケでは生徒三百人を擁して多忙な人であり、演劇、浪曲、歌謡と多様な大衆芸能文化に精進している。

高野　南州　本名・高野三郎。浪曲界の元老でもある。笠井剣風師（一九五三年十月の第一回全伯素人浪曲大会の優勝者）に浪曲と剣道を師事し、浪曲では一九六七年の第十四回全伯素人浪曲大会、同七四年の第十回全伯準名人大会で優勝を飾り名人となる。バウルーから首都ブラジリアに移転してからは浪曲界と縁遠くなっていたが、ことしはバウルーでの第三十三回全伯素人浪曲大会に出席、往年の〃米若調〃の名調子を遺憾なく披露した。
現在はブラジリアで剣道の指導に当って活躍中である。

由井　竜月　本名・由井利次。一九七一年八月の第十八回全伯素人浪曲大会、同七五年四月の第十一回全伯準名人浪曲大会で優勝して名人位を獲得。得意の節は四代目の〃天中軒雲月調〃で、口いっぱい吐き出すソフトな絶唱と常に新しい演題に取組む精進振りは浪曲界中で随一。昨八四年はサンパウロ浪曲協会の会長を務め、日本病院建設のためのチャリティー・ショーを催すなど、社会福祉にも活躍した。〃おはこ〃は「義

士伝」。

中川　芳月　本名・中川芳則。ブラジル生まれだが、日本育ちの帰伯二世で、日語放送で名を売った北パラナのロンドリーナ出身。

第一回北巴浪曲大会を経営していたジフゾーラ日語放送部と、週刊トピックスと共催し、その後同地に浪曲研究会を創設して愛好者らにバトンを渡した。これが縁となって大会の二年後から浪曲を東家燕真師に師事、芳月の芸名を頂戴する。一九六九年の第十六回全伯素人浪曲大会で優勝後、南聖海岸地帯の土地開発のためサンパウロに移り、同七六年の第十二回全伯準名人浪曲大会で優勝、名人となる。巧みな話術と愛嬌ある舞台は多くのファンを持つに至った。現在、ブラジル浪曲協会会長として、福祉面でも活躍中。

太田　南州　本名・太田熊一。ロンドリーナ浪曲界の功労者。浪曲に対する意欲的な努力と功績が認められ、名人位に推選された。

その後、高血圧に倒れて療養中だが、懐しい〝米若調〟をもう一度…と、多くのファンから再起を期待されている。

富士　州々夢　本名・佐藤進。一九七二年の全伯素人浪曲大会で優勝、その後ブラジル浪曲連盟の推選により名人となる。浪曲界で随一の〝啖呵（たんか）読み〟と〝けれん読み〟に精進して誰にも分かりやすいタンカでファンを魅了する。演劇の世界で鍛えたせいか、演技もうまい。浪曲の節に年功の円熟さが加われば、至芸とともに並ぶ者なき巧者と云えようか。サンパウロ州ノロエステ鉄道のリンス出身。現在はバウルーに住み、バウルー浪曲愛好会の指導員として活躍している。

戸島　鳳若　本名・戸島巌。歌謡、民謡畑から浪曲に意欲を燃やして精進、一九七五年の第二十二回全伯素人浪曲大会と同七八年の第十四回準名人浪曲大会で優勝して名人となる。持前の美声に渋味がかかれば……と、期待する人も多い。現在カラオケ教室も設けて歌謡の指導にも余念がない。ロンドリーナで活躍中。

荒木　正光　本名も同じ。一九七三年八月の第二十回全伯素人浪曲大会と同七九年四月の第十五回全伯準名人浪曲大会で優勝して名人位を獲得。笠戸丸や平野運平伝など、コロニアの移民史の哀歌を謳って題材で、聴衆を魅了する。温厚な人柄で、浪曲口演中にも誠実さがにじみ出ているのが感じられる。

高橋　秋水　北パラナのロンドリーナでは片岡燕若と並んで曲師も務める器用な人である。一九七六年の第二十三回全伯素人浪曲大会と同八〇年の第十六回全伯準名人浪曲大会で優勝して名人位を獲得。美声と哀調の小節は全伯一と云っても過言ではない。絶えず新題に取組んで、真山節、浪花亭節、米若節、ケレンの幸枝若節といずれも良くこなして、物真似では浪曲界随一である。現在ロンドリーナ浪曲協会の会長として後輩の指導にも当っている。〃おはこ〃は「笠戸丸」。

村野　燕若　本名・村野光則。一九八〇年の第二十七回全伯素人浪曲大会、同八一年と八二年の全伯準名人大全で優勝して名人となる（注＝八〇年から全伯準名人浪曲大会で二回優勝しなければ名人位を獲得出来ない新規定が設けられた）。日本浪曲協会の東家菊燕師と親交を深め、ネタは全部菊燕師を経て入手し東家詞の節と芸風を求めて研究精進するという一本道を歩む若手。中川芳月とともにブラジル浪曲連盟の副理事長を務め、浪曲に情熱を燃やして活躍している。〃おはこ〃は塩原多助（愛馬の別れ）、我れ幻の魚を見たり、名鳥尾長鶏の由来など。

国武　若晴　本名・国武晴男。一九八二年老練と浪曲界への功績を認められて名人位に推選される。〃おはこ〃　の「父は

第二の故郷へ」は得意中の得意で、ブラジルと日本を結ぶ親子の愛情物語だけにファンの胸を打つ。
労を惜しまず、助力する重厚な人柄である。

今野　吉郎　一九七九年の第二十六回全伯素人浪曲大会で優勝、同八四、八五年の全伯準名人浪曲大会で優勝を飾り名人位を獲得する。民謡、歌謡ともにこなす芸達者で、特に民謡は全伯大会の審査員である。浪曲も民謡を折込んだ演題は、他の浪曲師の追随を許さない。「宝の入船」など、その一例である。温厚な人柄は万人に愛され、現在カンピーナス日伯文化協会の会長も務め、さらにブラジル浪曲協会の副会長として多忙な人である。

宮原敏雄　本名も同じ。一九五三年十月の第一回全伯素人浪曲大会の開催に当って尽力した宮原巌の実弟、同五四年、五五年の同大会に連続優勝、さらに六五年からの第一回全伯準名人浪曲大会で「警察官」を口演し、コンクール形式による全伯初の名人位を獲得する。芸熱心で温厚、現在サンパウロでマッサジスタとしても広く人気がある。現ブラジル浪曲協会の相談役。

（文中・敬称略、一九八五年十月記）

追記＝コロニアの浪曲師でレコードを残したのは次の人々である。

▽天中軒満月　平野植民地開拓記「平野運平伝」、「田村幸重の少年時代」、「黒田武士」、「笠戸丸」

▽土井公男　コチア産組創立者「下元健吉伝」

▽花中軒水月　移民の父・上塚周平伝「拓魂」、「安中草三郎」、移民の父「水野龍山」。

また年代は忘れたが、日本より来伯した浪曲師は次の人々である。

芙蓉軒麗花　「十本の指」
篠　田　実　「紺屋と高屋」
広沢　虎造　「森の石松」
玉川勝太郎　「天保水滸伝」
木村　忠衛　「河内山宗俊」
村田　英雄　全伯浪曲大会へ優勝旗寄贈
二葉百合子　「岩壁の母」
二葉百合香　「婦系図」
太田　英夫　「番外地シリーズ」
天津　羽衣　「椰子の実」
東家　菊燕　「義士伝」（二度来伯）
宝川左雲丸　「正直車夫」（夫婦）

他に京山円駒、東家燕真の二人が移住者として来伯、永住している。

第1回
全伯芸能大会

サンパウロ市創設四百年祭（記念日は一九丘四年一月二十五日）に当って日系コロニアの協力委員会（山本喜誉司・委員長）は、イビラプエーラの記念公園内に日本館を建設、市当局に寄贈した。さらに、この祝典に協力するため、同年九月六日から十二日までの七日間にわたって第一回全伯芸能大会が南米劇場の〝こけら落し〟を兼ねて盛大に催された（七日間で十回の公演、連日とも満員）。

この芸能大会は、同年五月に創立された聖市芸能文化連盟の主催になるもの。おもな役員は、

顧問＝山本喜誉司、理事長＝池田純太郎　副理事長＝三好良実、渉外・書記＝沢田多策、理事＝坂野熊太郎、薬師神真一郎、河合貞一郎の諸氏であった。

芸能大会の出し物、参加劇団、演劇コンクールなどの結果は、本史演劇の部「歌舞伎芝居に生きた群像」（山口春海）に詳しい。

一方同大会のプログラムの編成、時間割りなどは三好、沢田が担当、剰余金のうちの二万三百クルゼイロスは日系コロニアの協力委員会に贈られた。

なお写真は、同大会の最終日に各部門の入賞者、関係者など

が集ってのもの。前列右より三人目が沢田、次いで中村琴二郎、薬師神真一郎、野村清博、池田純太郎、武田俊男、三好良実、一人おいて山口春海、樋口、立花、神保、一人おいて野上、村山、倉地。後列は右より三人目が風正太郎、次いで河合、坂野さんら。その他の人々の名は思い出せない、お許しを乞う。

（沢田多策）

第12部　映画

〔日本映画〕　一八九五年十二月、フランスのリュミエール兄弟がパリのグラン・キャフェで、「シネマトグラフ」を公開した。一九八六年アメリガのエジソンが「キネトスコープ」を改良した「ヴァイタスコープ」を完成した。これが映画誕生の日付けである。

明治三十年（一八九七）に、フランスのシネマトグラフと、アメリカのヴァイタスコープが日本に輸入されて、理科学実験の一資料として公開され、朝野の喝采を博したが、間もなくこれが興行者の手に渡って「動く写真術」としての珍奇さを売物に、日本各地を巡回興行したり　この時の映画フイルムは、それぞれの国で試作した実写ものが多く、日本では一八九九年頃から単純な街頭スケッチ、例えば、日本橋街路の賑い、浅草観音境内、といったものや、花柳界名妓の舞踊などが、五十フィート乃至七十フィート（一フィートは約三〇・四八センチメートル）位にうつされて、舶来フイルムとともに興行された。動く写真

だからというので、これらを活動写真といった。

劇映画の最初は明治三十二年十一月の歌舞伎座狂言「紅葉狩」で、これは九世市川団十郎・五世尾上菊五郎共演の舞台面であるが、これは記念的な意味でうつされた記録映画であった。演劇場面を映画フイルムに収録してこれを興行用に供したのは明治三十三年（一九〇〇）七月の名古屋御園座興行の「鳩の浮巣」の一場面で、これは旅興行者でありアメリカ帰りのカメラマンでもあった土屋常二が中村鴈次郎の出演で撮影したものである。この成功によって、歌舞伎劇や、新派劇の映画フイルムが漸次製作されるようになったが、巡回興行者は資本力に乏しかったので、知名の俳優を使うことができず、多くは地方巡りの無名劇団を使った。

だから劇映画とはいえ、衣裳も演技も、お粗末なものが多く、製作費を縮減したので、セット（装置）やライト（照明）を使わず、路上や山中で、夫婦別れや、お家騒動の場面を撮影した。実景応用の舞台演劇という妙な形式のものであった。

大正期に入って、アメリカ映画が発展し、映画劇の形式が整ってから、これらの映画に刺戟されて、日本の活動写真界にも、批判と反省が行われた。単なる動く写真への好奇心だけでなく、動く写真の集積によって、今までの舞台劇の概念とは全く違った新しい劇が創造されねばならない、ということに気がついた。

そして、映画劇（フォトプレイ）という言葉が輸入され、映画劇運動が提唱された。（大正七年＝一九一八）　これを提唱し、実践したのが帰山教正（かえりやまのりまさ）で、彼は自らシナリオを書き、自ら監督し出演もして「生の輝き」他数本の劇映画を作った。

これに刺戟されて、松竹キネマ（一九二〇年創立）が小山内薫を指導者として起ち、大正活映（同年）が谷崎潤一郎を指導者として創立され、大正十年（一九二一）前後には、日本の活動写真は、映画劇への生成脱皮に飛躍的な革新を見せた。幸いにして、その後の松竹キネマの撓まざる精進と日活の追随により日本の映画劇は順調に発達し、大正末期にはそれまで圧倒的な輸入本数を持っていた外国映画を、量の上において凌駕することが出来た。

昭和四年（一九二九）、トーキーがアメリカから輸入され、それまで無声であった日本の映画も、一つの転機に直面したが、昭和六年（三一）松竹の「マダムと女房」がトーキーとして成功した頃から、全面的にトーキー化に向い、昭和十年（三五）頃は、極く一部の製作者を除いては、殆んどトーキー化された。無声映画時代にあった現代劇、時代劇の区別は、トーキーになっても依然として行われたが、無声映画時代の題材が、家庭悲劇・豪傑活劇・仇討物といった舞台劇的題材の伝統に拘泥していたのと比べると、トーキーは日本映画の題材を著るしく近

代化し、例えばオペレッタ、ミュージカルドラマなどが取入れられ、舞台的演技が、映画的リアリズムに解放されたのが目立った。このことは、映画劇創始時代の俳優が、殆んど舞台出身の人達であったのにくらべて、この頃になって、ようやく舞台的演技を持たない、素人から養成された、いわゆる映画俳優が一人前の演技を持つようになった証拠でもあった。

島津保次郎・五所平之助・小津安二郎・田阪具隆・内田吐夢・伊藤大輔・清水宏などの純映画的素養を持った監督が輩出したのも、このために大きな役割を果たした。昭和十二年（三七）に東宝が産業資本を背景にして、大劇場網や完備せるトーキースタジオを擁して、日本映画界に出現したことは、それまでの小資本、手工業的生産形態をとっていた日本の映画事業に資本主義的革命をもたらしたが、間もなく大東亜戦争が起り、官僚・軍部のいわゆる国策的統制の枠にはめ込まれ、著るしく題材や機構に制限を受けた。

大東亜戦争終了後は、アメリカ占領軍の指示によって、統制は外されたが、そのかわり題材や演出が無軌道奔放となって、接吻・抱擁などの戦後的風俗が、急速に日本映画の中に取入られ、ピストル活劇、ギャングの横行などの猟奇的場面の登場とともに、日本映画を著るしく植民地化した。しかし戦後、七、八年にして、反省期に入り「望郷」「源氏物語」「麦秋」などでは、次第に日本的性格を取り戻しつつある（以上、一九五三年頃ま

での日本映画界の動きである)。

河竹繁俊監修、演劇博物館編の「芸能辞典」、東京堂版(一九五三年)から転載。

―――◇―――

ブラジルで初めて映画が一般に公開されたのは一八九六年七月八日、当時の首都リオ・デ・ジャネイロであった。上映フイルムはアメリカ、フランス、ポルトガルの各国で製作された実写もので、珍らしい各国の風景、風俗、その他を断片的に取上げたものであったが一般から大好評を受け、この人気に目を付けた某興行者により、翌九七年、当時は「ＯＭＮＩＯＧＲＡＦＯ」といわれた映画の専門上映館がリオに誕生するほどであった。

映画の輸入に伴なってリオでも製作者が名乗りをあげるようになった。一八九八年、アフォンソ・セグレットは、リオでブラジル最初の映画(実写)を一般に公開した。グァナバラ湾の風景、近代化を目指しての大都市建設で日毎に変容する首都の実態などを細部にわたって画面に描きだした。そして一九〇七年から同一二年にかけて国内の電力事情がさらに整備されると共に数多くの製作者、興行師も出現、その普及発展に拍車をかけた。長編劇映画の第一作はジュリオ・フェラスによるコメディー「ＮＨＯ・ＡＮＡＳＴＡＣＩＯ・ＣＨＥＧＯＵ・ＤＥ・Ｖ

ＩＡＧＥＭ」でありこの他多数の探偵もの、その他が製作・公開されている。

なお、サンパウロでもリオと同年の一八九六年に映画が上映されている。期日は明らかでないが、勿論これがサンパウロでは初めてのことで、提供者は当時の有名な写真家レナーロ（フランス系）が、ジレイタ街六番地にあった彼のスタジオで行なわれている。（以上、国際文化交流基金サンパウロ事務所発行の「ブラジル映画の発展過程」から一部抜粋）。

老舗、日伯シネマ社
昔懐し「籠の鳥」で旗揚げ

平田　公泰

〔元ニッポン映画社社長　同シネ・ニッポン館主〕

バウルーで孤々の声を…

邦画興行界の老舗、日伯シネマ社がノロエステ鉄道の始発駅バウルーで孤々の声を上げたのは、一九二九年の十月頃だったと聞いている。創立代表者は斉藤政一、協力者は東亜キネマ（在日本）のサンパウロ代理人の内海貞雄であった。私（平田公泰）

は、島根県松江の松江中学を中退、同二八年の初頭に知人の呼寄せで渡伯、ピラジュイの日の出植民地で農業に従事中、当時バウルーにあった聖州新報（香山六郎社長）の外勤員だった斉藤と知り合い、そのような関係から三〇年一月早早同社に入り、ノロエステ線を始め、ソロカバナ、パウリスタ、モジアナ各線のコロニア向け地方巡回映写のスタートを切った。

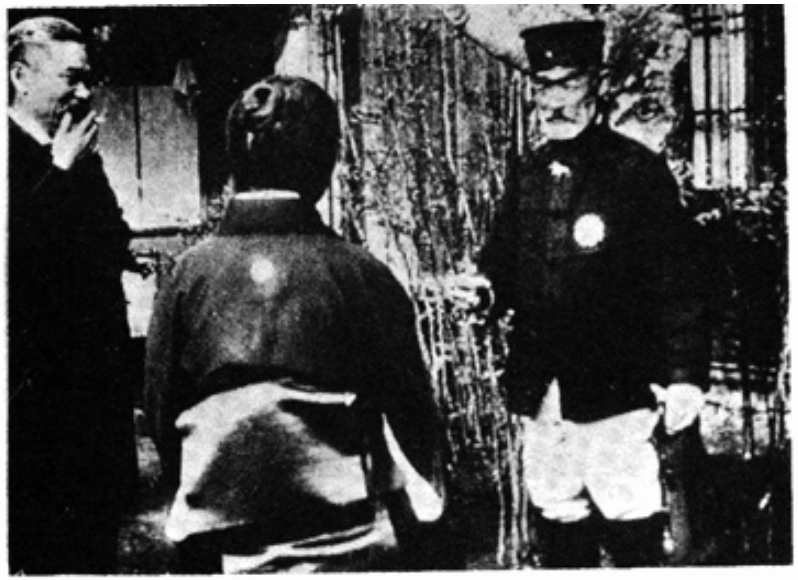
今から半世紀以上、約五十五年前のことである。さらに斉藤、内海の両人とも他界されている現在、当時のことを僅かながらでも知っているのは私だけとなってしまった。出来る限り記憶に残っている範囲内で、戦前の邦画興行界にまつわるエピソードなどを次に記述してみよう。

コロニアに邦画を持込み、地方巡回映写を行なった〝先駆者〟として一般に知られているのは、日蓮宗のお坊さん二人である。一九二七年、熊本県海外協会では母県出身者慰問のため長篇劇映画『日蓮上人』とともにサンパウロに派遣した。この映画の最初の映写地はヴィラ・ノーヴァ移住地（ノロエステ線）だったと云われている。

当時における地方巡回映写という仕事が予想以上に困難を伴なったものであることは、私の体験上からも十分に察することが出来るのである。なにしろ、駅からコロニア集団地への道は、いずれも土をなんとか盛上げただけ、といった至ってお粗末なもの。一度、雨でも降れば〝泥沼〟と化し、車は必ずと云って

いいほどエンコし、立往生を余儀なくされる。しかも、お坊さんらはコロニア集団地すべてに映写に必要な電源施設は皆無―という事実を知らなかったのだから、その困難さが増したであろうことは間違いない。

ところで、この地方巡回映写地がどことどこであったか、またその期間は…ということになると、今ではまったく不明である。ただひとつ、この映画の映写を担当していた内海貞雄が翌二八年に帰国した、ということが明らかである。



初期の日本映画「乃木将軍の凱旋」1905年

内海「籠の鳥」持って再渡伯

内海貞雄は、東亜キネマで数年間にわたってカメラマンを勤めた人。帰国した彼は、帝国キネマの小唄映画『籠の鳥』（一九

二四年の作品）の日本各地における大当り、それに『日蓮上人』という、一九二七年に熊本県海外協会から派遣された日蓮宗のお坊さん二人によってもたらされた（？）、この映画を実際に観た人々は、極めて少ないのではないだろうかと思われる。今から少なくとも五十八年の昔だからである。

私がバウルーの日伯シネマ社に入ったのは一九三〇年一月。この『日蓮上人』の映写技師だったのは内海貞雄、お坊さんはブラジルでの伝導を諦めてか帰国、これによって『日蓮上人』のブラジル国内での上映権を譲渡された内海は、これを各日系植民地で上映した。

私が日伯シネマ社に入った当時、このフイルムは上映に適しなかったほど〝ボロボロ〟になっていたので、全く観ていない。

ところで『日蓮上人』に関する映画は数多く製作されている。邦画ファンの某君によると、舞台における〝実写〟を別にすると明治三十九年（一八九六）に映画が日本に渡来してから大正十二年（一九二〇）頃までに『日蓮上人御一代記』、日活京都一九一八年度作品。小林弥六監督、出演・尾上松之助、共演・市川寿美之亟、嵐橘楽、中村仙太郎、大谷鬼若、嵐璃伯。

『日蓮上人竜ノ口法難』国活一九二〇年度作品。監督、出演者名とも不明。

『日蓮上人』（国聖・日蓮上人）、帝キネ一九二二年度作品。主演・嵐璃伯、全十七巻などがある。いずれも〝宗教劇〟といい

うタイトル付きである。

内海は、「私が持って来たのは松之助主演の『日蓮上人御一代記』であったと、生前常に確言していたようだから、まず、これに間違いなかろうと思われる。それにしても、このフイルムがここブラジルで無惨にも消滅したことは、残念でたまらない。

なお『日蓮上人御一代記』の尾上松之助（通称〝目玉の松之助〟）は、明治四十年（一九〇七）に映画界に入り、大正十五年（一九二六）に死ぬまで短・長編合せ一千本余の映画に出演している。　写真は一千本記念「荒木又右衛門」の松之助。

続く類似作品の氾濫に注目、『日蓮上人』という宗教映画でさえ、コロニアには予想以上に受けたのだから、『籠の鳥』なら興行的に絶対間違いなし…と予想してか、『籠の鳥』を持って再びサンパウロに来たという。

内海は、興行主としての再出発を期した。

まず、問題の電源は植民地の人達が持っていたカミニョオン

（貨物自動車）を利用することにした。モトールを動かし、持上げた車の後輪タイヤにベルトを掛けて発電機を回転させて電気を起こし、映画を映写する―という、実に元カメラマンに相応しいアイデアを捻ねり出した。この方法は戦前は勿論のこと戦後の数年間も殆んどの業者によって踏襲された。なお、当時の発電機の重量は約二百キロ、出力は約一千二百ワット。また映写機はアーバン式型とか、ドイツ製のキノボックス型のポータブルが多かった。

余談になるが、内海は日伯シネマ社を退いた後、ノロエステ線アラサツーバで長年にわたって写真館を経営、かたわら同地青年会の会長として後進の育成などの面で活躍した。

また、戦後は南米銀行に入り、当時は本店であった現セナドール・フェイジョ支店に勤めていたので、知っている人も多いと思う。この内海こそ、本格的長篇劇映画の輸入とその上映、地方巡回映写における電源問題の解決など、邦画興行界にとって偉大な「先駆者」であるとともに、最大の貢献者であると云っても過言ではあるまい。

「ノロエステ線一周」を自主製作

斉藤政一は、茨城県筑波郡小田村の出身（一八九七年生まれ）。東京の三田商業を卒業後、当時、陸軍の御用商であった叔父某の世話でウラジオストクに渡り、大正九年（一九二〇）三

月の尼港（ニコライエフスク）事件当時は同地に出兵中の弘前第八師団第五連隊でロシア語の通訳（判任官待遇）を務め、約四年間にわたって彼の地で過ごして大正十年頃に帰国、東京の某写真専門学校で写真技術を習得、その後、関東大震災に遭遇、大阪毎日新聞の〝震災移民〟の一人として渡伯したと、本人から聞いたことがある。

斉藤は一九二四年のシカゴ丸で渡伯、ノロエステ線のプロミッソンで数年を過ごしたのち、当時はバウルーに本社があった前記の聖州新報に外勤員兼カメラマンとして入社、二九年七月まで同社で働いた。斉藤はその後バウルーに日伯信託社を設立、土地売買の仲介、一般金融の斡旋、各商品の依託販売、商店の信用調査、貸金掛金の集金代理、その他一般商事に関する事務などを手掛けた（当時の聖州新報に掲載された広告による）。

その一方、邦画の興行にも注目していたようである。それはプロミッソン在住中の二六年五月頃、聖州新報紙上で《この度、日活、松竹キネマ、国際キネマ各社と特約の結果、近く邦画の上映を開始する。これは日本文化を広く一般に紹介するためである。また、同映画の地方巡回映写の余興のため男女琵琶師、浪花節語りなどの募集を近く開始する》。と云う趣旨の発言しているからである。

その第一歩となったのが、二九年十月頃に設立された日伯シ

ネマ社（ＥＭＰＲＥＺＡ・ＣＩＮＥＭＡＴＯＧＲＡＰＨＩＣＡ・ＮＩＰＰＯ＝ＢＲＡＳＩＬＥＩＲＡ）による実写もの『ノロエステ線一周』全四巻の自主製作であった。当時、日本からの移住者は毎月二回神戸出港の船で約二千人を数えたという。一方、パウリスタ、モジアナ両鉄道沿線のブラジル人耕地で契約農年に終えた人達が平野運平、上塚周平、その他の先駆者にならって無限に広がるノロエステの大原始森に開拓の斧を振るい、長年の辛苦の末、一面に花咲くコーヒー園を完成させ、折からのカフェー景気を満喫していた。

斉藤は、このような実態（実況）―従来の土壁、屋根はサッペーの小屋に変ってのレンガ作りの立派な家、カフェー乾燥用の広大なテレーロ、倉庫、整然と植付けられたカフェー樹の数々、新型乗用車とカミニョオン、日々の生活―などを３５ミリのモノクロ・フイルムに収めて、それぞれの出身地の親兄弟や親戚、知人などに観せる一方、これを興行に使うことを考え、早速実行に移した。

製作に先立って日伯シネマ社は聖州新報紙上に、《大ノロエステに散在する五万余の、吾が勇敢なる同胞の活動状態を、眼のあたり母国及び伯国各地に紹介する。日本は、大阪朝日新聞伯国総代理店を介し、同社活動写真班により日本各地で映写し、当伯国は、当社『籠の鳥』この作品について映画評論家の飯島正氏は月刊誌「芸術生活」特集・無声映画の黄金時代（一九

七五年三月号、芸術生活社発行）に、次のような一文を寄せている。

沢蘭子と里見明

大正十二年（一九二三）の関東大震災で一切が御破算になった日本映画復興のさきがけとなったのは、大阪に本拠をもっていた帝キネ（帝国キネマ演芸株式会社）の小唄映画『龍の鳥』（大13・一九二四）の大当りであった。商家の娘（沢蘭子）が大学生に恋したが親がゆるさず、失恋して死ぬという新派劇だが、この映画にいまでも有名な例の「逢いたさ見たさに恐さもわすれ／暗い夜道をただ一人／逢いに来たのになぜ出て逢わぬ／僕の呼ぶ声忘れたか（以下略）」の唄がつくのである。だがこれは無声映画だ。唄がつくといっても、それはスクリーンの横で歌手が歌うにすぎない。このペシミズムが震災後の虚無感にアピールしたのか、小唄映画はその後も続続とつくられた。しかし最初の『籠の鳥』（松本英一監督）が一番出来がよかった。

―――　◇　―――

『籠の鳥』は、帝キネ蘆屋作品。原作松屋春翠、脚色佃血秋、監督松本英一。お糸（沢蘭子）は避署地の海岸で文雄（黒見明）を恋するが大阪の家には親たちによって無理に結婚させられる番頭の与助がいる。文雄との仲がせかれるたびにお糸の恋心は募る。文雄もお糸に逢うことができず友人の岡村（松本泰輔）とカフェーでやけ酒を飲む。籠の鳥のお糸は結婚の場を逃れて文雄の宿を訪ねたが、今夜も文雄は不在だ。お糸はそのまま暗い夜道を彷い出る。そして数時間の後、それと知った文雄たちが彼女のあとを追ったとき、哀れな籠の鳥は小さな屍となっていた。

なお、この映画の製作費は僅か千五、六百円（当時）、ロケーション本位の四日半で仕上げた新派調ラヴ・ロマンス。関西は十一万円、関東は六万円、合計十七万円という百倍以上の純益をあげた。（前頁の写真は、沢蘭子と里見明）。

映画社にて各地に公開す》。と宣伝広告、ノロエステ各地の成功者をスポンサーとして全四巻、映写時間約四十分の『ノロエステ線一周』をみごとに完成させた。

３０年１月、バウルーで初興行

『ノロエステ線一周』の撮影を担当したのは前記の内海で、助

手として斉藤と彼の友人で千葉県出身の遠藤某が協力した。同映画の完成試写会は二九年十二月十一日夜、バウルーの日本旅館で行なわれ、一般の好評を受けたが、同夜〝添えもの〟として上映中の『雪の十和田湖』の二巻目が、引火のため同フイルムを焼失してしまった、という余談もある。

この実写映画と、内海が二九年二月の再渡航の際に携行、ごく一部で公開されて大評判だった『籠の鳥』との抱き合わせ興行は必ず当たる……と考えたのが斉藤で、斉藤と内海による話合いの結果、それぞれの現物出資による日伯シネマ社の設立、興行界への進出となったわけである。

当時の陣容は、代表として斉藤、映写担当は内海、その助手が私、解説者、いわゆる〝活弁〟として荒木某がいた。事務所はバウルーのインコンフィデンシア街に置き、直ちに駅前広場にあった沖山旅館のサロンで大々的な披露パーティーを開き、出席した各地の有力者に『ノロエステ線一周』と『籠の鳥』を観て貰った。

『籠の鳥』は、本格的な長篇劇映画だっただけに予想にたがわず物凄い大反響で、早くも各地からの上映申込みが殺到した。このようにしてコロニア初の映画製作者、そして戦前、戦後の数十年間にわたって邦画興行界における第一人者、斉藤政一の誕生となったわけである。彼の〝商売的な勘〟、いわゆるセンスの良さに驚されたのも事実である。

北パラナ、バンデイランテス奥の野村農場へ向う巡回映写班、映写機その他の機材は二頭立ての馬車に積んで悪路と〝格闘〟の連続であった。馬車の上左が筆者、一九三三年頃

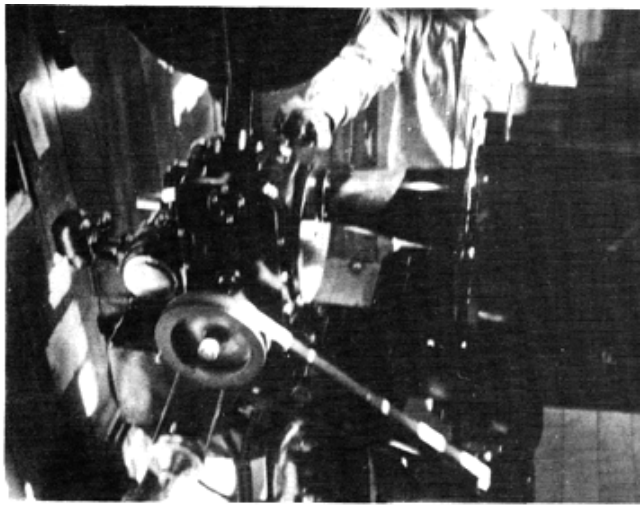
バウリスタ線マリリア奥の植民地を訪れた地方巡回映写班。左から平田、松井春波（一九三三年頃のある日）

日伯シネマ社の一般向け初興行は、三〇年一月一日からバウルー社交クラブの大サロンを借用して行なわれた。上映プログラムは、

実写『ポルトガル事件』一巻、同『雪の十和田湖』一巻、喜劇『腰抜け亭主』三巻、実写『御大礼盛儀、東京大出発』二巻、悲劇『父の愛』三巻、同社第一回作品、農業のブラジル誌推選『ノロエステ線一周』四巻、現代悲劇『籠の鳥』六巻　―　など

と、盛沢山であった。

上映は約一週間だったと思うが、連日とも大入り満員でバウルー近郊は勿論のこと、ノロエステ、パウリスタ、ソロカバナ各線の日本入会、青年会、女子青年会などからの上映申込みが後を絶たなかった。これに力を得た日伯シネマ社は、大阪朝日新聞ブラジル総代理人の丹坂草太郎が講読者拡張用に持っていた『御大礼盛儀』実況と『大阪芦部踊』の二本（上映時間四十分）を正式に購入し、地方巡回映写を大々的に開始した。私が最初に持って回わったのは実写『復興の帝都・東京』二巻と『大阪芦部踊』一巻の二本で約四十五分、これに『籠の鳥』六巻で、植民地によっては同じ映画をもう一度繰り返えして上映したことも少なくなかった。なお、実写ものの説明は斉藤自身、劇物は荒木が担当だったが、私も劇物の解説を何度かやったことがある。



地方巡回映写班が使用した戦前の映写機。ドイツ製のザイス・イコン型で、重さは百キロ内外ではなかったかと思う。

夢見の頃

地方巡回映写は苦闘の連続

これまでにも書いたように、当時の植民地への道はすべて〝悪路〟で、発電機、映写機やその他の機具（スクリーン、蓄音機、レコードなど）と含めて約一トン近くの荷物を積んだカミニョオンの後押し、途中で荷物の積み替えなどは毎日のことで、目的地に着いた頃はヘトヘトとなってしまっていた…などは数え切れないことであった。

砂土の上に棒杭を打込んで発電機を固定して二千ワットの電気が場内を明るくキラキラ点燈されると、子供達は歓声を上げる。それ程、電燈は地方の農村では珍らしかったのである。蓄音機からレコードの音楽が流れ出ていよいよ映写開始である。斉藤、荒木が〝蛮声〟で解説、そして十一時頃には〝シネマの夕〟が終わる。観客の中には十数キロ以上の遠い部落から馬に引かせた荷車で家族連で来る、しっかりやらねばと大きな責任を感じて頑張ったものである。若い時だ。お金はあまり儲けさせて呉れぬ仕組みだったが、観る人達が素直に喜んで呉れたので、楽しく張合いのある仕事だと感謝して働いたのである。

それから約五年間、巡回映写班の班長を勤めた若い青年は、今や七十才の老年となったが、一九五九年の七月、サンパウロ市内、日本人街コンデの一角であるサンタ・ルジア街に長年の宿望だった常設館、『シネ・ニッポン』を建てた平田である。ブラジル松竹の水本毅と組んで八一年十二日三日まで松竹映画の

封切上映を続けたが、テレビ、ヴィデオカセットの急激な普及による観客激減で閉館の止むなきに至った。時代の波に流されたものといえよう。

再び話を戦前に戻そう。日伯シネマ社はその後、国際協会の今村忠助が持参した松竹蒲田の現代劇『熱血の握手』（三田英二、森静子主演）と、日活現代劇『路上の楽園』（浦辺粂子、谷幹一主演）を購入、さらに『爆弾三勇士』、『人柱四勇士』などを手に入れ、マキノ映画『快人狼』三部作（武井龍三主演一などを次々と上映した。

しかし、三〇年にノロエステ線のコーヒー地帯が未曽有の大霜に襲われてコーヒー樹が全滅という惨状を呈した（注＝三二年当時、ノロエステ線地方の日本人農家が所有していたコーヒー樹は約四千五十七万二千本）。次いで十月三日には南リオ・グランデ、ミナスおよびパライーバの三州で一斉に革命の火が上がるなど（これによってゼツリオ・ヴァルガスの革命政府が誕生）、世情はあわただしく、幸先きよいスタートを切った地方巡回映写班の前途も危ぶまれたが、こんな時にこそ……とわれわれは植民者の慰安に挺身した。弁士諸君も声涙ともにくだる大熱演で勤めたものであった。

日伯、サンパウロへ進出

日伯シネマ社が本拠をバウルーからサンパウロに移したのは、

確か一九三三年だったと思う。月日は忘れたが、三二年に現在は文協会館となっている元大正小学校の講堂で〝日本映画の夕〟を催した。前記の『路上の楽園』と『熱血の握手』を上映して大好評を受けた。

これがサンパウロ市における〝邦画の初興行〟ではなかろうか。

ところで、当時のプリント（映写用フイルム）は、すべてが日本各地で数百回も映写機に掛けられたと思われる中古品。一回上映する毎に修理（切れた個所を継ぐ）という面倒な仕事があり、連日上映は非常に難しかったのである。それでも引き続いてどこエイロスにあったコチア産組本部のサロン、モジのモジ産組倉庫、同地コクエーラおよびカッペーラ区の日語校々合、近郊コチアの吉良商店裏のキンタールと同地日語校々合、ジャグアレーとヴァルゼン・グランデでも日語校々合で上映、さらに今では高級住宅地となっているモルンビーとブルクリンでは、大きな門柱のあるブラジル人の別荘（現存）のサロンを借りて上映したものである。

ここでちょっと奇妙に感じられるのは、戦後の邦画はすべてサンパウロに本社を置く各社から地方業者の手を経て各地で上映されたが、戦前はまったくその反対であった。これはサンパウロ市、その周辺のコロニア集団地がノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ、モジアナ各線地域に比べて極めて少なかったためであろう。

日伯シネマ社は一九三三年四月二十九日、サンパウロ市カルモ街の労働会館で『爆弾三勇士』および『人柱四勇士』を、同年さらに『満洲行進曲』、『女給』、『カフェーの女』などの新作を上映した。

次に、三四年から四一年十二月八日の太平洋戦勃発までの約八年間に各業者によってサンパウロその他で上映されたおもな作品を年代順に記そう。

▼三四年＝『聖なる乳房』、『銀座の柳』、『陸の王者』（サンパウロ広場のイタリア人クラブ）

▼三五年＝『月よりの使者』、『赤城の子守唄』、『修羅八光』、『進軍』（この頃から輸入プリントは新品となり、改めて「新作封切」という言葉が使われるようになった。上映館は本格的を市営サンパウロ劇場）

▼三六年＝『地上の星座』、『青春街』、『白夜は明くる』、『女の友情』、『ひとつの貞操』、『何が彼女をそうさせたか』、『若葉の夢』、『瀧の白糸』、『召集令状』、『夢見る頃』

▼三九年＝『新しき土』（日独合作）、『五人の斥候兵』（以上シネ・ロザリオ）、『海国日本』（パウリスターノ）、『ヨシワラ』（フランス映画だが、早川雪州と田中路子の主演。アルト・パラシオ）

▼四〇年＝『上海陸戦隊』、『東京の女性』、『大忠臣蔵』、『暁に祈る』（以上パラマウント）、『白蘭の歌』（ロザリオ）

戦前、最後の映画は「護国の母」

▼四一年＝『護国の母、杉野兵曹長の妻』（パラマウント）

太平洋戦争のため、四一年十二月八日を期して国内における邦画の上映は、軍命令とサンパウロ州社会・政治警察（ＤＯＰＳ）によって全面的に禁止された。ブラジル政府が正式に日独伊の枢軸国家と国交を断絶したのは翌四二年一月二十九日、このため独伊両国映画も邦画と同じように上映を禁止された。

このため、戦前最後の邦画上映作品は、日本キネマ興業社（平田公泰）提供の『護国の母、杉野兵曹長の妻』（発声版、日活多摩川三六年度作品、原作・脚本＝鈴木紀子、監督＝田口哲、中野かほる、中田弘二、滝口新太郎、伊沢一郎出演、全八巻、現代軍事劇）となった。

銃後の国民精神作興を讃えた作品で、日露戦争の初期、旅順港閉鎖作戦で戦死した死闘兵曹長の妻のその後の生活を描いた

白蘭の歌 の長谷川一夫と李香蘭

もの。上映期日は確か太平洋戦争直前の十一月中旬から下旬にかけての頃で、映局を反映してか、さしもの大劇場シネ・パラマウント（観客席は約千五百）も連日とも大入り満員、〝札止め〟の日もあったほどの大成功さだった。

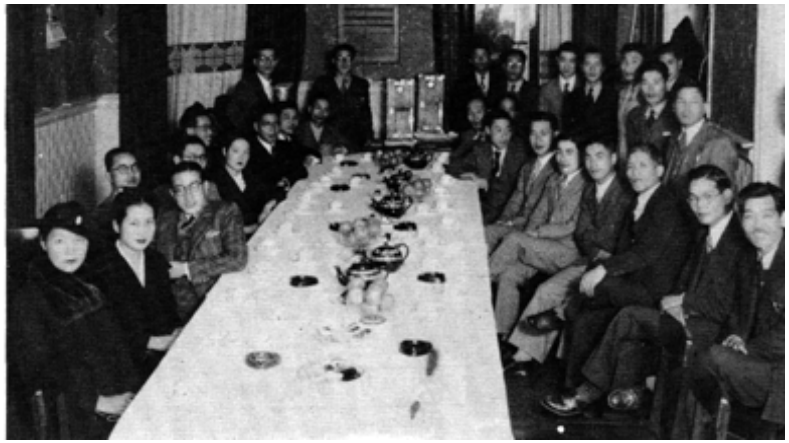
しかし、この『護国の母……』を最後として、それまで盛況を極めた邦画の興行は、終戦後のある時期まで〝冬眠〟状態に追いやられた。最も残念だったのは、営業許可の取消しは当然としても、当局によって数多くのプリントや、上映用の機材類をことごとく押収されたことであった。

独立して『青春街』を提供

私が独立してサンパウロに日本キネマ興業社を設立したのは、バウルーの日伯シネマ社に入って（当時十八才）から約五年三か月後の一九三五年四月であった。同志は業界の先輩だった松井春波、日伯シネマ杜の経験を基に興行界に乗出したわけだが、第一回提供作品の『青春街』をシネ・テアトロ・サンパウロで封切るまでは、苦労に苦労を重ねた。

『青春街』は新興キネマの一九三二年度作品。原作・宮本幹也、脚色・竹井諒、監督は熱烈な人道主義者であり、剛直な理想主義者と知られ、高い芸術的作品を日本映画界に残した村田実。

「青春街」の特別試写会は、当時リベルダーデ街にあった日本クラブで行なわれた。写真は同試写会に集った人たちで、向って左側手前から奥へ、溝部夫人、内山夫人、内山謙男（聖州新報、現サンパウロ新聞編集主幹）、溝部義雄（日伯新聞）、木村義臣（同上）、木村夫人、千田写真館主、藤平正義、石上、倉方勇、平田公泰（左側に立つ）と松井春治。右側手前から三人目が有馬鉄之輔。なお、右側の全員はすべて亡くなっている。



「月よりの使者」の入江たか子と高田稔

「新しき土」の原節子。右は早川雪州とルート・エヴェラー

さらに加えて、主演が入江たか子、岡田時彦、中野英治など、当時の人気スターだった・ので、サンパウロは勿論、地方でも予想以上の興行収入を上げることができた。

なお、封切に先立ち当時リベルダーデ街にあった日本クラブに報道および同業者を招いて特別試写会を催して好評を受けた。

追記　私の日本キネマ興業社が三五年四月から、太平洋戦争勃発までの四一年十一月までに輸入提供した作品は『護国の母』、『地上の星座』、（地上篇、星座篇）、『女の友情』、『ひとつの貞操』、『青春街』、『海国大日本』、『人生の処女航海』その他を含めて十二本。また、同業者から譲り受けた作品は、『白蘭の歌』、『大忠臣蔵』、『東京の女性』、『上海陸戦隊』などであった。

（一九八五年二月・記、文中敬称略）

――――◇――――

『青春街』の一般公開は、予想以上のヒットを放った。左の写真は封切第一日目の夜（午後八時から）で、上から舞台で挨拶する解説者の松井春波。中は客席約千五百を埋め尽くした観客、下はシネ・テアトロ・サンパウロの正面、向って右側入口上の横側に『青春街』の文字も鮮かである。

戦前の〝活弁時代〟華やかりし頃、各地で活躍、人気のあった松井春波（左）と谷天洋のふたり。なお『青春街』の解説もふたりが務めた。

小生にとっては独立初の提供作品であっただけ、感激はひとしお深かった。

なお、右の写真は『青春街』の入江たか子で、当時は大スターのひとりであった。

戦後は『流転』でスタート

隠忍自重、宿願の館主にも…

『流転』の上映許可は得たが一九四五年八月十五日、日本政府によるポツダム宣言の受諾により約五か年間にわたった太平洋戦争もようやく幕を閉じたが、国内における邦画の上映許可はわれわれ業者の予想を裏切って遂に降りないままその年は暮れてしまった。

このため日本キネマ興業社（代表・平田公泰）では、四六年の新春を迎えるとともに未だ講和条約は結ばれていなかったが、首都リオの連邦政府映画検閲関係筋の意向を打診したところ、近く邦画に対する新しい検閲が開始されるだろう……との話がもたらされたので、思い切って検閲局に『流転』の検閲と上映許可に必要な書類を提出した。

ところが、上映許可を一日も早く手に入れるには書類だけではおそらく数か月後になるというような噂もあったので〝籠城〟を覚悟でリオはグアナバラ湾岸のフラメンゴ・ホテルに投宿したのが二月半ば。それからはせっせと関係筋に働きかけた結果、同年四月六日付きで『流転』の上映許可を手中にした。許可番号は前篇が第一、九〇九号、後篇のそれは第一、九一〇号であった。長期間にわたる戦争に悩まされ、雑音混じりのラジオのニュースに一喜一憂しながら全く娯楽に飢えていたコロニ

アに、これで邦画を見て賞うことが出来る、と喜び勇んで帰聖、こんどは州の社会政治警察（ＤＯＰＳ）に対し、サンパウロ州内における『流転』の上映許可を申請した（注＝当時は連邦検閲局の許可のほか、上映州の監督官庁の許可も必要だった）。待望の許可書が発行されたのは同年の七月三日、前篇は第一、一三〇号、後篇は第一、一三一号がその許可番号であった。

私にとって「四月」と云う月は、なにかと〝幸運〟に恵まれている。戦前の日伯シネマ社に入ったのは三〇年一月だが、実際に巡回映写班の班長として仕事を始めたのは同年の四月。そして日本キネマ興業社代表として独立したのが三五年の四月であり、戦後の五一年四月にはニッポン映画社を創立することが出来た。また、ブラジル日本移民五十年祭に当る五八年の四月には新東宝の『明治天皇と日露大戦争』で予想以上の興業収入をあげた―などがそれである。

閑話休題。連邦と州の上映許可書を手に早速サンパウロ市内での上映準備を始めたが、上映に先立つ宣伝のことで難問題に直面した。

いくら宣伝したくとも邦字紙は無く（サンパウロ新聞は同年十月十二日、パウリスタ新聞は四七年一月一日からの創刊）、さらに日語ラジオの放送も皆無だったのである。このため宣伝は〝口コミ〟と〝ちらし〟で最善を尽すことにし、上映館は当時ビラ・マリアナ区のドミンゴス・デ・モラエス街にあった

ＣＩＮＥ・ＦＥＮＩＸと、ピニエイロス区テオドロ・サンパイオ街（コチア産組本部に隣接していた）ＣＩＮＥ・ＢＲＡＳＩＬを借りることにした。両館ともバイロの二番館（シネランジアの封切館で上映された新作を約一か月後に二本立てて上映する）だが、映写設備は整っていた。予定した上映作品は『流転』をトップに、戦前に検閲済みの東宝『白蘭の歌』（長谷川一夫、李香蘭主演）と『番町皿屋敷』（松竹、林長二郎、田中絹代主演）などと一般向けのものを手配し、万全を期した。〝好事魔多し〟―と云う諺（ことわざ）がある。

同年三月七日午後十一時半ごろ、時局認識を促進していたバストス産業組合専務理事の溝辺蔑太が自宅に侵入した臣連特功隊の四人によって射殺された。次いで四月一日の早朝、元日伯新聞編集長、後の文協普及会事務長の野村忠三郎が五人の臣連特攻隊員によって殺害された（自宅で）。さらに元陸軍大佐、産業組合中央会理事長でコロニアのリーダーの一人であった脇山甚作が殺害される―という事件が続発した（六月二日）。

このようなコロニア社会における〝異変〟を重視したのか、連邦検閲局、州社会政治警察は邦画の市内上映を禁止し、先に上映を許可していた『流転』のそれを撤回したうえ、上映用のプリントまで押収した。

『流　転』　一九四七年、サンパウロのサン・フランシスコ劇場で封切の戦後初の邦画だが、製作は松竹京都で太平洋戦争以前の三七年と、十年前のもの。原作・井上靖、監督・二川文太郎、主演・阪東好太郎、森静子、嵐徳三郎、河原崎権十即、柳さく子。第一部「炎」（七巻）と、第二部「星」（七巻）の前後篇から成る芸道物。同劇場では一挙に上映された。

なお、『流転』は戦後の五六年、同じく松竹京都で監督・大曽根辰保、主演・高田浩吉、香川京子、さらに六〇年、同じく松竹で監督・福田暗一、主演・十朱幸代、長岡秀幸で再映化されているが、この二本はサンパウロでは上映されていない。

『流転』の封切日、サン・フランシスコ劇場前の人出

新たに日伯興業会社で再発足

まったく弱り目に、たたり目。このような受難の中で戦前、戦後を通じて生き続け、生き残って来た日伯シネマ社（斉藤政一）と日本キネマ興業社（平田公泰）は話合いの上、この難局を乗り切るため組織の強化を目指して合併し、社名を日伯興業会社と改め再発足した。

新社は映画関係は勿論のこと、近い将来には演劇部門への進出、さらには常設劇場の建設なども計画、これを実行に移すため戦前から興行界で活躍していた人々に集って貰い、邦画の上映禁止も近く緩和されそうだ、との見地から新作の輸入事務を開始するとともに諸般の準備に着手した。スタッフは、社長・斉藤政一、副社長・平田公泰、営業部長・野村清博、宣伝部長・橋本悌三（松井春波）らで、斉藤と平田による現物出資による合資会社組織であった。

新社、日伯興業は一九四七年初頭から活動を開始した。

先ずサンパウロ市内のサン・フランシスコ劇場で戦後初の邦画『流転』の前後篇を封切り、次いで『番町皿屋敷』と『春雷』を発表した。当時の邦画業者はわれわれの日伯興業だけで、まったくの独占場。前記の三作品はすべて戦前のものであったが娯楽性に富んでいたので、興行的にも大成功を収めて日伯興業は順調なスタートを切ることが出来た。

サンパウロでの興行は以上のように好調だ

ったが、地方によっては色々な問題が起きたこともある。その一例が南聖海岸地帯のレジストロであった。どういう理由からか上映中の常設館に警官が現われ、「サンパウロ本署からの指令

番町皿屋敷（下加茂） 1937 監督・冬島泰三
主演・林長二郎 田中絹代 葛城文子

宗方姉妹 の田中絹代と山村聡

雲流るる果てに の鶴田浩二と山岡比佐乃

だ……」と云って上映を中断させてプリント（題名は失念）を押収した上、社の従業員二人を同地警察に連行して留置、翌日は二人をレジストロからサントス警察に送って二日間留置、次いでサンパウロの州社会政治警察に身柄を移された。二人はここで簡単な取調べを受け、同日夜釈放された。この二人は現存、そのうちのひとり松井は現在バール、食堂などの消毒業者として一家を成しているが、「どうして警察に調べられたのか今もって分からない」を往時を懐古している。

独立してニッポン映画社

四六年に発足した日伯興業は五二年までの約八年間にわたって邦画の紹介・普及に努力したが、同五二年に斉藤、平田は話合いの上斉藤は元の日伯シネマに、平田は新たにニッポン映画社を設立して独立した。これは両者のこんごの営業方針について意見の相違からであった。さらにブラジアン商事の映画部門への進出、アジア合資会社の発足、翌五三年七月頃に予定されるシネ・ニアロイ、これに次ぐ南米劇場（シネ東京）の完成を目前に控え、これまでの営業方針を根本的に改革するためでもあった。

これら新興業者のうちブラジアンは四七年の『東京五人男』を第一陣とし、次いで『金色夜叉』前後篇、『遥かをり母の国』、『偽つわれる盛装』、『麗人草』その他四、五本の戦後の佳作を次々

と発表、日伯興行の〃牙城〃を侵し始めた。日伯シネマ、ニッポン映画の手持ち作品の多くは戦前ロサンゼルスにあった日米キネマ社が日本から輸入、同地方で上映済みのものをわれわれが同社から又買いしたもので、作品的には新興業者のそれには太刀打できなかったのが実情でもあった。

このため私（平田）は、日本から戦後の新作を直接に輸入・公開することを計画、東京に飛んで松竹、大映の作品を購入した。松竹は『ひばりの初夢道中』、『華やかな夜景』『カルメン純情す』、『宗方姉妹』などのほか、さらに〃ひばりもの〃二、三本を追加した。このうち興行的に良かったのは、なんと云っても〃ひばりもの〃であったが神風特攻隊を描いた『雲流れるる果てに』（鶴田浩二と木村功）や『長崎の鐘』（月丘夢路、若原雅夫主演）も予想以上の興収をもたらした。

また、松竹からは数か月後に同社の大作『わが生涯の輝やける日』（森雅之、山口淑子主演）や『カルメン純情す』（高峰秀子）、カンヌ国際映画祭出品作『波』（佐分利信、淡島千景、津島恵子主演）を追加したので作品のレベルでは他の同業者にヒケを取らなかった、と今でも自負している。

一方、大映からは興行的に良さそうな三益愛子主演の〃母ものシリーズ〃七本、他に京マチ子の『火の鳥』、『浅草紅団』、菅原謙二、若尾文子の〃柔道〃もの『勝敗』、『街の小天狗』、『春雪の門』その他で二十本近くの購入契約を結んだ。このうち

には阪妻一代の名作と云われた『無法松の一生』も含まれていたことは勿論である。

無法松の一生」の阪東妻三郎と月形竜之介

「カルメン純情す」の高峰秀子と若原雅夫

『女真珠王の復讐』で当てる

その他、確かな本数は忘れたが、新東宝からも前田通子の『女真珠王の復讐』を初めとし『北海の反乱』、『湯の町エレージ』、『女体桟橋』、『名月佐太郎笠』、『芸者ワルツ』などに、五八年のブラジル日本移民五〇年祭の四月下旬に封切って予想外の成績を記録した『明治天皇と日露大戦争』があった。

しかし、このうち最高の興収をもたらしたのは『女真珠王の復讐』(ポ語題名はＣＯＮＦＬＩＴＯ・ＤＥ・ＣＡＲＮＥ)であった。

前田通子の素晴しいヌードが売物で、共演は丹波哲郎。五八年四月十四日、シネランジアのシネ・ジュサーラ（ドン・ジョゼ・ドス・バーロス街にあった）で封切り、同館で五月四日まで三週間続映で連日午前十時からの七回上映だったが大入満員、次いでアウローラ街のシネ・アウレアでも一日七回上映で三週間続映、ブラジル人同業者らの間で最大の話題となった。この二館における前後六週間にわたる続映に刺激されてか、市内、近郊、地方の館主から上映申込みが殺到、邦画としては珍らしく上映用プリントを十本複写（コピア）して注文に応じたほどであった。

「女真珠王の復讐」の前田通子

私は、この作品のブラジル人観客を狙っての封切に当って翻訳と字幕（スーパーインポーズ）の挿入に最善を期した。戦後の数年間における邦画の翻訳とポ語字幕の挿入は「検閲の許可さえ取れれば……」と、われわれ業者の多くは費用を節約するため最少限度に切り詰めていた。これでは日本語に不自由な日

系子弟を始め、ブラジル人が見ても、話が分からない、と云う訳で業者自身が活躍の場をせばめていた。映画は万国共通、見て筋が分かり、話が面白ければ売れるのである。

一九五六年から五八年頃まで松竹、日活、東宝、新東宝、大映、東映各社の作品はブラジル、アルゼンチン、ペルー、チリ向けを「南米一円」として一本Xドルと云う売切り制だったが、『女真珠王の復讐』の予想外の大ヒットに日本側はサンパウロ市場の有望性に着目してか、東宝は五八年中旬、松竹は翌五九年八月にそれぞれ現地会社を設立、日活は六二年四月に聖都映画社と提携、自社作品の売込みに当った。なお、邦画常設館の第一号シネ・ニテロイは、各地の現地会社設立に先立って東映の専属館となっていた。

シネ・ニッポンの開館成る

このような各社の進出に伴ってサンパウロは七〇年代初頭まで邦画の〝黄金時代〟の中にあった。このブームに拍車をかけたもののひとつに私たち同志によるシネ・ニッポン（サンタ・ルジア街）の完成がある。同館の〝こけら落し〟は五九年七月四日、客席千二百の中型劇場で映写機は米国製の新鋭機、音響装置も当時としては秀れたもの。また特設の舞台装置による演劇、ショーのための照明にも万全が期されていた。

開館記念の上映作品は新東宝の大作『新日本珍道中』（シネス

コ版）で、主演は高島忠夫、字津井健、万里昌代、三ッ矢歌子、大空真弓他オールスターの新東宝創立十周年記念作品。日本全国を二つの区域に分け各地の名所・旧跡、民謡、郷土踊りなどをふんだんに取入れた肩のこらない娯楽もので好評だった。

シネ・ニッポンの開館により、市内の邦画常設館はニテロイ（東映）、ジョイア（東宝系）、東京（日活）の四館（ニッポンは五九年八月七日から松竹の専属館）となった。さらに各社は日本々社からの著名スターの現地派遣にによるショーの開催などにも尽力した結果、時ならぬ邦画の〝黄金時代〟を満喫したわけでもある。

シネ・ニッポン開館当日の人出

しかし、この良き時代も七〇年代を迎えるとともに徐々に凋落の気配を見せ始めた。日本の各社による製作本数の激減、当地におけるテレビ、ビデオカセット、その他レジャーの異常とも思える普及に、映画館に足を運ぶ人達はめっきりと減って来た。このためシネ東京に拠っていた日活、次いでシネ・ジョイアの東宝が戦列を離脱、現在はニテロイと松竹が細々と〝余燼〟を守っているに過ぎないのである。業界にあったひとりとして、誠に淋しい限りである。

なお、私はニッポン映画社を設立、続くシネ・ニッポンの開館、五九年八月に同館を松竹専属館として第一線から退くまでの七年間に日本から直接輸入した新作は約百十本（年平均十六本）に達した。また、戦前からの手持ち作品は十六本、合計百二十六本の邦画を自ら公開、配給したことになる。

（平田公泰、文中敬称略、一九八五年三月記）

垣間見た興行界

素人が映画と天勝で仲間入り

江沢　晋二

（旧ブラジアン商事会社、総支配人）

映画、芸能に手を染めた動機

私は、第二次世界大戦後、日本映画の上映が解禁になってから間もなく、日本映画の輸入と公開、日本の芸能人呼寄せ興行に手を染めた一時期があった。それは今から三十五、六年前のことであり、現在では当時の資料は皆無である。このため僅かに記憶を辿って次のような拙文を綴ることにした。

先ず、私がそもそも芸能関係に手を染めた経緯から書き始めたい。

一九四二年九月ころ、私はカーザ東山サンパウロ本社の商事部に勤務していたが、第二次大戦勃発後、東山も徐々にその活動を抑えられ、ついに営業はストップしてしまった。

カーザ東山にとどまっていても、これから先の見込みはないから、各自は適当な職業を見付けて退職するようにとの勧告を受けていたが、別に解雇するようなことはなかった。

しかし、見込みのない職場に居残っていても仕方がないので、当時コロニアの事業家として知られていた故・藤原久人氏と、パラグアス・パウリスタの文化植民地創設者、故・山田登幸氏が共営でハッカ工場を設立し、ハッカ原油買付け担当者を探していたので、渡り舟と、プレシデンテ・プルデンテ市に居を移し、約四年間にわたってハッカ買付けの仕事に携わった（この職場を斡せんして呉れたのは、これも故人の切手蒐集家として知られていた如来晋一氏であった）。

このハッカ工場は相当の利益を生み出したが、一九四七年、当時としては先見の明があった藤原氏は、戦争も終わったのでハッカの相場は崩れるから、この辺で工場を閉鎖し、その利益を他の事業につぎ込むことを建策、その結果、山田氏の主張した貿易事業に転換し、ＳＯＣＩＥＤＡＤＥ・ＣＯＭＥＲＣＩＡＬ・ＢＲＡＳＩＡＭ・ＬＴＤＡ、と云う会社が設立された。

戦後、「東京レコード」、アメリカ製の「味の素」などを売出したブラジアン商事会社を、ご記憶の方もおられると思うが、当時のブラジルは第二次世界大戦で活気を呈し、相当の〝アブク銭〟を儲けたそうだが、その一方、外貨を湯水の如く使ったので、外貨欠乏を来たし、輸入はすべてブラジル銀行で輸入許可証を得なければ、外国から何も買付けることは出来なかった。

窮余（きゅうよ）の〝策〟。山田氏はアメリカのサンフランシスコ市に甥がいたし、私には東京に兄がいた関係上、種々計画は立てられたが肝心の輸入許可証は得られず、雑貨の輸入も実現できず、苦境に追い込まれた。

そのころのある日、ブラジル銀行の輸入局長に強引に面会を求め、会社の苦悩を話し、良い知恵はないか……と相談したところ、文化関係のものなら少しはなんとかなるのではないか、と入れ知恵してくれた。

文化関係とはなにぞや、すなわち映画、レコード、書籍、雑

誌、という答が出たので、直ちにその線に沿ったものをまとめ、ブラジル銀行へ輸入許可の申請を行なった。

一方、当時のコロニアの情況は、戦中、戦後を通じ約八、九年、日本との文化関係、芸能、映画、読書などに飢えていた時代であった。サンパウロ市で日本映画の上映が解禁になって間もなく、映画社の老舗、日伯シネマ社（故・斉藤政一氏）が、戦前から検閲済みでお倉入りしていた松竹映画「流転」（阪東好太郎、森静子主演）を封切りした時は、サン・フランシスコ劇場の切符売場から約一キロ・メートルのフイラが続いたと云われる位の盛況で、サンパウロ市に住んでいる人間は全部が全部、見に行ったとの話で、これは恐らく映画興行では最高の売上げだったと思われる。

そのような情況下で輸入許可証の発給を首を長くして待っていたが、ブラジル銀行輸入局長の言質のとおり、提出していたリセンサはすべてＯＫとなり、ここで初めて芸能関係に足を踏み入れることとなった。

ブラジアン商事が輸入した映画

これを書くに当って資料ともなるべき当時の邦字新聞（一九四九～五一年）はどういう訳か、移民史料館にも新聞社にも見当らず、ハタと困った。

従って前述のとおり記憶による記録であり、誤り、失念、思

い違いもあるかと思われるがご勘弁願うこととする。

一、東京五人男＝東宝、斉藤寅次郎監督、古川緑波、横山エンタツ、花菱アチャコ、高瀬ミノルら出演。

二、金色夜叉・前後篇＝東横、マキノ正博監督、上原謙、大日方伝、轟夕起子、木暮実千代ら出演。

三、暖流＝松竹、吉村公三郎監督、佐分利信、高峰三枝子、水戸光子ら出演。

四、月よりの使者＝大映、菅原謙二、若尾文子、山本富士子ら出演。

五、遥かなり母の国＝大映、伊藤大輔監督、早川雪洲、山田五十鈴、京マチ子ら出演

六、浅草紅団＝大映、木村恵吾監督、京マチ子、乙羽信子、岡譲二、河村黎吉ら。

七、偽われる盛装＝大映、吉村公三郎監督、京マチ子、藤田泰子、瀧花久子、菅井一郎、進藤英太郎ら出演。

「偽れる盛装」の京マチ子と菅井一郎

輸入した映画は全部で九本、と記憶するので、あと二本あるのだが、どうしても思い出せないのが残念である。それにしても、時代劇が一本も無いことは訝（いぶか）しいと思われるが、戦後も間もない時代で、殺陣劇は敬遠されていたのかも知れない。

映画輸入のリセンサを取得したのは確か、一九四九年（昭和二十四年）ころであったがそのころの日本側の映画プロダクションも未だ整備されておらず、映画の製作はこれからと云う時代であった。

〔東京五人男〕　昭和二十年（一九四五）十二月二十七日に封切られた敗戦後最初のお正月映画で、東宝製作・斉藤寅次郎監督作品である。

軍需工場の徴用を解除された五人の仲間が東京の焼跡に帰り、明るく復興に励むというもので、当時の「ＧＨＱ（占領軍司令部）の指導にしたがって企画された第一号」などと『東宝５０年史』には出ているが、なに、実際は敗色濃い時期に戦意昂揚の目的で撮りはじめてあったものを、それらしく手直ししたらしい。（評論家・矢野誠一）

輸入映画第一号選定について

東京から送られて来た各製作会社のカタログを見ると、戦時中に製作された、いわゆる〝銃後もの〟か、戦前の古いものばかりであったが、たった一本、昭和二十年（一九四五）に封切された「東京五人男」と云う喜劇ものがあった。

〝銃後もの〟は、当時のコロニア情勢から考え、好ましくないと断定、あまり古いメロドラマものも気に染まず、迷いに迷ったが、一方、輸入リセンサの期限も迫りつつあったことから、思い切って、戦後ものの「東京五人男」に決定せざるを得なかった。

皆さんご承知のとおり、この映画は戦後の社会を喜劇的に諷刺したもので、試写を見なくとも当然敗戦の臭いのするものであったがコロニアにこの映画を紹介したら、どのような反響があるだろうかと、商売を離れた当時としては思想的考えに支配されたのも事実であった。封切と同時にその反響の大きさに驚いても間に合わない苦境に立ったが、今でもあの映画の輸入については後悔していない。

まず「敗戦映画」「国賊会社」。当時のサ紙（サンパウロ新聞）には、「あのような映画を輸入する人間の頭は狂っているのではないか」とまで書かれ、まったく狂人のように頭がカッカとしたことを覚えている。地方での上映中、発電モーターにダイナ

マイトを仕掛けられたこともあったが、幸い未然に発見し爆発をまぬがれたこともあった。その反面結構応援して下さったコロニアの層も厚く、赤字を覚悟していた興行成績もまあまあの成績であった。

映画の興行成績について述べれば、なんと云っても「金色夜叉」（前後篇）がトップで封切はもとより、再上映でも満員で、再々上映のきいた映画はこれ一本であった。次は、「暖流」であったと思うが、この映画はトーキーの録音が悪く、発声がかすれて聴きずらい欠点があったが、それでも記録的には第二位であった。

金色夜叉　右側は上原謙と轟夕起子、左側は木暮実千代と轟夕起子

第三位は「偽われる盛装」であったが、主演女優が京マチ子というので前人気も相当のものであった。この映画の輸入については、裏話がある。京マチ子の実父がサンパウロ市に居る、と云う話を聞き、「偽われる盛装」封切と同時にアトラクションとして京マチ子の挨拶、日本舞踊の披露というプランを建てそのため彼女の実父（氏名失念）と云う人とも会い、側面から助力して貰うべく諒解を得た上、訪日、直接交渉を企んだが、身元不詳の人間とは面接しない仕組になっていて、お百度踏んでも門前払いで、ついにある高名な文学者にコネがあったので、その方を通じ面会することができた。このいきさつだけを書いても面白い物語になるが、ここでは省略。

ある撮影所で、そこの所長立合のもとで話し合ったが、特にお高く止まらず、割合に素直にこちらの話を聞いてくれたと感じたが、結果的には、この話は不調に終わった。なにしろ当時は人気絶頂の女優さんで、ハード・スケジュールで身体が持たないとこぼしていたほど多忙で、遥かブラジルくんだりまで出張なんて、ギャラの如何に拘らず、不可能と云う先方の事情で、諦らめざるを得なかった。

その何年後だったか、彼女は個人としてブラジルの実父に会いに来たそうだが、その時は映画関係から身を引いていたので今さら名乗り出ることはしなかった。

その他の映画興行は大同小異で、特に印象に残ったものはな

かった。

当時の興行ライバルは前出の日伯シネマ社で、その経験、錚々たるスタッフには恐威を感じたが、日本映画なら何でも飛び付いて来た時代であったので、駆出しでも結構勝負は出来た。その他、ブラジル映画社とか、南米興行社と云う社名で散発的に映画が上映されてもいた。日本映画の常設館みたいになっていたリアシュエイロ街のサン・フランシスコの小屋の予約など、連休を狙っての封切り作戦はお互い様で、しばしば劇場予約争奪戦で火花を散らしたものであった。

今でもシネ・サン・フランシスコの建物はあるが、その前を通る機会も縁遠くなって、映画観客が延々とフイラしたあの坂道は、昔懐しい想い出のひとつである。

映画について、もうひとつ苦労話がある。

それは、トーキー発声による日本語の会話をブラジル語に翻訳して画面にプリントしなければ、当局の検閲にパスしないので、映画輸入から封切りまで観客には分からない苦労があるということ。先ず、台本を翻訳したそれを画面に合わせてプリントする技術作業で、如何に翻訳が正しくとも日本語とブラジル語とでは会話のタイミングがうまく合わず、それをズブの素人がやるのだから苦労もさることながら、出来上がったものが幼稚でお粗末で、しばしば邦字紙に叩かれたこともあった。

一九五一年ころであったか南米劇場建設運動が起こり、この運動は割合に順調に進行、サン・ジョアキン街にシネ・サン・フランシスコに替る邦画常設館の南米劇場が出来上がった。これはその後、日活系封切館になったと覚えている。南米劇場と前後してガルボン・ブエノ街にシネ・ニテロイ（故・田中義数氏）が邦画常設館（後日、東映系専属館）として発足、カルロス・ゴーメス広場にシネ・ジョイア（現シネ・ショオチク）を借りて東宝系（押田真佐男氏）封切館も出来、さらにサンタ・ルジア街にシネ・日本（平田公泰氏のち松竹系専属館＝水本毅氏）が開業、日本映画も〝花盛り〟と云う発展の一時期はあったが、今はテレビに押しまくられて斜陽産業に転落、淋しい限りである。

ブラジアン商事映画部はこのような情勢の中で、常設館を持たなければ到底競争には勝てないと断定、見切りをつけて一九五三年末、廃業することとなった。映画に関してはこの程度にして、次に二代目松旭斉天勝一座の興行について、僅かながら述べることにしたい。

二代目松旭斉天勝一座興行について

一九五〇年ころ、戦時中の暗いトンネルを通り越して来た一

般コロニアの日系人は精神的苦悩はあったが、反面、経済的には戦時インフレによる好景気に恵まれ、その生活水準も戦前より遥かに上昇、そして安定した時代に入るが、その嗜好も日本映画だけでは物足りなく、有名歌手を含めた芸能団の派手な催し物を歓迎する風潮と云うか、そうした気運が漲っていた。

当時の日伯毎日新聞社長中林氏はいち早くこの気運を読み取り、日本から芸能団を呼寄せ、ひと勝負していたが、その反響については明瞭に覚えていない。

ブラジアン商事も映画興行をやっている以上、この機を逃すまいと、一九五〇年末、東京側といろいろ交渉を重ねたが、渡伯する勇気のない一団だったり、人数が多過ぎたり、ギャラが高過ぎたりで、なかなかまとまらなかったが、二代目松旭斉天勝一座の話が来た時、これはいけると感じた。

大正時代に活躍した一代目天勝のイメージは、まだコロニアに生きていると判じた。

早速、当時の東山銀行総支配人であった、山口昇三郎氏の所に重い腰を上げ、相談に行った。ところが、氏は天勝と聞いて一も二もなく賛成、一座の航空運賃約五〇〇コントスも約束してくれたので、意気揚々引上げたことを覚えている。堅い一方の銀行家が、興行の資金にお金を出したのは最初で最後だったと今でも思っている。

諸準備整い、いよいよ興行宣伝の時期に入ると、日伯毎日新

聞の第二次芸能団の興行と時期的にかち合う破目になった。お互いに一年のうち一般に金廻りの良い四、五、六月を狙っての極秘の興行計画だから、かち合うのはむしろ当然とはいえ、相手は新聞社で宣伝広告はお手のもの。加えて先方は、浪曲の広沢虎造と同曲師萩原稲子、唄の市丸と藤原千多歌、三味線静子、古賀政男・丈晴・照朗の父子一行八人で、当時の芸能界の最高メンバーであった。

こうなったら喰うか喰われるか、体当りを覚悟したが、面白いことにこうなると、パ紙（パウリスタ新聞）もサ紙もこちらに同情的で、頼みもしない〝提灯記事〟を書いてくれる有様であった。

一座の内容

三代目松旭斉天勝　魔術、日本舞踊
松旭斉天耕　手品
汐美姉妹　唄、アクロバットダンス
東健児　自転車曲乗り
鏡辰男　曲芸
花柳秀法　日本舞踊、三味線

以上七人の座員で、自分の出し物以外は必要に応じ他の出演者の裏方や助手をつとめ、その仕組はなかなかうまく出来ていた。

プログラムは幕合いを短くバラエティーに富んだ催しものを条件に、一切東京サイドに頼ったが、結構面白いプログラムが組まれていた。一座との契約は一切東京側まかせ、五二年六月末の連休を狙ってコンソラソン街にあったオデオン座を借り受けた。中休み二日置いて七日間公演、回数十三回と思い切った契約だったが、人気が出れば三万人は見込めると胸算用。が、見事に当って予想どおりの興行成績には、私自身驚いた。

聖市だけで軽く約九〇万の水揚げ

当時、映画入場料は大人一五クルゼイロス位であったが、天勝一座は確か三〇クルゼイロスの入場料だったと記憶する。それにしても、約九〇万クルゼイロスに近い水揚げとなった筈で、当時としては大金であった。劇場にいると、友人、知人、道で会ってもろくに挨拶もしないような人もみな肩を叩いて喜んでくれた。また、頼みもしないのに日伯毎日側の芸能団に関する情報をわざわざ注進してくれる物好きな人も現われる始末であった。

サンパウロ市興行が終わると、映画関係の全員が一丸となって協力してくれたので、地方巡業も無事に終わり、お別れ興行まで打てたのは、まったく予想外の人気の賜物。今では陳腐（ちんぷ）でお話にならないプログラムであったが、時代にマッチしたとは云え、大ヒットであった。

楽団が必要だったのでM氏に相談、いわゆるシルコ・バンドを編成してくれたが、初日は今でも名の通っているルイス・ゴンザガ氏が、北東伯特有のランピォン帽子をかぶり、アコーデォンを抱えて前座を務めてくれたのを覚えているが、どうして彼が出演したのかそのいきさつについては思い出せない。

ある出演者に人気が集中すると嫉妬心からか他の座員がゴネたり、また、人気が上昇するとギャラの釣り上げ要求を出したり、いろいろと内紛もあったが、最後に伝家の宝刀〝興行中止解散〟を申し渡すと皆シュンとしておとなしくなった。しかし、さすがに芸人でそうした不満を舞台に反映させるようなことはなかった。そうした内輪の揉めごとも世間に洩れずに済ませたのも座長であった天勝が興行界で苦労を重ねただけあって巧みに座員をリードし、協力してくれたからでもあった。

また、ご贔屓（ひいき）のお客さまが毎晩遅くまで、ホテルに押し掛けて、なんとか天勝、汐見姉妹を食事に連れ出そうと、結構高価なプレゼントを持ってやって来るのには閉口したものだ。

ブラジルでの公演も終わり、帰途ペルーのリマ市で五日間の興行を打ったが、ここではサンパウロ以上の人気で、個人的を接待が次から次へと続き、結局、十日ぐらいの滞在となった。

ペルーのリマ市公演を終わり、行きがかり上、私も日本まで一座に同行したが、彼らの日本での実生活を垣間見て、ブラジ

ルの興行生活は正に天国のようなものだったのだと思えた。
私にとっても、感激と興奮に満ちた最高の年であったと今でも思える。
その後、再度二代目天勝が来伯したことを知ったが、すでに時代は変ってその人気も凋落（ちょおらく）、夢はもう一度来なかったようであった。
私が芸能に関係した記録と云えば以上のようなもので、その期間も短かく、僅か二年余で終わった。コロニア芸能史編さんに当ってその半ページにも満たない記録であるが、お役に立てば幸いである。

（一九八四年五月・記）

――――◇――――

松旭斉天勝　明治後期から大正・昭和の初年にかけて、奄術界の王座を占めた女西洋奇術師。本名は中井かつ。東京生まれで十二歳のとき、明治後期の名高い奇術師松旭斉天一の弟子となり、たちまち一座の花形となった。
明治四十五年（一九一二）、師天一の没後、一座を主宰して海外へもたびたび巡業し、千数十種の奇術を考案し、一代の名声をうたあれた。「日本奇術協会」の会長も務め、昭和十年（一九三五）、五十歳で斯界を引退し、昭和十九年（四四）、一月、五十九歳で没した。二代目天勝は、姪が継いだ。

京　マチ子

別名は＝グランプリ女優＝だが、思えば『羅生門』『雲月物語』『地獄門』などの海外受賞で名をあげたのは、二十余年も昔の昭和二十年代後期のこと。いや、それにしてはお若い。先ごろ久々の映画出演、しかも大ヒットの『華麗なる一族』では、あでやかに衰えぬ容姿肢体で、オールド・ファンをわかせた。

ＯＳＫ（大阪松竹歌劇）から東京は日劇の舞台に乗りこみ、ダイナミックな『七面鳥ブギ』の踊りで大評判となり、昭和二十四年（一九四九）に映画入り、そのボリューム、曲線美は、当時イタリア肉体女優に唯一対抗し得る日本女優であった。

そのために、所属していた映画会社まで肉体オンリイと思いこんでいたところに、若き日の大きな不幸があった。肉体以外のものを生みだしグランプリをとったのは、黒沢明、吉村公三郎、成瀬巳喜男などすべて他社出演のときだけだった。

派手やかな外見に似あわず、世の主婦族以上に、掃除、料理、洗濯と小まめに動き回るのが大好き。加えてピアノ、英語、ダンスのレッスンに励む。ロマンスの噂すらない独身で、趣味は釣りとゴルフとか。舞台にテレビに現役女優でありながら、悠々自適のおもむきなのも、お人柄であろうか。

（南　俊子、映画評論家）

―――　◇　―――

大正十五年（一九二六）～大阪生まれ。女優。昭和十一年（一九三六）大阪松竹歌劇団に入り、二十三年（四八）日劇公演で認められ大映入社。デビューは『最後に笑う男』、話題作に『あにいもうと』『痴人の愛』『偽れる盛装』などがあるが『羅生門』『地獄門』により一躍グランプリ女優として国際的スターになった。

文芸春秋デラックス増刊「昭和５０年をつくった七〇〇人」（一九七五年二月発行）から転載。

東宝が業界に〝新風〟
慎重に検討し進出に先鞭

押田真佐男
（元東宝南米有限会社・取締役）

５８年、番組編成で南劇と提携

東宝が南米市場開拓の拠点としてサンパウロ市に東宝南米有限会社（ＴＯＨＯ・ＦＩＬＭＥＳ・ＡＭＥＲＩＣＡ・ＤＯ・ＳＵＬ・ＬＴＤＡ）を正式に設立したのは一九五八年四月十六日であった。現地法人組織で、資本金は邦貨一千万円（当時の二〇〇〇コントス）役員は駐在責任者、山崎長利を代表取締役に押田真佐男、清水雅（当時の東宝社長）、森岩雄、川喜多長政、

米本正の六人が取締役として名を連ねた。

東宝のブラジル進出は、これに先立つ一九五四年から計画、検討されていた。それは同年、サンパウロ市創設四百年を記念しての第一回サンパウロ国際映画祭に日本代表として出席した米本正（東宝参与）と、南米劇場株式会社（以下、南劇と略す）との間でブラジル進出の可能性についての話合いが行なわれたからである。

南米劇場（シネ・東京）の外観

次いで五七年二月、東宝傍系の東京映画から滝村和男プロデューサーが現地での移民映画製作検討と市場調査のため来伯、さらに同年八月十八日、川喜多長政（東宝取締役、東和映画K

K社長、社団法人日本映画渉外普及協会常務理事）によるブラジル映画界の現状視察のための来聖により、正式に具体化された。川喜多は、南劇と話合いの結果、翌五八年一月からシネ東京（南劇の直営館）の番組編成を東宝が行なうことを決定した。このため南劇支配人の押田真佐男は同年十一月訪日し、同十四日東宝本社で清水雅社長とともにこの件に関しての契約書に調印、ここで初めて東宝のブラジル進出への第一歩が踏み出された。

なお、東宝との提携披露第一作はカラー・シネマスコープの「大学の侍たち」で、邦画のシネマスコープ（標準型映画の縦横比１対１・３３に対し、１対２・５５の比率をもち、パノラマ的映写効果を生むことができる）公開は、ブラジルでこの作品が初めてである。また南劇と東宝との提携は、邦字紙による一九五七年における〝十大ニュース〟のひとつに挙げられた。さらに東宝のブラジル（南米）進出は、当時、大映がパリに共同経営の劇場を持っているのを別とし、日本の映画製作会社としても初めてのことである。

提携第一作「大学の侍たち」は一九五八年一月十五日よりシネ東京でスタートした。同十七日、この提携を記念して河内桃子、北川町子の二スターが来聖、十九日より八日間にわたって舞台で挨拶、ショーに出演、観客は連日とも長蛇の列、大好評を博した。

一方、同年六月九日には映画「南米航路」製作下準備のため脚本家の井手俊郎が着聖、現地調査を行なって帰国したが、予定されていた久松静児監督の発病、滝村和男プロデューサーの急逝で製作が中止されたのは、非常に残念であった。

同年十月八日には、業界視察と関係方面へ挨拶のため清水雅東宝社長が来聖した。

「無法松の一生」で招待特別試写会

一九五九年四月八日、サンパウロ総領事館主催で五八年度ヴェニス国際映画祭でグラン・プリ（金獅子賞）を受けた稲垣浩監督、三船敏郎主演の「無法松の一生」の招待特別試写会がシネ・マロッコス（定員千五百）で盛大に催された。映写に先立って日本映画に造詣が深いアルメイダ・サーレス（当時、オ・エスタード紙記者、映画評論家）による日本映画界の現状などについて詳細な説明があり、それまで日本映画に対して予想以上に〝不案内〟だった多数のブラジル人観客に感銘を与え、試写会は成功、その幕を閉じた。

次に、東宝南米の進出（五八年一月）から七八年十二月末の閉鎖に至る二十年余の間における主な事柄を年代順に列挙する。

※一九五九年八月一日　セラドール系のシネ・ジョイアと配給契約を結ぶ。配給第一作は「鰯雲」。このため市内の邦画常設封切館は既存のシネ・ニテロイ、ニッポン、東京を含め四館と

なったが、このうち東京は翌六〇年十二月十五日限り閉鎖された。

※六〇年八月　セラドール系のシネ・パラマウントと配給契約、同二十八日から第一弾「裸の大将」でスタート。

※六〇年十一月　大津美子ショー（十九～二十七日）シネ・パラマウント。

※六一年一月　セラドール系シネランジアの五館で二十八日から一週間にわたる第一回サンパウロ東宝映画祭。宝田明、草笛光子が出席。

※六三年一月　久慈あさみ、藤井輝子を迎え、十三日から二十日までシネ・ジョイアで第二回東宝映画祭。

※六八年四月　東宝南米創立十周年記念祝典に出席のため東宝本社から松岡社長、米本取締役、加山雄三、田中邦衛、中尾エミ、ザ・ランチャーズたちが四日来聖。五日から九日までシネ・ジョイアで東宝南米創立記念の映画祭と、加山雄三夢のゴールデン・ショーを盛大に催す。このショーは引続きロンドリーナで十日、モジで十一日にそれぞれ公開した。なお、加山、田中、中尾の三人は十二日からリオへ向い、「リオの若大将」の現地ロケに参加した。

輸入・配給本数は七二二本

一九五八年一月十五日のシネ東京における「大学の侍たち」

から七八年十二月末まで、東宝南米によって輸入・配給された長篇劇映画は実に七百二十二本に達した（他に短篇、ニュース映画も多数）。年度別の封切本数は次のとおりで、五八年当時の入場料は四〇から五〇、翌五九年は六〇クルゼイロスであった（入場料についてのタベーラ＝上限規定は無かった）。また、映画の輸入に必要な対日アジオ（ドル）の競売は九か月ぶりに五九年五月から再開され、輸入本数も急激に増加するようになった。

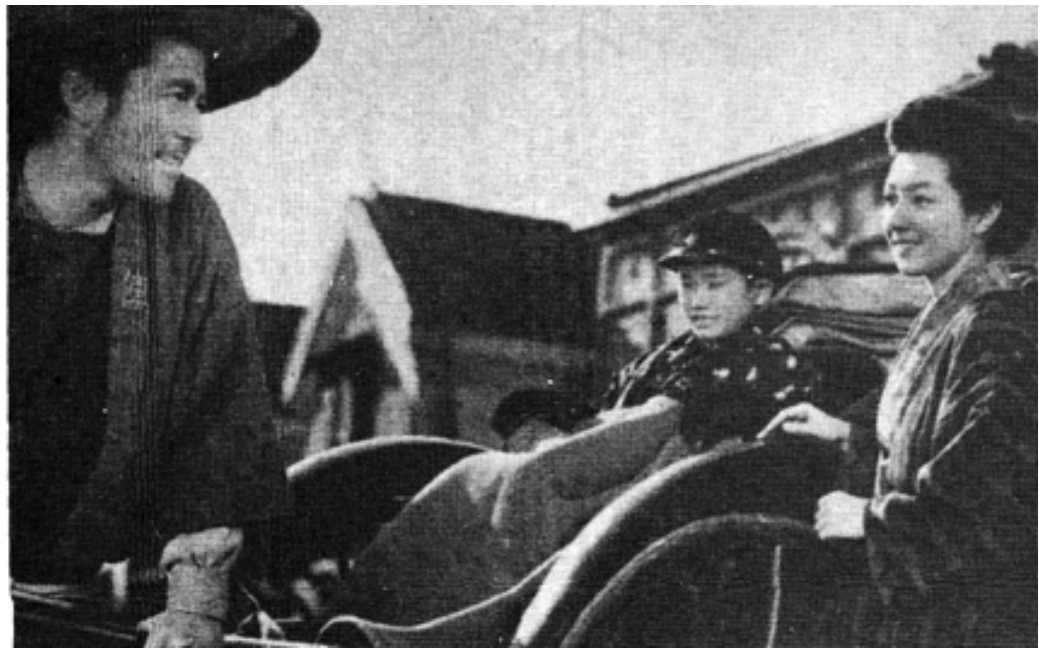
五八＝三二　五九＝五〇　六〇＝七一　六一＝三七　六二＝四三　六三＝四二

第一回サンパウロ国際映画祭に出席した越路吹雪＝右＝と新珠三千代＝左＝、中央はヴェラ・ヌーネス（一九五四年）。他に日本代表として米本正（東宝参与）、作曲家の河村氏などが出席した。

（以下２ページ囲み記事）

『無法松の一生』

戦時中の一九四三年度大映京都作品。岩下俊作の『富島松五郎伝』を病床の伊丹万作がシナリオ化した。小倉の名物男、人力車夫の松五郎は乱暴者だが侠気のある男で、知己を得た吉岡大尉の未亡人よし子と一子、敏夫に至誠と愛情で奉仕する。



しかし彼はある日、未亡人を訪問、「自分のこころは汚い」と、夫人へのひそかを慕情を告白して去る。それは当時の軍国主義

的滅死奉公のスローガンをネガティブとしたポジティブな人間愛の発露として、人々のこころを持った。主演は阪東妻三郎、園井恵子、沢村アキオなど。伊丹の澄明なシナリオを得て稲垣浩の演出も冴えている。祇園太鼓を乱打するショットなど最高のカタルシスがあった…と云われる名作

なお、東宝の『無法松の一生』（写真下）は、松五郎が未亡人への愛の告白する部分を、良風美俗に反するとして、検閲で削除された前作を不満としていた稲垣浩が、同じ伊丹シナリオにより、新たに色彩版として再映化した作品。松五郎は三船敏郎、未亡人は高峰秀子。出来ばえについては両者甲乙つけがたいが、戦時下という条件のもとでみた前作には、無告の代弁者によるファシズム的風潮への抵抗、人間性の回復といったものがより強い印象を受けたことは確かである。滝沢一、（映画評論家）。キネマ旬報『日本映画作品全集』より転載（一九七三年版）。

（１４４ページからの続き）

六四＝三九　六五＝二七　六六＝二七　六七＝三〇　六八＝三四　六九＝三四　七〇＝三二　七一＝三六　七二＝三五　七三＝三七　七四＝二六　七五＝二七　七六＝二五　七七＝一五　七八＝　八

この他に十五本で、計七百二十二本。

一方、ＥＭＢＲＡＦＩＬＭＥ（ブラジル映画公社）の指示により、一九五六年から一般封切館での国産映画上映が年間八対一と規定された。外国映画八本に対して国産映画一本の上映義務が強化されたわけ。この規定は七一年からは十四週間（九十八日間）、七三年から十六週間、次いで七八年から十九週間と年を追うに従って増加され、現在に至っている。

また、国産ニュース映画の上映も義務付けられている。しかし、封切館の場合、国産映画は必ずしも〝封切ものに限る〟という条項は取除かれており、邦画常設館での国産映画は特別の場合を除き、すべて〝再映もの〟となっているのが現状である。

※追記、前記、第一回サンパウロ国際映画祭への日本代表団は米本正のほか、越路吹雪、新珠三千代（女優）、河村篤二（東宝宝塚専属作曲家）などで、出品作品は成瀬巳喜男監督の「妻」＝主演上原謙、高峰三枝子、新珠三千代、丹阿弥谷淳子、三国連太郎＝であった。

（文中敬称略）

（一九八四年七月・記）

東宝南米創立十周年記念祝典のため来聖した加山雄三とファンの群れ（オートン・パラセ・ホテルで、一九六八年四月）

第一回サンパウロ東宝映画祭での宝田明と草笛光子。ブラジル人俳優は右からアルベルト・ルシェル、アウローラ、ツアルテ、ミルトン・リベイロ（シネ・アルト・パラシオ）

第二回サンパウロ東宝映画祭での久慈あさみ＝左と藤井輝子（シネ・ジョイアで）

私の「邦画界変遷記」

押田真佐男

「日蓮上人」や目薬の宣伝映画

日本映画が初めてブラジルで上映されたのは、昭和二年（一九二七）熊本県海外協会による日蓮宗の僧侶が持参した県人慰問のための『日蓮上人』だと云われている。次いで円坂さんという人が信濃海外協会からの「今上陛下の御大典」と「大阪南地のあしび踊り」の実写ものを各地で上映した…というのがコロニア一般の通説となっている。

次に、私の知っている範囲内で戦前、戦後の邦画界の動静（戦後における南劇の誕生までとその後を）簡単に追ってみよう。

邦画興行界の老舗、日伯シネマ社が斉藤政一によってバウルーに設立されたのは一九三〇年（以下、日本年号は略）のことで、唯一の手持ち作品「籠の鳥」で各地を巡業した。それから間もなく、アリアンサ在住の瀬戸某が「快人狼」、ニュース「帝都復興」と大学目薬の宣伝映画をノロエステ、ソロカバナ、モジアナ各線のコロニアで上映している。

日伯シネマ社がサンパウロに移ったのは一九三三年、当時カルモ街にあった労働会館で『路上の楽園』、『熱血の握手』を上映したと云う。これがサンパウロ市における邦画第一号であっ

たようだ。

浪花節語りの沢井天城は一九三二年にサンパウロで東洋シネマを創立したが、間もなく小笠原太陽堂と組んで聖市松竹興業合資会社と改名、これに当時の実業家、菅山輝吉、杉本芳之助、国井五郎たちが加わって南米興行合資会社に組織変更し、松竹の『人妻椿』、『忠臣蔵』や日活の『五人の斥候兵』を輸入・配給して気を吐いたが、一九三九年には解散している。このため日米戦争直前まで営業を続けていたのは日伯シネマ社（斉藤）と日本シネマ社（平田公泰）の二社だけであった。

「五人の斥候兵」は田阪具隆監督の日活多摩川作品。一九三八年度のキネマ旬報のベスト・ワン、同三八年のヴェニス国際映画祭で最高賞の「民衆大臣賞」を授与された。写真は左から小杉勇、見明凡太郎、井染四郎、伊沢一郎―右端―その他など。サンパウロでは三九年五月下旬、シネ・ロザリオで封切。

戦後、初めてサンパウロで上映された邦画は、戦前の老舗、日伯シネマ社の後身である日伯興業社（斉藤・平田共営）による松竹作品『流転』で、サンフランシスコ劇場での公開には連日とも大入り満員の盛況さを呈し、業者を歓喜させた。

一方、この好評に刺激されてか、その後、映画の輸入に手を染める者が続出した。当時、映画を含め輸入はすべて事前許可制だったが、それまで興行に無関係の第三者によるフィルムが噂されるようになった。有名な黒沢明の演出第一回作品『姿三四郎』（東宝・一九四三年度）の１６ミリ版が、どこそこで上映された―という話を聞いたのもしばしばで、『流転』が評判になってから、そう時日は経てなかったように思う。

ともあれ、『流転』を契機として邦画界の動きは活発化した。そのひとつは業者の急激な増加であり、もうひとつは〝われわれの手で独自の常設館〟を、と云う常設館建設ブームの台頭である。

業者は大別して、①自ら輸入・配給・上映に従事する②輸入・配給業者から作品の提供を受ける地方巡業者―となる。前者には戦前からの老舗、日伯シネマ社の後身である日伯興業社（斉藤・平田共営）を筆頭に、南米劇場株式会社（南劇）、ブラジアン商会映画部、アルテ興行社、全伯興行社、シネ・アジア社、オリエンタール映画演芸会社、ニッポン映画社、日映興行社などがサンパウロ市に本拠を。

また後者には、パラナ興業社、第一映画社、近代映画社、東洋シネマ社、五ツ島興行社、日映興業社、東北シネマ社、東映興業社、富士興業社、南映興業社、世界興業社など十一を数えた。この他にも東映作品『ひめゆりの塔』でサンパウロ初め各地で興行的に大成功を収めた花城商会（同商会はその後『健児の塔』も入れたが、これは前者ほど評判にならなかった）。さらに松竹作品『君の名は』全三部作（一九五三年度）を提供して驚異的な観客を動員した菅山・寺田商会（マリリア）も記憶に残っている。

当時、といっても戦後から一九五三年七月のシネ・ニテロイ、五四年七月のシネ東京開館まで〝邦画の常設館〟は殆んどサンフランシスコ劇場に限定されていた。時たま例外としてシネ・オデオン（サーラ・アズール）やシネ・パラマウントが使われたこともあったが……。

次に、一九四八年から五三年四月にかけサンフランシスコ劇場、シネ・オデオンで封切の邦画を数えたところ約五十本に達した。年代順に主なものを記す（カッコ内は提供業者名）。

雪夫人絵図、わが生涯のかがやける日、細雪、宗方姉妹、帰郷、ひばりの子守唄、想い出のボレロ、母子船（日伯興業）。晩春、蛇姫様、小判鮫、南風、また逢う日まで、喧嘩鳶、おぼろ駕籠、鞍馬天狗・角兵衛獅子、海賊船、生さぬ仲（南劇）。歌う野球小僧、二ッボンGメン、母、愛の山河、栄冠涙あり（日伯

シネマ）。母千鳥、拳銃の前にいた母、夢と知りせば（ニッポン映画）。上海帰りのリル、二つの花（日映興行）。銀座三四郎（オリエンタール映演）。偽れる盛装（ブラジアン）。君を呼ぶ唄、三色旗ビルジング（アルテ興業）。千石纏（全伯興行）。母月夜（シネ・アジア）。

改めて見るまでもなく、以上の作品の中にはキネマ旬報のベスト・テンに選ばれたものも数多い。業者がその輸入に当って作品を念入りに選択したことが、うかがわれる。

「滝の白糸」は戦前の一九三六年、日伯シネマ社によりサンパウロで上映され、大ヒットを放った。当時の新聞広告には「莫大なる権利金を投じ、遂に南米興業権獲得」と明記している。写真は入江たか子と岡田時彦

南米興行の「丹下左膳」前後篇も忘れられない名作のひとつだった。写真は大河内伝次郎と黒川弥太郎

ニテロイが初の日系常設館

邦画常設館の建設は、最初、斉藤、平田による「日本劇場」案があったが、これはいろいろな事情から〃机上のプラン〃に終わり、田中義数によるシネ・ニテロイによって初めて成し遂

げられた。

これに次いで、当時（一九五〇年頃）、日伯興業社の向うを張っていた南米興行社（武田俊男、須山良助、その他）による「南米劇場」建設案が進められた。それまでの南米興行社を南米劇場株式会社に組織変更したのが一九五一年八月、同時に劇場建設案を発表した。

翌五二年七月二十日に地鎮祭、五三年七月十二日には上棟式、五四年七月十七日、ここに〝コロニア娯楽の殿堂〟こと、シネ東京が開館、東宝の大作『太平洋の鷲』で華々しいイナウグラソンを行なった。当時の入場料は一〇と七クルゼイロスで、収容人員は一千二百であった。

なお参考までに記すと、当時の南劇役員は次のとおり。

会長＝武田俊男、社長＝武田五男、副＝須山良助、常務取締役＝小田勇、取締役日東義嗣、内村末男、清原六米、監査役＝北川必造、鈴木喜三郎、山本正喜、鈴木威、平井格次、河野米次。

その後のシネ東京（南劇）のスクリーンには数多くのカラー作品が続々と登場した。また、シネマスコープ時代に備えて五六年九月三日に従来のそれをパノラミカ・スクリーンに改造した。その第一回作品は新東宝の『ハワイ珍道中』（カーザ水本提供）であった。

さらに五七年五月にはシネマスコープ・スクリーンの設備を完

了、同月三日、イタリア映画『青い大陸』を公開した。このシネマスコープ時代の入場料は二一クルゼイロス（それまでは一三クルゼイロス）であった。

東宝の現地法人会社の設立（一九五八年四月）。私は当時、南劇の支配人であったが、のち、乞われて東宝の現地会社に移った。

「君の名は」の佐田啓二と岸恵子

「雪夫人絵図」の木暮実千代と浜田百合子

予断許さぬ邦画興行界のこんご

邦画の〝黄金時代〟到来は、業者によって異なるが、一九六〇年代の初頭からではないかと思う。当時、サンパウロ市内には邦画の常設館が四館、地方でも数十舘を数え、さらに巡回映写業者は枚挙（まいきょ）にいとまなし、だったからだ。

一例をあげると、六四年の東京オリンピックの記録映画である。この『東京オリンピック』は、日本および全世界の配給権を東宝が独占、確か六五年十月頃にサンパウロで封切ったが、その評判に地方の業者からの上映申込みが殺到した。「上映期日、次の業者へのフィルム輸送その他に就いて飽くまでも責任を負う・・・」と、我先に押しかけて来た。このような有様で東宝のサンパウロ事務所はフィルムを地方のA業者に回すだけで、仕事が無くなった。椅子に座っているだけでAはBへ、BはCへ・・・と回転、こちらは各業者からの送金に目を通すだけ。当時、このような業者は約八十を数えたのである。

さらに、サンパウロ州内は勿論、ロンドニア、マト・グロッソ、パラー、ミーナス、バイア、パラナ、セアラ、エスピリト・サント、ゴイアス、ペルナンブコ、リオ、南リオ・グランデ各州のブラジル人配給業社（その殆んどは常設館チェーンの経営者）からの配給申込みが数多くあった。

だが、邦画の観客動員数に限界がある—ということがようやく明らかになって来たのは予想外に早く、この『東京オリンピック』直後からでなかったかと思われる。いずれにしろ、観客の動員数は日ごとに減少、各館に〝長蛇の列〟が見られなくなったのも、一般がご存知のとおりだ。

現在、シネ・ニテロイと松竹が常設館として余命を保っているが、地方からの上映申込みは皆無に等しいと云う。たとえ、サ

ンパウロで新作を封切っても、地方での上映は殆ど不可能なのだから、両舘とも〝再映〟〝再々映〟、そして〝名画週間〟を表看板に仕事を続けざるを得ない苦境に追い込まれている。時たま、思い出したように新作の封切はあるにはあるが、過ぎ去りし〝黄金時代〟を顧りみるまでもなく、邦画興行界のこんごは〝茨の道〟であることは間違いなさそうだ。

（文中敬称略、一九八五年一月記）

（元南米劇場支配人）

日本映画海外受賞作品、サンパウロでの封切

戦前、国際映画祭で最初の受賞作品となったのは日活の「五人の斥候兵」（田坂具隆監督）で、一九三八年の第六回ヴェニス国際映画祭で最高賞の民衆大臣賞を授与された。

第二次大戦後、ハリウッドのアカデミー賞（一九二七年から）、ヴェニス（同三二年から）、カンヌ（同四六年から）、ベルリン（同五一年年から）、モスクワ（同五九年から奇数年に開催）、その他のおもな国際映画祭で受賞した作品をサンパウロでの封切順に記すと、およそ次のようになる。資料紛失のため掲

載もれの作品も少なくないと思われるが、できるだけ正確を期した。

戦後の第一回受賞作品は大映の「羅生門」（黒沢明監督）だが、同作品が五一年のヴェニス国際映画祭に出品されたのは、当時、東京に事務所を持つイタリア・フィルム社のストラミジョリ社長（日伊交換留学生、京大で古美術、文学を研究）による「この映画を見てひどく心をひかれた。故国イタリアで毎年開催されるヴェニスの映画コンクールに、日本作品としてぜひ出品すべきだ…」という勧めからであった。この頃は、まだ日本の映画界は戦後の立ち直りも完全でなく、イタリア語のスーパー（字幕）を入れて、一本の出品フィルムを作るため三十五、六万円の費用の捻出を渋る向きもあり、日本映画が出品されたのはこの年が戦後最初であり、しかも出品作は「羅生門」一本であり、それもイタリア・フィルム社の物心ともに、なみなみならぬ協力であっての上であった。

ところが、九月十日の映画祭授賞式において、映画祭最高の栄誉であるグランプリ（大賞）が、日本の「羅生門」に授与されたと発表され、映画界はもちろん、終戦以来、あらゆる方面が、敗戦思想に打ちひしがれていた日本人を驚喜発奮させた（田中純一郎著「日本映画発達史Ⅲ」による）。

次に、参考までに記すと、五八年の「宮本武蔵」は東宝映画（三船敏郎主演）。同五九年の「無法松の一生」も東宝映画だが、同じ稲垣浩監督により戦時中の四三年に大映で製作されている。主演は阪東妻三郎、園井恵子に沢村アキオで、第二回目の映画化。ところで、この第一回自作品は、映画評論詰による同年度の優秀映画選出で第一位に選ばれたのにもかかわらず《軍人の妻に寄せる無法松の感情が時局的でない……》として、公開の際には検閲でズタズタに切られたという。

新作の「無法松の一生」は、五八年のヴェニスで気を吐いたが、この年、同祭には木下恵介監督の「楢山節者」、増村保造監督の「巨人と玩具」も出品、とくに「楢山節考」とは最後までトップ争いの形となったが、リドの映画館で一般を対象に有料興行を試みた際の圧倒的な支持が効を奏し「無法松の一生」が金的を射止めた、ともいわれている。

第二回目の映画化での受賞作品には、この他に六六年の「姿三四郎」（内川清一郎監督加山雄三、三船敏郎主演）、八四年の「楢山節考」（東映、今村昌平監督）などがある。

なお、一九五六年から国際映画製作者連盟によって、国際映画祭で最高賞にグランプリの名称をつけることができる公認映画祭はヴェニス、カンヌ、ベルリンの三つだけになり同五七年からチェコのカルロヴィ・ヴァリとスペインのサンセバスチャ

ン、五九年からモスクワが加わり計六つになった。また、ヴェニスのグランプリは、「サン・マルコ金獅子賞」、ベルリンでは「金熊賞」（熊はベルサンの市章）とも呼ばれている。

カンヌ国際映画祭で撮影技術賞を獲得した「源氏物語」

ヴェニス国際映画祭（一九五六）でサン・ジョルジョ賞に選ばれた「ビルマの竪琴」

各地に次々と常設館

業者ら、卍巴で覇を競う

池田　重二
（著述家）

映画館主は興行的に大当り

戦前からもそうだったが、戦後は特に邦画シネマは大歓迎であり、映画館主は興行的に大当りしている。優秀な日本映画は邦人ばかりでなくブラジル人も見るから、今後も益々盛んになるだろう。

ブラジルで邦画を最初に興行したのは一九二五年（大正十四）九月で、熊本県海外協会員の中島氏が「赤垣源蔵」を持参した時に映画係として同道した内海氏が、主演沢蘭子の「籠の鳥」を輸入して巡回したのが、営業として嚆矢である。

一九二九年（昭四）に聖州新報社員の斉藤政一氏が「あしべ踊り」七巻を持参して廻った。翌三〇年（昭五）には国際文化協会の今村忠助氏（後の代議士）が松竹作品「熱血の手」、日活作品「地上の楽園」を持参、これを斉藤政一氏が引受けて興行化し、やがて日伯シネマ社を創立した。三二、三三年頃から邦人も毎年二万人位移住したので各植民地も集団的に数多く、巡回シネマ屋もボロ儲けとなったので戦争勃発寸前は日伯シネマ

社（斉藤政一氏）、ブラジル邦画社（平田公泰氏）日東シネマ社（橋本厳氏）、日本シネマ社（倉方勇氏）、南米興行社（杉本芝之助氏）、松竹興行社（沢井天城氏）、関西シネマ社（石川直継氏）などが創立し、僅かな資金でフィルム一本をかついで、一年中奥地を巡回興行した。

奥地邦人集団地は電気が無いので、トラックの電流を利用して映写していた。勿論、当時は無声映画で百姓嫌らいの青年達が弁士（即ち解説者）に早変りして、声優振りを発揮した。この巡回シネマ社は交通不便の集団地では案外うけがよく、戦後の今日でも、町に遠い所では月に一、二回位、映画会を催している所が多い。この巡回映画時代に儲けた邦人最初の興行者は斉藤政一氏で、その時に雇員だった平田公泰氏は独立して儲け、今日、一億円以上投資してシネ・ニッポン映画館を建て、素晴しく発展している。たった一本のフィルムを後生大事に持って一、二年も奥地を巡回した苦節時代を回想すると感無量である。

興行は〝水物〟であるから盛衰が激しい。

地方巡回のシネマ興行も現代（一九六〇年代初期）は農村にだけ廻らず、小さい町のシネマ舘を一夜だけ借りて興行する邦人もでてきたので、農民でトラックを持っている人達は町に、見にゆくようになった。現在も聖市に日映興行社（倉本静雄氏）、ガルサ市に近代映画社（苅谷徳三郎氏）、第一映画社（内田比都美氏）、マリリア市に東京映画社（本田貢氏）、東洋映画社（武

田一利氏)、アラサツーバ市に新興映画社（林信之助氏)、パカエンブー市に佐藤正人氏、ロンドリーナ市にパラナ興行社（薮政美氏)、岡本興行社（岡本豊一氏)、さらに吉本興行杜、石井映画社、安井興行社、安田興行社、国際興行社など数多くの巡回シネマ興行社がある。フィルムは全部邦画であることは勿論である。

ロンドリーナに初の日系舘

戦前、邦人で映画館を経営したのは一九三五年にロンドリーナ市で西山悟氏（兵庫県出身）が堂々たるシネマ館を建てたのが嚆矢であり、バストス移住地に木造映画館があった位のものであった。戦後はこの方面にも邦人の進出目覚ましくサンパウロ市にシネ・ニテロイ（田中義数氏)、シネ・ニッポン（平田公泰氏)、シネ・東京（邦人株式会社）の常設映画館があり、入場座席千五百人もある。堂々たる豪華宏壮なものである。松竹、東宝、大映、日活、東映、新東宝の各映画は前記映画館で上映されているが、別にブラジル人の映画館で邦画常設の映画館（パラマウント、ジョイア、スカラその他）もあるので、観客はその選択に不自由しない。

奥地ではパラナ州アサイ市にシネ・アサイ（植田馨氏)、ローランジャ市にシネ・ローランジャ（山之内安房氏)、パウリスタ延長線ドラセナ市およびグラシノポリス市に（青木正男氏)、パ

カエンブー市にシネ・サンルイス（高橋輝一氏）、バストス市にシネ・バリンニャ（沢村勘次郎氏）、モジアナ線イプアン市にシネ・イプアン（林原金治氏）、レジストロ市にシネ・レジストロ（武者留次郎氏）などがいる。勿論、どの人も丸裸から、何千万円、何億円のシネマ舘を建てたのだから努力の人として賞讃してしかるべきであるが、次にそのうちの二、三人を紹介しよう。

田中義数氏（愛媛県南山崎村）。サンパウロ市のシネ・ニテロイ館主、在伯邦人最高のシネマ館主、一九二六年二十一歳で両親、弟妹などと渡伯。モジアナ線コーヒー園でコロノ一年、北パラナに転じ、五年間コーヒー園で働き、サンタ・マリアナ駅で二十域の土地を購入、コーヒーを植えた。三五年雑貨店開業、ちょうど渡伯十年目であった。三年後に玉筍黍脱粒工場を建て農産物の仲買業に転向、戦時中の好景気の波に乗って四三年サンパウロ市に本店を移し、ウライ市にも支店を設け、終戦の黄金時代に「フェイジョン」農作物で半期に一億数千万円の純益をあげ、五三年に映画館を建て、農産物仲買から手を引いた。シネマ館は五階建ての鉄筋コンクリート、二階以上は食堂とホテルになっている。渡伯二十八年目にかかる豪華な常設館を建てた氏の努力を賞するとともに、氏に協力した弟妹の功績を讃えたい。

青木正男氏（長野県塩尻町）。一九二三年わずか十歳で茅野氏夫妻に連れられて渡伯、型の如くコーヒー園コロノ生活、辛苦

十一年の後に茅野氏と袂別して、各都市の雑貨店に勤務、転々とした。その間にブラジル商法の秘訣を修得、三六年小川建六精米所に働き農産物取引に精通、やがて月給から歩合制度になり収入をため貨物自動車を購入、着々独立の準備を怠らず四三年独立開業した。戦後のブラジル農村界の黄金時代に農産物取引で巨財を残し、五〇年新興都市ドラセーナ市に一千六百名収容能力の常設映画館を建て、毎月四、五十万円ずつ純益をあげ、二年後にはジュンケイロポリス市に収容能力一千名のシネマ舘を建てた。なお、氏はその近郊都市に今後七、八軒のシネマ館を建て、フィルムの配給を円滑にしたいと希望している。若冠十歳で渡伯した青年として映画で成功した立志伝中の人である。氏は青年時代に短距離・投てき・走巾跳・棒高などの陸上競技選手であり明朗なスポーツマンである。

井上安一氏（宮崎県木村）。一九三一年渡伯、ノロエステ線で八か年百姓をして、三九年リオ州サンベント駅で十ヘクタールの土地を購入してトマト栽培に従事した。大戦勃発で現地退去を命ぜられ、止むなくマゾンバ耕地に移った。悲憤の涙を払ってトマト栽培二か年、天日彼に幸して巨利を博し、十域の土地を購入した。この土地で連年豊作と高値に恵まれ、遂に堂々たるシネマ館を建てた。やがて彼の土地が市区に編入され、その分譲により六千コントスの純益を得たが、氏がイタグアイ駅でシネマ館を建てたので、ブラジル人らは感謝している。悪戦苦

闘した半生であったが立派にその努力は報いられた。

山之内安房氏（福島県出身）。一九三〇年渡伯、福島県立農林学校卒業後に教員生活数年、二十八歳の時にノロエステ線渡辺農場で百姓を振出しにブラジル生活が始まった。五年後の三五年北パラナ・ローランジャ駅旭植民地に五十域の土地を購入してコーヒーを植えた。終戦まで悪戦苦闘、惨めな生活であったが、よく辛抱し戦後のコーヒー景気で、一躍経済的に伸びた。四五年終戦の年に市内目抜の角に一、五〇〇平方㍍の土地を購入、そこに二千三百万円を投じ一千数百名収容能力の映画館を建てた。文化的施設をなすことは市内に美観を添えるものとし、営利を度外視した氏の卓見は邦人として誇りとすべきである。

平田公泰氏（島根県松江市）。サンパウロ市シネ・ニテロイ常設館主田中義教氏に匹敵するシネマ界の闘将である。一九二九年十六歳で渡伯した。型の如く奥地でコーヒー園で働き若くして辛酸をなめた。間もなくバウルーに出て、邦画界の草分け斉藤政一氏の日伯シネマ社奥地巡回映画班係となり数年を送った。漸く映画輸入および経営のことに精通しコツコツためた金で独立し、三五年二十歳でニッポン映画社を創立した。六年間で巨利を博し、戦時中静観、終戦後に秘蔵していた未公開の「流転」で一挙に莫大な金を懐にした。戦時中の四年間に邦画に接しなかった在伯同胞の渇望チャンスをよく獲えた。その幸運の波に乗りぐんぐん新作品を輸入、遂に五九年一億円でシネ・ニッポ

ン（収容能力千六百人）をサンパウロ市に建て、従来各社のフイルムを上映したのをやめ、松竹一社に限定し、毎週封切のみを上映することにした。映画界の鬼才としてその努力を賞したい。

なお、ブラジル風景や、コロニアなどを撮影し、そのフィルム上映を目論んだ者も二、三人いた。戦後、沢井天城氏（本名・橋本）が邦人活躍の実態をフィルムに収めたほか、アジア映画社の佐藤吉典氏が大日方伝氏との合作「愛を呼ぶ唄」（南米の曠野に叫ぶ）六巻を撮影した。両方とも日本で上映したが撮影技術が幼稚なため、好評を博すまでゆかなかった。然し、今後はこの方面に進出する人も出てくるだろう。

――◇――

以上は先年物故した池田重二氏の『ブラジル同胞活躍の姿』、一九六一年、日本出版貿易（株）発行の「映画館、地方巡回映画業」から転載させていただきました。

薄命だったシネ・日活

山元　貞義

二世間に数多くのファン

一九六八年、当時サンパウロ市には邦画（日本映画）の上映専門館としてシネ・ニテロイを始めとしニッポン、ジョイアの三館があった。ニテロイは東映、ニッポンは松竹、ジョイアは東宝―など各社作品の専門館で、ただひとつ日活作品の専門館は無かった。同年、旧知の日活映画の江森専務が来聖したのを期に、同専務の協力の下に日活作品の輸入公開に着手した。輸入の窓口はブラジル丸紅で、第一回作品は「裸の天使」であった。この頃の日活作品には〝裸もの〟が多く、検閲が心配だったが上映許可証を入手、まだ館の方の手当てが付いていなかったのでブラジル人業者に売込み、かなりの成績をあげることができた。

待望の専門館は旧南米劇場（シネ東京）である。第一回封切作品は、日本でも主題歌のため好評だった「南国土佐を後にして」（主演小林旭、南田洋子。ペギー葉山の同名のヒットソングを主題にした前科者の話）。日活映画の輸入・公開にはサンパウロ新聞の水本社長から多額の資金協力を得ていた。このような関係から専門館のイナウグラソンに当っては、サンパウロ新聞が歌手のペギー葉山を特に招いてくれた。人気歌手のショーと映画の〝組合せ〟が予想どおりに成功、第一日目には早くも約二万人の観客を動員することができた。当時、日活の人気スターは石原裕次郎をトップに小林旭、高橋英樹、浅丘ルリ子、吉永小百合、南田洋子、松原千恵子、浜田光夫、十朱幸代、芦川

いづみ、吉村実子、二谷英明、北原三枝、浜村美智子ら、若手の〝さっそお〟とした連中で、コロニアの二世間に数多くのファンを誕生させた。

この頃まで、サンパウロでの日活作品は非常に少なかった。五三年に発足したニテロイは開館から数年後までは大映、東宝、松竹、新東宝、東映、日活など各社の作品を上映していたが、それが東映の専門館となったため日活の〝場〟は無くなっていた。そんな時に日活専門館の登場である。開館二周年の正月興行には、浅丘ルリ子、高橋英樹の二大スターが来聖した。映画とショー、相変らずのプログラムだったが、興行成績は言わずもがなで大成功。コロニアが日活作品に〝飢え〟ていたのだろうか……。

日活では、その後も引続いて神戸一郎、大津美子、アイジョージ、小林旭、東海林太郎らの人気歌手、スターを招き、コロニアに健全な娯楽を与えることができるように努力した。しかし、残念なことに劇場主との間で常に折合いが悪く、開館後わずか五年足らずで専門館を手放せざるを得なくなり、閉館を余儀なくされた。邦画を含め一般映画界が斜陽のこんにち、日活は他より早く時代の波に巻き込まれたのだろうが、閉館がまったく惜しかったのは事実である。

（元シネ・日活館主）

「移民芸の真髄」から

巡業シネマ屋

醍醐　麻沙夫
（作　家）

（1）

戦前のブラジル移民のピークは、昭和七年（一九三二）から同十年（三五）にかけてであった。そこで、当時の移民社会における邦画界の事情をみてみよう。

昭和九年（三四）末までに入国した日本移民は約十六万人であるが、そのほとんどがサンパウロ州に入った。彼等の娯楽は釣や狩などの自然を相手にしたものを除けば、日本的なものに限られていた。金をためたら帰国するつもりで心が日本に向いていたせいもあるが、周囲にブラジル文化といえるほどのものが無かったせいもある。移民たちが接触するブラジル人は、カボクロと呼ばれる土着人と流れ者の労働者だけで、彼等はお喋りと小型ギター以外には娯楽と呼ぶほどのものは持っていなかった。（サンパウロ市に住んでいた日本人は例外である）

日本映画上映は昭和五年（三〇）にバウルー町の斉藤政一が「日伯シネマ社」を起したのが最初である。十六ミリ映写機にフィルム一本を持ってコロニアを巡業した。昭和十年には映画社は四つに増えた。それらがフルに回転したとすると、人々は

半年に一回くらいずつ巡回映画を観た計算になる。

昭和十四年（三九）出版の「バウルー管内の日本人」に映画の記事はないが、『伯国シネマ連盟』の広告があって

ＩＣ商会映画部＝千田勝雄。日伯シネマ＝斉藤政一。日本キネマ興業＝松井・平田。日興シネマ社＝倉方勇。松竹興行合資会社＝沢井天城

と五つの社名が並んでいる。そして（……映画は連盟加入者へ……）と末尾に小さく書いてあるから、個人でフィルムを持って廻っていた連中もかなりいたと推測される。

斉藤政一が日伯シネマ社を起した頃の事情については『コロニア五十年の歩み』（パウリスタ新聞社、一九五八年）に紹介してある。

それによると、熊本県海外協会が慰問のため昭和二年（二七）に派遣した日蓮宗僧侶がたずさえてきたフィルム「日蓮上人」と、信濃海外協会の「大正天皇御大葬」、「大阪南地のあしび踊り」などの実写フィルムがコロニアで最初に上映された映画である。

娯楽に飢えていたコロニアで、映画がまずまず商業ベースに乗ると見た斉藤が、「日蓮上人」を上映した男が持って来た「籠の鳥」のフィルムを買いとって日伯シネマ社を始めたのである。

上映技師はまだ十八歳の平田公泰（のちシネ・ニッポン社長）で、故郷の島根県の泳ぎ場の近くにシネマ舘があり、泳いで

いっては遊び半分に手伝いをした経験があった。

旗上げの昭和五年（三〇）は、六月に大霜があって農業者は息たえたえだった。こう不景気では興行延期かと思われたが、斉藤は逆に「霜害慰問大シネマ会」と銘打って大々的に宣伝して巡回先の人々を感激させた。駅に着くと遠いコロニア（植民地）からトラックが迎えに来ていて、青年会や日本人会のお偉方まで一列に並んで頭を下げたという。コロニアへ着くと娘たちが大騒ぎで、娘たちだけでなく主婦たちの人気もあって待遇は至れりつくせり、風呂にまで来て体を流してくれたという。「初期の映画屋はコロニアにとって神サマに近い存在だった」、と『コロニア五十年の歩み』は記している。

斉藤はその年の末には巡回を増やし、昭和十年頃には五班にした。彼は興行師の才能はあったが従業員の待遇に留意しなかったので同年にスト騒ぎが起り、それがキッカケになって各人が独立したのである。

（2）

シネマ屋がモテるようになると開拓地の家を逃げ出して、弁士に憧れる若者が増えた。

当時の自由業というと邦字紙記者と弁士ぐらいしかなかったから、百姓にイヤ気がさし、もっと自由な世界に憧れた青年のうち、硬派は記者になり、軟派は弁士になった。

私は当時の弁士の人々に会って話を聞いたことがある。そのときのノートと記憶を基にして書いてみる。とにかく、働き盛りのいい若いモンが家を逃げ出して声色にうつつを抜かすのだから、弁士が張り上げる声は「親不孝声」という名がついた。

興行中にそのままついて行ってしまうか、サンパウロのシネマ社へ弟子入り志願するのが普通だった。

上野某はサンパウロ市に移った日伯シネマ社へ訪ねて行ったが、社長の斉藤政一は不在で奥さんが応待した。

「あの……弁士になりたいのですが」

「あんたは、人の前で喋った経験はあるの？」

「ないです。恥しいから」

「困ったね。それでも弁士になりたいのかね。まあ暗い処なら喋れるだろう」

暗い処なら喋れるだろう、と言われた上野某は、

「はあ……。暗い処では女としか喋ったことないですが」

「仕方がないね。まあ、やってみな」

といったやりとりで弟子になった。

弟子といっても修業する訳でなく、「日本人ここにあり」というフィルムをすぐ受け持たされて巡業した。巡業中にモーションをかけようとした娘が、

「アラ、この弁士さんは素人ねえー、下手ね」と喋っているのを聞いてクサッタそうだ。

アマゾンから来たＡ（姓名不詳）はただ声がデカイというだけの理由で採用された。老人が多い場所では、いいだろうと言うのである。

本多某はマリリアで綿作りをしていたが、兄が結婚して嫁が来たので、

「働き手が一人増えたから俺は出ていいだろう」

とダダをこね、父は許さなかったが、母からコッソリ旅費を貰って日伯シネマ社へ走った。

レコードで八面あった泉四郎の「人妻椿」を暗記していて、斉藤社長の面前でそれをやった。

「……ああ、花ひらけども春さびし」

とやりだすと聞いていた斉藤社長は顔をしかめた。

聞き終った斉藤は、

「発声がぜんぜんちがうけど、熱があるからまあやってみろ」

と言って、憧れの弁士にしてくれた。

このエピソードでも分るが、コロニアの弁士は泉四郎派とか杉田金波派とか自称しても所詮はレコードで覚えた自己流だった。ただ一人の例外は野村北秋で、大阪で弁士をやっていた本格派でコロニア映画界では別格の扱いを受けていた。フィルムではなく野村北秋の名だけで観客が集まった唯一の人だった。

私が会ったときはもう八十近い老人で、せがんでもやってくれなかったが、大概の元弁士は北秋の声色をやるので、それで

想像できる。情緒纏綿たる理智派でヤマ場になると声がオクターブも上がる。本物を聴くと、その時に背筋がゾッとするなど凄い、ということだった。

（3）

昭和十年（一九三五）に日伯シネマ社で待遇改善を叫んで従業員のスト騒ぎがあったことはすでに記したが、北秋は別として、こんな即席弁士ばかり集まって仕事の無い時はメシを食わしてやっているので、斉藤としては安いのは当然だと思っていたに違いない。

巡回チームは映写機と虎の子のフィルムのほかに、一キロワットの発電機を持って行った。この重さは七〇キロほどあるから、これが一番の大荷物である。日本人会館か野外で上映するのだが、トラックの後輪を上げエンジンを廻わしてベルトで連結したダイナモを廻わして電源を得た。上映中、トラックとダイナモが動いているからかなりの雑音だが、これも一種の条件反射で観客はトラックのエンジンがかかると、

「さあ、シネマが始まるぞ」

と興奮するようになった。

弁士もトラックとダイナモの〝ドッドドッド〟という力強い音が伴奏されないと本調子が出なかった。

五月、六月の寒い冬の夜は観客は焚火をしながら見物し、その灯が白布のスクリーンに映えてノンビリした風景であった。入場料は無く「花」だった。映写中にセリフの無い処で弁士が「花」の主の名を読み上げてお礼を言うのだった。

久し振りの映画だから、タップリ楽しむのが建前で、短かいフィルムは二度繰り返して写した。弁士への野次も賑やかだった。

平田は隣接したコロニアで同時上映したことがある。三巻ずつのフィルムを馬に乗った青年が原始林の道を飛ばして交換するのだ。

アイデアは良かったが、馬も青年もだんだん疲れて交換がうまくゆかず、最後は遂に夜が明けてしまった。映画を観るために夜明けまで野外に座っていた観客がいたということは今日ではちょっと想像できない。ところがこの話は、これだけでは済まない。夜が明けてしまったので急きょ会場を日本人会館に移し観客の上衣や座布団を窓にかけて最後まで上映したそうだ。

映写技師が素人同然の上に一本のフィルムを酷使するので、やたらに切れる。それを受持の弁士がつなぐのだが、だんだん短くなるので他のフィルムを勝手につないでしまう。それは各弁士の趣味で編集した。だから同じ映画でも最初に観たのと、数年後に観たものでは大分違った印象になった、と当時の人は語っている。

（4）

お下げの田中絹代と長身の鈴木伝明が現代劇を演じていると、突然、チャンバラが出てきて、

「エー、目玉の松っちゃんがコロニアの皆様にごあいさつに参りました」

などと弁士はヌケヌケと言い、暫くすると、

「さて、本題に戻りまして……山のかなたの空遠く、いとしき人の住むという……ああそこに愛は芽生えるのでありました」

フィルムがいくら入り乱れていようと、まったくおかまいない。

大衆のアイドル、尾上松之助

この辺が活弁の便利な点で、現代のトーキーではこういかないであろうと思う。（弁士に人気があったためと、機械の調子が悪くトーキーが聞くとりにくかったために、コロニアでは第二

次大戦後も活弁全盛だった）

元弁士の人々の話を聞いていると、仲間の人名はハタノ・メイワクとか、ブラジル石松とか、果てはシオカラ・ドロンなどで本名がハッキリしない。ドロンといっても勿論アラン・ドロン並みの美男子ということでなく、すぐ失敗して夜逃げするからドロンなのである。

ブラジル石松はその名のとおりのそそっかし屋で、芝居をやって斬られてウワーツと叫んで松の木にしがみついてズルズルと倒れたら、松の木も倒れてしまって、起き上って松の木を起してからもう一度「ウワーツ」と叫んで倒れた、という人物である。

（中略）

シネマ屋を乗せたトラックがコロニアに着くと、花火がドーンと上る。「今夜、シネマがある」という合図だった。軟派の弁士たちは給料は安いが娘っ子をくどくのに夢中で、「親不孝声」を張り上げながら面白おかしい青春を送ったのだった。

（了）

（注＝以上は、醍醐麻沙夫氏が一九七九年十一月上旬から同十二月中旬にかけてサンパウロ新聞に連載された「移民芸の真髄」のうち、「巡業シネマ屋」に関する一部を転載したものです）。

松竹「楢山節考」で進出
２０年間に新作六七二本提供

水本　毅
（ブラジル松竹社長）

５８年、水本が交渉に訪日

松竹映画のブラジルにおける輸入・配給・興行を一手に扱う「ブラジル松竹有限会社」が正式に発足したのは、一九六一年三月であった。「ＳＨＯＣＨＩＫＵ・ＦＩＬＭＥ・ＤＯ・ＢＲＡＳＩＬ・ＩＭＰＯＲＴＡＤＯＲＡ・Ｅ・ＥＸＰＯＲＴＡＤＯＲＡ・ＬＴＤＡ」である。

このため私（カーザ水本兄弟商会社長）が訪日、城戸四郎社長（当時）と交渉したのは一九五八年三月であった。しかし、話は一挙にまとまらず、同年七月、松竹映画北米出張所（ロサンゼルス）宝田駐在員による現地の業界事情調査のための来聖、両者による慎重な話し合いなどに数か月を費し、ようやく提携が正式化したのは一九五九年六月で、私が代表の「ブラジル松竹」を市内セナドール・フェイジョ街三〇、九階九〇二号に設立、水本兄弟商会名儀のもと、十五本の松竹映画を輸入、その後の活動に備えた。

余談にもなるが、松竹は演劇の興行、映画の製作・配給・興

行をしている大会社。明治三十五年（一九〇二）白井松次郎、大谷竹次郎兄弟の松竹合名社がその母胎であり、京都の歌舞伎興行から出発した。映画の製作は大正九年（一九二〇）の松竹キネマ合名社創立からで、帝国活動写真株式会社を買収するとともに蒲田スタジオから映画女優を輩出させ女優全盛時代を作った。また同年、洋風楽劇および歌劇を模倣して松竹楽劇部を創立、これが後に大阪松竹少女歌劇として発展した。

一方、映画面をみると、日本トーキー（全発声）の最初の金字塔となった「マダムと女房」（五所平之助監督、渡辺篤、田中絹代、伊達里子、横尾泥海男ら）を昭和六年（一九三一）に発表した。さらに、これも日本最初の本格的カラー劇映画「カルメン故郷に帰る」（木下恵介監督、高峰秀子、小林トシ子、佐野周二、佐田啓二ら）を他社にさきがけ昭和二十六年（一九五一）に発表するなど、その業績は素晴しい。

「カルメン故郷に帰る」、小林トシ子と高峰秀子

なお参考までに記すと、日本初の大型映画（シネマスコープ）第一作は東映「鳳城の花嫁」（一九五七）、また第二作は新東宝の「明治天皇と日露大戦争」である。

ニッポン、松竹専属常設館に

当時の邦画常設館はニテロイ、東京、ニッポンの三館であった。このためブラジル松竹ではカルロス・ゴーメス広場のシネ・ジョイア（現シネ松竹）を松竹映画の封切館として交渉したが東宝南米の後塵を拝し、サンタ・ルジア街八〇のニッポンへ歩合契約で配給することを決めた。一九五九年七月一日に同館で封切の「忠臣蔵」（前後篇、大曽根辰夫監督、松本幸四郎、山田五十鈴、高田浩吉、月丘夢路、滝沢修、高橋貞二、淡島千景、鶴田浩二ら出演。上映時間約四時間、一九五四年度作品、同年度の日本での配給収入は二億九千万円で松竹のドル箱作品となった）が、配給第一弾である。

同年八月十日、松竹本社からの高村潔（きよし）専務を迎え、松竹のブラジル進出を記念してのパーティーをサロン・マッピンで、同時に招待映画会をセッテ・デ・アブリール街のシネ・コラールで行なった。木下恵介監督の「楢山節考」である。

ブラジル松竹有限会社（ブラジル側＝水本毅、日本側松竹＝城戸四郎）の正式発足は前述のとおり一九六一年三月であるが、これに先立ちブラジル松竹は、一九六〇年一月よりシネ・ニッ

ポンを松竹専属常設館として契約した。松竹本社からの駐在員来聖は、六一年からであった。

シネ・ニッポン・現在は愛知県人会々館

倍賞千恵子と水本毅

男女優スターを次々に招聘

〝より多くのファンを……〟という狙いから著名スターを招いてのショー開催は、各業者の常套手段である。ブラジル松竹もその例に洩れず、一九六六年一月、第一回目として桑野みゆきを迎え、同月二日から八日までシネ・ニッポンの舞台からファンに挨拶をさせた。その後、桑野はモジ、マリリア、プレ

シデンテ・プルデンテ、ロンドリーナなど地方四都市でのショーに出演した。司会は岩根友一（故人）であった。

次いで六七年五月二十三日から五日間、ブラジル日本移民五九年祭を記念して「倍賞千恵子ショー」をシネ・ニッポンで開催した。

その後、地方からショー公演の要望もあったが、種々の事情からモジだけに終わったのは残念であった。なお、同五月二十四日、皇太子殿下夫妻がサンパウロ市をご訪問、翌二十五日には、パカエンブー競技場で七万の日系老若男女に対して、移住五九年の労苦をねぎらいなさったが、この日、同競技場における皇太子ご夫妻歓迎コオラスの一員として倍賞も参加した。シネ・ニッポンでのショーは五日間とも予想以上の観客を吸収、いちじは溢れた客足を捌ききれず問題を起こすのではないか

―　と心配をしたほどであった。

第三回目は六九年八月七日から五日間の「加山よし子ショー」で、地方はモジ、マリリアの二か所のみ。第四回目の「由美かほるショー」は、七四年二月の二日間。第五回目はフランキー堺で、ショーは七五年五月十日より二日間だけであった。なお第二、第三回目のショーで司会を務めたのも岩根友一である。

「楯山節考」　松竹大船一九五八年度作品原作深沢七郎。脚色・監督木下恵介。撮影楠田浩之。音楽（義大夫、三味線）野沢松之輔（長唄）杵屋六左衛門。主演田中絹代、高橋貞二、望月優子。開巻努頭に歌舞伎の黒子（くろご）がでてきて、〃東西東西、ここもと御らんに入れまするは、本朝姥捨の伝説により楢山節者……〃　と口上があり、国産フジカラーによる極彩色の場面が始まる。

木下演出は努めて古風な日本的情調を盛るため野外風景もすべてスタジオ内にセットしオーバラップの代わりに、ヴェニス映画祭（一九五八年度）でも好評だったという舞台用の垂れ幕をあげたり降ろしたり、色彩照明の変化やライトの照明を用いたり、歌舞伎の引道具の手法を用いたりした。五百坪のステージいっぱいに建てられたおりんの家のセットには三〇数メートルの大移動レールが添えられた。

音楽もすべて和楽を用い、日本伝統芸術の味を残こしたが、演出は移動その他であくまでも映画的に処理された。おりん老婆が捨てられる山項の氷雪に覆われた場面は鬼気が迫る。装置伊藤喜朔、梅田千代夫。写真は田中絹代と高橋貞二。

「**楢山節考**」　松竹大船・九五八年度作品　原作深沢七郎。脚色・監督木下恵介。撮影楠田浩之。音楽（義大夫、三味線）野沢松之輔（長唄）杵屋六左衛門。主演田中絹代、高橋貞二、望月優子。開巻劈頭に狂舞伎の黒子（

ＳＨＯＣＨＩＫＵ、夢よもう一度

一九五九年七月から八〇年十一月までの二十年余、ブラジル松竹はシネ・ニッポンを専属常設館として来たが、地理的な条件に加え最終期には〝トロンバ〟＝一種のかっぱらい＝の横行に耐えず、シネ・ジョイアへ移転するとともに館名をシネ松竹と改めた。開館パーティーは同月二十八日、「寅次郎シリーズ」の第十六作で招待映画会を行なった。

一方、ブラジル松竹が一九五九年六月から昨八四年四月までに輸入したプリントの総数は七百三十二本、年平均二十九本強

だが、このうち封切作品は六百七十二本、残り六十本は当地で封切ってもクストの回収が困難とみられるため、〝お蔵入り〟となっている。

いま改めて邦画興行者としての二十五年間を顧みると、映画そのものが、その週の話題となった期間は相当に長く、一九五五年から同六九年までが、いわゆる〝邦画ブーム〟でもあったわけである。

ブラジル人業者による「羅生門」「七人の侍」「蝶々夫人」などは別として、日系業者によるサンパウロ市のシネランジアに登場した第一号作品は、ブラジル松竹提供の「黄色いからす」（歌舞伎座プロダクション作品。監督五所平之助、撮影宮島義勇、音楽芥川也寸志。主演淡島千景、伊藤雅之助、設楽幸嗣、田中絹代。父親の愛情に飢えた少年の悲しみを設楽が好演。色彩効果も良かった。一九五七年度作品）であった。封切舘はセッテ・デ・アブリール街のＣＩＮＥ・ＣＯＲＡＬ（席数は一千二百）五九年一月から好評で十四週間のロング（長期興行）で、舘側も「アメリカ映画の大作でも、こういうことは非常に珍らしい」と驚いていた。また、この作品はリオでも上映されたが（舘名は失念）、七週間のロングという好成績をあげた。

シネ・ニッポンでのロングは、七四年七月封切の「砂の器」が十一週間で最高、次いで七六年五月の「白い少女」が九週間、シ

ネ松竹では八一年二月の「花街の母」が十二週間で、この記録はこんごとも破られることは無いだろうと思う。

（注＝年号は原則として西歴を用いた。例えば「八一年」は、一九八一年を指す。敬称略。　　一九八五年七月・記）

田中さんとシネ・ニテロイ

穀物商から１８０度の方向転換

矢萩富士夫

（元シネ・ニテロイ支配人）

待望の常設館がオープン

サンパウロにおける初の日系常設館シネ・ニテロイがオープンしたのは、もう三十年余前の一九五三年七月二十三日であった。そして八三年八月十三日には、アヴェニーダ・リベルダーデの同館で「シネ・ニテロイ三十周年記念祝典」が華々しく催された。シネ・ニテロイの元関係者の一人として、同館創立当時のことがらを次に記させていただく。

ブラジアン商事時代の映画、興行、呼び屋の真似ごとの経験を買って下さったのか（本史、二三一ページの「垣間見た興行界」の著者、江沢晋二氏と元共同経営者）、一つ頑張ってくれ、ということで手伝わしてもらうことになったのは、オープンの

少し前になる。

憶えておられる人も多いと思うが、古い並木樹、うす暗い街灯のあの頃のガルボン・ブエーノ街に、忽然（こっぜん）と竣成した五階建の白亜の大殿堂、当時としては誰の目にも一大偉観であった。

後日、同館が盛況を極めた頃、誰いうとなく、ニテロイ城と呼ばれていると聞き複雑な思いをしたのは田中（義教）さんだけではなかった。

宝とも子（中央）を迎えて観客招待のための抽せん会。左―田中義数、右―押田真佐男の両氏

今は亡き田中さんが、あの場所に（真正面が今もある州官報の印刷工場）、約一千五百平方㍍の土地を購入、ここに映画館を建て、娯楽に飢えるコロニアの人々に、と雄大な計画を樹てら

れたのは、そのまた数年前になるわけだが、それはさておき。

「源氏物語」で華々しく開館

突貫工事でやらせても、オープンの期日を数回延ばす予想外のトラブルが内装面で起きる。一千五百の椅子の取付けと全床カーペット、たしかに大仕事ではあったが、シネマの生命である映写機、スクリーン、発声装置の調整、そして鍛帳（どんちょう）、照明ＥＴＣ……、それぞれの専門家に任せて腕組みしている人ではなく、こまめに動き回り精魂を注いでいた田中さんの姿が目に映る。

一方で、これもオープン間近しの南米劇場（五四年七月十七日）があり、なにがなんでも向うさんより先きに……と負けん気の田中さんの執念がかなって、華々しく大映作品「源氏物語」でオープンにこぎつけた時は、小柄な田中さんが心なしか、また少しやせられたような気がした。

今だから云えるという話しになるが、実は苦労の末のオープンの時点で、フィルムのストックは僅かに四本、フィルム輸入手配で田中さんが急遽日本に飛ぶという、こんどは上映面での心労、これは当たる、これは受けないとフィルムを選ぶ期待と楽しみ、活気溢れる面白い時期であった。

当時は松竹、東宝、東映、新東宝、大映その他各社の映画を選んで輸入出来、プログラムもバラエティに組んで、お客様に

喜んでいただける時代がしばらく続く。入場を待つ人、入場券を買う人の列が舘の左右二た手に分れ延々と長蛇、懐かしい思げ出である。この頃はさっぱり見られなくなったが……。

〔源氏物語〕　大映創立十周年記念、一九五一年（大映京都作品）。光源氏を主人公にその多彩な女性関係と複雑な人間群像をきらびやかな王朝風俗のなかに描いた日本の古典は〝谷崎源氏〟をはじめ多くの訳本があるが、これは原作にもっとも忠実といわれる与謝野晶子の現代語訳をもとに「吉村公三郎監督が新藤兼人（脚本）の協力を得て一年がかりで製作したもの。

源氏役の長谷川一夫をはじめ京マチ子、大河内伝次郎、木暮

実千代、乙羽信子、水戸光子、堀雄二が出演。谷崎潤一郎監修、池田亀鑑校閲というだけあって日本のコスチューム・プレイとしては画期的な出来ばえで興行的にもヒットした。また、カメラの杉山公平が五二年のカンヌ国際映画祭で撮影賞を受賞した（一三〇分）。写真は左から長谷川一夫、乙羽信子、京マチ子。

決断力と逞ましい実行力

勝気の田中さんからある時、こんな話を聞いたことがある。

「自分は長い間、フェイジョンの商売をしたが、相場と勝負の仕事、決していい時ばかりではなかった。心配で夜も眠れず寝汗をかくうちはまだいい、血の小便をするようになったときはショックだった。命を縮めるようなこの仕事を長く続けるべきでなし、と考えた頃、兼てからの企画、これに打ち込む決心をした」。

才気煥発、頭の回転の早い田中さんとはいえ、方向転換もいいところ、まして興行にはズブのアマがこの構想を打ち出したとき、危惧の念を感じた人は少くない。しかし、敢然と挑んだ決断力、加えて逞しい実行力は遂にあの『ニテロイ城』を造り上げ、むらにいえることは、そのすべてを独力でやり遂げたことに大変な価値があると思う。

そこまで来たので……とよく小店に寄って下さり、なにかと

話が尽きず、入院される直前のときは田中さんにはめずらしく、パペロッキの運営の難しさをそれとなくいっておられたのが、非常に印象深い。

覇気満々の一面ユーモラス、すべての点で歯切れのよかった田中さんを失なったことはコロニアの損失、といっても過言ではないと思う。

シネ・ニテロイが、もしガルボン・ブエーノ街に建たなかったら、こんにちの東洋街は、そしてこの繁栄は、といったら叱られるだろうか。しかし、私は敢えていう。田中さんは現在の東洋街のパイオニアであると。

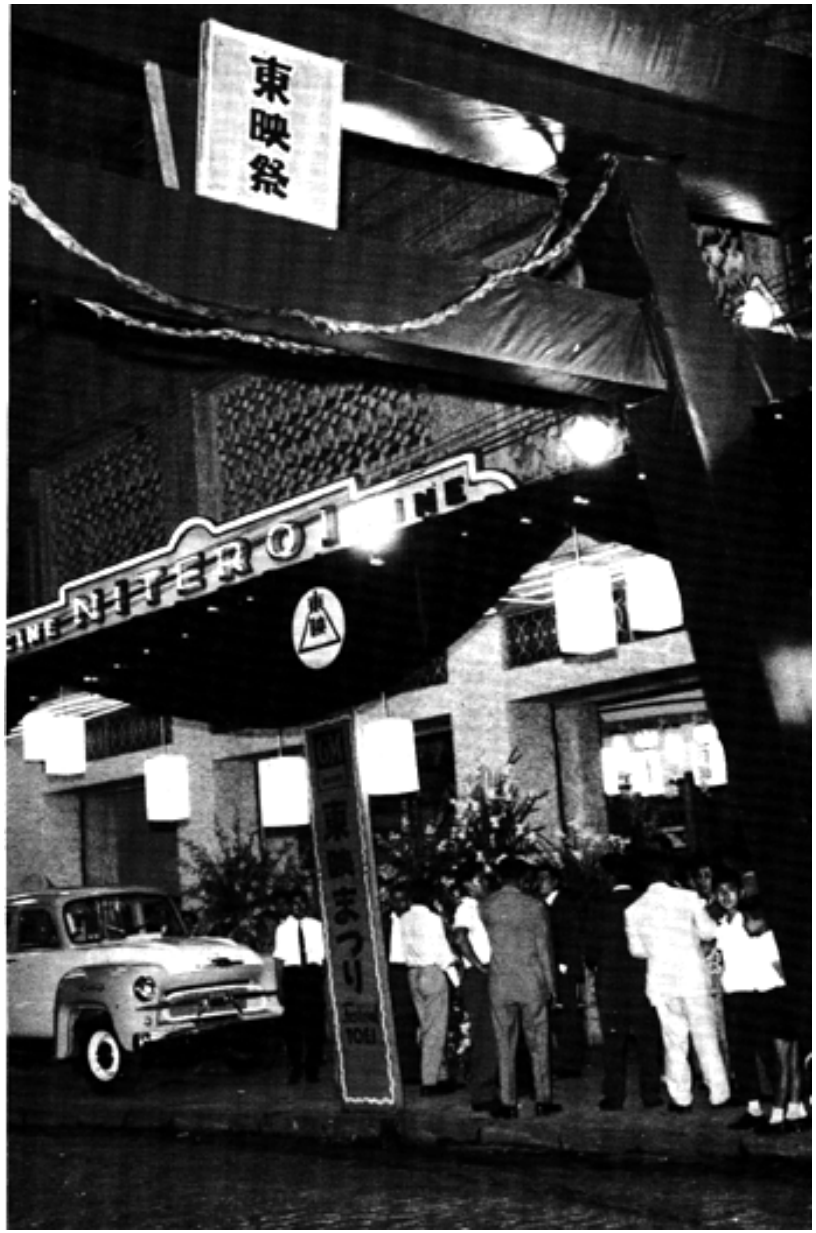
上に食堂、ホテル、ホール、下に堂々一千五百人収容の豪華な映画館。あのビルも今は無い。三十年という歳月とともに忘れられ、風化しようとしているとき、この度の日伯紙の企画は意義あり、たいへんうれしい。

＝カルサードス・トーキョ代表＝（一九八三年九月一日付、日伯紙の特集記事『シネ・ニテロイ３０周年祝う／東洋街を開いた人』から転載）

ニテロイ〝街づくり〟に一役

田中さんの先見の明を称えよう

城島慶次郎



開館六周年の記念ショーは、「炭坑節」でヒットの久保幸江による「NOITE・DE・TOKIO」であった（五九年九月）

コロニアに健全な娯楽を…

田中義数さんがガルボン・ブエーノ街に日本映画専門館を開館して今年（一九八三）は三十周年になるという。

三十年前といえば、これまで地方で農業をしていた人たちが、サンパウロやその周辺に移って、商業方面に進出したり、また野菜や果樹栽培などに転出したころではなかろうか。

田中さんもパラナ州からの転出組だった。

映画館をはじめる前は、サンタ・ローザ街に穀物を中心に農産物を手広く扱って拠点をつくった。

ブラジル日本移民七十年史によると、第二次大戦後の日本映画の上映は、日伯シネマ社と日本キネマ社が合体した目伯興業社がサンパウロ市で上映した「流転」が最初で、その後二、三の映画会社が上映を開始した。

このころの映画は地方では野外で、市部でも一般ブラジル映画館を一時借りての上映だった。

田中さんが農産物の取扱をやめて、映画館をつくったのは、それなりの打算の上でのことだろうが、他方、戦後潤いのないコロニアに健全な娯楽をとの願いがこめられていたのではあるまいか。

田中さんは元来頭脳の回転が早く、形勢を読みとることが早かった。日本映画の興行がまだ曙光の中にいた時代に、勇気を

もって決断した田中さんはさすがに偉かった。
シネ・ニテロイの舘名は、コロニアで広く懸賞募集をし、その応募のなかから選ばれたものだが、選考にあたっては委員会で意見が割れたらしい。しかし、田中さんの〝ニテロイ〟の語感が日東の勇士（英雄）のイメージにつながるとのことから、これに落ち着いたと聞いている。
田中さんの中には厳然と〝明治〟が息づいており、日本人であることに強い誇りを抱いていたことが感じられた。気どりも構えもまったくない人で、誰からも親しまれていた。

一変したガ・ブエーノ街

田中さんの意図はあたり、それから十数年にかけて日本映画はピーク期となり、シネ・ニテロイは今日、東洋街として知られるリベルダーデ界隈を発展させる原動力となった。
いまでこそガルボン・ブエーノ街へ行くと、ちょっと日本に帰ったような気特になる。大ざっぱにいって、通行人の半分以上は日本人だし、両側の店舗の看板にも漢字、カナとりまぜて日本文字が多い。「日本向きみやげ品各種」という立て看板の店をのぞいてみればブラジルの鉱石でつくった灰皿から、特産アグア・マリンの指輪、熱帯チョウの標本までなんでも揃っている。レストラン○○、○○食堂などの看板も多く目につく。また、普通の住宅と見える建物の入口に、「はり・灸もみ療治」と、

書いたところもある。

シネ・ニテロイの前には石原裕次郎がピストルをかまえた絵看板が出たり、鶴田浩二のやくざ姿、その他とりどりの絵看板が街往く人の目をひいた。映画館の上がホテル・ニテロイで、従業員も泊まり客もすべて日本人であった。

しかし、シネ・ニテロイができるまでの戦前、戦後を通じてのガルボン・ブエーノ街は一世紀も前に建てられたような同じ型の住宅が軒をつらね、街角にバールや、二、三の食料雑貨店があっただけである。

古きよき時代で、夕暮れには人の好さそうな感じの人達が窓から顔を出して街往く人々を悠長に眺めているのであった。街路樹の下には恋をささやく男女の姿がよく見かけられたが、今は一本の街路樹も見られない。シネ・ニテロイの出現は見る見る住宅街から商店街へと一変させた。

そのシネ・ニテロイは、サンパウロの都市開発の犠牲となり、ガルボン・ブエーノ街から消え、田中さんも世を去ったが、シネ・ニテロイが蒔いた一粒の種子は生え繁り、逞くましい発展を続けている。

赤い鳥居や、すずらん燈に象徴される東洋街は明るく、歌って、踊って今やサンパウロの名所となり、観光地としてクローズアップされてきた。

業績は歳月を越え生き続ける

歴史は、現在と過去の対話である―土地と時間、そして人々の心に刻まれた歴史をたどっていくとき、この一節がよみがえってくる。ある思想家はかって次のように語っている。「過去は、過去のゆえに問題となるのではなく、私たちが生きる現在にとっての意味のゆえに問題になるのであり、他方、現在というものの意味は、孤立して現在においてでなく、過去との関係を通じて明らかになるものである」と。累々と歴史的事実を重ねてきた過去の上に成り立つ現在。私たちは現在とやがて来る未来を見つめるため、新しいまなざしを持って過去である歴史を振り返らねばならない。

田中さんの業績は歳月を越えてなお生き続けるであろう。ガルボン・ブエーノ街の歴史を振り返るよすがにも、東洋街発展の礎となった田中さんの往時をしのぶ碑の建碑を地元の人に提唱したい。

かってシネ・ニテロイがあった大阪橋の袂（たもと）、日本庭園の前を通るたびに、シネ・ニテロイここにありき、の感慨にふけるのである。

（一九八三年九月一日付、日伯紙の特集　記事『シネ・ニテロイ３０周年祝う／東洋街を開いた人』から転載）。

先輩の業績に敬意

水本　毅

思えば三十数年前、平凡な街並の一画に広壮なニテロイ・ビルを建設し、シネ・ニテロイ舘の他、ホテル、レストウランテも兼業された創立者の田中義数さんは、リベルダーデにひとつの大きな種子を播かれた人でありました。その後おいおいに商店の数が増え、邦人商店街から東洋街へと移り変って行きましたが、この発展の蔭には勿論商店主の皆さん方のたゆまざる努力と協同の精神が大いに貢献していると思います。

が、三十数年以前のシネ・ニテロイ開設が無かったら今日のリベルダーデ東洋街はあり得なかったのではないかと思われます。その意味で田中義数さんは、東洋街の生みの親とも云えるでしょう。

私と田中さんとのお付き合いは、田中さんが映画をはじめられてからのことであったが、映画についてはむしろ田中さんの方が先輩格で、いろいろな邦画事情に通じておられた。

頭の回転の早い人で、同業者としてのたびたびの会合ではよく〝田中ピアーダ〟が出て座を賑わせておられたことも忘れられません。

惜しくも三年前（一九八〇）に亡くなられましたが、その後支

配人格の長男のパウロ君が父君の遺されたパペロッキの社長となられてより、三男のアウグスト君がシネ・ニテロイの後継者となり、現在リベルダーデ大通りに面した一画で弱冠ながら手がたい経営を続けておられることは心強いかぎりであります。

今なお惜しまれることは、大サンパウロ市の都市計画で東西高速道路貫通のため、ガルボン・ブエーノ街の中心が五〇㍍も取り壊され、その中に当時盛業中のニテロイ舘が含まれていたことでありました。あの問題さえなかったならば、現在のガルボン・ブエーノ街はより以上活況を呈していたことと誠に残念に思うものであります。

ニテロイ館開設より十数年間がいわゆる邦画の全盛時代で、映画館落成のこけら落しには長谷川一夫主演の「源氏物語」が上映され、次々と日本での話題作が封切られ、大いにファンの血を沸かせたものでありました。その頃の映画館の前にはいつも長蛇の列が出来、何時間も辛抱づよく並んでいたファンの姿がよく見られたものでした。

忌憚なく云えば、昨今の映画界はよほどの大作か問題作でない限り観客の多数動員ということは難しくなってきております。その原因は、テレビの普及、マイカー族の増加による一般娯楽の対象の変化、それに最大の強敵は最近のビデオ・ブームなどで、映画産業界はおのづからその方向を考えざるを得ないよう

な情況にあるようです。

末端業者のわれわれとしても実に頭の痛いところでありますが、移住国ブラジルという点を踏まえて、わずかながら日本紹介の責務と在住者皆さんの郷愁をいやす意味においても、命運の続く限りは、と腹を据えているわけであります。

三十年以前に在住日系人のための「娯楽の殿堂」をうち建てた田中義数さんの着眼力とその大きな業績は、必ずやブラジル日本移民史に残されるべきものと私は確信致します。

映画界の前途は決してバラ色ではないが、移住者の皆さんのある限り行き着くところまでは行く覚悟をアウグスト君ともども心底に刻みつけている昨今であります。

シネ・ニテロイ三十周年の祝辞が思わぬ方向に流れてしまいましたが、この映画界苦難のときに若き同業者よ、手を取ってお互いに頑張ろうぜ、と心からの声援を送りたいのであります。

（ブラジル松竹社長。一九八三年九月一日付、日伯紙の特集記事『シネ・ニテロイ３０周年祝う／東洋街を開いた人』からの転載）。

「七人の侍」に挑む

翻訳と字幕挿入で〝ひと苦労〟

聞く人・文　　赤嶺　尚由

〔ソール・ナスセンテ人材銀行代表〕

中堅実業家、若き日の〝隠し芸〟

アメリカ・ラチーナ保険（株）の篠又幸市郎専務取締役といえば、ブラジル日本商工会議所などの専任理事を長い間つとめ、めざましい財界活動をしており、特にブラジル財界との橋渡しができる数少ない日系財界人として広く知られている。

この人が、今をさかのぼる三十年前の一九五五年ごろ、黒沢明監督、三船敏郎主演で一九五四年のヴェニス国際映画祭でグランプリに次ぐ銀獅子賞を授与された有名な「七人の侍」をポルトガル語に翻訳し、スーパーインポーズ（映画で説明字幕を画面の上に重ねて焼付けること）作りに参加していたという事実を識る人は、しかし、かなり少ないのではあるまいか。しかも、ブラジルに来てから僅か二年位いしか経っていなかったのに、その翻訳を手掛けたということを聞くにおよんで、どうしてまたそんなに短期間でポルトガル語の力を身に付けることができたのか、さてまた「七人の侍」の翻訳に巡り合わせるよう

な人脈を築き上げることができたのか、いわゆる俗に言うところの『人間学』といった面からも非常に興味をそそられるような気がした。

とかく財界活動だけで知られがちな篠又さんが文化活動にも造詣の深いことを知り、嬉しくもあり、また心強くなった。そして、日本、世界の名画をブラジルに輸入して、多くの人たちに理解させる作業に篠又さんが協力したという事実に、このあたりで是非とも日系コロニアの歴史の光を照射しておきたいという一種の義務感めいた気拝にとらわれたのである。

そういう趣旨でインタービューを申し込んだら、とても良い雰囲気の中で応待してもらい、しかも、三十年前のできごとなのに、頭の中がきれいに整理されているとみえて、よどみなくスラスラ話してくれた。

赤嶺　まず映画「七人の侍」の翻訳との巡り合いといいますか、手掛けるきっかけになったことからおうかがいしたい。

篠又　ええ、私がブラジルに来たのが一九五三年二月十一日のことで、日本の丸栄（本社・名古屋）からリオの蜂谷商工株

式会社に出向という形をとっていました。

それから二年くらい経った五五年頃だと思います。ちょうどイタリア映画の輸入を手広くやっていたアルト・フィルム株式会社（ＡＲＴ・ＦＩＬＭＥＳ・Ｓ／Ａ）のガストーネ・ソレンチーノ（ＧＡＳＴＯＮＥ・ＳＯＲＲＥＮＴＩＮＯ）という社長がそれまでイタリア映画を輸入していたルートを通じて「七人の侍」をブラジルを初め中南米各国で上映する権利を買ったが、ちょうどリオでは日本語からポルトガル語に翻訳する人がいません。そこで、おまえ日本語もポルトガル語も両方できるんだからやってくれと声が掛りました。最初何度も辞退したが、しつこく言ってくるものですから半分こちらも勉強のつもり（笑）で、引受けることにしました。

赤嶺　ソレンチーノ社長とはどのような結び付きでしたか。何か特別な人脈を通じて識り合いになったのですか。

篠又　ちょうどその前に、日本のキャノン本社から南米担当のセールス・マネージャが来て、陸軍の作戦用にいいというんで、確かパノンとかいう製品だったと思うんですが、とにかくそういう特殊カメラを売ってくれということになり、陸軍省の

情報局へ連れて行きました。その時応待してくれたのが今はよく思い出せないんですが、何とかいった広報担当の中尉でして、その中尉がたまたま映画も担当していて、ソレンチーノ社長とも親しくしており、その人の紹介でお互い識り合いになったという訳です。その頃のソレンチーノ社長といえば、映画の輸入配給は勿論のこと、自分でもリオのシネ・アルト・パラシオとかの上映館を持っていました。その後もずーっとシネランジアにあった社長宅に自由に出入りしたりして家族ぐるみの交わり合いをしてもらいました。リオに出向して来た時の私はとても若く、特に独身の間は、たとえばパーティなどである人に紹介され、識り合いになったとしますね、そこで家に招待されたりしますと、そのまま本気にして（笑）よく出掛けて行ったものですよ。そして親しく交際していただきましたが、そういったことが後から考えてみますと、ポルトガル語を勉強するためにも多くの人達を識る上にもとても役に立ったように思います。

――

「七人の侍」と「蝶々夫人」を翻訳

これは余談になるが、その後中南米各国に配給・上映された「七人の侍」もブラジルで編集され直したもので、その中にも『シノマタ・コウイチロー』という名前が入っている。

篠又さんはそのことをメキシコにいる友人から手紙を受取っ

て初めて知った。ソレンチーノ社長に早速そのことを聞いてみたら、日本語からポルトガル語には確かに翻訳であるが、ポルトガル語からスペイン語には〝兄弟語〟みたいなものだから、シノマタ・コウイチローの翻訳でいいじゃないか、とこともなげに答えたという。だから現在でも中南米のどこかで、この人の翻訳になった「七人の侍」が上映されているかもしれないのだ。

「七人の侍」　東宝作品。脚色橋本忍、小国英雄、脚色監督黒沢明、撮影中井朝一。主演三船敏郎、志村喬、木村功、加東大介、宮口精二、津島恵子。明治、大正時代から時代劇映画の主題として限られていた英雄、豪傑談、股旅人情物の世界を「羅生門」（一九五一年度ヴェニス国際映画祭でグランプリを獲得）で豁然とひらいた黒沢明が、ここにまた新機軸を出して、西部劇まがいの雄大な戦国絵巻を、戦国時代の野

武士と農民を背景にくりひろげた。撮影一か年、製作費二億一千万円、上映時間三時間二十分という、日本映画史上稀に見る大作である。（一九五四年度作品）。写真は左から稲葉義男、三船敏郎、加東大介、千秋実、木村功、志村喬、宮口精二ら。

赤嶺　「七人の侍」のほかに八千草薫主演の「蝶々夫人」の翻訳も手掛けられたとかいう風に聞いていますが……。

篠又　「七人の侍」の翻訳から確か六か月ぐらいしてからだったと思いますが、「蝶々夫人」の翻訳もやってくれという話がきました。しかし、あの映画の大部分はイタリア語の歌詞ばかりで、それはそのままイタリア語からポルトガル語にしたのだと思います。だから私がやったのは登場人物の日本語の会話だけでして、全体の字幕の十分の一ぐらいだったように記憶しております。

八千草　薫

あの歌詞のところも全部シノマタ・コウイチローがやったと思われてはいけませんので（笑）特に付け加えさせていただく

ことにします。ただ、私はそれ以来、モウレツな八千草薫のファンですし、今だって大変なファンだと思っています（笑）。

「蝶々夫人」東宝、リッツオーリ・フィルム・ガッローネ・プロ提携作品。総指揮森岩雄、川喜多長政、ギード・ルッツアート。

脚色森岩雄、脚色・演出カルミネ・ガッローネ、撮影クロード・ルノアール。主演八千草薫、エコラ・フィラクリディ、田中路子、フェルディナンド・リドンニ。プッチーニのオペラ「蝶々夫人」を根幹にした日伊合作のカラー映画で、演出を様式化した上、風俗考証を厳重にしたので、合作映画としては珍しく佳作の部に入る出来ばえを示した。興行的にも成功。製作費は約二億円＝日本側負担は約四分の一＝。（一九五六年度作品）。

「七人の侍」というあれだけの世界的な傑作映画の字幕作成に参加したのだから、きっと何か、エピソードというか、隠くされた話があるに違いない。他人に話せない苦労話だってあったはずである。そういうつもりでこの人の胸を聞いてみようとしたら、矢張りあったのである。

赤嶺　二、三年前、「七人の侍」で主演した三船敏郎がブラジルにやって来ましたが、その時にお会いになったそうですね。

篠又　ええ、あの「ペラ・ヴァリグ」というところの発音がおかしい例のコマーシャルを撮影するためにブラジルに来た時でしたが、マクソード・ホテルでのカクテル・パーティで三船と次のような立ち話をしたんです。私は監督の黒沢明さんと主

演の三船さんにどうしてもお詫びしなければならないことがある。

それは何かというと、上映時間が三時間二十分ものの「七人の侍」のフィルムを何とかして一時間五十分ものにするため、あまりにもクドクドと撮っているところはモノトノ（単調）になりすぎるので、そういうところはハサミを入れた。ほかにもブラジル人に向きそうにないと思われる部分は切ってしまった。そういうことを三船に話しましたら、ああそれはいいですよ、ブラジル人に観てもらって、楽しんでいただいたらそれでいいですよ、ということだったんです。実はその時やっと三十年ぶりに胸を撫でおろしたワケですよ。（笑）

赤嶺　オホウ、天下の黒沢明監督の「七人の侍」にバッサバッサとハサミを入れた訳ですか。

篠又　あの当時の映画の上映時間は法律で十分間の広告やニュースを入れて二時間キッチリに収まるように編集しなければならないというふうに決められていました。翻訳し終ったある日、僕が呼ばれて何とか縮めてくれるようにという営業関係のたっての希望があるので、まず営業担当重役のルシアーノ・コンヴェルソ（ＬＵＣＩＡＮＯ・ＣＯＮＶＥＲＳＯ）と、もうひとりふたりの技術関係の人達と僕がまず一回見ました。それからあと社長ともう一回重ねて見ました。そしてどこを切るか決めることにしましたが、とにかく規定の長さということにな

ると、約三分の一もカットしなければなりませんでした。――

その時の篠又さんは勿論、丸栄から蜂谷商工に出向いており、昼間は駐在員としての仕事があった。従って、「七人の侍」の編集に協力するということになると、夜しかなかった。それから毎晩午後七時頃から十二時頃まで、三日三晩かけてやった。その時は独身だったからそういうことができた。また、切ると決ってからも、慎重を期した。何回も上映し直したりしていい加減な切り方はしなかった。作者のひとつの映画に賭ける気特が痛いほど判っていたのである。

慎重、「七人の侍」にハサミ

赤嶺　黒沢明は日本でも、いや世界を通じてみても、非常にうるさい映画監督の一人としてうけたわまっております。自分の意思を徹底的に押し通し、妥協を許さないタイプの監督のように伝え聞いています。たとえば、数年前に完成して、ブラジルでも映画として上映されたほか、テレビでも放映された「影武者」という作品で、最初主演に予定していた勝新太郎が撮影開始後間もなく、自分の演出に素直に従わないので、さっさと降ろしてしまい、仲代達矢を代役に立てたくらいです。

その黒沢の作品を切ったなんて、世界広しといえども篠又さんくらいしかいないのじゃないですか（笑）。さて、その巨匠黒

沢の、しかも傑作中の傑作「七人の侍」を約三分の一も切ってしまった時の心境たるや、それをもっと聞かせて下さい。

篠又　切ると聞いた時、監督の許可を取らずに切ってもいいものかどうか、とても心配だったことを今でもはっきり記憶しています。

赤嶺　自分の身を切るより辛い（笑）。

篠又　あの映画でジイさんバアさん達がいまに馬賊が来る、どうしようかと村の長老と思案投首でいろいろ論議するという暗い場面が果てしなく続くところがあります。ソレンチーノ社長は日本人や日本映画に通じているブラジル人にはいいかもしれないが、今のブラジル人にはどうしても判りにくい。ブラジルではもっとスピード・アップしなければならないということでした。もしあのまま単調なシーンをみんな入れていれば、あの映画はあれだけブラジルを初め中南米各国では受けなかったんじゃないですか。そういうふうに今でも確信しています。

赤嶺　かえって切ってよかった（笑）。しかし、切ったために不自然なところはなかったですか。

篠又　全体の三分の一を切った割にはいい出来ばえだったんですが　（笑）、よく見ると矢張りシーンとシーンの間に不自然なところも数か所あり、反省させられました。しかし、これは何度でも言えることですが、切っていなければ、あれだけあの映画は受けていません。「七人の侍」を切った人はおそらく日本

にもいないと思いますし、それも三船に話しましたが、こんどいつかチャンスがあったら黒沢明監督にも会ってそれを是非釈明したいと思っています。切ると決めたのは自分ではなく、責任もないが、今はソレンチーノ社長も亡くなったことだし、その間の事情も説明してお詫びしたい気拝を抱いている訳です。

――

ところで、言葉は目的ではなく、手段にしか過ぎないとよく言われる。確かに、そうではあるが、手段なくして、目的は達成されず、手段がより良くなれば、目的もそれだけ効果的に達成されるものなのである。特に映画を例にとってみると、目的（映画の主題）がより正しく異なった国々の人々に理解してもらうためには、手段（翻訳）が適切で、しかもその時その時の社会に根差しているというか、生きた言葉でなければならないのだ。ブラジルの場合、日本と同じように、北から南まで約一億二千万人がひとつの言葉を使っている。

つまり、単一語民族なのである。仮にひとつの映画を輸入してポルトガル語のスーパーインポーズ（字幕）を作って入れてしまうと、もうその時からその国の人達のうち誰かが観ても、理解してもらえる。国と国の習慣やものの考え方が違ってくればくるほど、映画の翻訳というものは、目的を達成させるのに相乗効果を生む、何とも大切な作業なのである。

赤嶺　「七人の侍」の翻訳に当って最も苦労したのは、どういったところですか。

篠又　映画の翻訳というものは、まず意訳でなければならないということです。観る人達にストリィを正しく理解させるということに細心の注意を払いました。そのために自分自身がまずシナリオ（脚本）を何度も読んで著者や脚色者が何を言おうとしているか把握しなければいけない。そうしないと観る人達を誤まらせることになりかねません。「七人の侍」の中には、確か川向うだったと思いますが、そこに馬賊が四、五騎物見に来る。三船の扮するサムライがザンゴウの中から飛出して来て、「やれるものだったら、やってみろ」とか何とか言って胸を叩く。馬賊の一人が発砲する。ウワーと声にならないような悲鳴をあげて、三船はザンゴウに飛込んでいく。

すかさず、「プーシャ・ヴィーダ」というスラング（俗語）を入れたら、ブラジル人の観客はどっと笑いました。製作者（監督）の意図を汲み取ってそれを入れてみた訳です。そこは、それまでずっと暗いシーンばかり続いていたから、製作者が〃息抜き〃のためにそのシーンを入れたというふうに解釈したからです。単なる声でもよかったが、スラングを入れることによって一段と場面が生きてきたと思います。

赤嶺　そういえば、時にひどい輸入映画の翻訳にぶつかることがあります。生硬というか、生まかじりみたいな。

篠又　私も「七人の侍」の翻訳の前後、サンパウロのシネ・ニテロイがガルボン・ブエーノ街にあった頃ですが、そこかどこかで映画を観た時に、こういうことがありました。

日本では妻が夫のことを子供達の前では習慣的に、『お父さん』とか呼ぶことがよくあります。それを、その映画の翻訳者がそのまま『パパイ』と訳してしまった訳です。それまで話の筋からしてその人の夫かと思っていたら、急に『お父さん』に変身したりして、観る人のほうが目を回わしたようでした（笑）。矢張りそういう時の『パパイ』は、『メウ・ケリード』とか、『ダーリンギ』というふうに意訳しないとおかしくなります。

赤嶺　日本人は自分の主人を急に、『パパイ』にしたりするおかしな民族だと誤解されることになりかねない（笑）。

篠又　直訳の危険性がそこにある訳です。

それに映画の翻訳というものは、不特定多数の人達が理解できるように、もっと生きた言葉を使うべきだということです。たとえば、スラングは言葉の調味料みたいなものですから、ところどころに効果よくはめ込んでいくようにしなければなりません。日本人だけでしたらともかく、ここではブラジル人や日系人も一世により近い二世ばかりでなく三世や四世も相当おります。そういった人達に広く日本映画を理解してもらうためにはもっと一般大衆に親しみた感じさせるような言葉を使うように頭を仂かさなければいい翻訳はできないんじゃをいかとつくず

く思っています。
そして常にそうした努力をしているべきだと考えます。
――――

人間と人間の出合いを大切に

そういえば、映画「ＥＴ」を観たことがあるが、その日本語への翻訳は生きていた。まるで使っている言葉そのものが弾んでいたように感じられた。地球へ降り立った「ＥＴ」と子供達との会話のやりとりがもし舞台が日本ならばかくもありなんと思えるような調子で日本語に移されていた。それに字幕の長短と登場する人達の会話とうまく合うように技術的に見事に配慮されている様子が素人眼にも判った。登場人物の口が締ると、字幕も終わる。字幕が消えると、口もちゃんととじる。そういうふうに工夫されていた。篠又さんは同じようなことを実に三十年も前に苦労していたのだ。

赤嶺　もっと突っ込んで翻訳の技術的な面で苦労したように思うんですが……。

篠又　翻訳してからスーパーインポーズに入りますが、それが当人の声とほぼ同時に終わらなければおかしくなります。逆にまた映画の中の人物が話している時に、ポルトガル語の字幕がさっさと終わってしまってもまずくなります。要するに、口の動きと字幕の長さをうまく合わせることに苦労しました。古

い機械をガタガタ手回わししながら何とかうまく合わせるようにした遠い日のことを、まるで昨日のことのように鮮やかに覚えております。

赤嶺　ところでもうひとつ、とても興味がありますのは、この映画の翻訳で篠又さんが一体いくら儲けられたかということ（笑）。イヤ、これは何もさもしい根性からではなくて、黒沢明の作品の翻訳価値がブラジルで金銭にしていくらあったかということを知ることもそうですが、当時の社会の状況というか様相といったものをしのんでみるためなんですよ。

篠又　報酬というものは、ホンのしるし程度（笑）だったように記憶しております。そうですネ、今の価値にしますと、七四年八月現在で百万クルゼイロスくらいで、ホンのお礼ということでした。シネ・コパカバーナの一週間の売上げの何パーセントとかというふうに決めたと思うんですが、それが百万クルゼイロスくらいじゃなかったですかね。今だとちょっと車代にしかならない（笑）。

赤嶺　しかし、単に報酬で推しはかれないものを得たことになります。

篠又　それは確かにそうです。ソレンチーノ社長とひょんな切掛けで知合い、黒沢明の「七人の侍」の翻訳を手伝い、それからずっと親しく交い合っていくことになりました。普通ならこちらがカネを出すからやらせてくれと持ちかけても

やらせてくれるかどうか…。
そういうふうに考えますと、人間と人間の出合いというものは実に楽しくもあり、大切にしなければならないんじゃないかというような気がしてくる訳です。

赤嶺　ご自分で手掛けられた字幕の入った「七人の侍」を最初にご覧になった時の気持は如何でした。

篠又　とにかく嬉しくて、一回どころか何回も見ました。ブラジルの人達が自分の予期していたところで予期していたように反応してくれるか、ラボラトリオ（制作室）で我々が考え、やったことが良かったのか、そのリアクションが知りたくてシネ・コパカバーナの暗い座席にただひとり身を沈めて気をもんだものですよ。自分の作品ではないが、自分の翻訳とかカットに参加したこともあって、気が気ではありませんでした。

――――

篠又さんという人はブラジルに来て僅か二年くらいして翻訳を手掛けるくらいだから、ポルトガル語の勉強には相当打込んでいたのだろう。事実、ポルトガル語の相当な使い手である一世の人という評判である。ブラジルに着いた当時は二十三歳と何か月かの若さ。
「七人の侍」に巡り合ったのは二十五歳をやや過ぎた頃だということになる。それで翻訳とは恐れいる。それだけに、ポルトガ

ル語の修得法についても一家言を持っていらっしゃる。

赤嶺　篠又さんのポルトガル語の修得法の秘訣を教えて下さい。

篠又　それは既にさっきも言ったことですが、回わってくるチャンスは常にモノにするという姿勢が必要だと思います。私は、たとえばパーティとかで挨拶したりして、こんど家にいらっしゃいと誘われますと、本気になって土曜日とか日曜日に出掛けて行ってしまいました。人を識ると同時にポルトガル語を覚えるという一石二鳥の効果がありました。

そういうことでソレンチーノ社長などとも親しくなり、背水の陣を敷くつもりでやった翻訳のお陰でうまくいってポルトガル語の勉強もさせてもらい、語彙（ごい）も豊富になるという結果になりました。従って一九八四年八月二十日現在、私はとても感謝しております。チャンスとあらば、蛮勇をもって立ち向うべきだと言いましたのは、そういう意味からですよ。――

篠又さんがブラジルにおける日系財界の次代のリーダーの一人であることは自他共に認めている。財界活動もいわずもかな大切であるが、そのかたわら映画をはじめとするいろいろな日伯文化交流の面に尽くしてくれる人がひとりでも多くなると、もっとバランスのとれた日系社会の建設ができるようになるの

ではないかと思う。篠又さんご自身そういうことを充分に自覚してるようにうかがえた。

実は篠又さんにインタビューを申し込むのは今回が最初ではない。十余年前、パウリスタ新聞の駆出し記者をしていた頃、経済関係のテーマに重きを置いたインタビューをしたことがある。その時もポルトガル語修得二年説を自信を持って唱えていた。あの時からそれこそひとむかし後に、篠又さんの持論を聞いたわけであるが、いま思い出してみても、ふたつの話には相違があるどころか、いささかの変化も生じていないのである。それを確めた時は逆にインタビューをしたこちら側の気持が何となく落着いてくるのであった。

『ガイジン』に見る姉妹の健闘

三藤　悟人　（ビラ・カロン文協理事）

コロニア初の女流監督

コロニアが生んだ初の女流映画監督の山崎千津薫（ちづか、三五）は、一九八〇年に発表した長篇劇映画『ＧＡＩＪＩＮ＝ＯＳ・ＣＡＭＩＮＨＯＳ・ＤＡ・ＬＩＢＥＲＤＡＤＥ』（上映時間一一二分）により、一躍新人監督として脚光を浴び、次いで同八三年の『ＰＡＲＡＨＹＢＡ・ＭＵＬＨＥＲ・ＭＡＣＨＯ』（上映時間八七分）、続く八五年の『ＰＡＴＲＩＡＭＡＤＡ』の発表により現在はブラジル映画界の中堅監督として、その将来が期待されている。

一方、千津薫の監督した前記三作品に美術監督として協力しているのは、彼女の実妹である百合薫（ゆりか）だが、コロニアにはあまり知られていないようである。

千津薫、百合薫の両親、山崎敏雄と秋吉澄子がアチバイアの西農場（農場主は西シメヒチ）で結婚式を挙げたのは一九四八年で、われわれ友人も数人が出席した。西農場は全面積七十アルケール、農場主の家はタイパ（板と板の間に粘土を入れた壁）作りの大きなものであった。

千津薫は一九四九年五月二日、そして妹の百合薫は五二年一月十三日生まれである。父親の敏雄は百合薫が生まれた二年後の五四年に早逝したが、母親の澄子が裁縫教師をやりながら祖父母とともに子供二人を育てた。ちなみに、千津薫は首都ブラジリアの建築科を卒業、次いでリオのウニヴェルシダーデ・フェデラル・フルミネンセの映画科で学んだ。

妹の百合薫はサンパウロのアルヴァレス・ペンテアード大学プラスチコ芸術科で学んだのち、千津薫の〝良き補佐役〟として映画界に入った。この姉妹の夫はいずれも映画製作関係のブラジル人で、それぞれ一人の子持ちでもある。

千津薫の監督作品のすべては、姉妹夫婦の家族が中心となり、それぞれの分野を担当しているところに強味がある。第一回監督作品の『ＧＡＩＪＩＮ』がサンパウロ市で封切られる直前の一九八〇年三月十九日にパウリスタ新聞の〝ボテコ〟欄に、映

画『ガイジン』と題して書いたのが、次の一文である。

「僕はまだこの映画を見ていない。見たところでそれを批評する資格もないものだが、昨年、この『ガイジン』製作のことを某新聞で見た時に、日系三世でたいした着想と度胸を持った女性が現れたものと感心していた。

映画の撮影が終った頃、アチバイアの菱沼氏より、その映画の監督の山崎千津薫さんは、われわれの同船者、畏友山崎敏雄君の息女と聞かされて感慨無量なものがある（注＝若い未亡人の千津薫の母親のために生活に困る人であったらまた別であったが、その心配のない人なので一時交友関係は絶えていたが、これを機会に復活した）。

われわれは昭和十六年（一九四一）三月二十四日、大阪商船の「あらぴあ丸」で神戸を出港、サントスに着いたのは五月十三日、日米戦争の勃発直前であった。着伯後、現在イビウーナに住んでいる近藤、山崎と僕の三人がナザレー・パウリスタの下元農場でお世話になった。

ところが、山崎は半年ばかりで雇人生活に飽足らず、近所でトマテの借地農を始めた。

それから約七年後の一九四八年、西農場主の息女澄子さんと結婚して千津薫さんが生まれた。西農場主も僕も南伯農業協同組合中央会（南伯産組）の組合員で、千津薫が祖父の西農場主と

一緒に組合の事務所に来ているのに会ったことがある。眼鏡をかけていたのが印象的であった。

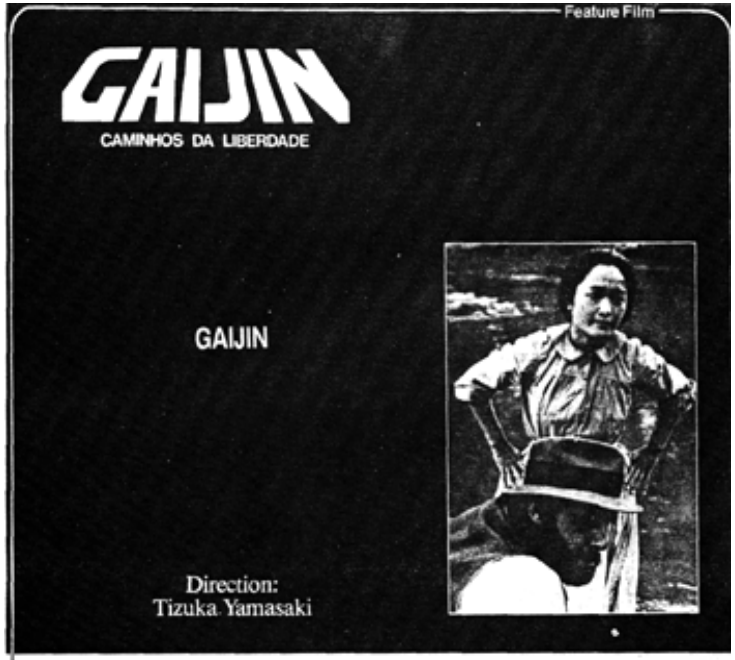
山崎は、何かやるような勇気とともに頭脳をも持っていたが、その芽を出す前に早死にした。この日曜日に地下鉄サン・ベント駅でのショーの時に会った千津薫は、体格から性格まで山崎に生写しだと思った。いつかゆっくりと話をすることにして別れたが、映画に祖母（チトエ）のイメエジが入っているそうである。われわれ移民の皆が経験したストオリイであるかも知れない。女性の身でよくあれだけの事業をやりとげたものだと感心に堪えない。

山崎千津薫（前列中央）と祖父母（西シメイチとチトエ）および両親の敏雄と澄子（後列の二人）

製作費を節約するために〝手弁当〟で働いたり、ブラジル人の俳優も一般に比べて半分のギャラで出演したなど、皆、千津薫の人柄に引かれたとはいわれるが、本当に父親そっくりで

ある。如何に映画そのものが芸術的作品であっても興行という営利的な問題を切放せぬことと思うが、これが昨年のブラジル日本移民と七六年祭の頃に封切り上映されていたら、あらゆる点から考えてもっと効果があったのではないかと残念に思う。

移り来てすでに三十九年、いろいろなこともあったが、われらの畏友山崎の遺児の今回の快挙を一番に喜んでいるのは母親の澄子と生まれ故郷の千葉に安らかに眠る千津薫の父ではなからうか。この映画の大成功せんことを彼女の父の親友として心から祈りたい。



CREDITS:

Story: **Jorge Durán and Tizuka Yamasaki**
Script: **Jorge Durán and Tizuka Yamasaki**
Photography: **Edgar Moura**
Art director: **Yurika Yamasaki**
Edition: **Lael Rodrigues and Vera Freire**
Music: **John Neschling**
Sound: **Juarez Dagoberto**
Production: **CPC - Centro de Produção e Comunicação Ltda.**
EMBRAFILME
Executive production: **Carlos Alberto Diniz**
1980
Time: **112 min.**
35mm
Colour
3069 meters
Reels: **6**

それに続いて、この映画製作に対して文化協会の不協力だったことなどを千津薫から聞いて、日本移民の日に書き八〇年七月三日の〝ボテコ〟欄に『話題の人』として取上げてもらった。

《六月十八日は日本移民の日、今から七十二年前の老移民の労苦の跡を偲ぶ時に思出すのは映画『ガイジン』である。この映画は南リオ・グランデ州グラマードの映画祭で数々の賞を、また世界的に有名なカンヌの国際映画祭では特別賞を受けた。それにもかかわらず製作、監督に当った山崎千津薫に対してコロニアは意外に冷淡だったと某新聞は報じているが、文協の非協力ぶりはうなずけない。

移民史料館に対しては増額、増額でやっと完成したが、何十年も先になった時の維持費を僕は心配している。そんな移民に関連した映画に対しては少くとも後援者ぐらいになって応援しても良かったのではないか。歌合戦や演芸会の後援だけが文協の在り方ではないはずだ。

父親を亡くしたか弱い女性が、あの大事業をするにはもう少しコロニアを真に理解したスタッフが必要だったかも知れない。自分一人で作ろうと張切った彼女にとってハガユイことが多かったに相違ないが、逆に考えれば自分でやったので、今後とも他人にまぎらせることは無く、次作が自由にやれることは彼女にとって有利ともいえる》（以下略）。

映画界で不動の地位を確保

千津薫の第二回監督作品は、三年間にわたって構想をねったといわれる自信作『ＰＡＲＡＨＹＢＡ・ＭＵＬＨＥＲ・ＭＡＣＨＯ』（八三年度作品）であった。この映画により千津薫は、ブラジル映画界で不動の地位を確保した。パウリスタ大通のシネ・アストルでの試写会には僕ら夫婦も招待を受け出席した。千津薫、百合薫の二人にお祝の花籠をあげて喜ばれた。会場では主演のヴァモール・シャーガスやタニア・アルヴェスなどに紹介された。映画の筋書は、パライーバ州生まれのアナイデが、一九三〇年の革命の頃に首都の新聞記者で弁護士のダンタスをひたむきに愛した有様を、美しい同州の海岸風景と心よい音楽をバックに描いたもので、時間のたつのも忘れて楽しく観賞した。

上映が終ると場内は拍手の嵐で、久し振りにすがすがしい映画だった。聞くところによると今度もまたカルタヘナ国際映画祭（コロンビア／カルタヘナ）で最優秀監督賞と女優賞を獲得した。また、近くフランスとスペインで催される映画祭に出品を招待されているとのことである。

友人の山崎は志ならず若くして夭折したが二人の遺児によって、彼の意志の一端を果し得たことは天国の彼も、もって冥すべきであろう。また、二人の孫を育てられたお祖母さま、二人

の娘を手塩にかけて育てられたお母さまのお喜びの様子が目に見えるようであるのは勿論である。二人の今後の精進を期待して、僕は彼女らこそ日系三世の女傑ではないかと思うのである。

それから僅か一年半足らず（八五年）で、問題作の『ＰＡＴＲＩＡＭＡＤＡ』を製作・監督した。美術監督は妹の百合薫であった。

その試写会が三月六日の夜、シネ・ガゼッタで行なわれ、招待されたので出席した。同映画の上映に先立ち、お祝に菊の鉢植を差し上げて非常に喜ばれた。映画は大統領の直接選挙を舞台に、新聞記者カロリーナ・デニス（デポラ・ブロック）と経済的に恵まれない映画製作者ゴィヤス（ブーザ・フェラス）と興行師（ヴァモール・シャーガス）との三者の愛慾関係と、直接選挙案が国会で否決されて間接選挙となってタンクレード・ネーヴェスが新大統領として選出されるまでの国内各地でのコミシオ、現職にあったフィゲイレード大統領や与党の大統領候補マルフ下院議員、さらに前バイア州知事のアントニオ・マガリャンエス下院議員、レオネル・ブリゾーラ現グアナバラ州知事などの政治家も顔を見せ、最後はタンクレード・ネーヴエス新大統領が約束する「ブラジル全国の国民に愛される国を作ろう」と、云うところで終わる。

千津薫にとって、この作品は第三作であるので経済的にも、また気分的にも相当の自信と余裕を持って製作・監督に当った

ことと思われる。そして、劇中のカロリーナ記者は彼女の意志の〝代弁者〟のような感じさえしたのである。千津薫は、同作品の封切りに先立って新聞、テレビからのインタービューに数多く応じていたが、この第三作は近い将来の大作に備えてのための〝小手調べ〟ではなかったのではないか、と思うのである。

未だ若い千津薫、百合薫のことだ。姉妹二人が手を合せてブラジル映画界の今後に〝新風〟を吹き込むことを期待しているひとりである。

（文中敬称略、一九八五年三月記）

日本で『ガイジン』を語る

今年（一九八五）はブラジルに日本からの移民第一陣が上陸して七十七年目。だが〝喜寿〟のめでたさの陰で一世、二世の苦闘の歴史は日々風化し、当事者みずから過去にふたをするきらいも。そんな日系社会に衝撃を与えたのが、三世のこの人が監督したブラジル版〝二つの祖国〟ともいうべき映画『ガイジン』。　国際的反響を呼んだ自信作を引っさげ先ごろ（六月上旬）東京で開かれた「カネボウ国際女性映画週間」に参加、故国ににしきを飾った。

ブラジル移民の歴史を描いた
日系三世の映画監督
山崎　ちづかさん

「製作に当たっては、保守的な日系人グループからの圧力もありました」と打ち明けるそのストーリーは、祖母の実話が土台。十六歳で兄とともにブラジルへ渡ったチトエは、夫婦単位でなければ移住を認めない現地政府の規則に従い、兄の友人と名ばかりの結婚をする。だが、新天地のコーヒー園で彼らを待ち受けていたのは、過酷を労働と搾取の毎日だった。やがて夫に先立たれたチトエは移民有志とともに、乳のみ子を抱いて農園を脱出する……。

タイトルの『ガイジン』とは日系人が白い肌のブラジル人を指して使う言葉。「日本人の発想と同じね」と苦笑しながら、「祖国の文化に固執する一世、二世の例にもれず、私の両親も『日本人らしく』が口ぐせだったとうんざり気味に振り返る。

ただし一歩家を出ると親の目を盗んでブラジル流に振る舞う二重生活。「前の世代が生活苦に悩んだとすれば、私たち三世は自分がいったいだれなのかというアイデンティティーの不確かさに苦しみ続けた」と、開けっ広げな物腰とは裏腹な心の暗部

をポツリ。

内なる日本と対決
日系人には違和感も

日本語がカタコトなのは「親への反発の結果」。住み慣れたサンパウロからブラジリアの大字へ進んだのも「日系社会から逃れたいとの思いがあったのね」。だが、距離と時間が、内省と日本文化への客観的評価を促し、ついにはデビュー作の長編映画にみずからのルーツを取り上げるまでに。「この映画を作ることで、初めて〝私の内なる日本〟と素直に向き合えた気がする」と、一皮むけたさわやかな表情を見せる。

「考えてみれば、ブラジルでは日系人こそが、ガイジンだったのよ。祖国からは経済的に見捨てられ、新天地からも疎外され……」と、タイトルにこめた二重、三重の意味を説明しながら、「それに女性もね」。

映画は男たちの都合で、結婚相手もろくに知らぬまま海を渡った女性たち。つらい農作業の後、一息つく間まなく炊事や育児に粉骨砕身した女性たちへの鎮魂歌でもある。「日本が経済大国になった今も依然、女性がつまはじきされた〝ガイジン〟の立場にあるとは驚きね。長編を撮る女性監督だってブラジルには十五人くらいいますが、日本では何人でしょうか」。

アメリカ人男性との間に男の子一人をもうけたが、未婚。「彼はニューヨークを離れたがらないし、私もブラジルを出るのはいや。それに監督の仕事は主婦業と両立しない」と、はっきりしている。日系人は眼中になかった?、「そう、むしろ避けて通ったわ。でも関白型の多いブラジル男も願い下げよ」。

一九四九年、ブラジルのポルト・アレグレ生まれ。ブラジリアの大学で建築を学んだ後、フルミネンセ連邦大学映画学校卒業、八〇年製作の『ガイジン』でカンヌ国際映画祭批評家賞、国際女性映画祭大衆賞などを受賞。愛息とともにリオ・デジャネイロに住む。祖母、母はともに健在。

邦画の〝上映事始め〟

第1号?政府の宣伝用実写

邦字各紙から転載

外務省の書記官が持参

戦前、戦後の邦画業界の〝歩み〟について詳しい元シネ・ニッポンの平田公泰さんは、「熊本県から日蓮宗のお坊さん二人が『日蓮上人』ほか数本の映画を持って来て各地で上映したが、

確かその一年か二年前、バウルーではすでに日本映画が上映されていた、という話は聞いたことがある。だが、どんな映画だったのか、本当かどうか、もう六十年前のことなので……」と云っていたことがある。

一方、ブラジル日本文化協会発行の『ブラジル日本移民７０年史』は

「一九二七年に熊本県海外協会が母県民慰問のために『日蓮上人』をヴィラノーバ移住地で上映したのが、日本映画の初めといわれ、翌年その映写技師の内海が『籠の鳥』を持ってきた」と、邦画の〝初上映〟を伝えている。

ところが、平田さんが誰からか聞流したと思われるこの話は実際にあったことで、当時の伯刺西爾時報（以下、時報と略す）、日伯新聞（日伯）、聖州新報（聖報）などの各邦字紙は、これについて、およそ次のように報じている。

関東大震災に各国から救援の手

東京、横浜の二大都市を火の海にし、膨大な死傷者と焼失、倒壊家屋を出した大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災に際して、世界各国から救援の手が差しのべられた。

これに対し日本政府は一九二五年、外務省を通じ答礼とその後の二都市における復興状態、日本の現状を紹介するため、中南

米各国へは荒井金多・外務書記官を派遣した。

荒井書記官は中米各国、さらに南米大陸のチリ、アルゼンチン、ウルグアイ各国を歴訪ののち同年八月十二日海路リオに到着、翌十三日夜、同市で『現代の日本』について約二時間にわたって講演した。八月二十八日付の日伯紙は「二月以来、中南米各地で日本の宣伝演説をしている荒井書記官はリオより二十一日に聖市着、二十七日午後三時半からシネ・レプーブリカで、同二十九日はサンパウロ座でブラジル人向けに、また三十一日にはコロニア向け邦語で演説会を開いた。余興の活動写真は官選だけ大分シツコク出来ているが、入場料はロハだったから、文句を云ふ者もなかったと報じている。

関東大震災速報ニュース映画の一コマ（大正十二年＝一九二三年、写真上）

活動写真の選定、頗る其当を得

それに対し日伯紙の〝ライバル〟と目されていた時報紙は、サンパウロ市における講演会、さらに活動写真の上映は「活動写真の選定、頗る其当を得」と一般から好評を持って迎えられたことを大きく報じたのち、シネ・レプーブリカでのプログラムを次のように記している。

『現代の日本』　約二時間の講演

活動写真

第一部　①日本のアルプス　②追浜海軍飛行場より東京への飛行　③三菱の電気工業部

第二部　①神戸川崎造船所　②東京に於ける欧州大戦休戦記念日祝賀

第三部　①水上飛行機上より見たる大阪市②養蚕業　③汽船太洋丸　④我陸軍騎兵隊将校の馬術　⑤帝国海軍演習

第四部　①日本に於ける教育　②二令嬢の薙刀と太刀との試合の型　③摂政宮殿下と久邇宮良子女王殿下との御婚儀

この講演会と、活動写真がバウルーで上映されたのは九月五日と六日の夜二回で、会場はサンパウロ劇場。同九月十一日付の聖報紙によると、これに要した費用はすべて同市在留邦人が負担、二日間とも入場は無料で、当日、ブラジル人からの九百十一ミル・レイス日本人からの八百四十ミル・レイスの寄付金合計一千七百五十ミル・レイスは、同市のサンタ・カーザへ贈

られている。

さらに、この催しは同月十八日、サントスのコリゼウ座でも開かれ、当日の入場者は千六百人を教えた（十八日付の目伯紙）。なお講演はリオ、サンパウロ、バウルー、サントスともすべてポルトガル語で行なわれた。

中山旅館で『日蓮上人』の試写

平田さんの「日蓮宗のお坊さん二人によって『日蓮上人』が各地で上映された……」うんぬんの『日蓮上人』その他がサンパウロで初めて上映されたのは、一九二六年八月五日夜、コンデ街の中山旅館であった。

同年八月六日付の時報紙は二段抜きで次のように伝えている。

「在伯同胞慰問のため熊本県海外協会から中島裁之理事、浪花節と講演の西川寅吉、活動写真撮影技師の内海貞雄（一八九九年生まれ、当時二十七歳か）、柔道三段の増水普水らが、日本の各種フィルムを携えて到着した（注＝七月二十九日、サントス着の大阪商船さんとす丸で来伯）。各地を巡回し、娯楽に乏しい山村在留同胞に活動写真を観せて故国の風物を偲ばせたり、浪花節や講演で労働に疲れた、頭脳を慰めたりして其の序でに当国に於ける同胞の活動状態をフィルムに納めて母国に持帰り之をブラジル宣伝に使はんとの企てである由であるが、昨夜（注＝五日夜）聖市中山旅館での映画試写などの成績に依れば、活

動写真は選択其の宜しきを得ざるが為、景色（注＝実写を差す）を除くの外は全然外人に観せらるべきものである上に、講談も浪花節も芸術としては受取り難き低級なものであるから、聖市では公開の席場を借りての催しも中止の模様らしく、若し又地方だけでも巡回すると云ふなら厳しく外人に祝せぬを条件とし、且つ慰問の主旨で営利的興行に陥らざるやう行うべきだと聖市在留同胞の輿論である」。――　と、上映された作品の題名すら発表せずに、作品の内容を厳しい筆法で非難している（文中、カッコ内の注を除いて原文のまま）。

これに対しての日伯紙は同じ六日付きで一行の来伯を伝えたのち、「普く慰問して廻る由であるが、不景気、悲惨のドン底であるから大いに慰問してやって呉れることを望む」とし、中山旅館での試写については、『赤垣源蔵徳利の別れ』は良かった……と一段のベタ記事で片付けている。

一行が当時の邦字紙上で発表した地方巡回日程は

▽八月五日～七日＝サンパウロと近郊

▽同十日～月末＝ノロエステの集団地

▽九月一日～十五日＝ソロカバナの集団地

▽九月末まで＝サントス、イグアッペ、南聖各地

▽十月中＝パウリスタ、アララクアラ、ドラデンセおよび三角ミナスなどとなっていたとおり、地方を巡回している。八月二十日付の聖報紙は「八月十四日午後、ノロ線プロミッソン駅

で西川寅吉が講談、翌日はボンスセッソ学校校庭で義士名銘伝、その翌日も近隣各地へ。活動写真斑も来ているが、今のところ活動は上映無し」、次いで「九月三日夜、リンスのコッケーロ植民地で一行による講談と映画の夕があった」と報じたが、十月二十九日付の「二日前の二十七日、バウルー在留邦人十六家族の主催で古賀家具店の仕事場で講談（西川寅吉）と赤垣源蔵の上映を予定していたが映写機の故障で中止になった」を最後として一行四人その後の〃消息〃は、各邦字紙とも伝えていない。

内海さんが邦画興行の〃草分け〃

ただひとつ明らかなのは、一行四人のうち内海貞雄さんが映画購入のため二八年六月三日サントス出港のハワイ丸で帰国、二九年二月サントス着の神奈川丸で再びブラジルに来たことである。

晩年の内海貞雄氏

これについて現存のタツ未亡人（一九〇五年生まれ、一九三二年暮、貞雄さんと結婚のため渡伯）によると

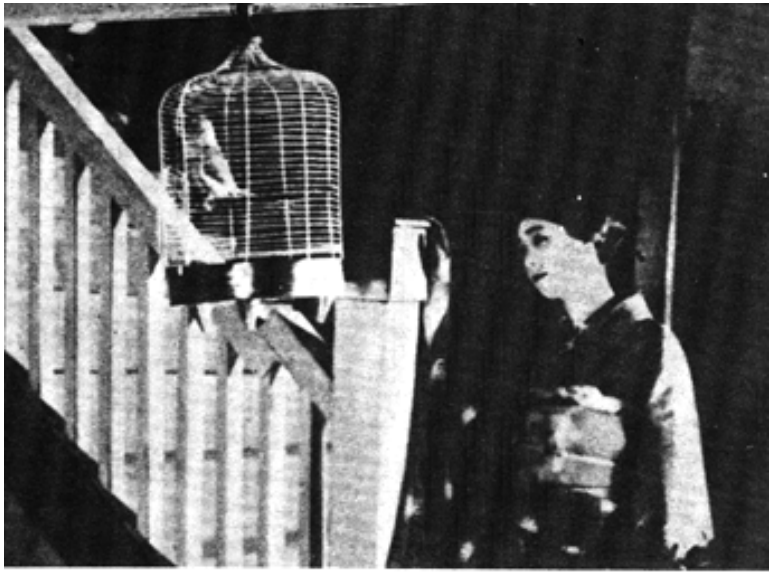
「私がサントスに着いた時、主人と日伯シネマ社の斉藤社長さんが出迎えてくれましたが、目を悪くしたとかで映画の方の仕事はすべて斉藤さんに譲ってほかの仕事をしていました。その後、主人に聞いたところでは、二九年の再渡伯の時に持ってきた映画は、当時日本で評判だった『龍の鳥』に御大典記念を含め数本の実写だったようです。ただその時、主人は再渡伯後の本格的な地方巡回興行に備えて同郷の独身青年四、五人を連れてきたそうですが、その人たちの名前は勿論、その後の消息はまったく知りません（注＝内海さんは長崎県の出身）。

主人はまた、こんなことをよく云っていました。それは新聞に《サンパウロに初めて映画を持ってきたのは日蓮宗のお坊さん二人で『日蓮上人』を写して歩いた……》に対したもので、『日蓮上人』は私を含めた熊本県海外協会からの四人だった、ということです。しかし、これは私に云うだけで、これを外に発表するということは、まったくしなかったとも聞いております」と、今は亡き内海さんについて語られたことがある（八五年四月ごろのこと）。

新聞に載った映画の宣伝広告

内海さんは元東亜キネマの撮影技師。再渡伯後は『籠の鳥』ほ

か数本の実写を持って地方巡回上映に従事したようである。一九二九年三月二十一日付の時報紙上に、当時は皆無だった映画宣伝のための上映広告が載っている。おそらく〝映画興行〟のための広告第一号（？）ではなかろうかと思われる。



「籠の鳥」の沢蘭子

『御大典活動写真』

マキノ、東亜撮影会社と提携

モンソン、アグードスを経て、ノロエステ線へ

アバレー本社　　昭和キネマ営業部

天皇即位の御大典は昭和三年（一九二八）十一月十日。広告の掲載期日がその翌年の三月、また内海さんが再渡伯でサント

スに着いたのは同年の二月　―　などから推してみると、この昭和キネマは、内海さんによる〝新たな興行社〟　だともいえなくもない。いま仮りにそうだとすると、内海さんこそブラジルにおける〝邦画興行老第一号〟の栄誉を担うに相応しい人でもある。

内海さんが二九年の十月（？）ごろから斉藤政一さんの日伯シネマ社の創立に参加したことは本史、平田公泰さんによる「老舗、日伯シネマ社」（二一七ページ参照）に詳しい。内海さんの地方巡回は半年ちょっとで終止符を打ったことにもなる。

内海さんが日伯シネマ社で先ず第一に手がけたのは３５ミリモノクロによる『ノロエステ線一周』の撮影であった。これに使われたカメラの名称は明らかではないが、その購入を斡せんした「農業のブラジル」誌の佐藤常蔵さんとよると、当時としては最新式のドイツ製で、サンパウロ市チラデンテス街の某ドイツ系商社が輸入したものというから、有各なアリフレックスかアスカニアであろう。

内海さんはその後一年ばかりして日伯シネマ社をやめ、アラサツーバに移り住んだ。亡くなったのは一九七五年三月十二日、現コチア産業組合中央会の内海アメリコ理事は故人の子息に当たる。

外人に味噌をつけた日本映画

若しも昭和キネマが内海さんの会社だ、とすれば内海さんは邦画興行者の〝第一号〟であり、老舗の日伯シネマ社はその〝後発〟。

さらに日伯シネマ社の創立に先立ってサンパウロ市に「南米日本映画宣伝団」という団体、あるいは会社（？）らしきものがあった。一九二九年七月十一日付の時報紙に

母国映画来たる　十一日午後七時から常磐旅舘内で「日本映画（活動写真）会、入場無料

実写　御大典映画　一巻
日本周遊　二巻
山陰大震災　一巻
その他

西洋喜劇　二巻
高木プロダクションの日本喜劇
豆六茶釜　三巻
マキノ時代劇　怪人狼　十五巻

南米日本映画宣伝団

十七日からノロエステ線、次いでソロカバナ線へという広告が載っている。しかし、誰かこの宣伝団の責任者かは、明ら

かにされていない。当時の常磐旅館は故、石原桂造氏が経営者であったようだが……。

ところで、前記広告文中にもあるように「南米日本映画宣伝団」は同年七月二十五、六の両日、リンスの常設館で地方巡回上映の第一歩を踏みだしたが、八月二日付の聖報紙は「外人に味噌をつけた日本映画」と題して次のように伝えている。（原文のまま）

ノロエステに入った日本映画南米宣伝班の一行、二十五、二十六日リンス常設館で内外人に公開したが、風景物は良きとして『父何処』とか『怪人狼』のチャンバラ劇にかてて加へた活弁の奇声に観覧席の外人連目をパチリ、彼方此方から侮蔑不平の声が起り、心ある者は日本人さへ腋下に冷たい汗が出る仕末。殊に二日目の晩などは血気の青年中には、こんなものは断じて町などで上映してもらいたくないと抗議を申込むものさへあった。

物は流行（はやり）出すと際限がなく決局脱線するまでやることになる。フィルムなども高尚なものが無難だ。外人にも観せやうといふのに非文明にも日本文のタイトル付なものに高声で叫ぶ弁士までつけるなど時代錯誤の限りだったと憤慨している向がある。日本シネマ関係者の一考を要す。

南米日本映画宣伝団の活動は、以上の聖報の記事を最後として、邦字紙上から消えている。経営責任者、あるいは〝お金〟を出した人の名はまったく不明。ただし、宣伝団が持っていた『怪人狼』はその後、日伯シネマ社の所有となり、同社の創立第一回上映会（？）のプログラムのなかに記載されている。

この『怪人狼』を見た人は予想以上に多いようである。元東宝南米の押田さんもそのうちのひとりだが、「主演が高木新平だったことぐらいしか覚えていない。若い男が狼に変身して親の仇を討つという他愛ないものであった……」といっていた。

夜の人気をさらった肉弾三勇士

日伯シネマ社がバウルーからサンパウロに本社を移したのは一九三三年、その第一回上映作品は『肉弾三勇士』で、カルモ街の労働会館で四月二十九日夜のことであった。五月一日付の時報紙は「夜の人気を掻った肉弾三勇士」とおよそ次のように伝えている。

「待望久しき『肉弾三勇士』の映画が折も折、天長節（四月二十九日）に封切られるというので、夜は邦人の人気をあつめ労働会館に吸収し、場内は人の鈴成りと云う盛況振りだった。

映写は先ず外国マンガ、肉弾三勇士の遺族の実写、次いで『人柱四勇士』と進められて行ったが皆短篇もので総体にアッと云

ふ中に過ぎた」。

この時の新開広告は

見よ！！！非常時日本映画を見よ！！！

廟行鎖の尊さ犠牲

忠烈　肉弾三勇士

陸軍の大模擬戦

江南激乱実戦史

◎人柱四勇士

という〃大仰〃　なものであった。

なお、一九三七年ころから日本のニュース映画が各業者によって上映されるようになったが、これは外務省から船便でサンパウロ総領事館に送られてきたものを各業者がそれぞれ複写したものである。同年十一月二十日付の時報紙は

「ニュースを繞り　シネマ屋さん協定　四社で縄張りを決める　ＩＣ商会＝ノロエステ　日東＝聖市近郊とアララクアラ　日本キネマ日パウリスタ延長線　松竹興業＝バストス、奥ソロ」

とその間のいっさつを報じている。

以上はあまり一般に知られていない戦前の邦画界の〝裏話〟らしきものの一部を各邦字紙から集めたもの。こと映画に関しては時報と聖報の両紙が他紙に比べて多く扱っている。

流転する映画『流転』

許可、禁止、解禁と三転も

戦後、サンパウロで上映された邦画の第一号作品は日伯興業会社（のち日伯シネマ社）の『流転』であったが、その上映年月日、場所（シネマ館）はどこであったか、ということは当時日伯興業会社の事業部長であった平田公泰さんさえ、はっきりと覚えていない。

平田さんがリオの連邦検阻局、サンパウロのＤＯＰＳから『流転』のサンパウロ州内における上映許可を取得したのは確か一九四六年の七月ごろのこと。早速、上映準備に着手したが、臣道連盟関係者によるテロ事件のため、同年中における『流転』の上映は当局から禁止された。

その後、『流転』の上映広告が邦字紙に現われたのは翌一九四七年一月の元旦号。パウリスタ新聞には「待望の名画　愈々堂堂公開　一月七、八日＝午後一時、三時半、七時、九時　同九日＝午後一時および三時半

入場料　大人＝一五、メイア＝一〇クルゼイロス　併映　日本の夏

於　ＣＩＮＥ・ＦＥＮＩＸ

と掲載されている。

これについて平田さんは、「上映予告の広告は出したようだが、上映したのはサン・フランシスコ劇場で、その期日もずーっとあとのようだったと云っている。

ところが、同年二月十五日付のパ紙社会面には

「邦画上映相成らぬ　当局から棒のお達し　流転する映画流転ファン失望！　さきにアメリカの邦人映画業者の手をへて時代劇『流転』の輸入に成功した日伯シネマ社では、当局の理解ある取計らいで、この一月半ば『流転』の聖市封切を行い邦画

ファンの渇望に応えたが……、この日伯シネマの大成功をみて、お次に名乗りを上げた他のシネマ業者が警察に出頭して上映許可を願い出たところ《まかりならぬ》との案に相違の返事、宣伝ビラを引込めるサワギも、この結果、奥地巡業を待機中の『流転』も他と同様のうんめいに　――　」

とあるので、ＣＩＮＥ・ＦＥＮＩＸで『流転』が上映されたことは間違いない。

邦画の上映が当局から解禁になったのは、この時から約一年後の四八年一月二十一日。

その間、日伯シネマ社では四七年十一月二十六日のパ紙に「近く上映予定！」と流転、春雷、佐渡情話、覗かれた花嫁、満願の朝、番町皿屋敷、その他新作の題名を発表している。

四八年一月一日のパ紙社会面は

「今年こそ解禁かー　映画界に明るい噂

日本映画お目見得　スエーデン日本人権益部も当局とのあっせんも　近く上映許可か―」と報じ、次いで日伯シネマ社はパ紙に「一月二十一日付で邦画の上映が解禁に―」との広告を出している。

『流転』約一年ぶりに〝陽の目〟

『流転』の戦後二度目の上映は二月十、十一の二日間、ジョン・メンデス広場からも近いリアシェーロ街のサン・フランシスコ

劇場で行なわれた。これも戦前の『東京の女性』（原節子、立松晃主演）との抱き合わせで、連日とも午後一時からの五回興行。入場料は前の年と同じく大人一五、メイアが一〇クルゼイロスであったが、二日間とも〝押すな押すな……〟で満員の盛況。同劇場の周囲は入場を待つ人々による〝長蛇〟の列。

当日の盛況さを、二月十二日のパ紙はおよそ次のように伝えている。

「〝日本映画〝大当り　椅子倒し雪崩れ込む　通行人驚す長蛇の列　待望の日本シネマは、シネ・・サンフランシスコで十、十一の両日上映されたが、定刻前同シネマ舘のあるクアルテロンは、エンエンたる日本人のフィラで、通りすがりの外人も眼を丸くして、〝オケ・ケ・テン・オージェ・エン……〟。

映画は『流転』と『東京の女性』の二本立てで、幕合いに辻朝子の日本舞踊があったが、場内は文字通り立錐の余地もなく、通路にぶっ通し立ち続けて待っていた者の数も相当に上った。

初の第一回上映は五時ごろ終わったが、セグンダ・セッソンに入るために待機していた群衆がワァーとばかり、一勢に場内に雪だれこみ、場内整理の係員が声もかれよと叫んだが、一向利き目がなく、堰を切ったような勢いで殺到し、入口にある椅子二、三列はメリメリとこわれてしまい、余り外国人などに見られたくないような修羅場を現出した。

が、シネマ屋さんの狙いはみごと的中、まさに殺人的大入りで

あった」。

なお当時、日伯の配給部長であった野村清博さんによると、シネ・サンフランシスコの観客収容力は約一千四百人。二日間の興行で軽く一万三、四千人を吸収した。入場券を売った〝カネ〟はいちいち数えている暇もないほどの忙しさで、近くの店屋から狩り集めた米のサッコ（空袋）に入れて置くほどだった、というから、興行収入も当時としては予想外の金額であったのだろう。

この『流転』は翌三月三日に再びシネ・フェニクスで二回、次いでピニェイロスとサント・アマーロでも上映して大いに稼いだのち中央線（セントラール）を皮切りしして地方巡回映写に入った。

当時のパ紙は一週間三回の四ページ建てで年間の購読料は一二〇クルゼイロス。ピンダモンヤンガーバにおける『流転』の入場料は一律三〇クルゼイロスだったにもかかわらず〝高い…〟という不平の声はまったく聞かれなかったそうだ。

（前田　正覚、元パ紙記者）

『移民史映画』成らず

トーキブラス、製作を中止

小杉らスタッフは来たが…

トーキブラス東伯映劇合資会社（以下、トーキブラスと略）は、一九五二年三月十五日のサンパウロ新聞第六面に、「四十余年の尊き移民史映画製作の為！　愈々本月十七日午前十時四十分着伯する　見よ！　此のスタッフを！！」と、十段抜きの広告で同社が製作する移民史映画のため監督の小杉勇を始め、大日方伝、藤田進、霧立のぼる、新井麗子ら俳優陣のほか脚本家・高木俊朗ら一行六人の来聖を大々的に発表した。

この広告には、ほかに宮村李光、沢井天城およびアチール・ド・タラタリーの連名で、「趣意」移民史の映画化に就きまして（一一九八、一一九九ページの切抜き参照）、来伯スタッフの写真（高木を除く）とその映画歴、一行が携えてきた映画の題名『この旗に誓う』『情災鏡』『千石纏』などの簡単を紹介、さらに男女俳優至急募集が列記されている。

同社の「趣意」の一部は、……中略、さてこの国際映画製作に当りまして第一、当国の人情、国俗、国状、又は邦人コロニアの生活状態を充分実得しなければ完全な成熟は望めないのであります。さて来伯後二カ月位は各線各都市又は殖民地を訪問

して、親しく皆様にせっし当国の事情を御知らせ願う意味に於て、渡伯俳優主演の映画上映と共に実演を致しっゝ一巡し実地に見聞して後撮影に着手さして戴きます（以下略）、というもの。

来伯したスタッフ一行と……右から高木俊朗、新井麗子、押田真佐男、大日方伝、鈴木小杉勇、霧立のぼる、藤田進、ヤマノ美容院主ら。写真提供・押田真佐男

実演は菊池寛原作の『父帰る』で、サンパウロでは確かシネ・オデオンのサーラ・アズールで『この旗に誓う』とともに公開された。

ところで、このトーキブラス社の『移民史国際映画』は〃題

名のない映画〝そのもののように製作は中止され、小杉監督をはじめ一行五人は同年八月中に帰国、ひとり脚本家の高木俊朗もその年の十月末に帰り、滞聖中の〝取材〟を基に『狂信』を発表したことは一般によく知られている。

「趣意」移民史の映畫化に就きまして

顧て弊社は邦字新聞紙上に掲載發表致しました通り我々の先驅者笠戸丸便乘勇躍南米の地に第一歩を印してより早くも四十餘年の星霜が夢と流れ過ぎたのであります

この先驅者のたどつた過程は餘りにもさんたんたる茨の道であり莫大な犠牲を拂はれた事は後進なる我々周知のことであります、斯くの如き辛き苦闘の歴史を刻みつゝその業績たるや實に民族の驚異的發展の基礎を築き更に後進者の指導して來たつた數々の辛苦はまいきよにいとまがないのであります

こゝに於て弊社はこの最も尊き先驅者に對する義務の眞且つ大なるを痛感し四十年移民史を永久の記念としてその業績を飾る一端とし後年に傳へ將又來る可き新しき渡伯希望者に對し往年の苦闘の物語りが參考の一助とも成り得れば幸甚ばかりなれば是せられし事を連想し「移民史國際映画」の製作を企畫致しました次第で御座います

申すまでもなくこの完成には幾多の困難が併う事を充分覚悟を致して居りますが「完徹せずんば止む」の決心と確心を持ち弊社全力を擧げてまい進しているのであります

幸い先般紙上に貴くコロニアより脚本を募集致しましたところ各方面より、激励の御手紙や尚又予想以上の應募で机上山積でまことに感謝に堪えない次第で御座います

應募下さいました脚本は、愈々本月十七日着伯致しまする高木俊朗氏並に監督俳優週當なる方々によつて審査する事になつて居ります

弊社は企画發表と同時に御愛援下さる同胞各位の熱誠に應うる爲め、祖國日本の一流會社へ、監督、俳優、脚本家招聘の折衝致して居りましたところ、祖國に於ても一大反響を呼び朝野の名士までが「これは民族的事業である」と絶賛を得、一流會社の厳選を得てこゝに左記人員

莫大な資本金が必要だが…

トーキブラス社はこの映画製作に先立ち、一般から脚本を募

集した。応募数は五二年三月現在で約四十本、三月中に審査を終わり後日邦字紙に発表……となっていたが、その後なんらの音汰抄も無かった。噂によると入選作は南米時事のM・N記者による作品（題名不詳）であり、これを素材として高木俊朗が最終的な脚本を執筆することになっていた模様だが、M・N記者の応募脚本、高木のものもついに〝陽の目〟を見ることが無かったようである。

この不発に終わった『移民史国際映画』に限らず、長編劇映画の製作には莫大な資金が必要である。先ず俳優費、スタッフ費、次いでフィルム費、現像費、照明費、鐘音費、音楽費（楽士、作曲者、指揮者に関する一切の費用）、大道具、小道具費、美粧費その他など、第三者には到底うかがうことのできないもろもろの出費がある。例えば俳優の送迎用車、雑用のための人件費、宣伝費などもそうだが、なんと云っても最大は撮影用機材の購入、あるいはその借用費である。

トーキブラス社の場合、映画製作（撮影）に必要な監督、俳優、脚本家は揃っていたが、カメラ、大道具、小道具、美術、照明、録音関係の肝心なスタッフは一人もきていない。

また助監督、カメラ助手も欠くことはできない。クランク・イン（撮影開始）に先立って以上の技術関係スタッフ全員をサンパウロでの〝現地調達〟を考慮していたとしても、カメラマンはスタッフと行をともにすべきであったと思われる（撮影機材

の現地での借用は別としても)。

確か一九五五年の初頭だったと思う。新東宝から『リオの情熱』の現地ロケ隊が大挙来伯した。この映画は新東宝と現地サンパウロ新聞の提携、ブラジル陸軍省、空軍省、観光局の後援を得たものといわれ、俳優陣の大木実、藤田進、安西郷子、木暮実千代などは別としても監督は瑞穂春海で助監督は二人、カメラマンの三村明も助手一人、照明、録音、美術、メーキャップ関係者、さらに製作者も一行のなかに含まれていたようだ。〝新東宝の豪華恋愛大作〟としてサンパウロで好評だったこの映画は、製作に当ってそれ相当の慎重な準備と少なからざるの資金の調達によって世に贈り出されている。

新東宝に反しトーキブラス社の場合、技術関係の製作スタッフは唯のひとりも来伯しなかった。「監督と俳優、それに脚本家を連れてきただけで、国際的な『移民史映画』は果してできるのだろうか……」という声が巷でささやかれていたともいわれる。

製作中止で声明書も…

余談は別として、この『移民史国際映画』は、不運にも製作中止となった。五二年八月七日付の日毎紙第二面に、トーキブラス社の次のような広告が掲載されている。

声　明　書

先般来弊社により一意進捗中の移民四十年記念映画製作も、関係者の総力を傾倒し如何なる困難をも辞せずとし、之が完成を期さんが為多大なる努力を到し現在に到りましたが、一切の努力報いられず、現下未曽有の金融パニックに遭遇し、又種々の事情により万止むを得ず、茲に俳優団一行との円満なる談合の上、意義ある今回の移民史映画製作も中止するの余儀なきに到りました。

此の移民史映画の製作企画に対し、現在に至る迄終始誠意を以て絶大なる御厚情と御期待を賜りました関係者の方々に対し誠に申訳なく残念此の上もない次第であります。

然し茲に貴重なる経験と大いなる暗示を得て捲土重来再び来るべき機会に備え、専心努力する覚悟で居ります。

略儀乍ら茲に紙上を以て江湖の諸氏に声明する次第であります。

トキーブラス映画合資会社

以上のような理由からか、『移民史国際映画』の製作に一応終止符は打たれた。これについて同年八月二十二日に帰国の途についた大日方伝、藤田進は、帰途、ハワイで同地の邦字紙記者に、次のように語っている（五二年十一月四日付け日毎紙より）。

夢よもう一度！　振出しから出直し　諦め切れぬ移民映画

俳優団がハワイで語る。

近着のハワイ・タイムスによると、移民映画製作のため訪伯した大日方伝、藤田進、新井麗子らが再起を期して帰国の途ホノルルに寄った記事がでていて、同紙記者に大日方伝、藤田進両氏は左のように語っている。

藤田　進談　移民苦闘史は資金その他の手違いで成功を見るに到りませんでしたが、あらゆる準備工作を終り、明年再び出直して完成を期することになっています。なにしろこの事業は多数の人材、機材、資本などを要するので、われわれを招聘した一土地会社（社長は三八歳の二世実業家）だけでは力足らずいろいろ実際問題として困難に直面しました。

しかしわれわれは最初から自分自身が、『移民』になったつもりで出かけており、如何なる障害にも打ち勝つ決心で頑張り、いよいよ撮影に着手するところまでこぎつけてきました。とにかく小杉勇、高木俊朗両氏は最後まで踏みとどまって基礎工作を終え、明年中には石にかじりついても初期の目的を達成すると意気込んでいます。

大日方　伝談　約半か年ブラジルにいて日本人の活躍ぶりを目に見ましたが、草分け同胞の進出目覚ましきものがあります。ブラジルの白人には少しも偏見なく日本人の優秀さをよく知っており、日本人と結婚したがる傾向が濃厚になっています。そ

れからいま尚同胞間に勝ち組負け組のあつれきがあるようですが、どちらの人達も祖国愛に燃えている事実を知り心打たれました。

なお、来伯したスタッフ一行のうち監督の小杉勇と霧立のぼるの離聖期日は調べてはみたがついに分からなかった。＝文中敬称略＝

（前田　正覚）

第13部

レコード

歌謡曲、演歌などが大半
稀には思わぬヒット盤も…
カーザ小野商会
（レコード部調べ）

レコード、テープは国内で複製

当商会がサンパウロで邦楽盤レコードの発売を開始したのは、一九五〇年のビクターからでした。ビクターは戦後間もなくからそれまで、楢原・門田商会によって一般に提供されていました。次いで当商会は五四年にサクラ、五七年にテイチク、六〇年に東芝、八三年にクラウンを発売、現在に至っています。

このうちテイチクは五七年までは遠藤兄弟商会、また東芝はオデオン社によって一度だけ発売されていました。

一方、カセット・テープの場合は、七八年にビクター、翌七九年に東芝とテイチク、八三年にクラウンなど、国内での複製により本格的な発売に踏み切りました。テープが輸入されたのは七二年からで、七九年の輸入中止までの約八年間は輸入もの、国内ものが同時に発売されていたわけです。なお、レコードの場合も当初は輸入ものに頼っていたのですが、国内での複製開始（年月は失念）とともに輸入は全面的に中止しました。

レコード、テープとも全発売枚（本）数の約八〇パーセントは歌謡曲、演歌、軽音楽、カラオケによって占められ、残り僅か二〇パーセントが浪曲、民謡、童謡などとなっています。この数字は飽くまで毎月の新譜発売時の平均で、例えば次のようにヒット盤が飛び出した場合、この平均数が大きく変わることはいうまでもありません。

生田恵子が驚異的な記録

いまでは珍らしくなったＳＰ盤で、予想に反して枚数を重ねたのはビクターの「ラ・クンパルシータ」（Ａ面・江戸川蘭子、Ｂ面・「アヂオス・パムパミア」藤沢蘭子）です。一九五〇年に発売してから同五五年までの五年間で五万七千枚に達しました。

しかし、江戸川、藤沢による有名なタンゴ曲集の記録は、五二年六月頃（？）に発売を始めた生田恵子の「バイオン・デ・ド

イス」と「ヴィンガンサ」、「パライーバ・ムリエール・マッショ」と「東京の門」によって軽く破られました。生田恵子はビクターの専属歌手。帰国旅費捻出でいろいろとコロニアの話題となった三浦愛蓄堂招聘の「松平晃芸能団」の一員（他に浅草〆香、隆の家万龍、隆の家栄龍、芙蓉軒薦花、中川加奈女など）として来聖したのを記念、当商会がサンパウロで録音、発売したものです。

前者の「バイオン……」は発売後僅か七か月間で三万三千枚、後者の「パライーバ…」も同期間の売上げは二万七千枚という驚異的なもので、各地からの注文殺到にプレスが間に合わず、プレス工程を三交代、一日二十四時間操業により、ようやく注文に応じたほどでした。三浦愛蓄堂による「レコード・ファン芸能競演大会」の成績が興行元の思惑を大きく下回り、このため一行の帰国旅費が調達できず〝立往生〟している、という現実が同情を呼び、ある程度にせよ売上げに影響を与えたものとも思われます。なお、「東京の門」を除く前記三曲の歌詞（訳）は詩人の古野菊生氏によるものでした。

ＬＰ盤の収録曲は、普通ＡＢ両面で十二曲から多いものでは十四曲を数えます（流行歌の場合）。このため、発売数が一万を越したのは、いままで僅か次の三枚だけでした。

◇童謡集　「子供のステレオ」第一集、テイチク。

◇流行歌集　「俺は淋しいんだ」、ビクター

◇加山雄三　「君といつまでも」、東芝。
テープの場合も大体においてＬＰ盤と同じく、特別にヒットー（売れる）したものはありません。

有名歌手の来聖公演で商売

邦画業者、その他による芸能人のサンパウロ公演は、芸能人そのものが有名な歌手である場合、われわれレコード関係業者はこのチャンスを逃すことは出来ません。来聖前から準備に入ります。前に記したように生田恵子でＳＰ盤二枚、また五九年中旬頃に来聖した久保幸江の際には、彼女のヒット曲である「炭坑節」、その他を収録したレコードを発売して好成績を上げました。

有名、無名、新人を問わず、その歌手自身の来聖公演がレコードの売り上げ高を増すことに寄与することは勿論ですが、すべてがそうではありません。生田、久保の場合はまったく例外で、その他は来聖時から約一か月間位は売り上げはやや上昇しますが、その後は常に復すのが実際です。

宝とも子、三田明の吹込盤も良く売れたのは事実ですが、なかには歌手の人気、収録曲の選定を誤り、その半数以上を〝残品〟にしたことも二、三に限りません。

このため新譜発売に当っては、歌手、収録曲の選定などで頭を悩すことは、まったく〝日常茶飯事〟といっても嘘ではあ

りません。

すたれのない〝演歌調もの〟

「日本でヒットしたから…」と、頭から無条件にこれを受け入れて発売したところ、売り上げはさっぱり、ということも数え切れません。その点、演歌調のものは、大体において間違いは少く、ファンもやや固定しているようです。

これに反し、「ニュー・ミュージック」といわれる新しい形式の歌（曲）には注意が肝要です。例えば発売後間もなく数千万枚に達したといわれる「帰って来た酔ぱらい」は、当地では散々でした。また、ＬＰ盤で数百万枚といわれている「荒井由美ヒットー曲集」も、良い成績を上げていません。

ところが、演歌、ニュー・ミュージックをミックスしたような「上を向いて歩こう」、「骨まで愛して」、「君といつまでも」などは一般に好評で、この種のレコードはいつも〝売上げナンバー・テン〟で上位を占めています。

現在、日本では毎年数千人という〝歌手の卵〟が輩出しているが、このうちモノ（本格的歌手）になるのは年に十指に満たない、といわれているほど競争の激しい世界だそうです。このため、ただ単に〝カッコいい〟とか〝カワイコちゃん〟などのレッテルのもとにパーっと躍り出たような歌手の生命は非常に短かく、数年を待たずして歌謡界からその姿を消しています。

その点、歌手として数十年にわたって第一線で活躍している人々のうちには、流し、ドサ回り、地方巡業、場末の劇場（コヤ）などで苦労したのが実を結んだ、という例が多いようで、〝歌手は単なる消耗品〟といわれて世の中で立派に生きている。このような歌手のレコードは数こそ少ないが日本、また当地でも売上げはいつも平均している。われわれ業者にとって有難い存在でもあります。

コロニア音楽家にも門戸を開く

当商会では、コロニアの音楽家にも門戸を開き、数々のレコードを商業ベースで発売している。そのうちおもなものを記したい。

トップは森茂夫さんのハーモニカ独奏集「舐園小唄変奏曲」。一九五一年にビクターから。また同年には、「日本の流行歌集」が歌手・難波勝美、語り手・岩根友一さんでビクターから出ている。題名は忘れたが、これもビクターから五二年に難波さんと保坂恵美子さんの「天国に結ぶ恋」（語り手。岩根友一）があった。

合唱曲も、これらからはずすことは出来ない。一九五四年のサンパウロ市創設四百年祭を記念し、同年ビクターから「サンパウロ市四百年祭の歌」を出している。合唱団は混声四部の宮

田栄一合唱団で、歌手は佐藤義昭、山中喜美夫、丸山千恵子、保坂恵美子、鎌田恵美子、鈴木エリ子さんなどの六人。伴奏はブラジル・ビクター・オーケストラ（楽団員のメンバーとして源河ネイデ、宮田栄一の両ピアニスト）、指揮は丸山昌彦氏であった。なお、この盤のＢ面はブラジルの民謡「モレーナ・マルコリーナ」となっていた。

五九年にはサクラから、コロニア初の童謡曲がある。児玉和枝さんによる「めんめん仔山羊」と「サッシー・ペレレー」である。作詞はともに堀田野情さん。

端唄では六〇年にサクラから、現日本音楽研究会代表の三好美和さんによる「秋の夜」と「縁かいな」。また長唄部門では同じ三好さんによる「楠公」が、六〇年にサクラから出ている。

民謡では六三年にサクラから大塚喜代子さんの「エンブー音頭」と「エンブー若狭節」があり（以上すべてＳＰ盤）、六四年には初のＬＰ盤「日本民謡コロニア名人集」がサクラ　で全十八曲が収録されている。松下政男、相馬愛子、小西千恵子、千葉忠未、山本鶴子、黒川房子さんなど六人によるものであった。

（一九八五年六月記）

第１４部

芸能関係者の来伯

三浦環と『蝶々夫人』

‘２１年リオ、サンパウロで公演

芸能関係者では〝来伯第１号〟

三浦環（明治十七年＝一八八四～昭和二十一年＝一九四六）は日本が生んだ国際的なプリマドンナとして、著名各国の音楽人事典に今なお掲載されているソプラノ。

三浦環がイタリア・オペラ団の一員としてリオの市立劇場でジャコモ・プッチーニ作曲の『蝶々夫人』（マダム・バタフライ）に出演したのは今から約六十五年前の一九二一年七月五日の夜であった。日本からの芸能関係者の来伯としては、彼女が〝第一号〟に当たるのではなかろうか。

三浦環のリオでの評判について、当時の伯利西爾時報（以下、時報）はおよそ次のように報じている（原文のまま）。

予て来伯の噂ありし歌劇女優三浦環夫人は伊太利歌劇団に加わりて本月四日リオに到着、五日夜市立劇場に於て『蝶々夫人』（マダム・バタフライ）を歌い其声の美と技の巧とは伯国の好劇者をして感嘆措く能はざらしめ夫人は歌ひ終へて後拍手に呼び出さるる事六回に及びたりと云ふ。

同夜は大統領エピタシオ・ダ・シルヴァ・ペソア氏乃夫人も秘書官及副官と共に大統領観覧席に在りて環夫人の美声妙技を嘆賞したりと夫人が好評は遂にプログラムを変更して翌六日も亦『蝶々夫人』を以て観客を呼び、排日新聞として知られる『パトリア』紙も賞讃の辞を呈するを惜まざりき（以上、時報二一年七月八日付け）。

人気、沸き返えるばかり

時報によると、三浦環はリオでのオペラ公演『蝶々夫人』に出演後来聖した。同年八月五日付の時報は、「お蝶夫人で有名な

三浦夫人来聖　日本随一の世界的声楽家として到る処喝来を博しつつある三浦環夫人は、愈々明日伊太利第一流の歌劇団（グランデ・オペラ）に加はり来聖される筈であるが、此の一同の歌劇は当市テアトロ・ムニシパルに於て明六日の晩『ファウスト』を以て始まり、呼物の三浦環さんの『マダム・バタフライ』は明後七日（日曜）午後二時半（マチネー）に演ぜらるるので全市の人気が沸き返えるばかりである。

日本人の好劇連も此の機会を逸せず見物に出懸けらるるが宜かるべし。但し劇場内では静粛を保ち日本流に喧騒を醸して外人に嫌はざれる様注意が必要である」――と、報じている（原文のまま）。文中の劇場内では〝静粛〟とか〝外人に嫌はざれる様〟〝日本流の喧騒〟など、観劇者に注意を呼びかけているのは、どういう理由からだろうか、ちょっと理解に苦しみそうである。

三浦環は八月十二日の共同記者会見で、およそ次のように語っている。

「一九一四年十一月二十一日、ロンドンのアルバート・ホールで赤十字主催の大音楽会があり、歌劇『リゴレット』の一節を独唱して、その技倆を認められた（注＝このアルバート・ホールでの大音楽会への出演は当時ロンドンで有名な指揮者であった。サー・ヘンリー・ウッドの家で『ルチア狂乱』と云う歌をうたい、それを聞いた人々が明らかにびっくり仰天、〝日本の

女性が、こんなに美しい声をしているとは……〃　との結果からで、音楽会への出演を特に強く勧めたのはチャールの母堂であったといわれる)。

『蝶々夫人』を本格的に全部イタリア語でうたったのは翌一五年五月にロンドンのオペラ・ハウスからで、この日を境として一躍世界的歌劇女優といわれるようになった。その後欧米各国を巡業し、『蝶々夫人』は三浦環に限ると評判になる」。

この会見記事に時報は、次のように付け加えている。

「女史の持って生まれた優しい日本婦人の特性と、同情の深いネーチュアとが芸術的天才に加わって人の心を引きつけるものであろうか―。『蝶々夫人』は外国人が観て珍らしいと思い、悲しいと感じ、巧妙だとはめるだけでなく、日本人たる私共が観ても、日本婦人の優しさと、良人思いの愛情と、まさかの時の決心を明瞭に顕わしている―」。

なお、第一次大戦後ニューヨークで凱旋式のあった時、ウィルソン大統領に手を取られ、スーザ指揮の楽団の伴奏で歌い、ワシントンでは振り袖姿で山車に乗り、日本の歌をうたい、行く先々で拍手喝采を浴びたという。

コロニア公共団体に寄付

日本からの大臣、県知事、芸能人その他の人々が来聖を機会に〃有名税〃としてか、コロニアの公共団体に応分の寄付―は

最近珍らしくないが、三浦環も日本倶楽部と大正小学校へそれぞれ百五十ミル・レイス、さらにミカド運動倶楽部へ百ミル・レイスを寄付、時報は「寄付せられたりとは洵に結構な置き土産である」と書いている。

時報は当時八ページで週間、年間の講読料は十五ミル・レイス、白米（六〇キロ）の上等は十八ミル・レイスだったから、合計四百ミル・レイスの寄付は〝大金〟だったろう。

三浦環は八月二十二日、サントスから次の出演予定地ブエノス・アイレスに向ったが、これに先立ちサンパウロで日本倶楽部、総領事館、黒石・時報社長らによる三歓迎会に、また十九と二十日には青柳・海興重役、藤崎会社主による二回の送別会に出席している。

なお、当時『蝶々夫人』で三浦環のライバルであったのはアメリカ生まれで二歳年上のジェラルディン・ファーラー。三浦環は滞聖中彼女について時報紙記者におよそ次のように語っている。

「北米のファーラー嬢が私の上に立たんとて焦慮苦闘せるも、劇評家は常に私の声と技とを賞揚し、到底ファーラー嬢に追随を許さずと口に筆に吹聴して呉れますので、何だかファーラー嬢に済まないような気がいたします。

それに有名な作詞家のロング氏は北米に於ける三浦環嘆美者の一人であるところから、同氏は私の為に歌劇『星子』を書き

上げ、目下作曲家をして作曲せしめつつあります」。

三浦環は東京芸大の前身、東京音楽学校の出身。在学中から日本最初のオペラ公演『オルフォイス』に出演後、帝国劇場の『熊野』に出演、大正三年（一九一四）渡英、『蝶々夫人』が大当りをとり、以後世界中で公演、その数二千回におよぶ。昭和十一年（三六）帰国、日本でも大評判をとる。

「我らのテナー」
藤原義江も来聖公演

日本歌曲の普及に貢献

大正時代から「我らのテナー」として絶大な人気を博し、全国を歌行脚して、当時まだ一般に認められていなかった日本歌曲の普及に貢献した藤原義江（明治３１年＝一八九八、山口県生まれ）はドイツ、アメリカ、アルゼンチン各国での公演後の一九三七年十一月四日、ブエノス・アイレスから来聖した。

藤原義江の父はスコットランド人。初め新国劇の沢田正二郎一座に入り、戸山英二郎を名のったが、その芸名でオペラに出演していたという〝変りダネ〟。大正八年（一九一九）イタリアに渡り、テノール歌手の修業、同十年（二一）ロンドンでデビュー、『荒城の月』をうたった。

当時の時報によると、藤原義江のサンパウロにおける独唱会は十一月九、十一、十四、十六日の四回は市立劇場で、十二日は午後二時から大正小学校で同校の児童に限っての独唱会を三十分から四十分間にわたって行なうとなっている（入場無料）。

さらに十七日にサントス、十九日にはリオで公演、十二月一日にはサン・ジョアキン街のリラ・クラブでコロニア大衆慰安のための独唱会、次いで奥地在住コロニア慰安のためプレシデンテ・プルデンテ、バストス、リンス、プロミッソンを訪れるという強行軍的なスケジュウル。

第一回公演の評判はまちまち

十一月九日の市立劇場における第一回独唱会の評判について同十一日付の時報は、

「流石は世界的テノール／アンコールまたアンコール／聖市芸術研究会主催／九時から市立劇場で殆んど満員／フリッ・ジャクソンがピアノ／満堂の聴衆を魅了」と報じ、公演会後の藤原義江談をおよそ次のように伝えている。

「聴衆の音楽鑑賞力はブエノス・アイレスの方がずっーと上だと思いました。今晩は非常に暑かったのと、ステージの直ぐ前から聴衆が並んでいたため、とても歌い難かったが、でも盛大で……」。

同日夜のプログラムのうち、日本歌曲は、

田植節　松島音頭　出船の港　娘　旅人の唄　鐘が鳴る　富士を見る　馬追手綱

などで、ブラジル人聴衆の評判について内山勝男氏（現サンパウロ新聞編集主幹）は

「翌十日付オ・エスタード紙の評判はあまり芳しいものではなかった。イタリア系のカロセイロ（馬車引き）でもあれぐらいなら歌えるだろう……と。これを見た誰かが藤原義江に注意したとみえ、第二回目からは見違えるように良くなった、ということを今でも覚えている」。

と、往事を語っていた。

なお、藤原義江は昭和九年（一九三四）に藤原歌劇団を組織、『ラ・ボエーム』公演を第一回に、毎年組織的に古典オペラを紹介した。戦後は昭和二十一年（四六）第十九回公演『椿姫』が最初、二十七、八年渡米、『蝶々夫人』を公演。昭和二十二年（四七）芸術院賞受賞。亡くなったのは七六年三月。

アメリカ二世の『蝶々夫人』

長谷川　敏子

戦前、三浦環、藤原義江に次いでソプラノ歌手の長谷川敏子が一九四〇年九月に来聖、市立劇場とサンターナ劇場での『蝶々夫人』に出演、好評を得ている。

長谷川敏子は米国カリフォルニア州生まれの日系二世、イタリアのミラノでオペラ歌手として永年にわたって学び、ミラノでデビュー、その後欧米各国で『蝶々夫人』に出演したという以外、その芸歴はあまり一般に知られていないようだ。

長谷川敏子はリオの市立劇場に出演後に来聖したもので、サンパウロでは九月一日に市立劇場、次いで同十四日にサンターナ劇場に出演したが、市立劇場での相手役はテイト・スキーパ、サンターナ劇場ではトーマス・アルカイデで、いずれも当時は有名なイタリア人のテノール歌手であった。

当時の時報は長谷川敏子について、「完熟せる演技である」と、讃嘆の辞を呈している。

なお、長谷川敏子は同年末までサンパウロに滞在、その間、故・池辺乙人氏夫人の案内でバウルー、カフェランジア、リンス、プロミッソン、アラサツーバなどの日系集団地で独唱会を開いて好評だったといわれる。

同四〇年の十二月末、次の公演に備えてイタリア向け離聖したが、その後の消息は明らかでない。

（前田　正覚）

あゆみの箱

「チャリティ・ショウ　ブラジル大会」の思い出

小畑　博昭
サンパウロ日伯援護協会事務局長

恐らく日本でも不可能…

私には、つい二、三年前迄大切に使っていたＳＥＩＫＯの高級腕時計がある。今頃流行っている電池式のクオーツものでな

く、振れば自動的にネジの巻かれる、一昔前には高級品であったものだ。この時計こそ、忘れることのできない貴重な私の思い出の宝である。

これは一九七一、七三年と二度にわたって開催された「あゆみの箱・ブラジル大会」に、あの絢爛たる舞台の監督を務められた、山本紫朗先生からの贈物である。二度にわたり、先生の舞台演出の助手として裏方を務めた私に、「この時計は来伯に当たり、新品をおろしたもの、使って呉れたまえ」と、自らの腕からはずして下さった感激の贈物であった。

にぶく輝やくこの時計を通じて山本紫朗監督の温顔と、「あゆみの箱・チャリティショウ・ブラジル大会」の前後二回にわたる豪華ショウが、つい、この前のように思い出される。

その山本監督の一文に、「考えられない日本の一流芸能人のグループ。これだけ日本で集めたら、いや絶対に一堂に会することは難事中の難事である。それが、地球の裏側二万キロ離れたブラジルに於て実現され、華やかな舞台が絢爛と開かれんとしている。二度と実行できないであらう。私はこのショウの演出を務めることに、大いに誇りをもっている」とある。

山本監督に云われるまでもなく、恐らく、あの二度にわたる、豪華ショウ。あとにも先にもコロニア芸能史上、再現はむずかしい夢のようなでき事であった。

火つけ役は伴淳三郎さん

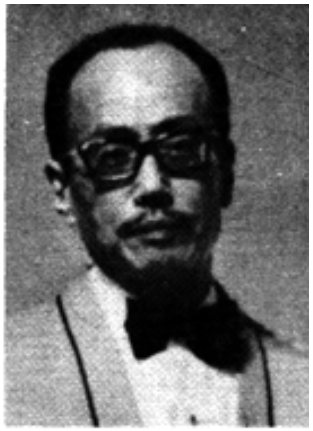
大阪万博の翌年に当たる一九七一年一月、伴淳三郎氏が来伯。確かブラジル松竹の水本毅氏の招きで来られたはず。滞聖中、当時のサンパウロ総領事・大口信夫氏の計らいで、公邸で晩餐会の席上、当時援協の中沢源一郎会長が〝バンジュン〟さんに紹介され、あゆみの箱・チャリティショウ・ブラジル大会開催のお勧めを頂く。慎重な中沢会長も〝バンジュン〟さんの誠意と、全く商売気を離れて協力を約し、お勧め下さった松竹の水本さんの真心におされ、ついにショウ開催を決意される。そのバックには、援協が六五年より造成を進めていた「百万コントス基金」を何としても達成させたいための募金活動の一環としての考慮も多分にあったと思う。

いよいよ具体化し始めたのは、それから二か月後の七一年三月中旬。あゆみの箱事務局長・奥村静雄氏と、舞台監督の山本

当時の中沢大会委員長

紫朗氏が調査と打合せに来伯し、とんとん拍子に話が進むことになる。

現地では、援護協会が主催団体となり、協力団体として救済会、パウリスタ児童療護会、希望の家福祉協会が参加。後援はサンパウロ州政府スポーツ観光局、サンパウロ市役所観光局が加わった、強力なものであった。



伴淳三郎氏

山本紫朗監督

さらに、このショウに奉仕下さるコロニア一丸となっての強力な委員会が、早速編成された。顧問六十五名、相談役五名、大会名誉委員長に大口信夫総領事、大会委員長に中沢源一郎氏以下、総務、財務、接待、救護、広報、法務、会計、監査、宿舎、配車、会場、音響、音楽、渉外、連絡、事務局など百名以上の委員が十六の各部門に分れ、熱心に準備が進められた。

超豪華芸能人の来伯に酔う

「日本においても揃えることのできない第一級タレントを、故国を離れたブラジルにおいてできると云うことは、『あゆみの

箱・チャリティショウ』なればこそで、善意で成り立つ、その組織の力と、身体障害者や、不幸な困窮者のために働こうとする博愛心の力によるもの」、と中沢委員長に感銘を与えた豪華メンバー。この一流芸能人を揃えるために最も苦労したのは、あゆみの箱事務局長の奥村静雄氏であろう。ご本人の言葉をかりれば、今回のブラジル大会を「畢生の事業として熱情の限りを尽した」、という。毎週のように中沢会長と奥村さんが、国際電話で、タレントの交渉に、一喜一憂しながら、真剣に交渉しているのを傍で見聞していた一人である。

その豪華メンバーが、本当に、サンパウロに乗込んで来た時は、夢ではないか、と気分の高まりを押えることのできない衝動にかられたものであった。その第一回のチャリティ・ショウの出演の人々を列記してみよう（三一四ページから三一七ページまで参照）。

一行十四名の超一流タレント。監督以下、付人など十三名、総勢二十七名のスタッフで来伯、七一年八月二十一、二十二日の両日、午後二時からと同七時からの計四回のショウが殆んど満員の観客で埋められた、イビラプエラ体育館の大舞台で展開された。

苦労した会場つくり

サンパウロ州政府のイビラプエラ体育館が会場となった。直

径一〇〇㍍の大建築物。全部を使い満員になって一万五千人が入れるもの。舞台を競技場内の一方の端につくり、その舞台前〝かぶりつき〟に約一千席の上席をつくる。体育館全観客収容数の半分を使用、一回に八千枚の入場券を用意した。七一年のショウでは結局四回で二万五千人以上の観客を動員した。コロニア未曽有の画期的な大企画が大成功裡に終えたのだ。

第一回七一年の大会も、七三年の大会も、その前々日まで、他の体育競技があり、舞台つくりは、昼夜二十四時間位で完成させねばならぬはめとなり、中心となって不眠不休で活躍した南伯産組工務部の他、一般からも、かなりの大工さんを動員、見

事を舞台を完成することができた。

会場つくりの中で一番心配した仕事は、音響効果であった。丸いドームの体育館で、普通のアルトファランテでは、反響がひどく、何を言っているのか分らない。歌も、話も折角の芸能も台無しである。鈴木威建築技師の大活躍が始まる。マッケンジー建築大学の音響専門家の威信にかけても改良しなくてはならない。先ず数千枚の空サッコ（麻袋）が調達され、観客席の通路といわず、空席に敷き広げられた。これが音を吸収し反響効果を落とすという。さらに、体育館内上部の窓という窓は、ショウの開始とともに、みな明け開げられた。音を外部に放出する効果だという。

観客にも音は吸い取られるから沢山入れば入る程よいという。鈴木技師の助手に清水尚久氏がついた。これまた電子音響については隠れた最高の技術者。業界に多くの友人を持つ人でもある。今でこそ、かなり大きな増幅器ができており、大会場でのショウも盛んで、経験も積んで効果もあがっておるが、当時、あのイビラプエラ体育館で、本当によい音を出したのは、第一回あゆみの箱大会が初めてと云われる。

清水氏の友人で、音響メーカで有名なクァザール社のイゴール・アレシャンドレ親子の大活躍があったことを知る人は少ない。あの音響効果の悪い体育館で、一〇〇パーセントといわずも、九〇パーセントの及第点で観客に満足して貰うために、相

当の苦労があったことも、今では懐しい思い出である。

大会成功のもとは

七一年の頃まで、日本からの来伯芸能人の小さなショウは、ちょく、ちょくあったが、一世移住者が憧がれの大スター、俳優が揃って、本格的な演出のもとに開催されたものは無かった。本物のショウに飢えていたことが成功の原因の一つとして上げられよう。

超一流の芸能人で組織されている「あゆみの箱」は、利益を超越した慈善奉仕活動として、日本でも高く評価されており、その善意が、ブラジルで苦労した移住者の慰問に、少しでも役立ちたいということで、無報酬で来伯して下さった。ギャラを払っていたのでは、とても成り立つものでは無かった。

大会委員長の中沢援協会長をトップに、委員の皆様方が、数か月間にわたり、準備のために多くの貴重な時間をさき、本番から、あと仕末まで、犠牲的によくお働き下さったこと。

さらに、コロニアの皆様が、このショウ開催に対し、大変に協力的で、入場券を心から喜んで、買い求めて下さったことは非常な感激であった。観客の中には、五百キロ、六百キロもの遠隔の地から、中には一千数百キロも離れたマット・グロッソ州からまで大会に参加するなど、このショウの目当てが奥地のすみずみまで、行きとどいていたことを物語るものであろう。

参加したうちの一人は、「わたしは今まで、こんなに出演者と観客が、混然一体となって楽しむのを見たことがありません。あれこそ、本当の、観て聞いて、楽しい協力、チャリティ・ショウと云うのでしょう」、と感激にむせんでいたことを思い出す。

第二回大会も大成功

〝柳の下のどじょう〟。諺によれば、一度成功しても、二度とはうまくゆくものではないと云われるが、七三年八月十七、十八、十九日に開催された、第二回あゆみの箱大会も大成功裡に終えることができた。出演芸能人のうち、第二回大会に初めて来伯したタレントをあげると、　長谷川一夫、淡島千景、長谷川稀世、坂東三津十郎、花柳芳次郎、引田天功、千昌夫、柳沢真一、松島みどり、榎本美佐江などの皆様方であった（三一八ページから三二一ページまでを参照）。

観客も第一回大会を上回る三万人以上の人人が参加、素晴らしい盛況であった。内容もヴァラエティに富んだ素晴しいものだった。

奇術・舞踊・演歌・懐メロ・沖縄みやびら太鼓・コント・沖縄舞踊・日本民謡お国めぐり、など約三時間半があっという間に過ぎる楽しいショウであったことは勿論である。

チャリティ・ショウの結果は

出演する芸能人も、ショウを観るお客も、ショウを主催する委員たちも、全く善意のかたまりとなって参加した結果、第一、第二回の大会とも多くの成果を上げることができた。

第一回大会の総収入は八十二万三千六百二十三クルゼイロス、諸経費を差引いて純益は三十四万百五十八クルゼイロスであった（当時一ドルは五クルゼイロス）。

第二回大会の純益は四十一万クルゼイロス（当時一ドルは六クルゼイロス、この「思い出」を記した八六年一月十日の一ドルは公定で十万八百九十五、平行（ヤミ）では十五万九百クルゼイロスであった）。

この第一回、第二回大会による純益は、日系四福祉団体の他、サンタ・カーザ、癌病院など、ブラジル人系の六つの医療福祉団体に贈られ、大変に喜ばれた。日系コロニア人の面目を大いにほどこした。

このショウが行なわれるまでは、〝チャリティ〟という言葉が日系コロニアには無かったのではないか。今でこそ慈善ショウ、即ちチャリティ・ショウと定着し、変にも思わなくなった。七一年の第一回の頃は、これがなかなか滑らかにでてこなかったと思う。コロニアに本格的なショウの楽しさを植付け、チャリティの真髄を示してくれた「あゆみの箱・ブラジル大会」は、コロニアの芸能史に、ひとつのエポックを残してくれたものと、高く評価される。

（一九八六年一月十日記）

〜〜〜〜〜〜◇〜〜〜〜〜〜

注＝筆者の小畑博昭氏は、七一年、七三年の「あゆみの箱・ブラジル大会」に大会委員全の事務局長として活躍した。

あゆみの箱
ブラジル大会に就いて

山本紫朗

今年のはじめには想像もしなかった驚天動地の行動が現実になって今ここにある。日本からはちょうど地球の反対側にあるブラジルに誰が行くことを予言しただろう。昨年（一九七〇）は世界万国博の演出で大阪で仕事をして今年はゆっくり東京での仕事を企画していた私に、降って湧いたようなブラジルの「あゆみの箱チャリティ・ショウ」である。

伴淳三郎氏が一月ブラジルに出発の際、火付け役をすすめた自分としてその実現の早さに我ながら驚いている次第である。東宝に席がある現在、大多忙の中を約一か月ブラジルで過すことは実にスケジュール上大いに支障をきたすものであるが、帰国後の伴氏の熱意、ブラジル在住の人々の声を聞き、腰をあげざるを得なかった。

そして今、私はブラジル・サンパウロに生活をしている。何か不思議な気がして、末だにこれが本当の自分なのか半分夢うつつの中に仕事を続行しているみたいだ。人間には運命がある。一生の間、仕事行動は、何かわからぬ糸にひかれるもので、私も、今その強力な糸にあやつられて「あゆみの箱・ブラジル大会」の準備に邁進している。

私は、常に仕事を全力投球でやる主義である。全身をその仕

事にぶつけてこそ値打がある。考えられない日本の一流芸能人のグループ、これだけ日本で集つめたら、いや絶対に一堂に会することは難事中の難事である。それが、地球の裏側二万キロ離れたブラジルに於て実現され、華やかな舞台が絢爛とひらかれんとしている。

二度と実行出来ないであろう、この豪華メンバーのショウ、私はこのショウの演出を務めることに大いに誇りをもっている。乞う御期待のショウ開催日は刻々迫っている。ブラジルの皆様、私達芸能人の熱意と誠意を充分にお汲みとりの上、今後の御活躍を祈る次第である。

（筆者は「歩みの箱・ブラジル大会」の舞台監督。第一回「あゆみの箱・ブラジル大会」のプログラム誌より転載）。

二万キロは夢のうち

奥　村　静　雄

一九七一年の八月に続いて、第二回目の「あゆみの箱・ブラジル大会」が、今年（一九七三）八月に、再びイビラプエラ州体育館で開かれようとしています。

第一回の成功のあとで、「われわれとサンパウロの人々との間に、同じ愛の心がある間は、二万キロは夢の内」だと書いたことを思い出します。

しかし、この二年間に、世界の情勢が、とくに日本を取り巻く国際情勢が恐ろしいほど変わったことを実感します。

去る三月始め、打合わせのためサンパウロを訪問したわたくしの心の中に、「われわれとサンパウロの人々の間に、同じ愛の心がある」にもかかわらず、何故かこの二万キロ㍍が遠く遠く感じられてならないのでした。

何故なのか、このわずか二年足らずの間に、地球上に何が起っているのか。私の感じた不安は一体何なのか……。

祖国を離れて何十年という、辛苦と艱難の後に、ようやく実らせた生活の場、第二の祖国に、手を取り合って生きている古い日本人との心の交換。それは飛び散る火花を見るような心のときめきでした。

今は、このときめきに水を差すような、冷たいものの影を感じます。国際情勢の急激な変化につれ、いびつな形で押寄せて来るもの、それが何らかの形で古き良きものに影をさす。一言で云えばそのような不安であったのかも知れません。

さて、しかし、第二回の「あゆみの箱・ブラジル大会」は、正に空前絶後の規模で、花々しく開催されようとしています。

愛の蕾は、再び絢爛と花開くことでしょう。

はるばる海を渡る「あゆみの箱」の関係者は、素（・）適（・）な（・）日（・）本（・）人（・）たちとの出会いに、深い感銘を受けるに違いありません。

いよいよ迫って来たその日のために、すでに参加者の全員がスケジュールの調整に追われています。きっと素晴しいショウをお見せすることができるでしょう。

何の事故もなく、この大会が終わった日の感慨を想いうかべ、ひそかに胸うたれながらこの拙文をお送りします。

（筆者は、あゆみの箱事務局長。第二回「あゆみの箱・ブラジル大会」のプログラム誌から転載）。

第1回

チャリティショウ出演の人々（順序不同）

阪東三津五郎

阪東三津五郎

本名守田俊郎、屋号は大和屋、阪東流舞踊家元。

大正二年、市村座で初舞台。

昭和三年に、明治座で、阪東蓑助を襲名。

昭和三十七年、歌舞妓座で、八世阪東三津五郎を襲名した。
先代に引き続き、重要無形文化財歌舞妓の保持者として、文化財保護委員会から認定書を受けた。
梨園切っての知識人と言われ、資料文献の保存などにも大きな貢献をなしている。
何冊かの芸談や、随筆をものしているが、昭和四十五年に出版した「言わでものこと」で、エッセイスト賞を受けている。
社会福祉事業にも、ことのほか熱心で、あゆみの箱運動では、理事として、その推進者の一人だ。日本赤十字社金色有功章を受けている。
そのほか、日本芸術院賞、柑綬褒賞、紫綬褒賞、放送文化賞などを受け、日本最高の舞台芸術家の一人である。
今回のチャリティショウには、オープニングと、フィナーレに、この人のケンランたる舞踊が公開されることになっており、前後三回その舞台が見られる。
本格的な日本の古典舞踊が見られる機会は、ブラジルでは、これが最初で最後と言われている。
チャリティショウのハイライトの一つである。

伴　淳　三　郎

本名、鈴木寛定。
山形県に生れる。
日活京都撮影所に、大正十五年に入所。
そののち、浅草で舞台をふむ。
ふたたび、映画界に帰り、大都映画、新興キネマ、新東宝を経て、現在は、フリーで、活躍している。
はじめ、方言を積極的に生かした独得の調子で、大衆的人気を獲得し喜劇王となった。
「アジャパー」なる意味不明の感投詞は、流行語になり、彼の商標ともなっている。
主な出演映画のうち「二等兵物語」「駅前シリーズ」がコロニアではよく知られているが、ブラジルの映画批評家の間では、「飢餓海峡」「超高層のあけぼの」などの名演技で知られ未公開の「どですかでん」の到来が期待されている。ちなみに右の「飢

餓海峡」は、ブラジルの権威ある映画賞「サシー賞」を受けた。
「あゆみの箱」の運動は、彼の個人的な体験からはじまったもので、今回のブラジル公演にあたっても、彼の果した役割は大きい。
ブルー・リボン大衆賞、京都市民映画祭助演男優賞などを受賞している。日本の代表的映画俳優の一人。
日本の代表的映画俳優の一人。

森　繁　久　弥

大正二年、大阪に生れた。
早稲田大学中退。
満州にわたり、新京中央放送局でアナウンサーとして勤務。
戦後、ムーラン・ルージュで、舞台に復帰し、昭和二十五年、ＮＨＫ専属となり、「愉快な仲間」で、藤山一郎と共演し、一躍人気者となった。

又、「ラジオ喫茶室」の時間を受けもち、軽妙な語り口と、見事なアドリブで、放送タレントとして大成功をおさめた。

のち、映画、テレビ、舞台に大活躍し、レコードの分野でも、独得の「モリシゲブシ」が人気を呼んでいる。

代表的な出演映画としては、「夫婦善哉」「三等重役」「警察日記」「猫と庄造と二人の女」「地の涯に生きるもの」などがあるが、コロニアでは、「駅前シリーズ」や「サラリーマンもの」などのイメージが定着しているだろう。

随筆家としても一家をなし、「こじき袋」「森繁自伝」「ブックサ談義」「アッパさん船長」「はじのうわぬり」など、たくさんの著述がある。

趣味はヨット帆走で、自家用のヨットも所有し、自らかじをとって、しばしば外洋航海にのり出す。

夫人は、すでに何回か来伯して、大のブラジルびいき。一家は、独得の自由な物の考え方をもち、そのくらしぶりは、しばしば、マスコミの話題となる。

あゆみの箱運動は、主唱者の一人であり、国内国外のチャリティショウには、必ず顔を見せる。

ブルー・リボン男優主演賞、映画コンクール男優主演賞、和田賞、ＮＨＫ文化賞など、数々の賞にかがやく、日本の代表的俳優の一人で、ブラジル人にもファンが多い。

昭和四十一年には、紺綬褒賞を授けられている。

勝　新太郎

突然、前発表のメンバーにない勝新太郎が、このあゆみの箱ブラジル大会に参加が決定した。彼は最初から、この大会に参加を希望していたが、自分のプロダクション行動等で多忙な為スケジュールがぎっしり詰って動きがつかなかったので半ばあきらめていた所突如スケジュールの都合をつけて参加された事は私達を大いに喜ばせた。一人一人の善意の積重ねが、あゆみの箱ブラジル大会の成功につながる道である。

私達は彼の参加を大いに期待する。

彼の座頭市、三味線弾奏、ジャズを歌いあげる八面六ぴの芸風は、さぞや大拍手で場内をゆるがすことであろう。

京　マチ子

大正十三年大阪生れ。

昭和十一年大阪松竹歌劇団に入団し、二十四年、大映に入社し、映画「最後に笑う男」でデビューした。

そののち、黒沢明監督の「羅生門」が、ベニスの国際映画祭で、グランプリを受賞し、一躍、国際的に有名になった。

翌年、カンヌで、その出演映画、衣笠貞之助監督の「地獄門」がグランプリを受賞、又、溝口健二監督の「雨月物語」が、ヴェニスで、審査員特別賞を獲得するに及んで、日本映画界の有する数少い国際女優として、その地位は不動のものとなった。

ブラジルでは、そのほか、市川昆監督の「鍵」、日米合作映画「八月十五夜の茶屋」などが、ブラジル人むけに配給され、この国でも、知名度の高い女優である。

この度のチャリチィショウ、サンパウロ公演では、「八月十五夜の茶屋」の踊りを披露する。

鶴田　浩二

大正十三年、静岡県浜桧市に生れる。
大阪此花商業、関西大学商学部を卒業。
昭和十九年、敗色濃い帝国海軍横那賀海兵団へ入団した。第十四期海軍飛行予備学生、いわゆる「同期の桜」の一員である。
昭和二十二年、高田浩吉劇団に入り、師匠の名から二字をもらって、鶴田浩二として、デビューした。
昭和二十三年、松竹に入社し「遊侠の群れ」で、映画界にデビューした。
その天性の美貌と、独得のニヒルなムードは、広く大衆的な人気をはくし、戦後日本映画界生んだ、最高の二枚目の一人に数えられている。
昭和二十六年、松竹退社。
昭和三十三年東宝へ入社、ここで娯楽映画として、映画史上に残る傑作、「ハワイの夜」に主演した。

三十五年、東映に入社。
ギャング映画及び、仁侠映画のヒーローとして、人気は最高である。
歌の方でも、「ハワイの夜」の主題歌をはじめ、「好きだった」「町のサンドイッチマン」「赤と黒のブルース」などがヒットし、ビクターのドル箱である。
昨年、「古い奴とお思いになるでしょうが、古い奴ほど、新しいものをほしがるもんでございます」というせりふではじまる「傷だらけの人生」が大ヒットし、これを記念しておこなったリサイタルも大成功をおさめるなど、かわらぬ人気を保っている。

春日八郎

昭和二年福島県に生れ、早稲田大学理工学部中退、東洋音楽学校を卒業し、昭和二十二年、キング・レコードの第一回新人歌手募集コンクールに合格し、キング・レコードの専属となった。

作曲家細川潤一及び、江口夜詩氏に師事し、五年間の苦難時代をこえ昭和二十七年、「赤いランプの終列車」でデビューした。

昭和二十九年、「お富さん」の大ヒットで、一躍、キング・レコードのトップ男性歌手となり、「雨降る街角」「別れの一本杉」「ひょうたんブギ」「居酒屋」「別れの灯台」などの演歌調のヒットを次々に飛ばし、歌謡界における位置を不動のものとした。

昭和四十三年に発売した「春日八郎歌謡大全集」は、彼の歌手生活半生の総決算ともいうべきもので、その年、日本レコード大賞特別賞を受賞している。

その独得のふしまわしと、適度の泥くささは、俗に「春日ぶし」と呼ばれ、日本の流行歌界の土俗派の代表と呼ぶにふさわしい。

ブラジルの日系人の間の人気はつねにトップクラスに属している。

渡　辺　はま子

本名、加藤はま子、横浜市中区山手に生れた。

昭和八年、武蔵野音楽学校声楽科を卒業後、ビクターに入社し、お色気ソングの元祖「忘れちゃいやよ」「とんがらかっちゃいやよ」で、たちまちスターとなった。

昭和十二年、コロンビアに移籍し「支那の夜」「蘇州夜曲」「何日君再来」など、一連の大陸ものや「愛国の花」などのヒット曲を出した。

戦後、「雨のオランダ坂」「長崎のお蝶さん」「モンテンルパの夜はふけて」など、かわらぬ活躍をつづけていた。

最近のナツメロブームで、引退中の彼女にも、頻々とお呼びがかかり、おとろえぬ美声でファンをたのしませている。

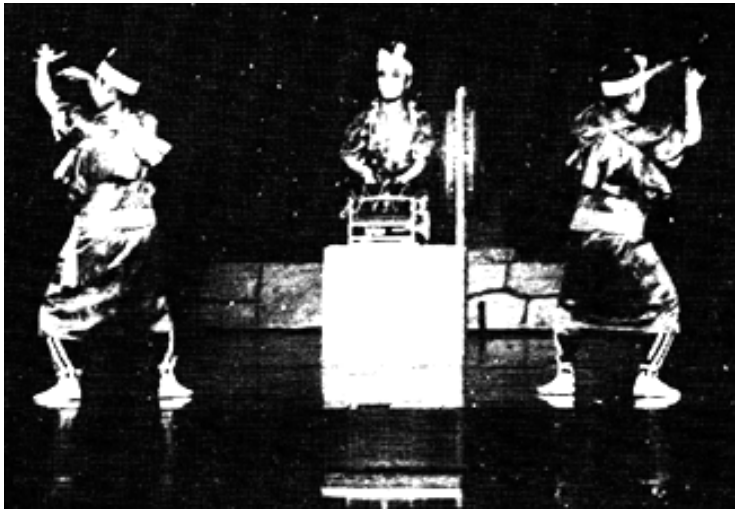
彼女の歌は、しばしば、外国にも知られ、「支那の夜」「蘇州夜曲」「何日君再来」などは、スタンダード・ナンバーとして、世界中で歌われ、演奏されている。

冠船流　川田琉球舞踊団

川田礼子

川田功子

川田公子



長姉礼子は、沖縄県那覇市の出身。四歳の時、琉球古典舞踊の伝承者で名優といわれた故玉城盛重翁に師事し、六歳の時、師の推薦によって上京し、伝寿講堂並びに早稲田大学演劇博物館に於て独演会を開き、各界の絶讃をあびた。

そののち、沖縄の菊五郎と．いわれた渡嘉敷守良翁に師事し、古典の女踊を習得し、昭和二十一年、御冠船舞踊正統派の奥儀伝授の免許を受けて、冠船流を創立し、初代の家元となった。

彼女は、古典の継承とともに、その普及にも熱心で、昭和三十四年、川田礼子琉球舞踊団を創立、美術、照明、音楽、舞台監督などの各スタッフをそろえ、自ら団長として、舞踊団活動を開始した。

昭和四十一年冠船流川田琉球舞踊団と改称し、地方公演、沖縄特別公

演のほか、映画、テレビ、レビューなどに進出し、現在、商業劇場で観ることのできる、ほとんどすべての琉球舞踊は、その出演、又は、ふりつけによるものを言われている。

次姉川田功子は、姉を助けて、舞踊団をもりあげ、妹公子は、踊り手として、また、太鼓たたきの名人として、しばしば、東京キューバシボーイズなどのラテンバンドと共演したりしている。

日本ではじめてのプロの沖縄舞踊団として有名。

大谷瑠美子

「お金も、名声も、何も欲しくなく、ただ、純粋に歌だけを歌いたい」 私は、今まで、彼女ほど、歌にひたむきな人を見たこ

とがありません。
昔だったら、考えられぬ境遇、名門中の名門、そこからかもし出される育ちのよさ、そう言った事が、当面は、彼女の歌そのものよりも話題となることであろうが、しかし、彼女の歌への一途を心と、異常なまでの情熱（勿論、彼女独得のパーソナリティや歌唱力、意外性も充分持っている）は大いなる可能性となって成功するだろう。
大谷瑠美子は、本当に、将来楽しみのある、そして、長く音楽界の中で生活している私にとって、出会ったことのない新人です。
（日本フィリップス・レコードの紹介より、名和治良記）

東本願寺の御連枝の長女として生れ、流行歌を歌うには、内外から抵抗もあったろうに、よくぞ歌いつづけて、ここまできたものと拍手をおくりたい。
ブラジルは、北パラナのアサイにあって、その美声は、コロニアではつとに知られていた。
彼女を直接に知っているアラサツーバの人々、北パラナの人々は言うに及ばず、コロニアの人が、こぞって応援して、スターに押しあげたい新人である。
今回のチャリティ・ショウでは、「悲しいため息」と「女の世界」を歌う。

玉川　勝太郎

本名石波栄太郎。

昭和八年、東京に生れた。

昭利二十三年、先代（二代目）の玉川勝太郎に師事し、玉川福太郎の名で、デビューした。

早くから、浪曲界若手のホープと言われ、国際劇場で行われる名人大会に、再三出場し、ハワイにも巡演している。

昭和三十六年、東芝レコードに入社し、歌謡浪曲の分野でも新しい境地を開いた。

三十九年には、コロンビア・レコードへ移籍し、同年、三代目玉川勝太郎を襲名して、今日に至っている。

コロニアでは、久々の本格的浪曲家の来伯である。

曲師は、吉野静師（本名石井静子）昭和十三年生れ、で、三十二年、三味線界に入り、玉川師の曲師として三十八年まで活躍した。そののち、和年四十六年まで、二代目篠田実師の曲師をつとめ、現在にいたっている。

志摩夕起夫

大正十二年の生れ。

本名は小島幸夫。

昭和二十六年、今のＴＢＳの前身である、ラジオ東京が発足

するとともに、ディスク・ジョッキーとして日本ではじめての深夜放送を開始した。

そののち、毎日曜日の午後、二時間にわたるミュージンク・レターの番組も兼任した。いわば、民間放送のディスク・ジョッキーの日本における草分けである。

クラシックから、ポピュラーにおよぶ、豊富な音楽知識にうらうちされたやわらかい、上品な語り口は、たくさんのファンを集めている。

のちに、コンサート・スデージの司会者に進出したが、アクの強さ、ドロくささが売りものの芸人が多いこの世界で、ほとんど唯一の上品でスマートな司会者だろう。

外来のタレントがくると、まずはじめに、彼にお声がかかるのももっともである。

第２回

チャリティショウ　出演者のプロフィール

伴　淳　三　郎

本名・鈴木寛定。明治四十一年一目十日山形の生れ。バンジュンの名で親しまれ、「アジャバー」なる珍語を全国津々浦々にまで流行させた喜劇王。

コロニアでも「駅前シリーズ」「二等兵物語」等でおないしみだが「飢餓海峡」では、老刑事という地味で真面目な名演技で、ブラジルの権威ある映画賞「サシー賞」を授賞した。

ブルーリボン賞、京都市民映画祭助演男優賞などに輝く、日本の代表的映画俳優の一人である。

第一回ブラジル大会では、玉川勝太郎、丹下セツ子と寸劇「お富・与三郎」で、こうもり安を演じ、大いに湧かせたが、今大会では、千昌夫、柳沢真一と組んで、彼が演じるコント「レストランは大騒ぎ」の酔っぱらいが見もの（この他、引田天功と奇術、又、第二部日本民謡お国めぐりでは、本場山形の「花笠踊り」で、唄まで聞かせる大サービスで楽しませる。

坂東三津五郎

本名・守田俊郎。歌舞伎俳優、坂東流舞踊家元、屋号は大和屋。明治三十九年十月十九日目生れ。

人間国宝で、近世歌舞伎に於る舞踊の名人と云われた、芸術院会員七世の長男で、昭和三十七年六世蓑助より、八世坂東三津五郎を襲名した。

一九七一年に開催された第一回ブラジル大会では、オープニングに「老松」を踊って幕を開けたが、今回も第一部で、御祝儀「浦島」と「壇の浦」第二部で、三津十郎と組んでの「三社祭り」と、前後三回にわたって絢爛たる舞踊が披露される。

彼は、先代に引続き重要無形文化財の認定を受け、又、あゆみの箱運動では、理事として、社会福祉事業に力を入れ、日本赤十字社金色有功賞を受けている。この他、日本芸術院賞、紺綬褒賞、紫綬褒賞、放送文化賞を授賞している。

森　繁　久　弥

ラジオにテレビに、映画に舞台に、テレビのＣＭに八面六臂の大活躍をしている。

彼の唄う「モリシゲ節」は、あまりにも有名であるが、唄うだけでは収まらず、作詞・作曲まで手をのばし、ついに「知床旅情」なる大ヒットを飛ばした。

代表的な主演映画には、大阪のこまやかな情を描いた「夫婦善哉」。サラリーマンものとして好評を拍した「三等重役も北海の自然の厳しさと、そこに生きる一徹を老人を描いた「地の涯に生きるもの」、その他、一連の「駅前シリーズもの」があるが、最近の傑作は何といっても、有吉佐和子問題のベストセラーの映画化「恍惚の人」に於ける老人の名演技だろう。

ブルーリボン男優主演賞、映画コンクール男優主演賞、和田賞、ＮＨＫ文化賞など、数々の賞の他、昭和四十一年には紺綬褒賞を授けられた。

あゆみの箱運動では、主唱者の一人として理事という重責を担っている。

今回の第二回ブラジル大会では、「ああ戦友」他、久々に　モリシゲ節」が楽しめる。

長　谷　川　一　夫

本名も同じ、明治四十一年二月二十七日生まれ。

大正二年、伏見大手座に五才で初舞

台を踏んで以来、映画・演劇畑ひとすじに歩んで来た。日本芸能界の重鎮。

映画界には、昭和二年「稚児の剣法」で、林長二郎の芸名でデビュー。その後、昭和十三年芸名を本名の長谷川一夫にかえて銀幕に、ステージに活躍し、一世を風靡した。

昭和二十五年、大映に入社し「地獄門」で、カンヌ国際映画祭グランプリを受賞、昭和三十二年には、大映の重役に就任した。昭和三十九年「青葉城の鬼」の主演をもって、三〇一本の映画主演の記録を樹てた。四十一年大映を退社し、東宝歌舞伎、東京歌舞伎座、大阪新歌舞伎座公演の他、テレビ等でも活躍中である。

今回のチャリティ・ショウに無料出演される事は、日本の芸能界でも大評判になっているが、彼の披露する「那須の与一」「雪之丞変化」の舞踊は、オールド・ファンばかりでなく、若い女性のためいきをつかせずにはおかないだろう。

京　マ　チ　子

日本映画界が生んだ国際女優京マチ子は、大正十三年三月二十五日大阪に生まれた。

昭和十一年、大阪松竹歌劇団に入団、銀幕には昭和二十四年、大映から「最後に笑う男」でデビューした。彼女の主演作品で、一九五一年度ベニス国際映画祭で黒沢監督の「羅生門」がグランプリを、翌一九五二年度のカンヌ映画祭で衣笠監督の「地獄門」が同じくグランプリを、更にヴェニス映画祭で溝口監督の「雨月物語」が、審査員特別賞を獲得し、グランプリ女優として、不動の地位を築き、又、日本映画の海外進出に大きな役割を果した。

ブラジルでは、ブラジル人向けに公開された、市川監督の「鍵」。日米合作の「八月十五夜の茶屋」等があるが、特に「八月十五夜の茶屋」のサンパウロ封切りの時などは、映画館の前に、十重二十重の行列が出来、大変な評判となった。

今回は「歌磨の女」「さのさ」などで、あの素晴らしい踊りを披露する。

淡島千景

「駅前シリーズ」「夫婦善哉」等で、コロニアにも巾広いファンを持つ淡島千景は、大正十三年二月二十四日生れ、本名・中川慶子。

昭和十四年、宝塚歌劇に入団し、娘役として活躍。

銀幕には、昭和二十五年、松竹から「てんやわんや」でデビュー。この後「自由学校」「麦秋」「やっさもっさ」「残菊物語」等、多数の作品に主演し、ブルーリボン女優主演賞、アジア映画祭女優助演賞等を授賞して居り、その渋い芸風は、巾の広いファン層を獲得している。

今大会で、長谷川稀世と踊る「禿」。長谷川一夫、京マチ子と踊る「博多節」等、日本でも見られぬ〝顔合せ〟は、本大会の圧巻である。

長谷川稀世

昭和二十一年五月八目生れ、本名・原田勝美。

慶応大学文学部英文科を二年で中退し、昭和三十年七月東宝歌舞伎第一回公演で初舞台。以後、映画・テレビ・舞台に活躍中。

今度のチャリティ・ショウ・ブラジル大会では、淡島千景と「禿」を、そして花柳流家元・花柳芳次郎と組んで「深川」を披露する。

坂東三津十郎

本名・中尾清勝。昭和十三年十二月十一日生れ。

坂東三津五郎の高弟で、第一回ブラジル大会では「兜」を踊

り人気を博したが、今回は「壇ノ浦」を披露する。

花　柳　芳　次　郎

花柳流を隆盛に導いた功労者の一人、四代目芳次郎の息子として、昭和六年三日目二十二日に生れた。本名は花柳寛。

昭和三十年、ベルギー、西ドイツ、スイス等で公演し好評だった五条珠実舞踊団に、花柳流からただ一人参加し、又、昭和三十三年五月、ベルギーのブリュッセルで開催された万国博覧会には、日本政府派遣の文化使節団の一員として、花柳流の舞踊家十二名と共に「日本デー」に出演、日本舞踊の粋を披露し、三日間の予定が五日間に日延べされた程、大きな反響を呼んだ。

その後、五月二十六日パリの国際演劇祭にも特別出演し、フランスのリヨン、イタリアのローマ、フィレシチエ、ヴェニス、ナポリ等で公演し、いずれも好評を拍した。

この様に、花柳流として、日本舞踊を海外に積極的に紹介し、又、海外で収得した体験を振り付けに生かすなど、創作活動に

も大きな努力を続けていいる。
三代目家元後見という重責にある。

引田天功

昭和九年七月三日横浜に生れた。
お座敷芸の手品を、絢爛豪華をマジック・ショウにまで発展させた引田天功は、学校で学んだ理論（日本大学工学部電気科卒）や、趣味としての船舶、飛行機や自動車等の操縦術を、たくみにマジックの分野に応用した大仕掛けな魔術を行ない、日本の魔術師から、世界のマジシャシとして大活躍中である。
その実力の程は、見てのお楽しみという事になるが、昭和三十六年十一月十二日に、天皇陛下の還暦祝に御前で、その腕前を披露し、その後四十三年五月十二日、四十六年五月十四日と、天皇陛下に御覧項き、その他、皇太子御夫妻をはじめ、各皇族方にも特別に御覧頂くという栄誉を担った事でも判る。
又、昭和四十三年七月十八日には、神奈川県三浦海岸に於て、大

観衆を前に、世界でも初めてという大魔術「恐怖の海中脱出」を行ない大成功を収めた。

昭和四十五年大阪で開催された万国博覧会では連日、電力館に出演し、一日十七回公演を一八三日間一日も休まずにやり遂げる等、精力的な活躍を続けている。

本大会でも、アッと驚くショッキングなシーンの連続で楽しませる。

冠船流川田琉球舞踊団

川田礼子

川田朝子

川田功子

川田公子

歌の島、踊りの国といわれる沖縄から、前大会で「みやらび太鼓」で圧倒的な人気を拍し、すでにコロニアにおなじみの川田三姉妹に、今回はもう一人朝子が加わり、絢爛たる沖縄舞踊が展開される。長姉礼子は、沖縄県那覇市の出身。

昭和二十一年、沖縄の菊五郎といわれた渡嘉敷守良翁より、御冠船舞踊正統派の奥儀伝授の免許を受け、冠船流を創立、初代家元となった。

昭和三十四年、川田礼子琉球舞踊団を創立、その後、昭和四十一年に冠船流川田琉球舞踊団と改称し、公演や映画、テレビ、

レビュー等に進出し、日本で初めてのプロの沖縄舞踊団として活躍している。

本大会には、特にブラジル側よりの依頼で出演しているが「みやらび太鼓」の他「阿里屋ユンタ」「谷茶苅」など、四姉妹の踊る沖縄舞踊は、大きな評判となるにちがいない。

千　昌夫

昭和二十二年四月八日、岩手県陸前高田市の生まれ。本名・阿部健太郎。

昭和四十年九月、ミノルフォン・レーコード発足と同時に男性第一期生として「君が好き」でデビュー。

昭和四十年春、高校の修学旅行で上京、その足で作曲家遠藤実先生の門を叩き、断られて三日間居座って門下生となった。

「君ひとり」「星影のワルツ」等で、コロニアにもファンが多い。

彼の動物好きは有名だが、特にサルが好きと云うのも変って

いるが、今はやりの日本列島改造論とかで、彼が投資した土地に、新幹線が通る様になって大きな値上りをみたり、アメリカ人の美人歌手と結婚してアッと云わせたり、華やかな話題につつまれている。

柳　沢　真　一

昭和七年十二月十九日、東京に生れる。

昭和二十七年六月三十日、日比谷公会堂でジャズシンガーとしてデビュー。

昭和二十八年度、芸能（音楽部門）新人王、昭和二十九、三十年度と続けて男性ジャズシンガーNo.１に輝く。

昭和三十一年、コメディアンとして俳優に転向し、映画、テレビで活躍している。

尚、昭和三十六年にＮＨＫの海外放送「ラジオ日本」で、一年間放送した「懐しのメロディ」は、最高の聴取率を記録、ナツメロの真ちゃんとして、世界各地の一世・二世に親しまれた。

今度のブラジル大会では「私の青空」「ダイナ」等で往年のジャズシンガーを、又、千昌夫、伴淳三郎と共にコントにも出演し、コメディアンぶりも見せる。

松　島　み　どり

本名・内田かずこ。昭和二十五年十一月三日生まれ。

演歌の新星として、最近めきめきと売り出している。柔道二段。今大会では得意の「大利根子守唄」「人生劇場」などのほか、民謡の部では千昌夫とのコンビで「おてもやん」を聞かせてくれる。

榎本美佐江

大正十三年三月十三日生れ。

有名野球選手と離婚後、美事に芸能界にカムバック、再びステージ・テレビ等で活躍中の本格的な日本調歌手。

今度の大会では「十三夜」「すみだ川」「湯島の白梅」等、豊藤美の三味の音と共に、久方ぶりに日本調の唄を聞かせてくれる。

志摩夕起夫

ソフトな語り口と、その豊富な音楽知識で多くのファンを持つ名司会者。

昭和二十六年、ラジオ東京（現ＴＢＳ放送）開局と同時に、ディスクジョッキーとして、日本ではじめての深夜放送を開始した。

当時、ＮＨＫ調のおかたい口調の放送ばかり聞かされていた人々の耳に、そっと耳元で語りかける様なソフトなタッチが人気を呼び、ディスク・ジョッキーという耳慣れない言葉と共に、

大きな反響を呼んだ。

その後、日曜日の午後、二時間にわたるＳ製薬提供になるミュージック・レターの番組を担当し、ディスク・ジョッキーとしての志摩夕起夫を不動をものとした。当時の彼のファンが、コロニアの戦後移住者の中に相当居る筈。

クラシックからポピュラーまで、巾広いコンサート・ステージをあかぬけした名司会でこなしている。

民間放送界ディスク・ジョッキーの草分けである。大正十二年六月十四日生れ、本各・小島行雄。

寺　岡　真　三

大正十四年十二月四日、京都の生れ。

昭和二十三年、早稲田大学政治経済学部を卒業。学生時代より、楽団グラマーシックスを結成、ジャズ・ピアニストとしてラジオ、テレビ、ステージに活躍。人気投票では、常に一、二位の人気を保った。

作曲・編曲法は飯田信夫、トミー・パーマー両氏に師事し、昭

和二十九年、雪村いずみの「はるかなる山の呼び声」の大ヒットで編曲者としての地位を確立した。

昭和三十六年には、フランク永井の「君恋し」で、レコード大賞を、昭和三十九年には「お座敷小唄」で、レコード大賞編曲賞を授賞するなど、昭和四十七年度迄に日本ビクターより授賞したヒット賞は七十二にのぼっている。

今大会にも前回同様、指揮者として参加している。

川田三姉妹の参加をよろこぶ

屋　比　久　孟　清

〝あゆみの箱〟　チャリティショウを日本の一流芸能人十四、五名が、一堂につどって、若葉かおるイビラプェーラの体育館で華やかに催されるということは、思って見ただけでも、われわれの心にホノボノと迫るものがある。このショウが遠いサンパウロで催されるようになったのは只二人の人間の出合いに端を発し、送り出し側と受け入れ側の純粋な人間愛の善意が実ったもので、それ自体一つのドラマと思えないこともないと私は考える。

忙しい芸能人の出演を胸をたたいて引受けたという伴淳さんの自信。

底知れぬ善意の持主でなければ出来ない芸当ではなかろうか。
又これを受けてたった中沢援協会長も〝みてきいて楽しい協力〟の一石三鳥のねらいが、いくらかあったと仮定しても、中沢さんの奥深くかくされている人間愛の心情の然らしめたものと思う。
それだからこそ、コロニアの総意が結集出来、各委員の協力を惜しみなく動員して、万全の受入体制が出来たというものだ。コロニアの宝とはせんなるかなである。
幸いこのチャリティショウに沖縄舞踊家の川田三姉妹も参加協力することになっている。在伯同県人にとって、大きな悦びであり、小さな誇りと思う。送り出し側から国際電話で、沖縄舞踊冠船流家元の川田姉妹の沖縄舞踊はどうか、という申入れが来て決ったとのこと。こちらからの要望ではなく、向うからの申し越しということに、凡ゆる意味を含めてうれしさが倍加した。われわれにとって世界一なつかしい音楽、舞踊である。
それが東京で認められている。又この機会にコロニアの多くの人々に観ていただける。そして慈善ショウに協力出来るということで、私の喜びようもその辺にあるというもので三姉妹を心から歓迎し感謝申したい。
沖縄は歌の島、踊りの国といわれるくらい昔から音楽、舞踊は盛んであり、豊富な島である。舞踊を大別すると古典舞踊、民謡舞踊、歌劇舞踊旅歌踊、組踊等になるが、すぐれた古典音楽

によって奏ぜられる舞踊が古典で、その華やかな美しい舞いの手は、絢爛な衣裳と共に、沖縄舞踊の粋である。川田嬢が演ずる〃花風〃（はなふ）〃仲里節〃がこれに当る。

民謡舞踊は、庶民生活の中から自然に生れた民謡に振付けられた踊りで、農村、山村、漁村の生活感情が歌と踊りに表現され、素朴の中に各々その地方の独特の持味があって、興味津々たるものである。

川田嬢の演ずる〃天川〃（あまかわ）がそれで、男女二人の組合せで熱愛の踊りである。組踊は王朝時代の国劇で、冊封使接待の時に演ぜられ一名お冠船踊りともいわれて、琉球芸能の

最高峯とされているが、これ′は〝能〟とよく似て、能に学んで作られたようである。しかし、能よりもはるかに変化があって面白い。

今度来伯する川田姉妹の御尊父は沖縄芸能の大家で、沖縄伝統の舞踊の本質の上に近代感覚を加味した新作も数多く発表されているようで、〝みやらび大鼓〟〝御手大鼓〟　はそうではないかと期待される。

最後に沖縄舞踊は舞台にしずしずと出て来る時の出羽、舞い終って、余韻を残しながら幕の内へ入って行く後姿になんともいえない味わいがあるのをお見落しないように……　これが沖縄舞踊の妙味というもの……。面白くもない談義を書いてしまったが、多くの観客の方々が見て下さっているということだけでありがたいと思う。幕間いのひとときをこの拙文に目を通して下されば幸甚に存じます。

心うつ『能』の美しさ

宝生流能楽団の聖市公演

矢島　貞
（主婦）

招聘で市当局に協力要請

一九七八年六月二十四、二十五の両日、サンパウロ市立劇場での日本宝生流能楽団の公演は、名実ともに日伯文化交流に相応しいものであった。

この公演もちょうど、日本人のブラジル移住七十年の年だったので、コロニア七十年の記念祭典行事として催された。

次に、この能楽団招聘、公演実現までの経緯をできるだけ簡単に記したい。

重要無形文化財指定、宝生流能楽師の本間英孝氏から伯謡会宝生流の鈴木威氏に、希望者への指導申入れがあった（確か一九七五年八月ごろだったと思う）。その一年ほど前、本間氏は北米ロサンゼルスでの能の公演、指導を終え、帰国に先立ちブラジルのサンパウロでも宝生流の謡曲同好会があることを知って、鈴木氏の許へ立寄られた（当時、私たち夫婦は伯謡会々員ではなかったが、本間氏の仕舞と謡曲指導を見学した）。その時、どのようなお話があったのか、次のロサンゼルスでの講演と指導

後に日時を繰り合わせてサンパウロに立寄る旨の前記の申入れがあったわけである。

その頃は私たち夫婦も伯謡会に入っていたので、本間氏から鈴木氏宛の件に就いての相談に加わったが、ロス～サンパウロ間の往復航空費、滞在費、謝礼などは十名ほどの会員（半数以上が夫婦、定年者。ロスでの宝生流会員は百名前後）では、負担額が多き過ぎて到底不可能である。それは先年の本間氏来聖時の経費も会員がそれぞれ分担したので、今また、それ以上の出費は出来ない相談であった。そこでお断りしようと云う意見と、「今は出来なくとも将来のことも考え、折角のこのチャンスを断ち切らないようにし、日本とブラジル間の文化交流のパイプとして繋いでおきたい」と云う意見に分れた。私たちも勿論、後者の意見に賛成だったが、それが費用の問題だけでなく、他の事情から話がもつれた結果、最終的にはお断りすることになった。

残念だった。しかし私たちの子供を含めた二、三世の人たちに、コロニア日系の人たちに、またブラジル人に高度な日本文化を紹介したい、という気持は押え切れず、ちょうど赴任されたばかりの面識のある国際交流基金サンパウロ事務所長の大久保氏に相談してみた（こうしたケースの文化人派遣についての旅費問題）。同氏から直ちに、「東京の本部と相談してみても良いことですね」と云う返答を得、私たちを夫婦はこれを鈴木氏

に伝えた。

同氏は喜ばれたが、氏自身は仕事の関係上、時間的に全く余裕が無いため、私が直接に話を進めるように依頼された。さらに本間氏一人でなく、能楽団の来聖を本間氏に頼んでは…ということも持ち出された。しかし、その後はいろいろな事情から具体的な話は一向に進まなかった。

この能楽師（団）の招聘要請は、これまで私が切望してきた日本文化紹介の主眼のひとつであった。日夜自問身答の末、ためらいを捨ててやってみようと決心した。間もなく所用で訪日した私たち夫婦は本間氏にお会いして能楽団招聘の件について話をし、出来るかどうか、とにかくやってみようということになり、私はサンパウロで、本間氏は東京で実現に向って働くことになった。

帰聖すると同時に、能楽団招聘のための一部にもと、基金を集め始めた。和田隆司、大橋憲太郎両氏、日本へ能楽勉強のため留学した中尾仁太郎氏と私たち夫婦の五人で、このお金は能楽団来聖時における歓迎費の一部に当てられた。

一方、松田セルソ市議を通じてサンパウロ市当局に能楽団の正式招聘、これに関連する一行の滞在費、謝礼の件などについて申請した。当時の文化局長サバト・アントニオ・マガルジ氏は演劇の教授で『能』に深い関心を持つ人。私たちに側面から尽力してくれたが、赤字財政の市当局は正式招聘のほか謝礼金

と舞台製作費以外の援助は不可能とのことであった。このため滞在費その他は松田ネルソン氏のＴＶプロダクションが『能』の舞台実況を放映することで、ようやく話をまとめることが出来た。

これに対し日本側の外務省、国際交流基金には、多人数から成る能楽団を派遣しても、果してブラジル人に受けるか…という懸念があった。私たちは①一般にも受け容れられる安い入場料②営利を目的としない―などを提案、総領事館、国際交流基金の許可を得ることが出来た（高額の出費をともなう文化事業に対し、外務省、基金側はその許可に当っては実に慎重である）。ようやく国際交流基金の旅費援助となったわけで、これで『能』そのものに対するブラジルと日本側関係者一同の熱意が、正式に認められたといえる（私たち夫婦は、能楽団の招聘をサンパウロ市当局に申請した段階で、伯謡会を離れた）。

三回の公演とも満員の盛況

以上、能楽団のサンパウロ公演は実現の運びとなったが、観客動員の問題が残されていた。サバト文化局長は同公演について各大学市立図書館、各伯字紙などを通じて紹介、市立劇場はビラを制作して各方面へ配布した。

その資料はすべて私が担当、総領事館、日本の本間氏からのものを提供、プログラムの内容説明と翻訳は私と娘が行なった。

こうして、市立劇場における宝生流能楽団のサンパウロ初公演の幕は華やかに揚げられた。当日のプログラムは『羽衣』と『経政』で、出演者は次のとおり（敬称略）。

シテ方　今井泰男＝無形文化財能楽指定者

渡辺三郎、三川泉、本間英孝（以上同）、高橋勇、塚田光太郎、中村孝太郎、小倉敏克

ワキ方　森常好

〔経　政〕二番目（太鼓なし）

季＝秋　所＝山城国仁和寺

梗概　幼少の時から仁和寺の宮に仕え、特に君の寵愛をうけていた平の経政は、一の谷の戦で討死した。君はこの事を不憫に思召され、僧行慶に、経政の遺愛の青山という琵琶を仏前に

供えて管絃講の法事を行なわさせられた。この懇な弔いの中に、夜も更け燈火の影もかすかになった処に、経政の霊が影の様にあらわれて、生存中の楽しかった夜遊（やゆう）の有様を偲び、その憧れの心を述べ、曽って琵琶を弾いて御室の空にその昔が漂った時、大絃小紋が相和して、或は急雨の様にまたある時はささやくような風情に、鳳凰も飛び下りて遊び、衣笠山を月下に望んで美しい舞の袖を返した趣など、いろいろ夢幻的な追憶を述べたりした後、激しい恨みの姿を見られた事が恥しいと語り、燈火を消して給われたと云ううちに、争闘の恨みに責められて苦しみ悩む有様を見せ、再び影の様に幽霊は消え失せるのである。

〔羽　衣〕　三番目（太鼓アリ）

季＝春　所＝駿河国三保松原

梗概　駿河の国三保の松原に白龍という漁夫がいた。或る春の一日、桿を肩に釣に出てみると、浜辺の松に見馴れない美しい衣がかかっている。色香妙にして霊香あたりに薫じて唯の衣でないので、家の宝にと思ってこれを取って家に帰ろうとすると、其の衣は私の物だと呼びとめる声と共に、美しい女が現われ、それは天人の羽衣でたやすく人間に与えられないと云う。

白龍は天人の羽衣と聞いていよいよ喜び、国の宝ともなるか

ら衣は返されないと云うと天女は羽衣がなくては天上に帰ることが出来ないと、雲の流れ雁の渡る様を羨んで泣き悲しんだ。白龍は余りにも痛ましく思い、天人の舞を見せれば此の衣を返すと云うと、仕方なく天人は羽衣を身にまとい、天上界の有様を述べ、舞をまい、君が代の限りなきことを寿ぎながら、次第に空高く舞い上がり、遂に富士の彼方の霧にまぎれて見えなくなった。

囃子方　小鼓＝福井啓次郎、太鼓＝寛鉱一
笛＝寛三男、太鼓＝鬼頭鬼太郎

以上の一流の先生方による本格的なお能をたまたま日本移民七十年の祭典行事として催されたのは、実に嬉しいことであっ

た。また三回にわたる公演とも満員（うち約八割はブラジル人）という有様で、特に第一回目などは遠くポルト・アレグレから来た数十名の大学生は、天上桟敷からではよく観られないからと、下の階の席が満員のため通路に坐って観劇するというほどの大成功を収めた。

左から今井泰男団長、三川泉副団長、本間英孝氏

なお、この能楽団来伯公演にお助力、協力下さった方々の芳名を改めて記しておきたい。

サンパウロ市文化局長アントニオ・マガルジ、総領事館首席領事和田規矩男、国際交流基金サンパウロ事務所長久保和朗、州知事補佐官田村ワルテル（公証翻訳人として、本間氏より私

への日本文の委任状を翻訳していただく)、和田隆司、大橋憲太郎、中尾仁郎、千阪征彦（女婿、マガルジ局長との交渉、伯字紙記者との会見に通訳、また、市に提出する文書の作成)、同裕子（娘、通訳)、矢島新一郎（夫、通信、国内・国際電話、文書一切のコピー費用、揚幕布代負担）の各氏。

また、一人でも多くの人に観てもらいたいと思い（特に日本人、日系のために)、劇場側の諒解のもとに商銀本店と市内支店で入場券を扱ってもらうことを倉持肇同行重役にお願いし、便宜を計っていただいた。

さらに、私自身の忘れられない思い出の仕事として、能舞台の設計、正面の鏡板の松の絵、揚幕作成を記しておきたい。鏡板は、千阪の家の庭で画き上げて劇場に運んだものである。予算ぎりぎりの舞台作製で私は可能な限りのエネルギーを燃やした。あのような働きはもう再び出来ない。

最後に、一主婦の私の信用証明書として、要望書とともに市議会に提出され、また、劇場借用申し入れがスムーズに運んだのは、移住六十年祭のサンパウロ市立劇場での日本古典芸能上演のプログラムであったことも記しておきたい。

（一九八四年十二月末日・記）

〔著者略歴〕一九二一年北海道小樽市に生る。三八年北海道庁立小樽高等女学校卒業、家族とともにブラジル移住、六一年

ころよりブラジル人向け日本文化紹介に尽力邦字紙に随筆、所感を投稿。画展開催、七五年サンパウロ市パンアメリカン美術学校卒業、八三年著作自費出版、七七年日本宝生流入門、重要無形文化財指定宝生流能楽師、三川泉門下。

「奇蹟の人」大島彰さん
全盲のエレクトーン奏者が訪伯

阿部　三郎
（前在伯群馬県人会々長）

自弁で演奏旅行の幕を切る

日本が生んだ全盲のエレクトーン奏者、大島彰さん一行の搭乗するパンナム機がサン・パウロ市のコンゴニャス空港に舞い降りたのは一九七九年の九月十九日、快晴の午前九時三十分。今からちょおど五年前のことになるが、これが大島さんの初回の訪伯であった。

一行の構成は、大島さんの後援会「日本の心を歌う会」の岡部恒七会長、司会者の五十嵐由人、付添の萩原清六、同夫人、それに記録写真班の川上喜人の諸氏六名であった。

疲れを知らぬ大島さんらの一行は、この日からほぼ二週間に

わたる精力的な演奏旅行の幕を切って落されたが、その足跡を辿ってみると、

▽九月二十日＝サン・パウロ市内発行の三大日系新聞を訪れ、表敬挨拶す。

▽同二十一日＝二十二の両日、一行は老人週間の年次慰労大会に参加し、大島さんのエレクトーン演奏は絶賛を博す。場所は新築の在伯沖縄県人会舘、参会者は通算約三千人。

▽同二十三日＝サン・パウロの衛星都市サント・アンドレ文協会舘において独奏会を催し、参会者に深い感銘を与える。

▽同二十四日＝一泊の予定で北パラナの雄都ロンドリーナへ出張し、市内の文化会館において独奏会を催し、大成功裏に所期の目的を完遂す。群馬県人会本部より鈴木会長、広瀬副会長同伴。

▽同二十七日＝「生長の家」本部において特別独奏会を催す。

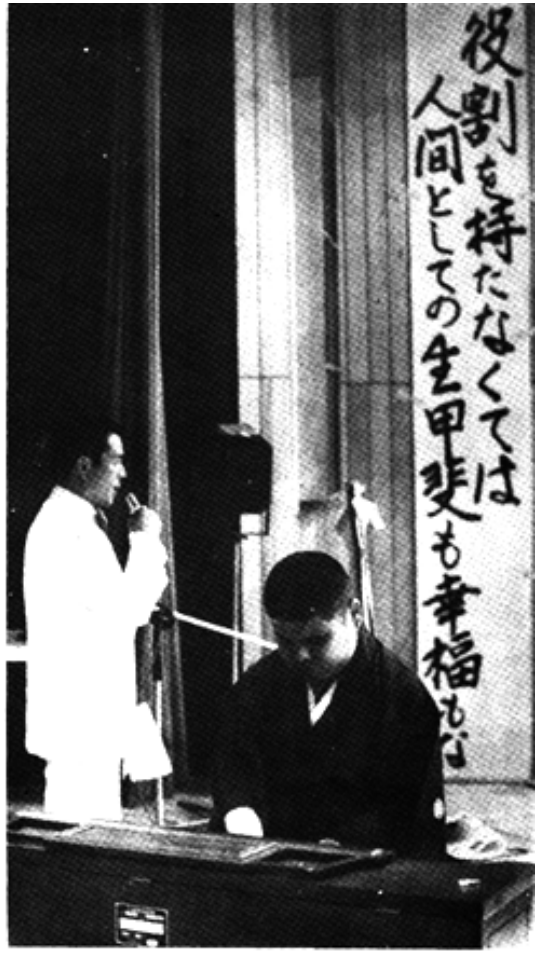
▽同二十八日＝老人ホーム「憩の園」を訪問して、身寄りのない老人たちの慰安と激励の演奏を行ない、その帰途「パードレ・シコ盲人学校」を訪問して身障児のため演奏す。

▽同二十九日＝サン・パウロ市内のブラジル日本文化協会の記念講堂において、サン・パウロ日伯援護協会の主催、在伯群馬県人会の協賛による昼夜二回にわたるチャリティーショーに出演し、満堂の聴衆にさわやかな感動と不滅の印象を与えて終演す。この日の演奏がメイン・エベントであり、最高の盛り上

がりであった。

▽十月一日＝上記のハード・スケジュールをみごとに完遂して、大島さんの一行はリオ経由で帰国の途についた。

以上が、一行のスケジュールのあらましであるが、これだけでは味も素っ気もなく、満堂の聴衆が感動の渦に捲き込まれ無我の境地に引込まれた現場の模様が伝えがたいので、以下、前文補足の意味合いで肉付けを試みたい。



情感をこめて熱演の大島さんと司会の五十嵐さん
老人週間の演奏会で…

「日本人の心の歌」で一つに融け合う

前出の九月二十一、二十二日の二日間にわたって催うされた一行の訪伯最初の演奏会、つまり老人週間の慰労大会の印象がもっとも鮮烈であった。

この大会終演の翌日、邦字三紙はいずれも大きなスペースをさいて絶賛の報道記事を写真入りで載せているが、その一例として「日伯毎日新聞」は、その日の模様を次のように伝えてい

る。

《正午から午後一時二十分まで、話題の大島さんの演奏。しんみりと胸に迫るあの曲、この曲をエレクトーンで情感いっぱいに聞かせてくれる本格派の演奏者である（メドレーのトップ曲「戦友」のメロディに聴衆はおもわずに手拍子して唱和、舞台と客席が渾然と一体となった。なんとも心のあたたまる場面をみせた。曲はナツメロ「波浮の港」から「籠の鳥」「赤とんぼ」「七つの子」とつゞく。お別れの三曲、「二人は若い」「炭坑節」「荒城の月」で大島さんの演奏は終った。

失明のエレクトーン奏者、大島彰さんの「荒城の月」の余韻がしずかに消えた時、期せずして「日本の心の歌」で一つに融け合った聴衆の拍手が大きな波となってステージに押し寄せた。

盲目という致命的な障害にもめげず、音楽に光明を見出した大島さんの生きざまと心をこめた演奏が出席者全員の胸に清烈な感動と、生きる喜びと新たな勇気を与えたようだ。会場の壁にある垂れ幕の文字は、

「役割を持たなくては、人間としての生き甲斐も幸福もない」

とあった。》

なお、在伯群馬県人会の前会長、阿部三郎は、あの日の感動を「パウリスタ新聞」に、次のように寄せたのである。

大島さんのエレクトーンを聴く

大島さんの熱心な訪伯の申し出を受けたのは、昨年の九月末

のことであった。

あれからちょおど一年の歳月がたって、去る九月二十一日、二十二日の両日、サン・パウロ市内の沖縄県人会館で開催された第十回老人週間の催しに、大島さんのエレクトーンが参加し、両日の聴衆通算二千五百余名の人人に、近年稀にみる清浄な感銘を与えたことは、すでに邦字各紙に華々しく報道されたこと故、読者もご存知のことと思うが、私もその聴衆の一人として、ほんとうに強い感銘を覚えたことを告白する。

大島さんの心意気に打たれて県人会では現地における一行の受入れを引受けたものの、本人の人柄を知るまでは、一抹の不安を抱いていたことは事実である。

果して、どの程度にエレクトーンを弾きこなすものやら、実力のほどが全くわかっていなかったので、県人会の役員たちも半信半疑の心情であったが、老人週間の初日演奏会で大島さんの奏でる妙なるリズムに接して、完全に魅了されてしまい、それまで抱いていた懸念は一気に雲散霧消した。

人のハートに泌みこむ音楽とは、まさにこれであろう。感激のあまり不覚の涙を流した人が大勢いたが、私自身もその一人であったことを告白しなければならない。今更のように、音楽が持つ偉大な力に敬服した次第である。

大島さんがこの会場で奏でた音楽は、いわゆるクラシックな高級難解なものは会の性格上避けて、私たちが青年時代から聞

き覚えている歌謡曲が主であった。巷間で親しまれている「のど自慢」などでよく歌われているものなんであるが、その平凡な曲がひとたび大島さんの手にかかると、何んと、まか不思議な情感がメロディーに乗り移ってきて、聴く人のハートに迫ってくるのである。

歌への一途の情熱、激しさが歌詞の意味を倍にしてハネ返してくる。歌への純粋な想いがフツフツとして脈打ち、忘れられようとしている日本人の美しい情操をまざまざと蘇らせてくれるのである。

大島さんは、生れた時からの盲目であった。

過酷なハンディを背負って生れながら、苦難を克服して現在の澄み切った心境に到達するまでには、所詮、第三者には理解し難い苦闘の途を歩んでこられたことと想うが、本来から言えば、他人の被講のもとに生活する身体障害者でありながら、日本とは地球の反対側に住んでいるブラジルの日本人を慰問激励の目的をもって訪伯され、しかも、一行の往復旅費自弁、その上、チャリティー・ショーの拠金を全額ブラジルの慈善団体に寄贈したという崇高な志に対し、私たちは心から敬意を表したい。

聴く人の心底に深い感銘

さて、この大島彰ショーの業績について、第三者としての総括的評価をするならば、一県人会単位の主催する行事としては、

全く望外の素晴らしい成果をあげ得たものといっても決して過褒にはないだろう。

そこで、この一連の行事が何故にこれほど大きな反響を日系社会に与えたか、そして、あのような爽やかな印象を人々の胸に深く刻みつけることに成功したのか、その由って来る原因について、一応の分析を試みると、その主たるものは下記の四点に絞ることができると思う。

（一）大島さんの一行が、訪伯を思い立った動機と演奏会開催の趣旨が、あくまで清純無垢であって、利潤を目的とする興行的な意図が全然無かったこと。

一行六名の往復旅費は自弁、その上、ショーの収益は現地の慈善団体に寄付したいという事前からの申し出がこのことを裏付けている（注、慈善団体に対する寄付金は邦貨四百五十万円に達したと公表されている）。

（二）音楽に対する大島さんのひたむきな情熱と、音感の正確さが比類稀であったこと。

世の中には、エレクトーンを巧みに弾きこなす人は、他にも多いことと思うが、奏者自身の胸に秘めている美しい情感をメロディーに乗せ移らせて、聴く人の心の底にしんみりと泌み込ませるほどの技術を身につけている人は、そう多くはいないだろう。大島さんこそは、その稀少価値を持った人であったと信ぜられる。

（三）援護協会、救済会、老人クラブ連合会その他多くの有力日系諸団体が、この行事開催の趣旨に快く賛同され、誠心誠意の積極的後援が得られたこと。

（四）日系の三邦字紙が、快よくこの行事に協賛し、各地における演奏会の模様を如実に報道してくれたことが、人気の盛り上げに大きく影響したことであり、報道陣の熱意が、決定打となったものと思われる。

州政庁で華やかに演奏会

かくて、大島さんの初回訪伯時の演奏会は誠にすがすがしい余韻を残して、有終の美を飾ったわけであるが、その反響は時日とともに全伯に散在する日系人の間にも大きな波紋を描いて隅々にまで広まっていった。そしてこの夜の演奏を聴く機会を逸した多くの人たちからは、是非とも、大島さんの再度の訪伯を実現して欲しいという熱心な申し出が県人会に続々と集中して来たので、同会でもこれを放置するわけにもいかず、役員会では慎重協誠の結果、この人たちの熱意に応えて、これが実現に努力することに踏み切ったわけである。

ただ、ここで申し合せたことは、前回の経験に鑑み、大島さんの音楽を日系社会にのみ止めておくことはいかにも惜しい、音楽にはもともと国境などない筈、よって、次回の企画には一般ブラジル人を対象とする演奏会を一枚加えることにし、日伯

文化の交流に一役買って出ることにした。

そこで、まず、この企画について時のサン・パウロ州知事のパウロ・マルフ氏に直々申言したところ、同知事はこの提案を即座に快諾し、この企画こそ群馬県との姉妹提携行事の一環として最もふさわしい催しであるから州政府としては協力を惜しまない。知事の名をもって公式に招待状を差上げる心組であり一行の州賓待遇も考慮するから、早速、その実行手配を推進されてはどうかという、予期以上に積極的な知事の意向であった。

これに勢いを得て、いよいよ話は煮詰り、大島さんの一行が音楽使節団として華かに再渡伯が実現したのは、一九八一年九月中旬のことであり、初回の訪伯からちょおど二年目のことであった。

この度の一行のメンバーは、団長格として「日本の心を歌う会」の顧問・清水ます江女史（清水知事夫人）、同会の岡部恒七会長、同村松博文副会長、それに県庁から湯浅一郎参事と一倉登参事が随行、前回と同じく六名の構成であった。

前後十二日間にわたるサン・パウロ滞在であったが、この間の一行のホテル滞在費、交通費（州政府の公用車専用）は、すべて州政府の負担となった。

この回のメイン・エベントは、企画どおり州政庁バンディランテス宮の大サロンにおける州知事夫妻主催による豪華けんらんな大島さんの独奏会であった。

日伯の名士、顕官とその家族約一千名を迎えた会場で大島さんの奏でる日本の民謡は、国境を越え、人種や言語のへだたりを超越して、聴く人の胸底に深い感銘を与え、なごやかな情感をかもし出して魅了したことは、閉会後の州政府饗応のカクテル・パーティーの席で参会者の間でささやかれた会話にも聴取されたと聞いている。

この度の本使節団の主要目的が、このバンディランテス宮の演奏令におかれていたことはいうまでもないが、その前後の日時を有効に利用して、精力的に各地方都市を巡回して演奏したが、いずれの土地でも旋風のように熱烈な感動を巻き起こしたことは、全く瞠目に値する事績であろう。その足跡を日付けによって辿ってみると……

▽一九八一年九月十九日　午前九時半、パンナム機にてサン・パウロ市コンゴニャス空港着

▽九月二十日　県人会主催の歓迎会に一行出席し、特別演奏

▽九月二十一日　休養

▽九月二十二日　老人週間の慰問演奏

▽九月二十三日　目伯援護協会主催のチャリティー・ショーに参加演奏

▽九月二十四日　サント・アンドレー市民会館における公式演奏会

▽九月二十五日　州政庁大サロンにおける公式演奏会、午後

八時より約二時間

▽九月二十六日　生長の家本部主催の慈善演奏会

▽九月二十七日　モジ・ダス・クルーゼス文化協会主催の演奏会

▽九月二十八日　サン・パウロ市内の盲学校を訪問しての慰問演奏

▽九月二十九日　北パラナ、ロンドリーナ市厚生会主催慈善演奏会に参加

▽十月一日　休養

▽十月二日　群馬県人会主催送別会での特別演奏（於・県人会館）

▽十月三日　午後七時半、コンゴニヤス空港より日本向け帰国の途につくなどであった。

（一九八四年十二月・記）

日毎が戦後初の芸能団

各地公演で大成功収める

実現までに約一年間の交渉も

戦後初の〝大型芸能団〟　―小唄勝太郎、三味線豊吉、東海林太郎、篠田実とその実子・房信―の一行五人が日伯毎日新聞

社（以下、日毎）の招聘によりサンパウロ入りしたのは一九五一年の一月九日であった。一般ではこれら一行を「第一回芸能使節団」と呼んでいたようだが、その実現までには約一年に近い日本側との交渉が必要だったと云われているほどの難事だった。

日本で芸能人との話合いの〝窓口〟に当たったのは戦前の同盟通信のリオ支局長であった椎野豊。何はともあれ約二か月半にわたるサンパウロ公演のため、各芸能人のスケジュウルの調整、出演料の問題、その他いろいろのこともあったようだが、それが実現に至っただけ、日毎側の喜びも〝項点〟に達してか、一月四日付の同紙社会面トップは

飛行機に乗って　海を渡るメロディ　勝太郎ら　今日出発！
四日午後二時半　羽田から飛び立つ

と、およそ次のように報じている。

「本社が招聘の小唄勝太郎、三味線豊吉、東海林太郎、篠田実、同房信ら一行五人の芸能団は、今日午後二時半、羽田からサンパウロ向け出発する。

この芸能団の訪伯公演に当っては、日本全国のファンから激励の電話、電報が数多く寄せられている。その一例として昨年十二月十七日付の東京新聞を見てみよう。

芸能人のアメリカ巡業が流行の折柄、今度はブラジルへ東海林太郎、小唄勝太郎、とんち教室の三味線豊吉、浪曲の篠田実、同房信らが出かける。戦後、その五人が南米を訪問するのはこれが初めてで、一行は日伯毎日新聞社から招聘されて正月四日に出発し、空路ハワイ、米本土を経てブラジルに四十五日間滞在し、在留邦人間で公演する。その間、とんち教室は紅一点の豊吉が欠席するので、代りの三益愛子が新入生として出席するはず」。

遥かなる母の国の歌声を載せ

いよいよ第一回芸能使節団のサンパウロ入りである。一月十日付の日毎紙の報道を見てみよう。

忽ち花輪の歓迎陣、来た我らの芸能使節　熱狂的な出迎え

パン・エア機　午後二時五分コ空港着

「数日来の雨空もカラリと晴れてさんさんと降りそそぐ陽光の青空には、純白の綿雲が輝やいている。この日、一月九日、コンゴニャス空港の電気時計は午後二時五分を指している。

来た！！！　遥かなる母の国の歌声を載せ、パン・エア機の巨体は刻々迫り鮮やかに着陸。

開かれたドア……、おお勝太郎だ！！！東海林太郎だ！！！続いて三味線豊吉、篠田父子、一瞬ざわめきを止めて固唾をのむ歓迎の人の群……。秒一秒、次の瞬間、人波の中から万雷の拍手が起こった。かくして我らの芸能使節の一行は無事サンパウロの土地を踏んだ」。

以上が社会面のトップ記事。ほかに小唄勝太郎の「歌は皆様のお好み次第」、東海林太郎の「精いっぱいうたいたい」、三味線豊吉の「三味線のよさを皆様に伝えたい」、篠田父子の「空港での歓迎は一生忘れない、頑張ります」、などと各自の抱負談で社会面は芸能使節団の歓迎一色で埋められている。なお、一行の宿舎は当時としては〝手ごろ〟のサンパウロ・ホテル。同年九月に来聖、各地での公演に失敗、帰国旅費の稔出もままならず、コンデ街の某ペンソンに泊まっていた某芸能団一行に比べ、破格の待遇といえそう。

連日とも大入り満員の大盛況

サンパウロでの公演は一月十七日（午後八時）、十八日（同上）、二十日と二十一日は午後三時、八時の二回で計六回。場所はコンソラソン街のオデオン座（サーラ・アズール）であった。

伴奏は丸山昌彦指揮のサンパウロ管弦楽団。

歌手の東海林太郎（右）とサンパウロ管絃楽団の丸山昌彦氏。

一行はサンパウロ到着の翌十日から連日、オデオン座その他でサンパウロ管弦楽団との合同練習に入り、十七日からの第一回公演に備えた。

参考までに記すと、第一回公演のプログラムは、およそ次のようなものであった。

歌　の　花　籠

第１部　篠田実　浪曲「紺屋高尾」

第２部　小唄勝太郎　柳の雨、木曽節、勝

太郎おけさ、会津磐梯山、島の娘
東海林太郎　国境の町、上海の街角で、湖底の故郷
三味線豊吉　たぬき、目で見る歌「愛のスウィング」
あるいは「あきれたブルース」
第３部　小唄勝太郎　清元小曲「おそめ」
東海林太郎　お夏清十郎、すみだ川、むらさき小唄、
野崎小唄、赤城の子守唄
フィナーレ　全員　東京音頭（踊入り）
入場料は普通席六〇、上等席八〇クルゼイロスで半額なし。十四日から前売券の発売だったが、その人気はもの凄く僅か四日間で早くも約一万枚を売り切り、市内のそこ、ここに〃闇の入場券〃が出回ったほどだったという（なお、当時の日毎紙の購読料は年間二〇〇クルゼイロスであった）。
十七日の第一回公演の盛況さを、同十八日付の日毎紙から覗いてみよう。

豪華　歌謡と浪曲の夕
描き出した美と昂奮　場内は熱狂のルツボ　沸き立つ絶讃！！
待望の豪華「歌謡と浪曲の夕」は、昨夜オデオン座で絢爛豪華ここに極まれる初日の幕を開けた。劇場に押し寄せるファンの数は無慮三千近く、市内は勿論、サントス、ソロカバ方面の

人々、また数日前から市内で泊り込みの人々達。さすが収容人員尨大をサンパウロ市に誇るオデオン座も人、人、人の波に身動き出来ぬ状態で、場内整理員は収拾つかぬスシ詰めに右往左往して汗だく、声をからして観客整理に大奮闘。開演一時間前にして大入満員札止めの大盛況であった。

二日目の十八日も満員、二十日の三日間で入場者は八千人を突破、最終日の二十一日も客足は衰えず……とあるから四日間六回の公演が動員した観客は一万二、三千人に達したもようである。

地方でも予想以上の人気

我らの芸能使節団の地方公演は、二十二日の近郊マウア（シネ・サンタ・セシリア）を皮切りにモジ、ノロエステ線（ミランドポリス、アラサツーバ、プロミッソン、リンス）パウリスタ線（マリリア、ルセリア、ポンペイア、ツパン）、パラナ州（ロンドリーナ、ロランジア、アプカラナ、アサイ）などの各地で開かれた。このうちアラサツーバ、ロンドリーナでは二日間二回の公演で、戦後初の芸能団であっただけ、いずれも大盛況だったといわれている。

なお、一行は三月三、四の二日間、オデオン座での「お別れ公演」（両日とも超満員）を終え、五日午前十時半コンゴニャス空港発のレアル機で無事帰国した。また、一行の来伯公演は

約五十日間で二十か所、延べ六十余回を数えた。この日毎紙による第一回芸能使節団の大成功に刺戟されてか、その後、芸能団の来伯公演が頻繁になったことは、一般のよく知ることである。

（文中・敬称略）

古賀、市丸、虎造らが続く

小唄勝太郎、東海林太郎、三味線豊吉、篠田実親子らの第一回芸能使節団による各地公演で予想外の好成績を手にした日毎社は、第一回芸能使節団が帰国して僅か三か月後の五一年六月十四日から十九日まで六日間、市内のクルツーラ・アルチスチカ劇場に第二回芸能使節団を迎え、華やかに〝歌の花籠〟の幕を開けた。

一行は作曲家として有名な古賀政男に同丈晴、市丸、歌手の藤原千多歌、浪曲の広沢虎造と三味線の萩原稲子らの六人。サンパウロ公演のプログラムは、およそ次のようなものであった。

第1部　軽音楽演奏「丘を越えて」、指揮古賀政男

歌謡　あの花とこの花、恋の曼珠沙華、長崎物語＝藤原千多歌

舞踊小唄　春雨　歌と踊＝市丸

歌謡　影を慕いて　ギターと歌＝古賀政男、酒は涙か溜息か、誰か故郷を思わざる　アコーデオン＝古賀丈晴

第２部　浪曲　森の石松＝広沢虎造、三味線＝萩原稲子

第３部　扮装歌謡ショウ　第一景青春の丘歌＝南の花嫁さん、高原の乙女、湖畔のエレージ。コミック・スナップ＝モグラの歌、モヤシの照（藤原）。歌＝チャッキリ節（市丸）、二人は若い、ハイキングの歌（藤原）。

第４部　サクラ・サロンにて　音楽＝麗人の歌。歌謡＝三百六十五夜（藤原）、とんからがってプンプン（市丸）、三味線ブキウギ（静子）、緑の地平線、トンコ節。全員合唱「ブラジル音頭」、以上指揮・古賀政男。

市丸の華麗だった舞踊小唄　春雨　写真

なお、入場料は第一回公演の際のように上等、普通席の区別はなくて均一の六〇クルゼイロス。これは数日後からオデオン

座で公演を予定されているブラジアン商事の「松旭斉天勝一座」に対するコロニアの〝前人気〟が予想以上に大きかったことから、主催者側が配慮したのではないかと思われる。

第一回目と比べ反響は…

第二回芸能使節団によるサンパウロ公演の反響は第一回に比べ、あまり派手には報じられていない。しかし、古賀政男、市丸、広沢虎造ら、当時の第一級芸能人を擁していただけ興行的には成功裏に終わり、一行は近郊のリベイロン・ピーレスを皮切りとして地方巡業の旅に出た。

おもな公演地はバウルー、ゼツリーナ、カフェランジア、リンス、プロミッソン、ビリグイ、ビラッキ、アラサツーバ、チエテ移住地、アンドラジーナ、バストスその他。約一か月半にわたる地方巡業から帰聖した一行による〝お別れ公演〟は、八月三、四、五の三日間、プログラムをすべて更新して同じクルツーラ・アルチスチカ劇場で開催された。三日間四回興行、幸い連日とも超満員、一行は張り切って舞台をつとめ、その数日後、数多くのファンに惜しまれながら帰国の途についた。

第一、第二回芸能使節団の来伯公演について、日毎社の中林昌夫氏は、およそ次のように語っている。

「今となっては全く笑い話のようだが、新聞紙上で芸能団の来伯公演を発表したところ〝本当に来るのか？〟はよいほおで、

ひどいのになると〝アメリカに買われたニセモノだろう……〟など巷の話題となった。また東京とサンパウロを結ぶ旅客機は四発プロペラのコンステレーションで、実に五日を要した。

このため××日午後コンゴニャ空港に到着の予定、と発表すると、またもや〝予定というだけで本当か…〟というデマも流された。

興行的な面は亡くなった父が一切取仕切っていたので詳しいことは知らないが、損はしなかったようだ。いずれにせよ第一陣、第二陣とも地方を約五十日間にわたって慰問し、明るいコロニアを取戻す一端ともなった、といえる催しであったことはいうまでもない」。

〜〜〜〜〜〜　◇　〜〜〜〜〜〜

▽追記　一九五一年に来伯した芸能団は前記日毎の第一回、第二回に加え、ブラジアン商事の「松旭斉天勝一座」―本史、垣間見た興行界、二三一ページ参照―のほか、三浦愛蓄堂の松平晃一行、南米商事興行部の〝人間ポンプ〟（有光伸男と映画「小判鮫」）などと多士済々、さぞかしコロニアもその応接にいとまがなかったのでは……。

（文中敬称略、前田　正覚）

日伯が招いたおもな芸能人のプロフィル

小唄勝太郎

本名、真野かつ。美声がみとめられて新潟芸者から東京の葭町へ移り、ビクターでレコード歌手になったのが昭和六年（一九三一）。デビュー曲は『磯の源太』だが、のちの『佐渡おけさ』で人気上昇、三三年一月新譜のレコード『島の娘』が大ヒットして、小唄勝太郎の名は全国的になった。

『島の娘』のうたいだしは〈ハー島で育てば〉だが、この歌のヒット以後、勝太郎自身のものもふくめて、芸者出身の歌手の歌には、ハーといううたいだしがふえて、そういう歌を〝ハー小唄〟というようになった。

当時はテープがないので『島の娘』は録音には原盤を三十七枚もとり直したそうだが、勝太郎の芸熱心はこの一事でもわかる。

また、新潟なまりがぬけなくて、ネオンサインとうたうべきところが、ネオンサエンになるので、なまり直しにも大いに苦労したと当人が語っている。

『佐渡を想えば』『東京音頭』『柳の雨』『明日はお立ちか』等ヒットした曲も多いし『柳の雨』などは録音以来四十年、舞踊用として今も売れている。

（加太こうじ・風俗評論家）

明治三七年（一九〇四）～昭和四九年（一九七四）新潟生。

流行歌手。十三歳で芸者となり、のち上京。葭町より出て昭和六年『磯の源太』と『佐渡おけさ』でデビュー。八年『島の娘』が大ヒットとなり市丸とならんで昭和前半の歌謡界に君臨、市勝時代をきずく。

東海林太郎

東海林太郎を有名にしたのは人の知るとおり昭和九年（一九三四）の『赤城の子守唄』だが、彼は自分が最も好きな歌は『国境の町』だと言っていた。満州で八年間暮したので一種の郷愁を感じたのであろう。しかし、鉄嶺の図書館長まで勤めた満鉄時代の生活はあまり面白くなかったようだ。

学生時代からの歌手志望の初志を捨てきれず、満鉄をやめて帰京した当時、彼は退職金で満州から腕のいい職人を二、三人連れて来て、弟と〝ぎょうざ〟の店を始めた。もし『赤城の子守唄』のヒットが出なかったらそのまま中華料理店のおやじにおさまっていたかも知れぬ。

売り出しの頃、地方巡業の際、客席から〝トーカイ（東海）〟とかけ声がかかった。彼はすぐこれを受けて「トーカイリンタロー改めショージタローです。よろしく」、と挨拶した。

服装についてうるさかった戦時中、エンビ服で『麦と兵隊』を歌ったあと、警視庁に呼ばれて注意された。彼が「エンビ服は

西洋の紋付ハカマのようなものだ。貴方の着ている洋服も西洋のものではないか」、というと係官曰く、「まあ気が向いたら国民服も着て下さいよ」。

直腸ガン手術三回、その度に再起不能を伝えられたがよく病魔を克服して死ぬまで歌い続けた。

テレビ時代でも終始、直立不動。その歌には古武士の風格があった。

直立の姿勢で残す東海林ぶし

（丸山鉄雄・音楽評論家）

明治三十一年（一八九八）～昭和四十七年（一九七二）、秋田生。早大卒。流行歌手。満鉄に十年勤続ののち、昭和八年（三三）時事新報主催の音楽コンクールに入賞し、歌手生活に入る。九年（三四）『赤城の子守唄』を歌い大ヒット、以後数々のヒット曲を世に送り出した。戦後三たびガンを患ったが、歌手としてカムバックし、四十年（六五）紫綬褒章を受けた。

古賀　政男

ラジオ、テレビの〝なつメロ〟番組に最も多く歌われているのは古賀メロディであろう。

大正の演歌師のバイオリンに代えてギターを使用、昭和の演歌調歌謡曲を作ったのが古賀政男である。

レコード歌謡の初期、コロムビアに〝新人泣かせの半兵衛〟といわれた竹中という録音技師がいた。

新人の歌手や作曲家には意地悪で、吹き込みの際、スタジオの中に電気もつけず、〝こんな唄ははやらない〟などと面と向って悪態をつく始末だった。

古賀政男も藤山一郎も最初は泣かされたクチだったが、この技師が『酒は涙か溜息か』の出来ばえにはめずらしく感激、吹き込みが終ると自分でビールを三、四本スタジオに持ち込み、スタッフと乾杯したという。

古賀政男は幸か不幸か女性には恵まれなかった。若い頃に惚れた彼女がいたが、その女は亭主持ちだった。山田耕作夫妻に仲人を頼んで正式に結婚式を挙げた松竹少女歌劇団のプリマドンナとも一週間で別れている。

古賀政男の古くからの友人・山川武氏によれば淋しがりやのロマンティストだという。

しかし真に心を許す友はいないようだ。

田中角栄は国有地をころがして目白に田中御殿を建て、古賀政男は五線紙の上にお玉杓子を並べて、渋谷上原に古賀御殿を構えた。

両者共に若い頃は貧乏で苦労した立志伝中の人物である。

田中御殿の綿鯉はマスコミのサカナになったが、古賀御殿のお玉杓子は古貿メロディとして永く大衆の心の糧となっている。

古賀御殿　誰か印税想わざる

（丸山鉄雄・音楽評論家）

明治三七年（一九〇四）福岡生。明大卒、作曲家。日本作曲協会会長。昭和の流行歌作曲家の大御所。数えきれぬほどのヒット曲を持つ。昭和五年（一九三〇）のデビュ曲『酒は涙か溜息か』が大ヒット。ほか代表作に『影を慕いて』『人生劇場』『湯の町エレジー』『丘を越えて』など。

広沢　虎造

なにしろ三つの子供までが、よくまわらない舌で、「バカは死ななきやなおらなィ」とやっていたのだから『森の石松』の人気はすごかった。

神田ならぬ芝生まれの江戸っ子でありながら、関西で修業し

た虎造売り出しのきっかけが例の『清水次郎長伝』だが、三代目神田伯山のところに通いつめてようやく自分のものにした。

浪花節を地でゆく義侠心の持ち主で義理人情を重んじたための興行上のトラブルから、籠寅と先代山口組組長の間で抗争事件をひき起こしたことがある。一世を風靡したひとだけに伝説も多く、大正三年（一九一四）に建設された東京駅正面の大時計は虎造が職工時代に取りつけたとか、悲惨な晩年を送り、浅草で行き倒れになり警察に保護されたあげく誰ひとり見とるものもなくさびしく息を引きとったとか、まことしやかに伝えられたものだが、いずれもほんとではないという。

（矢野誠一・演芸評論家）

明治三十二年（一八九九）＝昭和三十九年（一九六四）東京生。本名、山田信一。浪曲家。関西で先代広沢虎吉に入門、二十二歳で真打。木村重松の関東調と、神田伯山の講談をたくみに取り入れ独持の虎造節によって一世を風靡、特に『次郎長伝』は有名。

〜〜〜〜〜　◇　〜〜〜〜〜

以上は、いずれも文芸春秋デラックス増刊、（一九七五年二月、文芸春秋㈱発行）の『昭和５０年をつくった７００人』から転成、写真とも。

松竹歌劇団が来伯
サンパウロ、リオで大好評…

戦前、戦後を通じて初の大型芸能団、といっても過言ではない松竹歌劇団（ＳＫＤ、団長・六車進、以下スタッフ四十四人）によるサンパウロ、リオ両市における来伯公演は一九六六年八月十二日から約三か月間にわたる長期間にわたったほか、出演者が全員女性という〝異色〟のものであったため、コロニアは勿論のこと、広くブラジル大層にも大好評をもって迎えられた。

松竹歌劇団の来伯公演は、サンパウロの興行師アブロン・カッネルソンによって実行に移された。彼はその前年の一九六五年、当時ブラジルのボクシング界でバンタム級のチャンピオンであったエデル・ジョフレ選手（現サンパウロ市議）を日本の同級チャンピオン（名前は失念）に挑戦させるため訪日、ジョフレ選手は不運にもこの一戦に破れたが、アブロンは東京に滞在中、浅草の国際劇場で観た松竹歌劇団の「東京踊り」の素晴しい舞台に魅了され、帰伯直前に松竹本社幹部とブラジルおよびアルゼンチンにおける公演について話合い、その後いろいろと問題はあったが六六年八月に、ついに実現させたもの。

振袖姿も艶やかに３７人の美女

当時の日毎紙によると、松竹歌劇団の一行四十五名はサンパウロのコンゴニヤス空港に八月十日午前八時十五分すぎ着、「松

竹歌劇団着く、東京踊りの美女三十七人、振袖姿も艶やかにサンパウロ入り」、とＶＡＳＰ機を背景にした美女らの四段抜き写真を大きく載せている。また空港ロビーでは大幹部の千草かほるが一行を代表しての、「私たちを歓迎いただきまして、大変有難うございました。十分に練習し、ベストを尽して立派な舞台をつとめさせていただきます」、との挨拶まで紹介している。

市内パラマウント劇場における公演は八月十三日からだったが、その前日の十二日午後九時から同劇場にナテル州知事夫妻、サンパウロ市長夫妻、演劇、音楽、美術および報道関係者ら多数を招いて豪華絢爛なショウを披露、割れるような拍手を浴びた。

一行のショウは火から金曜日までは午後八時と同十時半の二回、また土・日曜日の二日間は午後四時、八時、十時半の三回で、サンパウロの公演回数は実に五十八回に及んだ。

十月十三日、一行は次の公演予定地リオ向け空路離聖したが、その際、千草かほるが一行を代表して、「サンパウロで五十八回の公演を行いましたが、日系の方々には特にごひいきにあずかりました」。と挨拶している。

一行はリオではレプーブリカ劇場で約一か月間にわたって公演、同市でもサンパウロに劣らないほどの人気を博したが、十一月の中旬、次の公演予定地であるポルト・アレグレ向け空路リオを離れた（なお、一行の南米における最終公演予定地は、ア

ルゼンチンのブエノス・アイレス市であった)。

ところで、サンパウロ、リオその他における一行の公演プログラムは、歌舞伎ものから地方民謡の四季など、純日本調に溢れるものと、東南アジアを背景にしたミュージック・ソングなど、バラエティーに富んだものであった。

その一部を記す。「偲ぶ」は、明治の末期、築地明石町の情緒的な背景の中に、一人の女が想思の人と始めて合い、また別れた想い出の場所であることを新内小唄風の曲で歌う。

「戦場ケ原」＝百合姫を愛する大蛇彦、それを横恋慕する百足丸は術くらべで結末をつけようといいはる（中略）。

両者の死斗は、風を呼び、雲を起こし、雷鳴轟く中で続けられ

る。荒涼たる戦場ケ原の中に百合姫の遺骸を見付けた大蛇彦は、力つきて重なるようにバッタリ倒れる。

「魅惑のジャングル」＝ジャングルの中でホットなラテンリズムの曲にのって、美しく変化に富んだ乱舞を見せる。

「エレガント・レディ」＝魅力的に踊りぬくエイト・ピーチェスの粋なスタイルが舞台上に繰り広げられる。

なお、ブラジル松竹の水本毅氏によると、松竹歌劇団の南米公演は興行的には失敗だった、という。歌劇団の各地公演は最大の好評をもって迎えられ、観客の動員数も予想以上のものがあったらしい。しかし、松件本社が興行師のアブロン・カッネルソン氏に与えた南米公演の権利（ギャラー）は米貨の十万ドルであったが、そのうちの二万ドルは未回収のまま今日に至っている、という。

（前田　正覚）

〜〜〜〜〜　◇　〜〜〜〜〜

松竹歌劇団　明治三十五年（一九〇二）、白井松次郎、大谷竹次郎兄弟の松竹合名社の後身である松竹株式会社の子会社。大正九年（一九二〇）、洋風楽劇および歌劇を模倣して、楳茂都陸平、原田潤、松本四郎の舞踊家や音楽家を主体に松竹楽劇部を

創立、これが後に大阪松竹少女歌劇に発展した。

東京においても昭和三年（一九二八）に松竹楽劇部を創立し、これが東京松竹少女歌劇の母胎となった。昭和八年七月、松竹少女歌劇団（ＳＫＤ）と改称以来『タンゴ・ローザ』に一エポックを作り、宝塚と相対して今日浅草国際劇場を根拠として一方の人気を集めている。

松竹少女歌劇団からも幾多の人気スターを生んでいる。その草創期においてターキーの愛称で呼ばれる水の江滝子、オリエ

ブラジル公演に参加したおもな人々。

津坂などがあり、現在は東京松竹から出た人では映画の京マチ子、歌謡曲の並木路子（ともに来聖した）などがある。

国劇向上会発行の「芸能辞典」から転載。

宝塚歌劇団も来演
舞台いっぱいに日本調も…

国際交流基金が補助…

一九六六年八月の松竹歌劇団に続いて、一九七八年十月三十日、こんどは宝塚歌劇団の一行三十七人がメキシコ、アルゼンチンの公演を終わらせてサンパウロ入りした。

宝塚歌劇団の中南米公演は、松竹歌劇団の場合と異なって国際交流基金の補助によるものであった（補助金は一説に五千万円、当時の伯貨にして約五百万クルゼイロス）。

一行は松原徳一団長（国際交流基金業務部長）以下スタッフは全員四十七人。出演者は宝塚歌劇団の専科、花、月、雪、星組の研究科に四年以上の在籍者のなかから選ばれた三十五人であった。

松原団長はサンパウロ公演に先立って、「サンパウロでは特に七十年の長年月にわたって苦労をした移住者の人たちに、日本

を思い出してもらい、楽しんでもらいましょう」、とメキシコ、アルゼンチンとは異なった気持で公演を展開したい、とも報道関係者に語っている。

宝塚歌劇団のサンパウロ公演は市立劇場で十一月三日から十二日までの十日間。プログラムは二部に分かれ

▽第1部＝純日本調に溢れたもの。元禄時代の風俗、歌舞伎のさわり、鹿児島、沖縄の踊りを披露、「さくら・さくら」の曲がアレンジされて舞台に流され、外国人、若い世代に日本情緒といったものを理解して貰えるよう工夫をこらしている。

▽第2部＝〝洋もの〟。宝塚の独特ダンスを繰り広げる（1、2部を合せ全二十五場）。

で、市立劇場での十日間における公演回数は十一回に及んだ（うち六日は休演）。これは当初予定していた十回が、日が経るとともに人気が上昇、八日までに十二日の分まで売切れ、さらにブラジルでの公演はサンパウロだけだったのでリオをはじめ他の都市からの観客も多かったので、最終日の十二日には特に一回の追加公演を行なったため。

なお、入場料はポルトローナおよびバルコン・ノーブレが二五〇、バルコン・シンプレスが一八〇、カデイラ・ホイエルが一二〇、ガレリアが八〇クルゼイロスなどであった。

（前田　正覚）

宝塚歌劇団　前身は宝塚少女歌劇。兵庫県武庫川のほとり宝

〜〜〜〜〜◇〜〜〜〜〜

おお！タカラヅカ

塚温泉場の娯楽機関として大正二年（一九一三）に創設。当時有馬鉄道の専務であった小林一三は、三越少年合唱団からヒントを得て宝塚唱歌隊を同年七月に募集、十二月に宝塚少女歌劇養成会を結成、翌年四月一日、第一回公演として久松一声作『ドンブラコ』ほか二曲を上演した。

作家陣には高木和夫、坪内士行、岸田辰弥らがいた。大正七年に東京進出の初公演を行ない、翌年文部省の認可を得て宝塚音楽歌劇学校と改名した。昭和二年（一九二七）、岸田辰弥が発表した『モン・パリ』からグランド・レヴュー時代を展開、やがて白井鉄造の『花詩集』に至るまでの間にレヴュー形式を確立、男装スター小夜福子や葦原邦子らを育成、娯楽機関の乏しい日本一般子女の人気を集めた。

昭和十三年（一九三八）には渡欧公演、翌年は渡米公演を実現した。戦後は娯楽性の解放で、一部少女ファンを吸収する程度で、男装スタイルの変質性を指摘されたが、越路吹雪、乙羽信子、淡島千景らを輩出した。

なお、宝塚から映画、あるいは演劇界に転出した人々は淡島千景、越路吹雪、新珠三千代、草笛美子、久慈あさみ（以上来聖）、乙羽信子、月丘夢路、加茂さくら、浜木綿子、八千草薫、上月晃、那智わたる、鳳八千代、大原ますみ、沢かおり、日高澄子などがいる。

（尾崎宏次・演劇評論家）

〜〜〜〜〜　◇　〜〜〜〜〜

追記　掲載の写真はすべて文芸春秋デラックス「おお！タカラヅカ」一九七三年七月発行からの転載です。

また宝純子は花組、順みつきは月組に属し、サンパウロ公演には二人とも参加しており、滞聖中にはそれぞれ移民史料館を訪れています。

宝純子（右）の「ザ・レビュー」、左は島ゆり

西独から異色の歌姫

田中路子が独唱会

一九五一年正月から翌五二年の暮にかけ、数多くの芸能団（人）が来伯した。トップは五一年正月の日伯毎日新聞社による第一回芸能使節団、次いで同年六月、同じく日伯毎日新聞社による第二回芸能使節団と、ブラジアン商事の松旭斉天勝一座、さらに同年九月には三浦愛蓄堂の松平晃一行がつづく。また、年が明けた五二年三月には『移民史映画』製作の小杉勇ら一行、八月には益田隆舞踊団、十月に田中路子、殆んど時を同じくして伏見直江一座と、コロニアはその応接にいとまがなかったようだ。なお余談だが、この年の十一月にはサンパウロ市内のシネ・イピランガその他七館で前年の五一年、ヴェネチア第十二回国際映画祭でサン・マルコ金獅子賞（最高賞）を授与された黒沢明監督の「羅生門」が封切られている。

ところで、これらの芸能団によるサンパウロその他における興行成績は、というと日伯新聞の第一、第二芸能使節団、ブラジアン商事の松旭斉天勝一座を除くとあまり芳しくなく、なかには帰国旅費の調達もままならず、サンパウロで〝立往生〟を余儀なくされた一行もあったほどだった。

前置が長くなったが、前記のうち五二年十月に来聖した田中路子について、できるだけ簡単に紹介しょう。

活躍舞台は主にヨーロッパ

田中路子（一九〇九＝明治四十二年、東京生まれ）の来聖公演について、五二年十月十六日付の日伯毎日新聞は「薫る〃歌の花束〃　話題のソプラノ歌手田中路子聖市で公演」、とおよそ次のように報じている。

「ソプラノ歌手として、また早川雪州と共演した映画『ヨシワラ』などで、日本よりもヨーロッパでよく知られている田中路子さんが、夫君であるヴィクトル・デ・コーヴァ氏の卒いる劇団の一座とともに十四日午後ブエノス・アイレスよりのクルゼイロ・ド・スール機でコンゴニャス空港に到着した。

来聖した田中路子とヴィクトル・デ・コーヴァ夫妻（コンゴニャス空港で）

田中路子さんの初公演は十七日午後九時からクルツーラ・アルチスチカ劇場でフタを開けるが、当夜のプログラムは『桜の夜』と呼び、第一部はドイツ語による劇、第二部は全部が田中路子さんによる独唱に当てられる。

曲目は二部に分れ、一部はイギリス、フランス、ドイツなどの歌謡曲、オペラのアリアをそれぞれ原語で歌い、二部では日本の古い民謡および現代の作曲家の歌謡曲を歌うことになっている」。

同記事中の「日本よりもヨーロッパでよく知られている……」のは、オペラ歌手、映画女優としての彼女の活躍舞台が戦前戦後を通じてヨーロッパ、特にドイツ、フランス、オーストリア各国であったからである。

田中路子の父は著名な日本画家の田中頼璋で、母政子の長女。東京の隻葉女学校を卒業後、東京音楽学校の声楽科に入ったが、ある恋愛事件の〝もつれ〟から、一九三〇年二月に両親によりオーストリアのウィーンへ音楽留学という名目のもとに送られる。

ウィーン国立音楽学校声楽科四年のクラスで勉学中、知人から紹介されたウィーンのコーヒー輸入商ユリウス・マイルン（ボヘミア名家の出身）と三一年三月末に結婚した。当時路子は二十一歳、夫となったマイルンは五十七歳であった。

音楽学校を卒業した路子は、オーストリア第二の都市グラー

ツの市立オペラ劇場で『蝶々夫人』でデビュー、この初舞台は大成功で地元オーストリアの新聞をはじめ「ニューヨーク・タイムズ」までが華々しく書きたてた（一九三二年十二月）。一九三三年、約半年の予定で三年ぶりで日本に帰った路子は、日比谷公会堂で近衛秀麿の指揮するベートーヴェン『第九交響曲』を独唱したほか、日本青年会館、大阪朝日会館、京都市立公会堂などでリサイタルを開き、一般、音楽評論家などから絶賛を受けている。

1937年、映画「ヨシワラ」に出演の田中路子

映画『ヨシワラ』、日本で騒がれる

田中路子が初めて映画に出演したのは一九三五年。オーストリアのトービス・サッシャ社の『恋は終りぬ』、次作が日本で国

辱映画と騒がれた三七年の『ヨシワラ』。このほか戦前にはフランスで『旅順港』ほか数本があり、戦後では西ドイツで四九年『異国の鳥』、五〇年に『大使館のスキャンダル』などに第二の夫コーヴァと共演したが、映画女優としての評価はあまり認められなかったようだ。

一方、オペラ歌手としての路子は、当時の仏領インドシナ（現ヴェトナム）を舞台にしたポール・アブラハムのオペレッタ『ジャイナ』に出演、ウィーンのブルグ劇場での初演以来大好評で、一九三六年のクリスマスをはさんで三か月のロング・ランであった。また同年初頭、ブルグ劇場で出演したオペレッタ『ゲイシャ』も好評だった。戦前はウィーンのほかベルリン、パリ、ロンドンなどの舞台で活躍したことはよく知られている。

なお、路子がユリウス・マイルスと離婚したのは四一年七月、デ・コーヴァとの結婚は同年八月であった。

田中路子のサンパウロ公演は、前にも書いたように一九五二年十月だが、当時の日伯毎日によると、十七日夜の独唱は好評だったが、観客席千五百余のクルツーラ・アルチスチカ劇場でのコロニアは三百人足らず、終幕後の楽屋裏で路子は同紙記者に、「日本民謡こそ私の心魂をこめて歌ったもので、サンパウロには沢山の日本人がおりながら、どうして聴きに来てくれなかったのでしょうか」、と落胆し、「ブエノス、ポルト・アレグレでの公演でも、もっと日本人が来てくれた。私はコスモタリ

ンといわれるが、日本を愛し、日本のために尽してきたつもりなのに……」、と語り、両眼を真赤に泣きはらしていた、という。

戦前戦後を通じ、ヨーロッパ各国の舞台で常に絶賛の嵐の中にあった路子にとって、日本人聴衆の少なかったサンパウロ公演は残念でならなかったのであろう。

路子はその同じ五二年、ザルツブルグの音楽祭に正式の招待を受け、翌年この地のモーツアルテウム（モーツァルト記念研究所）の黒大理石の碑に日本人として初めて、音楽関係の功労者としてその名を刻まれたほどだったのだから……。（文中・敬称略）

◇以上、角田房子著「ミチコ・タナカ、男たちへの讃歌」（新潮文庫、昭和六十年二月二十五日発行）を参考させていただくとともに、このページの写真もすべて同文庫から転載しました。なお、田中路子さんは、一九七九年から西独ミュンヘンに住んでいる。

（前田　正覚）

援協日本病院建設
チャリティーショウ

北島三郎　特別公演

サンパウロ日伯援護協会（会長・竹中正）主催、サンパウロ総領事館、国際協力事業団サンパウロ支部、ブラジル日本文化協会、ブラジル日本商工会議所、ブラジル日本都道府県入会連合会、サンパウロ、日伯毎日、パウリスタ、週刊時報各邦字紙後援の援協日本病院建設、チャリティーショウ『北島三郎特別公演』は一九八四年二月十一、十二日の二日間（四回公演）、市内パルケ・アニェンビーのアニェンビー劇場で盛大に開かれた。

特別公演は北島三郎をトップに、指揮・鈴木操、司会・及川洋、演奏・ジャズ・キングス、尺八・鈴木操、三味線・鳴子勝

栄らキャストのほか、構成・演出、音楽、照明、音響、舞台制作、効果、舞台監督ら七名のスタッフによって行なわれた。

チャリティーショウ実行委員会（委員長・竹中正）によると、同公演会の収支決算は次のようになっている。

▽収入の部

二日間四回公演への入場者は八千四百名（一六六、九〇二、五〇〇）プログラム関係売上げ（一三、〇四九、〇〇〇）

寄付その他雑収入（一四、三〇一、〇八三）

▽支出の部　通信、交通費、その他（一、八〇五、六二八）

事務、宣伝費（一九、八五一、七三八）

北島三郎一行の往復旅費（四八、五三六、五七〇）、最終的は現地側秒負担が多かった。

会議、接待費（二四、七二一、一八〇）

照明、音響機器関係（四〇、一二〇、六〇〇）

税金関係（一一、二一九、〇六〇）

収入合計＝一九四、八五〇、三六三

支出合計＝一四六、二五四、七七六

純利益額＝四八、五九五、五八七

（いずれも単位はクルゼイロス）

サンパウロ日伯援護協会による病院建設のためのチャリティーショウは、一九七一年の第一回と七三年の第二回あゆみの箱に次いでこんどの北島三郎特別公演は第三回目。入場者は

第一回が二万五千余、第二回が三万余で三回目を加えると、全入場者数は約六万四千に達する。

一方、各チャリティーショウの純利益は、第一回＝三四〇、一五八、第二回＝四一〇、〇〇〇、第三回＝四八、五九五、五八七（いずれも単位クルゼイロス）で、合計四千九百三十四万五千七百四十五クルゼイロスとなっている。

（前田　正覚）

コロニア芸能史編さん委員会

委員長　水本　毅

民謡　開田　五郎
佐々木重夫
及川也周平
猪狩　親一
松崎　松蔵
米谷　信一
内山　良文
桐生　照義

浪曲　沢田　多策
花中軒水月
笠井　貞雄
中川　芳則
今野　吉郎
樋口　公若

演劇　丹下セツ子
土井　公男
山元　貞義

山口　春海
小泉　照男
広田　義秋
映　画　平田　公泰
押田真佐男
野村　清博
田中アウグスト
古典音楽　宮下　良作
音　楽　丸山　昌彦
宮本　忠治
川口辰之助
小野寺七郎
山川　健一
村上二三男
能楽・謡　鈴木　威
バレエ　大谷　康夫
小原　明子
戸塚　マリ
奇　術　森政　又彦
津野　豪信
ラジオ　奥原マリオ
菊地　啓

テレビ　上杉　清司
松田ネルソン
日本舞踊　京藤間勘輝
倉岡　房枝
下川八重子
花柳　金龍
藤間芳之亟
池芝　　緑
（順不同）

コロニア芸能史
１９８６年５月１０日発行
編さん　コロニア芸能史編さん委員会
発行者　コロニア芸能史編さん委員会
C／A CASA MIZUMOTO
Galvao Bueno，45 S. Paulo
Brasil
印　刷　トッパンプレス印刷出版（有）
EDITORA GRAFICA TOPAN. PRESS
LTDA.
Rua Muniz de Souza，645 S.
Paulo